

インフィニット・スト  
ラトス ー紅蓮ノ太  
刀ー

通りすがりの料理人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

インフィニット・ストラトス

それは大天災篠ノ之束によって生み出されたマルチフォーム・スーツ

しかしそれは女性にしか動かすことが出来ない…

はずだった

男性で初の操縦者へ織斑一夏が見つかつた事により世界中で男性操縦者の検査がおこなわれたそしてついに2人目の操縦者が見つかつた

そう！その男性こそ織斑一夏の幼馴染にして親友の緋龍蓮仁であった！！

「ハア？ええ？動いた!?ハアア~~~~!!?ムリムリ！女子高とか絶対ムリ！一夏のせいでヤ

ベ—イ事になった…次会ったらしばき倒してやるうううう!!よし!とりあえず逃げよう!」ダツツ

『ファツ!?!チフユサン!?!チヨマツテ…アアアア!』

今、緋龍蓮仁の学園ライフが始まる!!

『タスケテエ…』

?まだ原作前のストーリーです。

原作までしばらくかかるのでご了承ください(・ω・)

# 目次

第1章 出会いと別れの小学生編

原作前第1話 起きてから2時間の話

1

原作前第2話 一夏の家に突撃!え?

千冬さん居る? : 静かに入ろう!

7

原作前第3話 千冬さんの笑顔が凄く

怖い件

原作前第4話 篠ノ之道場入門!そし

て洗礼! 前編

原作前第5話 篠ノ之道場入門!そし

て洗礼! 中編

32

原作前第6話 篠ノ之道場入門!そし

て洗礼! 後編

原作前第7話 炸裂!!必殺の○○○ブ

レイカー!!!

原作前第8話 出会いはいつも突然に

く天災ウサギとの遭遇

原作前第9話 稽古の時間! (なお修

業相手は千冬さんと束さんが務めます)

原作前第10話 白騎士事件

原作前第11話 友との別れ : 再び友

達1人に : (泣)

原作前第12話 新たな出会い! 転校

32

43

60

75

91

107

124

	生はチャイニーズガール!?	141	活の幕開け!	259
	番外編 一夏の(恐怖の)お料理教室		原作前第17話 俺、剣道部に入部し	
	※生徒は蓮仁のみ	157	た筈だよね…?	275
	原作前第13話 更に向こうへ! P1		番外編 猫の恩返し的なもの	292
	u s U l t r a !!	167	原作前第18話 夏だ! 山だ! 修業	
	原作前第14話 修業が地獄過ぎた:	183	だあああ!	317
	原作前第15話 田舎に泊まろう(大		原作前第19話 夏だ! 青春だ! エン	
	自然)	198	ジョイだあああ!	345
	番外編 織斑さん家のお引越し		原作前第20話 遂に登場! 奴の名前	
244			は緋龍蓮也!	378
	第2章 波乱万丈の中学生編		番外編 束さんからの贈り物	396
	原作前第16話 波乱万丈!? 中学校生		番外編 千冬さんは掃除ができない	422

	原作前第21話	冬休みの予定? 修業	
	だよ(真顔)		446
	原作前第22話	新年早々に不運の予	
	感!?		470
	番外編	数馬と弾、漢の決意	486
	新春お正月スペシャル!〜2021〜		511
	原作前第23話	ヤクザ祭りだワツ	
	シヨイワツシヨイ!		524
	番外編	バレンタインとは男の戦いで	
	ある		548
	原作前第24話	行くぜドイツ! モン	
	ドグロツソと不穏な影!?		571
	原作前第25話	ドイツでの死闘! 蓮	
	仁VS亡国企業!		597
	原作前第26話	そして怪物は生まれ	
	墮ちる		630
	原作前第27話	事件の収束	653
	原作前第28話	消えない心の傷	687
	原作前第29話	立ち上がれ、進み続	
	けろ		716
	原作前第30話	日本でのそれぞれ	753
	原作前第31話	彼の者、歩み進むは	
	修羅の道		790

原作前第32話 朱時雨を賭けて勝

負う!?!え、俺が!?!

812

原作前第33話 帰ってきた蓮仁

847

原作前第34話 鈴の従姉妹!?!台湾よ

り来襲!

882





## 第1章 出会いと別れの小学生編

### 原作前第1話 起きてから2時間の話

朝目覚まし時計の音が鳴り響く

「うう〜ん」バシッ

「ふあ〜あ…7時か…あと5分寝よ」

そうして俺はもう一度深い眠りにつこうとした…しかしそれは叶わなかった  
ガチャ「コラ！何二度寝しようとしてるの！」

「フア!？」

その声によって俺は飛び起きた。ちくしよおお…至福の二度寝タイムがああ…

「早くしないと一夏君が来ちゃうわよ。ほら！準備して！早く早く！」

「…分かったよ。おはよう母さん」

「おはよう蓮。朝ごはん冷めちゃうから急ぎなさいよ」

…まったく朝から騒がしいなあ…まあ俺が原因なんだけどね！それから俺は手早く準備を終えて朝食を食べた

「それじゃあ母さん行ってきま〜す」

「いつてらっしやい！車に気をつけてね」

こうして蓮こと俺【緋龍蓮仁ひりゅうれんじ】の一日が始まった

「…ヤバい眠い z z z」

…始まった？

## S i d e 一 夏

俺の名前は織斑おりむらいちか一夏

小学2年生で姉の千冬姉との2人で暮らしている

両親はずっと昔に俺と千冬姉を置いて出て行っただらしい…

でも俺は寂しくない！千冬姉が居るから！掃除も料理も出来ないけど…それでも最  
高の姉さんだと思ってる…思ってるからね？

それに家族ぐるみの付き合いの友達も居るから！千冬姉がバイトで遅い時は晩ごは

んにさそってくれるし、泊まって遊ぶこともある最高の友達なんだ！だから寂しいとは思わない！

今はその友達の緋龍蓮仁の家に向かっていて家が見えてきたのだが…

「……………」

「zzz ( )? ω ? )」

まるでコアラのように電柱にしがみついて寝てる蓮がいた…

イヤ、何やってるの!?

「オイ！蓮！何やってんだよ！」

「ナズエミテルンデイス!!」

「…ツ!?!」

「オンドウルラギツタンデイスカー!!」

「イヤ何でオンドウル語!?!本当に寝てる!?!」

突然オンドウル語を寝言で喋りだした蓮

本当に何やってんだよ!!

ああ…通行人の人達に凄い見られてる！恥ずかしいなもう！

「起きろー！」バシッ

「痛っ!?!」

あまりの恥ずかしさに叩き起こしてしまった：反省も後悔もしてないけどな  
そしてようやく起きた蓮は俺を見て：

「!?ダ：：ダデイヤナザアン！」

「ちげえよ！一夏だよ！」

「イチイガアザアン！」

駄目だこいつ！

何で学校行く前からこんなに疲れるんだよお

S i d e 一夏 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

あまりの眠さに電柱にしがみついで寝ていたらしい  
うーん何か橘さんの夢を見たような？気のせいかな？

俺を起こした一夏があきれながら

「…おはよう蓮、目は覚めたか？」

「んあ？…おお一夏！おはよう！」

「まったく、寝言でオンドウル語を話すやつ初めて見たぞ俺…」

フムフムどうやら橘さんの夢は気のせいじゃなかったようだ

てか寝言でオンドウル語喋ってたのか…結構凄いやね？え？どうでもいい？あつそ  
うですか… ☒・ω・、)

「まあいいじゃん！早く学校行こうぜ！一夏！」

「よし！どつちが早いぞ競走だ！」ダツ！

「フツ一夏…お前に足りないもの！それは情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ！そし  
てなによりもオオオオオオオオツ！！

早さが足りない!!」ダツツ！

「!?早い!!…俺が遅い!?俺がslowly!!?冗談じゃねえ!!」

おっ乗ってきたな

俺もアホだけど一夏も何気にアホだからなあ

あと英語の発音無駄に良いからムカつく

その後学校までダツシユした俺と一夏は教室で二人仲良く力尽きるのであつた

「信じられるか？まだ起きて2時間以内の出来事だぜ？」

原作前第2話 一夏の家に突撃!え?千冬さん居る?...  
静かに入ろう!

S i d e 蓮仁

あの後(一夏との全力ダツシユ)無事に復活した俺たちは授業を受けて無事に放課後を迎えた...

ハイ嘘です。一夏は無事だったけど俺は居眠り3回して説教されました...ただでさえ眠いの全力ダツシユしたから眠気に勝てませんでした...

一夏のヤツ教科書で隠してたけどめっちゃ笑うの我慢してた...  
今、俺を笑ったな?って言ったらさらに怒られた...解せぬ...

一夏はついに吹き出したしあのヤロー許せん!

「一夏ああ!」

「何だよ...ツぷつ!ククク!」

「思い出し笑いすんじやねえ!」

いまだに笑いを堪えてる一夏にコブラツイストをお見舞いしてやった

「アアアア痛い！痛い！ギブ！ギブアップ！」

「…ネバー？」

「ギブアップ！あ…」

「そうかもつと喰らいたいか！」（？・・？・・）??

「アアアア!!」

しばらくして一夏を開放してやったなかなか良いのが極まったぜ

「ふう〜スツキリした！大丈夫か一夏？」

「オデノカラダハボドボドダ!!」

…うん！なんやかんやでまだ余裕そうだな

関節技でも極めようかな？

「そうだ蓮」

「うお!?!びつくりしたいきなり復活すんなよ…」

「今日暇か？このあと俺ん家で遊ぼうぜ！」

遊びの誘いか…まあ暇だし行くけど…一夏つてずっと俺としか遊んでないな

…ここ最近…と言うより毎日俺と遊んでるな

…友達いないのか？

あつ駄目だ特大ブルーメランになって帰ってくるう！



イヤ友達いないわけじゃ無いけどネタが通じないからあんまり楽しくないんだよね

一夏はネタ通じるし楽しいよ

「よし遊ぼうぜ!」

一夏が一番!これはもうベストマッチ!だね!

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

蓮と遊ぶことになった下校途中隣を歩く蓮を見て思った:

(蓮って俺以外友達いないのかな?)

自分から誘っておいてなに考えてるんだと思うけど:毎日俺と遊んでるから多分そうだろう。学校ではよく他の人と話してるけどあんまり楽しくなさそうなんだよな

(まあ俺も蓮以外友達いないけどなあ)

…ちよつと虚しくなってきた

まあこれから見つかるさ！今は何して遊ぶか考えよう！

「よしランドセル置いてくるからちよつと待っててな」

そう言つて家に入つていった蓮

待つてる間に何して遊ぶか考えよう

……………駄目だ！何も思いつかない！

いつも二人鬼ごつことか二人隠れんぼとか二人トランプとか…

二人じゃつまんないよおお!!時々千冬姉も遊んでくれるけど…

千冬姉が鬼になると鬼ごつこも隠れんぼも3分でおわつちやうし！隠れんぼとかど

うやつて見つけたか聞いても

『勘だ！』ドヤア

とか言うし！俺も蓮も引いちやつたよ！蓮なんて

『千冬さんは見○色の覇氣が使えるのか…』

つて遠い目してたし！

そんなこと考えてたら蓮が戻ってきた

「一夏あ！お待たせ！」

「んじや行きますか」

「…うん!遊びは家で考えよう!

ちなみに蓮の家から俺の家のアパートまで徒歩5分だ

「んで?何して遊ぶ?」

「さつきまで考えてたけど何も思いつかなかった…」

「おお…そうか…まあ2人だからなあ」

俺も蓮も遠い目をしてるんだろうな…

「よ、よし!とりあえず一夏ん家行くぞ!突撃いい!」ダツ!

「あつ!待て蓮!」ダツ!

「待たん!」

「オラアアアン!!」

「フツ…一夏よお前に足りないm『それは朝やったからもういいよ!』…そうかあ…」

「落ち込むなよ!ガラスメンタルかよ!」

「オデノココロハボドボドダ…」

イヤ、メンタル弱!?ちよつと心配になってきちゃったよ!?

「と見せかけてスキあり〜!」

あのヤロー!!俺の心配を返せえ!!

そして俺の家が見えてきた！蓮がもうすぐアパートの階段につく！

「はっつはっつはっ！このまま俺の勝ちだあ！」

あっ！そういえば…

「蓮！」

「あん？」

「今日千冬姉バイト無いから家に居るぞ」

「え？まじで？」（。D。）

そう言っつて蓮は止まった

Side一夏Side out

Side蓮

俺は今朝みたいに一夏と競走していたが…

「今日千冬姉バイト無いから家に居るぞ」

俺はその言葉を聞いて止まった

俺は前に一度千冬さんに無礼を働きひどい目にあつた…

うつ?!思い出したらお尻が…!?

まずいこのまま突撃したら…

『突撃〜!』

『ほう?私の家に大声上げて突撃してくるとは…蓮良い度胸だなあ?』ニツコリ

『あ…千冬さ…ん?』ガタガタ

『よおくしお仕置きの時間だ…さあ尻を出せ』ガシ

『アアアアア!!』

つてなつてたヤバイ…想像しただけでお尻がああ!?

『どうした蓮?急に止まって尻抑えて?』

『イヤ気にするな…競走はやめて普通に入ろう』

「お、おう」(何か震えてるし顔青いけど千冬姉と何かあつたのか?)

そして俺たちは普通に入った

「ただいま〜」

「おじやまします〜…」

そして入った先には千冬さんが仁王立ちしていた…ナズエデイス!?  
そして…

「おかえり一夏!蓮!お前たちの帰りを待っていたぞ?」ニッコリ

なぜか俺たちの帰りを待っていたらしい…凄く怖…じやなく凄く良い笑顔で…  
それを見た俺たちの反応は…

「ヒエ…」

…そんな声しか出せなかった…(泣)

## 原作前第3話 千冬さんの笑顔が凄く怖い件

前回のあらすじ！

一夏の家に遊びにいった蓮！玄関を開けた先に居たのは…

「おかえり一夏！蓮！お前たちの帰りを待っていたぞ」ニッコリ

仁王立ちしてニッコリしていた千冬さんだった！

S i d e 蓮仁

俺、蓮仁と一夏は足が痺んで動けなくなっている！

俺たちの目の前にはいまだにニッコリしながら仁王立ちしている千冬さんがいるからだ！

「…どうした？お前たち？」ニッコリ

「ヒエ…た、ただいま…千冬姉…」

「ヒエ…お、お久しぶりです…千冬さん…」

俺たちは蛇に睨まれた蛙のように動くことができなかつた……

何かしたかなあ俺（泣）

（イヤ待てよ千冬さんはお前たちつていつたよな？ じゃあ一夏絡みか？ ……駄目だ！ 余計にわからない！）

チラツと一夏のほうを見るが一夏も心当たりは無いみたいだ……

「どうした？ 早く上がれ」

「アツハイ」

さて部屋に上がったが今千冬さんを前に俺と一夏は座っている……

ちなみに全員正座だ……なんでえ？ 何もしてないよ？

「さて……お前たちに話がある」

俺と一夏の背筋が伸びる！

「ハイ！ なんでしようか！」

尻叩きは勘弁してください……

「実は私の友人……まあお前たちみたいない関係のヤツが居るんだがそいつの親が道場をしていてな」

ん？ 何か話始めたぞ？ どうやら怒ってはいないようだ……よかつた……

でも何だろう？ 友人の親が道場？ いったい何の話だ？



一夏を見るが首を傾げている…一夏も分からないか…

「それでその道場に時々通っているのだが友人の親…師範にお前たちの事を話たのだが、どうもお前たちが気になるらしくてな。ぜひ連れて来てほしいと言われたんだ」

つまり道場の師範に何故か興味を持たれたってことか…

「だいたい分かった！つまり勧誘しようってことか…って千冬さん何話したんだ？興味持たれるようなことしてないよね？」

「まあ単刀直入に言うがお前たち道場に入る気は無いか？」ニヤリ

「そう言っって不敵な笑みを浮かべた千冬さん…その顔も怖いです…」

「どうしてこうなったと考えていると一夏が急に立ち上がり…」

「ちよつと待ってくれよ千冬姉！」

と声を張り上げた

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

## Side 一夏

「ちよつと待つてくれよ千冬姉!」

俺は声を張り上げていた

前にも言ったが俺たちの両親はいない

今は千冬姉のバイト代で生計を立てているがそれでも高校生のバイト、そんなに高い給料じゃない

要するに貧乏なのだ

家もお世辞にも綺麗と言えないボロアパートだ

家の家計は火の車状態だ2人で生活するのがやっとなのに道場に入れ?

「道場に入ったらお金が掛かるだろ!?!それじゃ千冬姉の負担になる!!まさかバイト増やす気か!?!これ以上増やしたら倒れるぞ!!そんな事になったら俺……」

俺は俯いてそれ以上声を出すことはできなかつた……

すると俺の頭に何か乗った感じがして顔を上げると……

さっきの怖い笑顔とは違うとても優しい慈愛に満ちた顔の千冬姉が俺の頭を撫でていた

「一夏ありがとう…お前がそこまで私のことを心配してくれていると思わなかった」  
「…ッ！当たり前だろ！ たった2人の家族何だから！」

「そうだな…すまなかった…」

申し訳なさそうに謝る千冬姉

「だが道場の師範は家の事情を分かってくれている。必要な道具も貸してくれるし、お金のことも配慮してくれるそうだから…だから私は大丈夫だ」

そう言つて頭を撫でる千冬姉…少し泣きそうになつたのだが…

「それにお前たち暇だろ？」

その一言で涙が引つ込んだ…

Side 一夏Side out

Side 蓮仁

ほぼ空気になっていた俺

一夏と千冬さんの感動的な場面を見ていたが…

「それにお前たち暇だろ？」

千冬さん…そりやねえよお

見事に感動場面を破壊してくれました…シリアスブレイカー千冬さんじゃねえか！

一夏も『そりやねえよお』って顔してるし…何やってんだミカああああツ!! って言  
いそうになった…

「どうせ二人鬼ごっことか二人隠れんぼとか二人トランプしかやらないだろう？ それに  
お前たち…

他に友達いないだろ？」

「グフツ!？」

俺と一夏の精神をエグる一言を放った千冬さん

俺達は胸を抑えた…人が気にしてる事を平然と言つてのけるそこに痺れもしないし  
憧れもしない

「ま、まあそれなら行って見ようかな…他に友達いないし…」

死んだ魚みたいな目をしている一夏はそう答えた…

「蓮はどうするんだ?」

と今度は俺に聞いてくる千冬さん

でもなあ俺が勝手に決めていい話じゃないし一回親に話してからだな!俺のは安くないし

そう千冬さんに言おうとしたら:

「ああちなみにもう華さんから許可を貰ってある」

マジかよお用意周到すぎるよお:

あつちなみに母さんの名前は緋龍華ね

「伝言で『どうせ二人じゃたいして遊べないし道場行って来なさい。体も鍛えられるしそれに:」

他に友達いないでしょ?』:だそうだ」

「ガハツ!」

母さんまで俺たちの精神をエグってくるう!?

床に手を付き項垂れたおれは:

「:俺も行くかな:他に友達いないし:」

こうして俺たちの心はポロポロになり道場に行くことになった

その道場の名前は

## 篠ノ之道場

「一夏……最後にアレ言おうぜ……」  
「……ああ……あれか……」

「オデノココロハボドボドダ!!!」

# 原作前第4話 篠ノ之道場入門！そして洗礼！ 前編

前回のあらすじ…

千冬さんに精神をエグられた俺たち…オデノココロハボドボドダ…

そんな俺たちは千冬さんと道場に行くことになった

## S i d e 蓮仁

千冬さんに精神をエグられた次の日の放課後

俺と一夏は千冬さんに連れられて例の道場…篠ノ之道場の前に来ていた

「ほあく思ってたよりでっかい道場だなあ」

一夏が驚きながらキョロキョロと周りを見ている

確かに結構な大きさがあるし神社の敷地内にあるのかあ…

長い歴史がありそうだ…まあ興味は無いけど



「それじゃあ中に入るがその前に…」

ん?千冬さんがこちらを振り返って俺たちを…と言うより俺をみている…ナズエミ  
テルンデイス!!

「道場の中では礼儀正しくするんだぞ?特に蓮お前が一番心配だ…」

信用無いなあ…TPOは弁えますよ…多分ね…

「間違つても『たのもう!』なんて言いながら入るなよ?道場破りと間違われるからな」  
そりやそうだがさすがの俺でもそんな事は言わないよ

「…ツ?!」(えっ?!言わないの!?)

「おつとどうやら一夏は言うつもりだったみたいだ…やっぱアホだなこいつ…あと驚  
きすぎだろ…」

そんな一夏に呆れた視線を向けた千冬さんと俺は道場の中に入った

「失礼します」ペコリ

挨拶をして礼をしながら入る千冬さん

俺たちもそれに習って挨拶と礼をした

「失礼します」ペコリ

すると道着を着た厳ついおっさんが俺たちの前にやって来た

「おお!千冬君よく来たな!それで?その子達が君が話していた弟さんとその友達かな

「？」

「お久しぶりです師範！この二人が弟の一夏とその友達の蓮仁です」

「始めまして織斑一夏です！よろしくお願いします！」

「始めまして緋龍蓮仁です！いつも千冬さんがお世話になってます！」

「おいコラ蓮！お前は私の何なんだ!?普通一夏が言うセリフだろ!!」

ちよつとボケかましたら怒られた…だが後悔は無し！

それと俺が千冬さんの何なのか…そうだなあ

「…やんちゃな二人目の弟？みたいなの？」

「何で疑問形なんだ!?!」

荒れてますねえくまあ俺のせいだけどね！

「俺と蓮が兄弟かあ…へへ何か照れるな！」テレテレ

一夏の奴結構喜んでやがる…まあ一夏との兄弟も悪く無いな！

「まあそういうことだ千冬姉さん」

「…ツ!?!…フム…チフユネエサンカ…ワルクナイ…フフフツ」ボソツ

何かぼそぼそ言ってるなあ…あと何故か背筋がヒヤツとしたのは多分気のせいでは無いだろう

…千冬姉さん呼びはやっぱりやめておこう

「はっはっはっ! 実に面白い子供だな! 話に聞いていた通りだ!」

豪快に笑い出したおっさん。…おっさん呼びは失礼だし師範って呼ぶか

さらに師範は俺たちを見て……

「ウム! 二人共良い面構えだ! きつと強くなるぞ? まあ才能を開花させられるかは君たち次第だな!」

見ただけでそんな事分かるのかあ? ちよつと胡散臭いなあ

「今見ただけで分かる何て胡散臭いと思つたね?」

ファツ!? 心の声を読んだ!? このおっさん師範只者じゃ無い!

「これでも多くの実力者を育ててきたんだ。人を見る目には自信がある」

…ツ!! この人…できる!!

この人なら信頼できそうだ!

「それで? 今日は見学かな?」

「いえ二人とも入門するそうです」

俺も一夏も入門すると昨日のウチに決めていた

えっ? 普通見学してから決めるんじゃないかって?

…まあほら…俺も一夏も遊びのレパートリーがなくなってきたし?

あと…他に友達いないし……

そういう事で入門することになりました…

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

挨拶を済ませ俺たちは道具を貸して貰い、千冬姉から竹刀の持ち方など基礎的な事を教わる事になった。

「道着姿似合ってるじゃん！蓮！」

初めて着たのに妙に着慣れた感じがする！

「おっ！ありがとな！一夏は全然似合ってるねえな！」

「はははっ！何言ってるんだよ？なあ千冬姉！似合ってるだろ？」

「……………」プイッ

!?! 無言で目を逸らされた!?! 本当に似合ってるのか!?!

膝から崩れ落ちた俺……………おい!?何笑ってんだよ!蓮!

「ふっ…冗談だよく似合っているぞ?さすが私の弟達だ!」

…?弟達?いつの間にか蓮も弟認定されたらしい

蓮も『あれえ?』って顔してるし…

「…さて!それでは今から剣道の基本的な動作や技それと礼儀などの事を教えていく  
!」

それから俺たちは千冬姉から基本的な事を教わった…

キングクリムゾン!

なんやかんやで基礎知識を教わった俺たちは素振りをしていた

…うん!何回も降ってたら手に馴染んできたみたいだ!

基礎を教わり素振りをして1時間ほどたった頃

師範が一人の女の子を連れて来た

「どうだい千冬君?彼等の調子は?」

「はい、現段階でも筋が良いようで二人共基礎はほぼバッチリですね。流石私の弟達だ

！」

……もう弟達つて所はツツコまなくていいや……面倒くさいし……

「ほう……流石千冬君の全力の鬼ごっこから二人がかりとはいえ三分も逃げただけはあるようだ……」

俺たちの事を話したつて鬼ごっここの事だったのか……あと千冬姉小学生相手に全力つて大人気ないよお……ゲンナリ

蓮も同じ事を考えていたのか俺同様ゲンナリしていると師範が……

「どうだい千冬君彼等と私の娘を試合で戦わせてみないか？」ニヤリ

不敵な笑みを浮かべた師範が試合を申し込んできた……

イヤちよつと待つて!?!何考えてるのこの人!?!

その言葉に驚いた顔で師範を見たあとにキツイ視線を俺たちに向けてきた女の子……  
そんなに睨まないでくれよお……

そして千冬姉は……

「……ほう……良いでしょう受けて立ちます！」ニヤリ

こちらも不敵な笑みを浮かべた千冬姉が答えた

……つて受けちゃつたよこの人!?!俺たちの意思は関係なしかよお!

それを聞いていた蓮は……

「ちよつと何言ってるか分からない」

「ぶふう!!」

妙に似ているサンド○イツチマンの富○たけしのモノマネをしていた  
思わず吹き出しちやつたじゃないかコラア!?

そして俺たちは洗礼を受ける事になった:

中編に続く!

# 原作前第5話 篠ノ之道場入門！そして洗礼！ 中編

前回のあらすじい!!

剣道の基礎を教わった蓮仁と一夏

すると突然試合を申し込んで来た師範!?

二人はいったいどうなるのか!?

S i d e 蓮仁

突然試合をすることになった俺と一夏…

ちなみに俺たちに拒否権は無いらしい…\ ( ^ p ^ ) / オワタ…

だいたい一時間程度で基礎知識習って竹刀軽く降っただけのド素人の俺たちに試合させるって…何考えてんだこの二人は？



あくあもう考えるのやゝめた アイスタゞべよ

心の中で竹内○真のネタやつてると師範が連れてきた女の子と目があった

…見覚えがあると思っていたが同じクラスの…確か篠ノ之箒だったかな?俺と一夏と一年生の時から同じクラスだったはずだ…

そうか此処の道場の娘だったのかあ

近寄り難い雰囲気でクラスでも浮いてたけど…

なる程…道場で厳しく育てられてきたからあの雰囲気なのか…

とりあえず話しかけて見るか

「よっ!篠ノ之!同じクラスの緋龍蓮仁だけど分かるか?」

「俺は織斑一夏だ!一年生の時も同じクラスだったよな?」

篠ノ之に挨拶をした俺たち

俺たちの事を知ってるか分からないからな。一応挨拶の時に名前を言っておいたぜ!

「フン!それくらい知っている!お前たちほど騒がしい奴らはクラスにいないからな!」

…ええゝ辛辣だなおい…

どうやら俺と一夏は印象最悪らしい…

「何故私がお前たちみたいなの奴らと試合をしなければいけないのだ！」

何か滅茶苦茶嫌われてるうー!?

初めて喋ったのに!何でだよ!俺たちが何したってんだよお!?

「コラ!箒!何て事を言うんだ!」

「ですが父さん!コイツらはいつも学校でヘラヘラしてるんですよ!?!それに今日初めて竹刀を握った奴らに私の相手が務まると思えません!」

まったくだよ俺も相手が務まると思えましえん(遠い目)

俺が遠い目をしていたら隣り一夏が《私怒ってますよ!》って顔してるし…  
「そんなのやってみないと分からないだろ!」

やめろお!一夏コラア!嘯み付くんじやねえ!!

心の中で叫んでいる俺にお構いなく話しを続ける一夏

「馬鹿にされたままじゃ終われない!俺も!蓮も!」

バカヤロオ!俺を巻き込むなあ!!

ステイ!ステイだ一夏あ!ステイクル!!

「フン!いいだろう!そこまで言うなら相手をしてやる!」

ああ…もうだめだあ…もうどうにでもなれえ…(泣)

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

篠ノ之に馬鹿にされて怒った俺は戦うことにした!

別に俺は馬鹿にされてもいい! けどなあ! 蓮を馬鹿にしたのは許せない!

「まずは俺から相手だ!」

すると蓮が俺に近付いてきて小声で話しはじめた

(おい一夏あ! お前どうすんだ! 相手は女の子だが俺たちより剣道の経験があるんだぞ

! 竹刀持つて一時間ちよつとの俺たちじゃ分が悪い!)

(だけどこのままじゃ終われないんだ! 蓮が馬鹿にされたままじゃ…)

(…ッ! 一夏お前俺のために怒ってくれたのか?)

(当たり前前だろ? 俺たち親友なんだから!)

「……ッ!!イチカアアアア!!」ガシッ

「レンジイイイ!!」ガシッ

俺たちは友情の熱い包容をした!!

これを見た篠ノ之は引いていたがそんなの知らん!!

俺たちはズツ友だレンジイイイ!!

(だが一夏どうするつもりだ?そう簡単には勝てないぞ?)

(大丈夫だ!俺に考えがある!)

そう俺には考えがある!

左翔太郎が言っていた!!

対策なんぞ、動いてから立てればいいんだ!つてな!

そして俺と篠ノ之は防具を付けて向かい合った

師範がルールの説明を始める

「それではこれより試合を始める!ルールは時間無制限で先に二本取った方の勝利だ!

審判は私と千冬君で行う!構え!」

お互いに竹刀を構え、そして睨み合う

「蹲踞!」

竹刀を構えたまま蹲踞をする…

「…始めええ!」

「メエエエエン!!」バシン!!

「へぶうううう!!」

「…一本!面あり!」

いきなりかよお!?!うおおお…いつたああ…

速攻で一本取られた俺は余りの痛さに変な声を出してしまった

(…ツ!!クソツ!!油断した!!何やってんだよ俺!)

(フン!やはりこの程度か…すぐに終わらせてやる!)

俺は馬鹿だ!いきなり油断しちまった!だがもう取らせない!

「二本目!構え!」

再び竹刀を構える

(結構早い振りだった…だがあれくらいならば見切れる!)

「…初めえええ!!」

「メエエエエン!!」

…!それはもう効かない!

目前に迫ってきた竹刀を弾く

「…っ!？」（見切られた!? たった一回の攻撃で!?）

さあ今度はこっちの番だ!

「ハアアッ!」

竹刀を構え前に出る! 狙うは籠手!

今の位置からの最短で籠手を狙い打つ

「コテエエエ!!」

「ツ! 舐めるなあ!」バシン!

しかしその攻撃は相手の竹刀によって弾かれた

（クソツ! 弾かれたか!）

しかしバランスは崩れた! このまま追撃を…っ!?

俺は追撃をやめ後ろに飛んだ

その目の前を篠ノ之の竹刀が振り下ろされていった

（…危なかった…あのまま追撃していたらやられていた…）

「何っ!？」（馬鹿な! バランスを崩して追撃してきた所をカウンターで倒すつもりだったのに見切られた!?)

お互いの間合いから距離を取り睨み合う二人…

「…訂正しよう織斑…最初は私の相手にならないと思ったが、お前は…強!!」

「ツ!!へへっまだまだこれからだぜ?篠ノ之!」

「ああ!かかってこい!!」

「はあああああつ!!」

竹刀と竹刀が二人の闘志がぶつかり合う

時にはいなし、時には躲し、時には竹刀で受け止める

互角にも思えた試合だが3分も経つと段々と差がついてきた:

一夏が押され始めたのだ

「ハア...ハア...ツ!」(クソツ!体力がもう限界だ...これ以上は不味いな...)

全力の千冬から逃げた時間は3分

これは一夏と蓮仁が全力を出せる体力の限界の時間である

そして箒は剣道経験者で体力は二人以上にある

(どうやら織斑は体力切れのようだ...ここで一気に方をつける!)「ハアアツ!」

箒が掛け声とともに竹刀を振り下ろす

それを辛うじて躲す一夏

一夏の攻撃回数が減っていき、箒の攻撃回数が増えていく

そして決着の時がきた:

「ハア...ハア...ツ!これが...俺の出せる最後の...一撃だ...!」

(もう限界だ…せめてこの一撃だけでも決める!!)

「フツ…いいだろう! その一撃真つ正面から打ち破ってみせよう! こい!」

お互い構え、そして同時に前へと進む

「ゼアアアアアツ!!」

「ハアアアアアアツ!!」

お互いに真つ正面からの全力の面打ち

道場に面を打たれた音が木霊する

スパアーン!!

「…面ありっ!!」

この一撃を制したのは…

「勝負あり! 勝者! 篠ノ之箒!」

箒だった



S i d e 一夏 S i d e o u t

S i d e 箒

織斑一夏との試合が終わり小休止を挟んだ私は先程の試合を思い出していた…

とても今日初めて竹刀を握ったとは思えない動きをした織斑…

最初は呆気なく一本取ることができた

しかし次の攻撃からは一度見ただけで防ぎ、初見のカウンターまでも躲してみせた

前から剣道をしていた私と互角に戦っていたと思うと悔しく思うがそれ以上に楽し  
いと思えた試合だった

そして彼等の方を見る

悔しそうに唇を噛む織斑とそれを慰めている緋龍…

織斑との試合はとも心が踊った

緋龍…お前はいつたいどんな戦いをするのだ？

そう考えていたら自然と口の端が上がっていた  
すると緋龍と不意に目があった

(…ツ！何という力強い闘志の籠もった目だ！)

奴は目を逸らすことなくこちらを睨みつけるように見ていた  
…お前も私を楽しませてくれるのだろうか？ 緋龍蓮仁！

原作前第6話 篠ノ之道場入門!そして洗礼! 後編

前回のあらすじ!

一夏は箒との試合で奮闘したものの体力の限界により箒に敗れてしまった!

だが箒にも強さを認めてもらうことができた

そしてついに蓮仁の戦いが始まる……

S i d e 蓮仁

篠ノ之との試合を終えて戻ってきた一夏

とても今日初めて竹刀を握ったとは思えない試合だった

しかし一夏の顔には悔しさが滲み出ていた……

「ちくしょお……一本も取ることができなかった!」

悔しさの余り俯く一夏

後半での戦い、特に最後の一撃は素人目からしても素晴らしい攻撃だったと思う

「一夏、確かにお前は負けた……だけど初めてであそこまで戦えたんだ！悔しいだろうけど胸を張ってもいいと俺はおもうぜ？」

試合中の一夏は普段の様子とは違ってもカッコよかった

そんな一夏を初めて見た俺は褒め称えることが出来ようと笑うことが出来るだろうか？

答えは否！

俺の唯一無二の親友に自分の思いを伝える

「お前は良くやったよ親友の俺が保証する！今まで見た中で一番カッコよかった！負けちまったけどお前を笑う奴何ていやしない！それだけ頑張ったんだからな！」

「蓮……ありがとな」

ようやく顔を上げた一夏

その顔はいつも通りに戻っていた

そして千冬さんも声をかける

「一夏、悔しいと思うのは悪い事じゃない。その気持ちがお前をより強くするだろう。だから今の気持ちを忘れずに己を鍛えるんだ」

「千冬姉……あぁっ……！俺はもっと強くなる！そして今度は勝ってみせる！」

千冬さんの言葉に闘志を燃やす一夏:もう大丈夫そうだ

「次は俺の出番だ。一夏よく見とけよ?俺の戦いを」

「ああ!応援してるぜ!」

一夏を慰めていると視線を感じ見てみると篠ノ之がこちらを見ていた口の端を上げてニヤツとしている顔の篠ノ之:

まるで千冬さんみたいだ

要するにとつても怖いです:

ヒエツ:目があつた:そんなギラギラした目で見るなよお!

べつ別に怖く何かないやい!目を逸らしたり何かしないやい!

しばらく睨み合い(?)をしていたらさらに怖い笑顔になつた:なんでえつ?

何かもう戦闘狂みたいな顔してるしヤベーなアイツ

今から戦うと考えていたら憂鬱になつてきた:

だが一夏が漢を魅せたんだ!俺もやらなきや漢が廃る!

そして俺は防具を付けて篠ノ之と向かい合つた

「もう休憩は良いのか?」

「ああ問題無い。早くお前とも戦いたいからな」ニヤリ

ああ:完全に戦闘狂ですね間違いない:

そして俺は篠ノ之に向かつて…

「最初に言っておく。俺はかーなり、強い！」

そして遂に俺と篠ノ之の戦いが始まる！

Side蓮仁Side out

Side等

「最初に言っておく。俺はかーなり、強い！」

緋龍は私に向かつてそう宣言した

「今のはゼロノスだよな？」

「ああ…ゼロノスだな」

織斑と千冬さんがなにか言っている

ゼロのす？とは何だろうか

少々呆れた様子の千冬さんが話しはじめた

「それでは試合を開始する。ルールは先程の試合と同じだ。審判は引き続き私達が行う」

そして私達は前に出る

「構え!」

互いに睨み合いながら竹刀を構える

「蹲踞!」

互いに蹲踞をし始まりの時を待つ…

「始めえええ!」

先程の試合を見られてるのでいきなり攻めずに様子を見ようとした…

その時

「…ッ!!メツメエエエエン↑!!」

バシッ…

音が響き渡る

「…!面あり!一本!」

語尾の上がった掛け声で突っ込んできた緋龍によって先手を取られた私はなすすべなく一本決められたのだった

「つな?!」(何だと?!これは私が織斑にやった事…!あの試合で学んだか…!!)

普通は警戒して後ろに下がると思ったがいきなり攻めてきた…

いや…コイツならば普通な事などしてこなくて当然か

いつもクラスで見ているヤツは普通じゃないしな…

だがそこが面白い!!

先に取られたがここから取り返す!!

そしてまた竹刀を互いに構え直したのだった

S i d e 箒 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

竹刀を構えて蹲踞した俺と篠ノ之

「始めえええ!」



そしてついに試合が始まった

(さっきの試合でいきなり攻撃してきたしここは下がるべきだな)

攻撃を警戒した俺は下がって距離を取ろうとした

しかし

ガッ!

(あつヤベ!袴踏んじまった!)

慣れない袴を踏んでしまい前に倒れそうになった俺

(アカーン!転ぶううう!クソツこうなったら…)

「…ツ!!メツメエエエン↑!!」

前に転びそうな勢いを利用して苦し紛れの面打ちをする

バシッーーン

竹刀が何かにぶつかった音が響いた

(つつぶねえー!転ばずに済んだ!)

心の中で安堵していると…

「…ツ!面あり!一本!」

と聞こえたので周りを見ると皆が驚いた顔でこつちを見ていた…

えっ?俺が取ったの?

うわあー！マジかよお！カッコつけて『俺はかーなり強い！』（ー、ドー、）キ  
リッ

とか言ったのにこんな一本は嫌だああ！しかも声語尾上ずってたし！

「すっすげえ!?蓮のヤツいきなり決めやがった!」

「ふっ…流石だな蓮…!」

一夏!千冬さん!違うんだ!誤解なんだああ!

篠ノ之もやめて!そんな『面白い!』って顔で見ないで!事故だから!偶然だからああ!

心の中で悶える俺。しかし顔には出さない

いつまでも悶えている訳にはいかないので気持ちを切り替え構え直す俺

(最初はあるな一本だったが次は俺の実力で決める!)

「構え…始めえええ!」

今度は距離を放す俺

篠ノ之も必要以上には攻めてこなかった

俺の攻撃をまだ最初のアレしか見ていないから下手には攻めてこれないのだろう

攻撃パターンを見切られる前の方をつける!

籠手に攻撃しようとする前に出る

「ハアアッ!」

しかしその攻撃は届く事なく避けられてしまう

そして篠ノ之が竹刀を振り上げる

「ヤアアアッ!」

「…っ!」

振り下ろされる攻撃を竹刀を横に構え受け止める

(なんだ!この力は!?)

あの体のどこからこれ程の力が出てくるのか

何とか受け止めたが何度も食らっていたら体力が持っていられる

距離を取り牽制するがそこにまたしても突っ込んできた

(早い!避けるのは間に合わない!…なら!)

再び横に竹刀を構え受け止める…と思われた

しかし竹刀がぶつかかる瞬間横の構えを斜めにして受け流した

(…っ!受け流したか!…不味い!)

攻撃を受け流され体制を崩した篠ノ之の面に向けて竹刀を振り下ろす

しかし首をずらして避けられた

(今のを避けるのかよ…やっぱ経験者は違うな)

後ろに下がる篠ノ之に追撃する

カウンターを気にしつつ面に向かって鋭い一撃を放つ

今までで一番の攻撃

決まったと思った

しかし

篠ノ之は左に体を躲し前に入る

そしてすれ違う瞬間に：

「ドオオオオツ!!」

「…ツ!?ガハアツ!!」

胴に一撃入れられてしまった

「胴あり!一本!」

クソツ取られたか!

俺と篠ノ之の本数が並んでしまった

次に取った方が勝つプレッシャーの中互いの竹刀を構え直す

「先程の織斑も強かったがお前はそれ以上だ」

篠ノ之が話しはじめた

「だが負ける訳にはいかない!この勝負私が勝つ!」

「悪いがそう簡単にはいかないぜ?俺は結構負けず嫌いだからなあ!!」

そして激しい攻防が始まった

俺はなるべく攻撃を受け止めずに避けるか受け流すかをしていた

(余り時間を掛けるとこっちの体力が無くなるのが先だ、余り悠長にはしてられない!)

カウンターを織り混ぜながら確実に追い詰めてくる篠ノ之

このままでは勝てないと思った俺は勝負に出た

篠ノ之の攻撃を誘い込みそれを力尽くで弾き返す

(んなつ!?まだこれ程の力があつたのか!?)

驚き体制を崩した篠ノ之は反応が遅れてしまった

(これで!止めだ!!)

「メエエエエン!!」

そして最後の力を振り絞り全力の一撃を振り下ろす

そして誰しもがその一撃が決まったと思った

そう思ったのだ

しかし…

蓮仁の手の中には竹刀がなかった…

「「「「はっ?」」」」

その場の皆の声が一つになる  
バシーン！

その音に後ろを振り向く蓮

その先には蓮が持っていた竹刀が転がっていた…

「oh…」

そんな声しか出せなかった蓮仁はギギギつと聞こえそうな動きで前に向き直る  
そこには…

竹刀を振りかぶった篠ノ之がいた

あつアカン（察し）

「メエエエェン!!」

「カラミソツ!?!」

そして蓮仁の脳天にクリーンヒットしたのだった…

「……………め、面あり!勝者篠ノ之箒!」

こうして俺の戦いは幕を閉じた

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

試合の終わった蓮が戻ってきた…

めっちゃドンヨリしながらな

なんとも言えない最後のやられ方…

あんなん何て声掛けりやいいんだよおお!?

とりあえず話しかけて見る

「お、おう蓮! お疲れ様! 凄い試合だったぜ!」

「…ああ…ありがとな一夏…」

めっちゃ落ち込んでるううう!!

やっぱコイツメンタル弱いな!?

すると千冬姉が…

「蓮いつまでも落ち込んでいるな。最後の一撃は力が入り過ぎていたから竹刀が飛んで行ってしまったんだ」

「そうだけ! 蓮! 俺にも言ったら? 始めてであそこまで戦えたんだから胸を張ろうって!」

「一夏…ああ! そうだな! 善戦できたんだから良しとしよう! この敗北を糧にもつと強くなる!」

やつと戻ったか…よかつた…

胸を撫で下ろしていると篠ノ之がこっちにやってきた

「二人共お疲れ様! いい試合だった!」ニッコツ

今まで見たことの無い明るい笑顔を向けてくる篠ノ之



すると蓮が…

「へえ良い笑顔じゃんいつものムスツとした顔よりそっちの方が似合うぜ?」

「んなつ?!いきなり何を言うのだ!」カアツ…

蓮の言葉に顔を赤くする篠ノ之

しばらくして落ち着いてきたのか話しをもどした

「織斑の試合も緋龍の試合も本当に素晴らしかった…特に緋龍は最後の一撃、竹刀を落としてなければ負けていた…」

するといきなり頭を下げてきた篠ノ之

俺も蓮も驚いて目を見開く

「二人には色々酷いことを言ってしまった!本当にすまなかつた!」

そう謝る篠ノ之

俺たちは…

「別に気にしてねえから大丈夫だぜ?な一夏」

「ああちゃんと謝ってくれたしな」

「…ツ!ありがとう二人共!!」

顔を上げた篠ノ之がお礼をいつてくる

そして蓮が…

「よし！それじゃあ今日から俺たちは友達でありライバルだ！よろしくな！」  
篠ノ之に右手を差し出す

「うむ！よろしく頼む！」

そして握手をして笑い合う

「おれもよろしくな！次は負けないぜ？」

「ああよろしく！私も負けてやるつもりはないぞ？」

俺も握手を交わして笑い合った

こうして俺たちに新たな友達兼ライバルができて道場の洗礼が終わったのだった

S i d e 一夏S i d e o u t

S i d e  
???

道場の外から箒と笑い合う蓮仁と一夏を見つめる人影があった

「ちーちゃんが連れてきた子達つよかったな〜」

そうつぶやき見つめ続ける

「特にあの子が気になるな」

その視線の先には蓮仁がいた

「緋龍蓮仁だっけ?面白そうな子、流石ちーちゃんに認めて貰っただけはあるね」

怪しい笑みを浮かべる女性

そして蓮仁を見つめ

「どうやって接触しようかな?早く話してみたいなあ」♪蓮仁だからレン君だね♪フツツ楽しみにしててねレン君♪」

# 原作前第7話 炸裂!! 必殺の○○○ブレイカー!!!

前回のあらすじ!!

篠ノ之道場に入門し篠ノ之箒と試合をした蓮仁と一夏

二人は試合に破れたが箒に認めて貰ったのだった

そして友達兼ライバルになった3人であった

S i d e 蓮仁

道場に入門してから数日がたった

篠ノ之と試合をした翌日に俺と一夏は普段使わない筋肉を使った事により重度の筋肉痛になり一日中机から動くことができなかつた…(泣)

あれから篠ノ之も話しかけて来るようになり俺たちの事を心配してくれた…めっちゃ良い子やん!

まるで別人みたいに笑うようになった

本当に丸くなったなあ…

俺たちと話すのを見た他の女子達も篠ノ之に話しかけるようになり友達も出来たよ  
うだ…

あれ？俺と一夏より友達多いな（現在の友達2人）

謎の敗北感に苛まれたりもしたここ数日

道場で稽古をしたり遊んだり結構充実した生活を送っている

そして放課後…

今日は掃除の当番があるんだよなあ…

道場も今日は無いから早く帰って遊びたかったのになあ…

まあ一夏は先生の手伝いをさせられてるから今日は遊べないんだけどな

アイツ結構先生に頼まれ事されるんだよな

本当にお人好しだよなあ

まあ一夏にそう言ったら『お前が言うな！』って言われるんだよ

別にお婆さんの荷物運んだり、迷った人に道案内したり、捨て猫にカニカメラあげたり  
位しかしてないんだけどな

「さて掃除の前にトイレにいったいれ〜！ってな！」

なんつって！」

………一人で何言ってるんだろ俺（白目）

しかも今のが7話の初セリフなのに…（メタ発言）

そしてトイレから戻ってきた俺は掃除をしようと教室に入る

そこには…

A 「や〜い！男女！」

B 「お前女のくせに剣道してんだろお？だから男女なんだよ！」

C 「そうだそうだ！」（便乗）

「………」

男子3人に囲まれて悪口を言われてる篠ノ之がいた…

はあ？

アイツら何やってんだよ

「………私は掃除をしないとイケないんだ。お前たちに構ってる暇はない邪魔をするな」

篠ノ之が男子達にそう言うのと男子Aが…

A 「ああ!?!何指図してんだよ!男女の癖にリボン何か付けやがって!!」

そう言つて篠ノ之のリボンを奪い取つた

「ツ!!返せ!」

A 「はん!ヤダねお前には似合わねーんだよ!悔しかったら取り返してみろよ」  
それを見た俺は

「…おい」

気づいたら自分でも驚くほど低い声を出していた

A 「ああ?なんだよ緋龍?」

「男が寄つてたかつて女虐めてんじゃねーよ」

B 「はあ?何お前コイツの味方なの?」

? 何当たり前の事言つてんだよコイツ?

「当たり前だろ？俺のダチなんだから」

A 「なんだ？お前こんな男女が好きなのか？」

篠ノ之の事が？当たり前だろ！友達の中で一夏の次に好きだぜ！

ああちなみにまだ一夏と篠ノ之しか友達いましてえん…

「…ああお前たちみたいにな奴らより断然（友達として）好きだね」

「んなっ!?」カアッ

あつ篠ノ之が顔真つ赤にしてる

なんでえ？

（ひ…緋龍は私が（女として）好きなのか!?!）

何故か顔を真つ赤にした篠ノ之…風邪か？（朴念仁）

「さあて…そのリボン返して貰おうか？」

俺がそう言うのと男子Aは…

A 「取れるもんなら取ってみやがれ!!」

すると男子BとCが前に出てきた

B 「二人がかりに勝てるわけないだろ！」

C 「そうだそうだ！」（便乗）



…どうでもいいけど男子C『そうだそうだ』しか言つて無いな…

しかも後ろに（便乗）つてついてやがる（メタ発言）

「何人東になるうが、所詮クズはクズなんだよ」（呉島光実）

ABC 「「ああん!?!んだとコラア!!」」

ネタが通じない（泣）一夏なら乗ってくるのに

これだからモブは駄目なんだよ…

さてただの煽りになってしまったが気を取りなをして

「俺とお前たちとの格の違いつてやつをみせてやる!!」

俺は男子Bに近付く、すると

B 「オラア！」

右ストレートを打ってくるしかし…

「遅えー！」

千冬さんのスピードに慣れた俺には止まってみえるね！

そのまま横に躲し腕を掴む

そして…

「しっぺえ!!」

B 「いっつっ!?!」

「デコピン!!!」

B 「ぐえっ!?!」

「ババチョップ!!!」

B 「へぶしっつっ!?!」

そして膝から崩れ落ちたB…

「…次はお前だあ」ニッコリ

C 「ヒエッ」

千冬さんのマネの笑顔(怖)で相手をビビらす

流石千冬さん!

「猫騙しい!!」バチン

C 「ぴゃっ!?!」

猫騙しで怯ませて後ろに回り込む

そして相手の腰に手をまわし…

「からのジャーマンスープレックスウウウ!!」

C 「ホゲエエエッ!?!」

頭から崩れ落ちたC…

「ふう〜」

一息ついてからAを見ると顔を真っ青にしていた

まあ速効で仲間二人やられたしな

「あばばばば…」ガクガク

いやビビりすぎい!?

Aに向かつて話しかける

「…あとはお前だけだなあ? なあオイ?」ニツコリ

A「ヒエッ…」

お〜ビビってるビビってる

「今ならリボン返してくれるなら見逃してやるよ?」ニツコリ

一応助かる道を作ってやるが…

A「ちつちちちくしよお!?!俺はやるぞお!?!」

…(〜)ハア…おとなしく諦めればいいものを…

A「オラア!」

また右ストレートを放ってくる

そしてその手を左手で捕まえ右手にちからを込める

あつ殴んないからね？流石に洒落にならんから…

そして相手の下半身に右手を運ぶ

A「!?!?お前…まさか!?!」

皆さんもうお気づきだろうか？

おれの右手の前にあるものを…

そうそれは……

股間だあ!!!

「必・殺!!：ゴールデン・ボール・ブレイカー!!!」ガシツ!!

A「ホデュアアアア!?!」

必殺のゴールデン・ボール・ブレイカー（金○潰し）を食らった男子Aは、まるで口ピンに股間を握られたフランキーみたいな声を出す

「もげるわいなー!!!」

「もぎとれるわいなー!!!」

「みかんのように!!」

廊下を通った二人組の女子がそう叫んだ

いや誰だよあんたら?!?!

…では気を取り直して

「おとなしく引くかこのままもぎ取られるか好きな方を選びな…?」

ドスのきいた声でそう尋ねる

A 「ごめんなあざい!!リボン返すがらもうやめでえ!!」

うつわきつたない顔だなあ

涙と鼻水と唾液で凄まじい顔になってる

そして手を放すと力無く股間を抑えながら崩れ落ちた…

「フツ…またつまらん玉を掴んでしまった…」

B C 「安達ー!?!」

ようやく復活したBとCはAこと安達の元に走る

「さあとつとと失せろ！次はもぎ取るぞ！！」

BC「お、覚えてろよー！！」

三下のセリフを吐いて安達を引きずりながら逃げてった…

つて安達の足引つ張ってるから段差に頭ぶつけて凄く痛そうだな！？手を引つ張って

やれよ！！

「よし！終わった！！」

そして篠ノ之のもとに向かう…

前に手を洗いに行つた

股間触っちゃつたし…汚いからね

汚物は消毒だあー！！

ハンカチで手を拭きながら教室に戻つて今度こそ篠ノ之のもとに向かう

「大丈夫だったか？」

「つ！？わ、私は大丈夫だ！！」

顔を真っ赤にしながら答える篠ノ之

本当に大丈夫かあ？

「ほらリボンだ」

「…いつの間にな？」

さつきゴーグルデン・ボール・ブレイカーする前に取ってたんだよな

しかしリボンをさしだすも受け取ろうとしない篠ノ之

それどころか俯いてしまった

「……う？どうした？」

「……私には、私みたいな女にはリボンは似合わない……」

泣きそうな声を出して答える篠ノ之……

そして俺は

「お前バカか？」

「ハアツ!？」

これには篠ノ之もびっくり

いきなり『お前バカか？』って言われたらそうもなるけど

「あんな奴らの言うことを真に受けるなのはバカだっていつてんの！それにお前にリボンは似合うぞ……」

そして俺は篠ノ之の髪を束てリボンで結んだ

「ほらやっぱりかわいい！」

「…っ?!」カアッ

また顔が真つ赤になる篠ノ之

「ど、どうして私を助けたんだ…?」

なんだよいきなり…?

大切な友達を助けるのは当たり前だろ?

「篠ノ之は俺の（友達として）大切な人なんだ。助けるのは当たり前だ」

「ツ~~~~!!」（た、大切な人それってやっぱり私の事が…）

何か悶てる篠ノ之どうしたんだあ?（朴念仁）

「まっそういうことだ! さっさと掃除終わそうぜ! 篠ノ之」

するとこちらに向きなおった篠ノ之が

「箒だ」

「え?」

「だ、だから私のことを他人行儀に篠ノ之と呼ぶんじや無く、箒と呼んでくれ!」

顔を赤くしながらそう告げた

「分かった…箒! これで良いのか?」

「…! うむ!」

嬉しそうに頷く篠ノ之もとい箒



「じゃあ俺のことも蓮って呼んでくれよ。蓮仁だけど親しい人はみんな蓮て呼ぶから」  
「わ、分かった…蓮」カアツ

あつ尊い…

何故か拜んでしまったが掃除に取り掛かった俺たち

掃除中チラチラこつちを見てくる箒…

ナズエミテルンデイス!!

掃除も終わり俺たちは一緒に下校した

…下校中終始無言だった俺たち

チラチラみてるので目を合わせてみたら速効で逸らされた…

なんでえ？

そして分かれ道に到着した

「じゃあな箒！また明日」

「…ああまた明日な…蓮」ニコツ

そう言って笑った箒は走って帰って行った

その後ろ姿をただ見ていた俺は

「尊いんじやくあツ!!!」

そう叫んだ

「つか今回俺のSideしかねえじゃん」

## 原作前第8話 出会いはいつも突然に～天災ウサギとの遭遇～

前回のあらすじ！

男子3人組から虐められていた箒！

そんな箒を助けたのは蓮仁であった

しかし助けたあとに色々勘違いさせる発言をしてしまったのだった…

Side 蓮仁

叫んで少し落ち着いてきた俺はおとなしく帰ることにした

「あくあ帰つても一夏と遊べないし、竹刀の素振りでもするかなあ…」

そんなことを呟きながら歩いていると突然後ろから話しかけられた

「その君うちよつといいかな？」

多分俺に話しかけてるんだろうと思ひ振り返る

「はい？どうか…しまし…た…」

そこには不思議の国のアリスみたいな服にメカのウサミミをつけた千冬さんくらいの歳の女性がいた：

あつヤバい人です、ね間違いない（確信）

そこからの俺の行動は早かった

「あつ今日は用事があるので早くかえらないとー。さよならー」（棒読み）

ダツシユで走り始めた俺は角を曲がり逃げた

しかし次の曲がり角を曲がったら：

「ちよつと束さんとお話ししな〜い？」

何故か先程の女性が目の前にいた：

あつこれ逃げられないは（諦め）

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 束

箒ちゃんと別れたレン君は

「尊いんじやくあッ!!」

そう叫んだ：

うん！すつごい分かる！あの笑顔で名前呼びのコンボはズルいよ!!

しばらくして落ちて着いてきたレン君が歩き始めたので後ろから話しかける

「その君うちよつといいかな？」

「はい？どうか…：しまし…：た…：…」

こちらを見て固まったあとに

「あつ今日は用事があるから早くかえらないとー。さよならー」

とすつごい棒読みで走り去っていった

結構走るの早かったな

でも東さんには勝てないよ！

そこからダッシュで追いかけて塀を飛び越えたりしながら先回りした

するとレン君が曲がって来たので

「ちよつと東さんとお話ししな〜い？」

そう話しかけた

すると

「……瞬間移動？」

「……聞いてきたので

「違うよ、走って扉を飛び越えてきたよ」

「そう答えた

すると

「なんだよ……ドラゴンボールかと思ったたらNARUTOだったよ……」

「あれ？何か思ってたのと違う反応だなあ

「もつと『な、何だつてえー!』（驚愕）みたいな反応かと思つたのに

「あつそういえば箒ちゃんが……『緋龍に常識と言う言葉は通用しない』ドヤア

「つて言っていたっけ

「ドヤ顔も可愛かつたなあ」

「嘘付いて逃げる何て束さん悲しいな」

「いや怪しさ満点すぎるそつちが悪いでしょ。俺の気持ちになつてみてよ」

「……おお……君以外と辛辣だね……」

「結構グサツとくる言葉をいただきました……」

「それじゃあお話ししよう」

「ええ、つマジでえ？」

そこまで嫌なの!?

「まあいいですけど…」

あっいいんだ…

「それであなただは誰ですか？」

「フッフッフツ…私はてえっんさい科学者の篠ノ之東さんだよ!」

私の名前を聞いて目を見開くレン君

フッフッフツやっぱり驚くよね

篠ノ之何て名字ここら辺には他に居ないからね!

箒ちゃんとの関係が気になるよねえ?

するとレン君は…

「勝利の法則は?」

と聞いてきた

えっ? 何だつて?

「勝利の法則は!」

また聞いてきたあ!?

「き、決まった…?」

「…ツ!!」 パアッ

何かすっごい笑顔になってるう!?

「ラビット・タンク?」

またまた聞いてきたあ!!

「…ベストマッチ」

「夜は?」

あつまだまだ続く奴だこれ:

そしてヤケクソ気味に答え始める

「焼き肉っしょ!!」

するとレン君はさらにノリノリになり

「今の俺は!？」

「負ける気がしねえ!!」

それからしばらくこんな事が続いていた:

本当に予想以上に予想外だよお:

S i d e 東 S i d e o u t



S i d e 蓮仁

俺は今東と言う人に仮面ライダービルドのネタを振っていた

あの『てえっんさい』の発音は間違いない！桐生戦兔だ！

ここまで対応するとは…

この人…できる…!!

一夏以外でここまでネタで会話できる人は初めてだあ…

と、感動していると…

「…も、もういいかな？」

とちよつと疲れた顔で言ってきた

「はい！久しぶりに友達以外でネタが通じて楽しかったです！」

「お、おおう…それはよかったね…？」

苦笑いしている…なんでえ？

「そ、それより他に聞くこと無いの？」

他に聞くこと？

ああそういえば気になる事言ってたっけ

「そういえば何で俺が嘘付いてるって分かったんですか？」

「そつちかあ…」

…？そつちつて何だ…？

「あんなに棒読みじゃ天才の束さん以外でも分かるよ…」

「な、何だつてえー!?」（驚愕）

「そこでその反応なの!?先回りされた時じゃ無くて!?」

そうかあ…嘘下手だったのかあ

知らなかったなあ…

『子役いけんじゃね?』って思ってたのになあ…

「それに何と!このウサミミは嘘発見器なのだ!!しかも私が作ったのだあ!!!」

「な、何だつてえー!?」（棒読み）

「おうコラ思いつきり棒読みじゃ無いか」

怒られたでござる

だが悔いはない

「いやでも凄いですね」

「フッフッフ…凄いでしょ?最高でしょ?てえっんさいでしょ!」

「お顔が……怖い感じに……」

「おうこら」

ネタを振りまくる俺氏

「そういえば篠ノ之つて言つてたけど箒の姉ちゃんですか？」

「あつ今聞くのねそれ……」

ちよつとゲンナリしてきたよこの人

「……ゴホンツッ！以下にも！改めて箒ちゃんのお姉ちゃんの篠ノ之東だよハロハロ」

♪

「……雰囲気全然違いますね」

まるで真逆の存在だなあ……

本当に姉妹かあ……？

髪の色も箒と違うし

ま、まさか!?

「……複雑な家庭なんですわ……たとえ血が繋がって無くとも家族の絆があれば大丈夫ですよ頑張ってくださいね」

「相談にもなりますから……」と俺は言う

頑張ってくださいね！俺応援してますから！！

「いや違うからね!!血繋がってるからね!!」

あっそうですか

盛大な勘違いだった…

「…もう本題に入っつていいかな？」

「何だ…まだ本題じゃ無いんですか」( 旦、 ) ハア…

「イヤ君のせいもいいッ!!」

俺のせい？違いますね妖怪のせいですな間違いない

時間も時間だしそろそろ真面目に聞か…

「それでは本題に入りましょうか？」

「何で君が仕切るのさ…本題だけど今日は学校で箒ちゃんを助けてくれたよね？そのお

礼をしにきたの」

「えっ？お礼参り？」

「違うから！お礼だから!!」

何だそんなことか…

別に当たり前のことだから礼なんていいのに…

ん？

待てよ？何で学校での事知ってんだ？

箒と別れてすぐに話しかけられたのに…

「…何で学校での事知ってますか？」

「それはねえ、ずっと見守っていたからだよ♪」

何か小型カメラみたいなの取り出してドヤ顔している

そして俺は…

「お巡りさん！この人です!!」

「ちよ〜つと待とうか？一回落ち着こう」

「だが断る」

「イヤ本当に待って！洒落にならないから！」

俺の口を押さえてくる束さん

「モガモガモガ!」

すると…

俺を押さえてくる束さんの後ろから誰かが近づいてきた

その人物は

「オイ…蓮に何をしている束？」ニッコリ

「ヒエツ…ちーちゃん!」

我らが頼れる千冬さんだった！

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 千冬

何となくだが蓮がピンチな気がして急いで走ると  
そこには蓮を押さえてる束がいた：

はっ？

何をやってるんだコイツは

ちよつとお灸をそえなければならぬ様だなあ：

「オイ…蓮に何をしている束？」ニッコリ

「ヒエツ…ちーちゃん!？」

私は笑いながら束に近づいて行く

一歩前進するたびに顔が青くなっている

そして束との距離はゼロになり…

「あいだだだだあああ!!?アアアアツ!!?」

私は束の頭を掴み持ち上げた

所謂アイアンクローだ

「…さて?何をしていたんだあ?なあ束」

「アアアアア!!まず離してえええツ!!?」

段々ミシミシ聞こえてきたが気のせいだな

「頭が陥没するうううツ!!?タスケテエツ!!!」

すると蓮が…

「ち、千冬さん!それ以上は流石に不味くないですか!?

「むっ…:そうか」

蓮に言われたら仕方がないな

私は束の頭から手を離した

「アアア…:私の頭陥没してないよねえ…?」

蓮に頭を見せて束がそう言った…

「…あつ…陥没してる」

「ええええツ?!? って嘘発見器が反応してるから嘘だね!?! 一瞬本当に陥没してるかと思っ  
ちやつたよ!?!」

「…感のいいガキは嫌いだよ……」

「イヤ君の方が年下あああ!!?」

…ほう? あの実をここまで翻弄させるとはな

流石は蓮だ

「…それで? 蓮に何をしていたんだ束?」

「ええつとね? カクカクシカジカって訳でして…」

「ふむ…なるほどなあ」

それで押さえていたのか

「…えつ? ちーちゃん今ので分かったの?」

「ああだいたい分かった」

「ディケイドですね間違いない」

蓮それを言つては駄目だ!

「イヤ何で分かるの!?!」

「そんなの作者が説明書くの面倒くさいからに決まってるだろうが」



「ちーちゃんメタ発言しちやってるううう!？」

S i d e 千冬 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

千冬さんがメタ発言したけど俺もしてたからなあ

「それでまだ礼を言っただけじゃないだろ？」

と千冬さんが言った

そういえばそうだった…

「ああうんそういえばそうだったね」

こちらに向き直る束さん

「レン君！箒ちゃんを助けてくれてありがとうね♪」

「いえいえあつしは当然の事をしたまでっスよ」

「何かキヤラ違うよ？」

気にしたら駄目だよそんな事

「これからよろしくね♪レン君♪」

「よろしくお願いします！エボルラビットさん!!」

「それはやめてくれないかな!?!」

「だが断る」

「キイキイキイッ!!」

何か奇声を上げてる（笑）

そしてひと呼吸置いて…

「私の事は束お姉ちゃんって呼んでくれないかな?」

すると千冬さんが…

「…束え何を蓮に姉呼びさせようとしてるんだあ!!」 ガシッ

再び始まるアイアンクロー

「アアアアッ!!」

うわあ…痛そうだなあ

「では私達は帰るとする。蓮も気を付けて帰るんだぞ」

アイアンクローのまま引きずりながら篠ノ之道場の方に歩いて行く千冬さん…

こうして俺と天災とのファーストコンタクトは終わったのだった

原作前第9話 稽古の時間！（なお修業相手は千冬さんと束さんが務めます）

前回のあらすじ！

下校途中の蓮仁に話しかけてきた怪しい人物…

それは箒の姉の篠ノ之束だった!?

なんやかんやで束を翻弄させる蓮仁だった…

S i d e 蓮仁

箒の姉ちゃんの束さんにあつてから数日がたった

あれから俺と一夏と箒は学校や道場で楽しく充実した日々をおくっている

そして今日も道場に向かうと…

「ハロハロ〜♪レン君この間ぶりだね♪」

エボルラビットが現れた！

そして俺は携帯を取り出して…

「もしもしポリスメン？」

「ちよ〜つと待とうか？何をしているのかな？」

あつ…取り上げられた…

「イヤ何か反射的に？」

「反射的に通報しないでくれるかな!？」

怒られた…

イヤでもいきなり怪しい人物が現れたらしようがないよね？

「すいません…次からは千冬さんに通報します」

「それはそれでヤバいからね!？またアイアンクローされちゃうから!？」

そんな事を話していると一夏と箒がこっちにきた

「蓮何やってんだ？」

「イヤちよつとこの人に絡まれて…」

「なつ!？姉さん!？何をやってるんですか!？」

そう言つて俺と東さんの間に箒が割り込んでくる

さらに東さんを睨みつけている

え？何で睨みつけるの？

「姉さん何をするつもりだ？蓮は私の友だ、何かしたら許さないぞ!？」

あらヤダイケメン！

これで性別が逆だったら惚れましたね

何て思っている今日この頃

「ち、違うよ！箒ちゃん！何にもして無いし、しようともして無いからね！」

この人妹からの信頼度無さすぎじゃね？

「なあ箒この人そんなに信用できないか？」

「……姉さんが他人に興味を持つこと自体中々無いからな。興味を持ったとしても悪い方かもしれないしな」

何だ？悪い方って…

いったい何の事だと考えていたら一夏が

「悪い方って何だ？箒」

と一夏が聞いていた

ちなみに一夏も箒を名前呼びにするようになった

俺と箒が名前呼びなのに自分だけ名字だと疎外感があるからと互いに名前呼びになった

「悪い方は何か危害を加えるかもしれないという意味だ」

うわあ…何それ怖い

でも特にそんな事はされてないしなあ

「大丈夫だ箒！ いざとなつたら千冬さんを呼ぶから！」

「なら安心だな！」

千冬さんの信頼度は高いなあ

実の姉より高い信頼度を勝ち取る千冬さん

そこに痺れる憧れる！

「まあこの前偶然……では無いけど下校中にあつて話したんだよその時には押さえつけられたけどな」

爆弾を投下した俺！

束さんの顔が青くなる

「……姉さん？」

「ヒエツ……」

!? 箒の背後に般若が見えた気がする!?

何て……恐ろしいんだ……

「……蓮？ 今変なこと考えていなかったか？」

ヒエツ……心を読まれた……（泣）

「滅相も御座いませんよ箒さん」

「……………まあいい」

ふええっ…助かったあ

顔には出さないが滅茶苦茶安堵した俺だった

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

蓮と話す筈の姉ちゃん

でもまだ紹介されてもないから中々話に入れない…

3人で話してるのを見ると疎外感が半端ないなあ

「…なあ蓮に筈…そろそろ紹介してくれないかな？」

すると蓮と筈が

「一夏は知らなかったのか？」

と聞いてきた：

知らないよ！初めてあつたよ！

あと息ぴつたりで話すなよ！

余計に疎外感に苛まれちゃうだろ!?(泣)

「…ゴホン！この人は私の姉で篠ノ之東だ」

と箒が言う

「別名エボルラビットだ」

と蓮が言う

「ちよつと!?エボルラビット何て呼ばれてないよ!？」

「ちよつと何言ってるか分からない」

「富○たけしイイイ!？」

「東えええツ!!蓮に何をしとるかあああツ!!」

「「千冬さん(千冬姉)(ちーちゃん)!?」」

千冬姉も乱入してきた!?

場が段々とカオスな空間になってきた：

すると師範がやってきた

「おお、皆集まってるね」



「師範！おはようございます！」

「おはようございます！」

千冬姉が挨拶をして、それに続いて俺と蓮も挨拶をした

「おはよう今日も元気だな！」

ハツハツハと豪快に笑う師範

元気なのは主に蓮と千冬姉と束さん何だけどなあ…

「さて蓮君と一夏君今日からの稽古の話し何だが…二人には無手の稽古を初めてもらう」

むて？何だろうかそれは…

蓮もよくわかってないみたいだし

「無手は素手で戦うことだ」

と、千冬姉が教えてくれた

すると蓮が

「何で素手で戦う稽古をするんですか？」

それは俺も思っている事だ

剣道を習っているのにわざわざ無手の稽古をする必要は無いのではないだろうか

「無手を鍛えるのは剣を落したり折られたりした時に武器なしでも戦えるようにする

ためだ」

……千冬姉

さつきから説明してくれて助かるけどさ…

師範が凄い説明したそうにしてるんだよなあ

「ち、千冬君…説明なら私が…」

「師範が説明すると篠ノ之流の歴史から話し初めて時間が掛かってしまいますので」

歴史から説明はキツイなあ

千冬姉は俺たちに気を使ってくれたみたいだ

あと師範が落ち込んでる

「…最近千冬君が辛辣になってきた…」

「反抗期かなあ」何て言い始める師範…

何かイメージが崩れてきた…

「…では気を取り直して無手での稽古を始める」

それから俺と蓮は師範と千冬姉に無手を習うのであった

S i d e 一 夏 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

はい、基礎を教わりました！

え？いきなり跳んだ？いやまあ気にするな（作者が面倒くさがった）  
さてさてさうて（メリオダス風）それでは実戦です！

……いやちよつと待って！

何でいきなり実戦なんだよ！

師範いわく『千の言葉より一回の実戦だ』だそうです

ちくしよお…この人も戦闘狂かあ…

ちなみに相手は千冬さんと東さんらしい

しかも二人がかりでね…

なんでえ？

俺VS千冬さん&東さんって絶対俺を殺しにかかってきてるよね？

スライムにイオナズン打ってくるようなもんだよ!?  
オーバーキルすぎイイイイツ!?

ふうおっほっふへんあっしやいなすかにはまちさんどう! (現実逃避中)  
……………ふう、落ち着いてきた

すると一夏と箒が

「蓮! 頑張れよな!」

「全力を出せ! 蓮!」

二人からの応援、無駄にはできねえ!!

「ああ! 逝ってくる!!」

「何か字が違う!?!」

気のせいだよそんな事:

千冬さんと束さん:

ヒエツ: ラスボスと裏ボスが同時に現れたみたいなのオーラを放ってくる (泣)

: ええい! 男は度胸!!

「逝きますよ二人とも!!」

「だから何か字が違う!?!」

ええい気にするな!!

そして俺は千冬さんに向かって突撃した…

キングクリムゾン!

結果から言って何もできずにボコられた…

あの二人は人間やめてるは

千冬さんは…

『あたたたたたたたたたた!!』

と北斗百烈拳を放ってくるし

束さんは

『オラオラオラオラオラオラア!!』

ってスタープラチナ放ってくるし

その攻撃を2方向からまともに食らったおれは今…

床でヤムチャっていた…

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

## Side 一夏

千冬姉と東さんにボコられた蓮…

って大丈夫かよ!?

「姉さんも千冬さんもやり過ぎです!!」

と箒が言うと二人は

「…むう、流石にやり過ぎたか…」

「…テヘペロ♪」

………東さんは反省してないみたいだ

「蓮! しつかりしろ!」

「死ぬんじゃない! 蓮!」

いや箒さん流石に死にはしないよ…

「だからよ…止まるんじゃない…ねえぞ…」ガクッ

いやそれ死ぬやつう!?

「団長おおお!!」

キボオノハナー♪

「束さん！BGMかけるのやめてください！」

何でタイミングよく流せるんだ!?

そして蓮は気絶したのだった…

S i d e 一 夏 S i d e o u t

S i d e 蓮 仁

目を覚ますと何処かの部屋で寝かされていた

…！これは…この状況は！！

「…知らない天じよ「蓮！起きたか!?」……………一夏あああ」

お前この野郎！タイミング悪すぎるだろ!?

まあいいや

あれからどれくらい時間がたったのだろうか？

「…一夏あれからどれくらい時間がたった?」

「えーと…6時間だな」

6時間!?道場に來たのが朝九時で千冬さん達の稽古がだいたい十一時に終わったか

ら……

今は夕方の五時!?

「マジかよ…あの二人手加減してくれよお…」

「あの二人は俺と箒で叱っておいたから」

小学生に怒られる高校生…シニールだなあ

「……………一夏、俺は自分が強いと思っていた……………けどなそんな事は全然無かったんだ…俺

は…弱い」

「蓮…」

箒との試合や虐めっ子との戦いで調子に乗ってたんだ俺は…



だからあの二人は俺の弱さを分からせるためにあの稽古をしたんだ…

…へへっ！

あの二人には感謝しないとな！

「一夏！俺はもう慢心しない！これからもつと鍛えて強くなる！そしていつかあの二人を超えてみせる！」

あの二人がいる高みに辿りつくのは簡単では無い

それでもいつか必ず二人を超えてみせる！

すると一夏が…

「俺も、俺も強くなりたい！どこまで行けるか分からない…それでも千冬姉を、皆を守れるくらい強くなりたいんだ!!」

「一夏！」

「蓮！」

俺たちは拳を打ち付けあって…

「俺たちはつよくなるぞ!!」

こうして俺たちは新たな目標を見つけることができた

それから2年後

俺たちは小学4年生に上がった時に…

い  
ある事件が起きて俺たちの今までの日常が変わってしまう事を、俺たちはまだ知らな

## 原作前第10話 白騎士事件

前回のあらすじ

無手を習った蓮仁と一夏

蓮仁は千冬さんと束さんにボコられてヤムチャっていた

そして二人を超えるという目標を建てた蓮仁はさらに修業に力を入れるのであった

S i d e 蓮仁

強くなると決意した日から2年がたった

あれから俺たち3人はかなり強くなった

試合をしても他の同年代の門下生には負けなくなり年上相手でも勝つ事が出来るよ

うになった

同年代で戦えるのは一夏と箒くらいになってしまったが…

師範からも教えてもらっている

いつもは穏やかだが稽古中はとても厳しくなる

苦しく辛い稽古だったが自分が強くなっている事がわかる

無手での稽古も順調に進んでいる

今では千冬さんと束さんの北斗百烈拳とスタープラチナを見切って反撃出来るようになった！

…と最初は喜んだがあこの二人いきなりスピードを2倍にしてくるのでまたボコられてヤムチャっていた

あつもちろん稽古だけじゃ無いぞ

箒と束さんを入れて鬼ごっこしたりトランプをしたりもした

まあ鬼ごっこは千冬さんと束さんからは逃げ切れないし

俺たち3人じゃ捕まえられないけどな…

でもトランプでは俺と一夏は無双してた

千冬さんいわく『トランプ中の蓮と一夏の画風はまるでカイジのようだ…』と言って  
いたっけ

東さんと箒も『何か【ざわざわ…】って聞こえた気がする…』と言っていた  
まあ気のせいだな

こんな感じで2年を過ごした俺たち

しかし

この日常も終わりが近づいてきていた…

学校から帰った俺たちは稽古が無い日なので俺の部屋に集まっていた  
だが千冬さんと東さんは居ない

何だか最近二人の様子がおかしかった事もあり3人で集まっていた

「最近千冬姉が変だよな」

「ああ何だか姉さんも変な気がするんだ」

「……千冬さんは難しい顔してるし東さんは作り笑いみたいな顔だし何か変だよなやつぱり」

頭をひねる3人

だが何も思い浮かばない

「何か心当たりは無いのか？特に蓮」

……箒さあん何で俺が原因みたいに言うんだよ…

「そっだぞ蓮、早く白状しろ」

ブルータス！お前もか!?

「二人とも何で俺が原因みたいに言うんだよ…」

すると二人は

「だいたい蓮が何かしらやらかすから」

と声を揃えて言った

そして俺は…

「( ; ω ; ; )」ブワッ

泣いた

「うあー!? 蓮落ち着けよ!」

「そ、そうだぞ蓮! 一回落ち着こう!」

「オデエノココロハボドボドダ…」

二人からの信用の無さに全俺が泣いた

「蓮はメンタルミジンコだからなあ」

ひでえなコイツ更に傷口に塩を練り込んできた

「…お、よしよしほら泣きお止み」

……箒は箒で子供扱いしてくるし

「…俺には心当たりは無いから…」 (〇) グスン

「じゃあ謎は迷宮入りだな…」

なんて難事件だ

誰か体は子供、頭脳は大人の名探偵かじっちゃんの名を掛ける名探偵つれてきてく!

「もうこの話し終わりにしてトランプでもするか」

箒がそう言ったとたん俺と一夏は雰囲気が変わったのだった…

Side 蓮仁 Side out

## Side 箒

私は今蓮の家に来ている

何回も来たがどうにも落ち着かない

何だかドキドキする

しかしそんな気分も…

「もうこの話しは終わりにしてトランプでもするか」

私が放った言葉で空気が変わった

正確に言うくと蓮と一夏の雰囲気が変わったのだ

二人はいつもと画風が変わったような気がするんだ

鼻は伸び顎も尖っているように見える



そしてざわざわと音が聞こえてくる気もする…

この二人はいつもこうだトランプなどのカードゲームをする時はいつもこうなる  
しかも二人とも凄く強い

私もそうだが姉さんや千冬さんでも勝った所を見たことが無い

「何をする?」

「…ポーカーなんてどうだ?」

何だか喋り方まで変わった気がする…

「い、いやババ抜きでいいんじゃないか?」

「……………ならそれでいくか」

そう言つてトランプを配る一夏

そして配り終えてペアを作つてカードを捨てていく

そして蓮と一夏は

「張らせてもらうぜつ…!限界を超えてつ…!」

「大丈夫勝てる…!」

そして勝負は進み私が2枚一夏が2枚蓮が1枚になった

そして蓮が一夏のカードを引き当てたら蓮の勝ちだ…

互いの顔を見て手札を探る二人

ざわざわ…

一夏の頬から一滴の汗が落ちる…

ざわざわ…

「…これだ！」バツ

そしてカードを引いた蓮は…

「……悪いな……この勝負俺の勝ちだ!!」

そして残ったのは私と一夏…

一夏は残り1枚私は残り2枚…ジョーカーは私の手札の中に

そして私の顔を覗く一夏の瞳は深淵のような暗さを持っていた

一夏の手が私のカードに伸びる

ジョーカーの前で止まる指

しかし今度はジョーカーでは無い方のカードに止まる

「……今、瞳が揺れたぜ？」

……!?!私の動揺を見破った!?!

そして一夏はカードを引き…

「びびって逃げ回る者に…女神が微笑むはずもないっ…!」

そして一夏はペアになったカードを捨てた

「ま、また負けた…」

何なんだこの二人は!? 強すぎるだろ!!

頭垂れていた顔を上げると…

「いえ〜い! 俺の勝ちだ!」

「くっそ〜今日は俺のまげか…」

いつもの二人に戻っていたのだった…

S i d e 箒 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

トランプで遊んでいた俺たちは時間がだいぶ過ぎていた事に気づかなかった

「もうこんな時間か…そろそろ帰らないとな」

「私もそろそろ帰らないと」

二人が帰ろうとすると…

「二人ともせっつかくだから夕飯食べていらっしやいよ」と母さんが言ってきた

「話以来の登場だから張り切ってますね」

「いやしかし悪いですよ…」

と遠慮する筈

すると母さんが

「大丈夫！柳韻さんには連絡しといたから！」

手回しが早いよ母さん…

ちなみに柳韻さんってのは師範のことね

「帰りも送っていくから！」

「わ、わかりました」

押し切られたか筈よ…

ああなった母さんは誰にも止められない!!

「一夏君は千冬ちゃんに頼まれてるから」

「えっ千冬姉が？」

あちらも手回しが早い

じゃあみんなで食べますか!!

俺たちはリビングに行った

今日はワカメと豆腐の味噌汁に炊きたてご飯、ひじきと大豆の煮物とキュウリの浅漬  
け!そして:

俺の大好物の鶏の唐揚げだつ!!

「ひゃつほう!唐揚げだあ!!」  
／ (≡▽≡) ／

「蓮は本当に唐揚げ好きだよな」

「何だ?蓮の好物は唐揚げなのか」

当たり前だろ?

外はカリッと中から肉汁がジュワツと溢れ出す…

更にレモンをかけてサツパリさせて食べるのもうまい

ああ早く食いたい

「唐揚げは俺の好物だ!さあ早く食べよう!」

席に座るようにながす俺

みんな座って:

「「いただきます!」」

「ふふっ召し上がれ」

そして俺たちは食べ始めたのだった

「やっぱり華さんの料理は美味しいです!」

「ええ初めて食べましたがとても美味しいです!」

「あらありがとう二人とも!蓮はどう?」

と聞いてきたので親指を立てて

「最強無敵の美味しさ!」(b、・ω・) b

と伝える

そしてあつという間に食べ終わり

食後のお茶を飲んでいた俺たちはテレビを見ながらまつたりしていた

「ああくお茶がうまいく」ズズツ

「それな」ズズツ

「本当に美味しいお茶だな」ズズツ

お茶を飲んでいたらテレビの画面が変わった:

『番組の途中ですが緊急ニュースです! たった今アメリカから日本に向かってミサイルが発射されました!!』

それを見た俺たち3人は…

「「ふうふうっー!?」」

お茶を吹き出した

『およそ2341発以上のミサイルが日本に向けて飛来しています!皆様今すぐ頑丈な建物か地下にお逃げ下さい!』

……いや無理だろ

あんな数のミサイルだ…逃げ場なんてない

この時初めて絶望した

何もできない自分に…

自分の無力差に絶望した

「……ツクソ!何でいきなりミサイルなんて!?!」

「ど、どうすればいいのだ…?」

怒る一夏に困惑する箒

今までの記憶が蘇る…

俺と一夏と箒、それに千冬さんと束さん…

この5人ですごした日々が頭の中に渦巻く

ああ、これが走馬灯か…

最後にこの二人に何か言葉をかけよう

俺の友に：

「二夏、お前が俺の初めての友達だった：お前がいなかったら本当に楽しいと思う事も無かったかもしれない：ありがとな」

「……ツ！何だよいきなり！そんな最後みたいな事言うなよ！」

「……お前は最高の親友だ」

そう言う和二夏は泣きそうになりながら

「……お前も、お前も最高の親友だよ蓮!!」

… 一夏

ありがとう

次に箒に向き直る

「箒、お前と道場であった時は試合をしたよな：何だか懐かしいな：あれから仲良く慣れて嬉しかった、一夏以外でも楽しいと思える友達に出会えて本当に嬉しかった」

「……蓮」

「……俺たちの日常が変わったのは箒のおかげだ：ありがとう」

すると箒は泣き出して喋りだす

「……ッ！逆だ！お前たちがいたから私は変わったんだ！お前たちのおかげで学校にも

馴染めた！」



箒がそんな事を思ってくれていたとは…

そして俺の方に向き直り

「…蓮…わ、私は！お前のことが…」

そこで言葉を区切り…真っ直ぐに俺の目を見つめて…

「私は！蓮のことが好『皆様！あれをご覧下さい！』…？」

箒が何か言おうとするとニユースキャスターが何かを見つけたようだ

『空に謎の飛行物体です！白い人型の飛行物体が見えます！』

テレビに映されたのは空を飛ぶ白い騎士のような姿をしたロボットみたいな物だった

その騎士は剣を構え、大量に迫りくるミサイルの中に突っ込んでいく

そして次々とミサイルを切りつけて破壊していく

先程の絶望が嘘のように俺たちはテレビ画面に魅入っていた

そして騎士はすべてのミサイルを破壊し尽くした

「………凄…」

誰が放った言葉かは分からない

だが本当に凄かった

そして気づいたら俺は外に飛び出していた

開けた場所に付き空を見上げると

複数の戦闘機が騎士を捕まえるかのように飛んでいた

しかし騎士はそれを物ともせず迎撃していった

そして騎士が飛び去る瞬間

こちらをみた

そして一瞬動きがとまったあとに飛び去って行った

「……俺たち生きてるのか？」

「ああ生きてる」

横を見るといつの間にか一夏と箒がいた

しばらく3人で空を見上げて

俺の家に戻った

帰り道は先程の言葉を思い出した3人は顔を赤くして終始無言であった…

その後ミサイルは何者かのハッキングを受けて発射されたと報道された

そしてあのミサイルを破壊した白い騎士は束さんが造り上げたインフィニット・スト  
ラトスというスーツらしい

この事件は白騎士事件として歴史に名を刻んだ

「あら？皆どうしたの急にいなくなったと思ったら顔赤くして戻ってきて」

「「……………ええっ?」「」

母さんはこんな大事件を皿洗いしていて気づかなかつたらしい…

…まじかこの人

# 原作前第11話 友との別れ：再び友達1人に：（泣）

前回のあらすじ

蓮仁の家に集まっていた一夏と箒は夕飯をご馳走になり食後のお茶を飲んでいたすると突然緊急ニュースが流れアメリカからミサイルが発射されたとの情報が入るしかし突如現れた白騎士によってミサイルはすべて破壊されたのだった：  
そしてそんな大事件をまったく気づかなかった蓮仁の母であった：

S i d e 蓮仁

白騎士事件から数日がたった

ISを束さんが造ったと発表されてから俺たちは一度も束さんとあっていない箒も師範もあれからあっていないらしく

今何処にいるのかも分かっていないらしい

それから篠ノ之神社には連日マスクミが押し寄せている状態らしく箒は学校にもこ  
れていない

道場も開ける事ができずにいる

もちろん俺と一夏は箒に会いに篠ノ之神社に向かったが政府の人達がいて門前払い  
されてしまった

電話も繋がらない状態が続いている

そんな日が続いて俺たちはいつもの日常は壊れた

俺も一夏も元気が無くて他のクラスメートからも心配されてしまっている

そんなある日

教室に先生とその後ろから箒が入ってきた

俺と一夏は立ち上がり

「箒!!」

と名前を呼ぶと箒は悲しそうな顔で俺たちを見た

そして先生が……

「突然ですが篠ノ之箒さんが転校する事になりました」

……はっ？

俺は先生の言葉が理解できなかった

「家庭の事情により本日を最後に明日引越す事になります」

そんな俺を置いて先生は淡々と話す

そしてホームルームは終わるのであった

あれから箒はクラス中から質問をされていたが何も話さず俯いているだけだった

そして放課後

ようやく俺たちは箒と話す事ができた

箒の話しによると束さんがISを造った事と居なくなった事により箒達が危険に晒されてしまうので、政府の重要人物保護プログラムにより家族とバラバラになり名前を変えて各地を転校し続けるらしい

そして箒は泣き出してしまう

「……グスツ……せっかく二人と仲良くなれたのに……こんのはあんまりだ……」

「……………」

俺たちは何も声を掛けることができないでいた

すると箒は

「……お前たちと出会えて本当に良かった…今までありがとう…」

そう言っただけ走り出した

「…っ!?待てよ箒!」

「追いかけるぞ! 蓮!」

俺たちも走って追いかけるが箒は政府の人と思われる人やボディガードらしき人達と車に乗り込み走り出した

そして箒は俺たちに向けて悲しそうな笑顔で

『さようなら』

と言った

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

## Side 箒

転校する事になった私は蓮と一夏に一方的に別れを言つて逃げるようにその場をさつてしまった

あのまま二人の側に引き続きたら：今以上に別れるのが辛くなつてしまう

家に付いてから部屋に入り泣きじやくつた

もうこの家に住めなくなる

家族とも一緒に居られない

そして何より蓮と一夏に会えなくなる：

たまらなく辛い

あの二人に出会えてからの2年間は今までに無いくらい楽しく充実した毎日だった  
なのに今はまるで世界の色が無くなつてしまったかのように感じる

もう戻らないあの日々

3人で：時には5人で過ごした時間が壊れていく

何故こうなつた？



姉さんがI Sを造ったからか？

姉さんが居なくなっただからか？

姉さんが悪いのか？

そんな事ばかり頭の中で渦巻く

そして私は泣きつかれてそのまま眠ってしまった

翌朝

私は家族と別れを済ませていた

これからはそう簡単には会えなくなる

最後の別れでは無いがやはり辛い…

そして私は車に乗り込み駅に向かって行く

窓から眺める風景は今までの日々を思い出した

3人で歩いた学校への道

鬼ごっこをした公園

稽古終わりに皆で行ったコンビニ

夏に行ったプール

通り過ぎていく風景を眺めていると

いつの間にか涙が流れていた

……昨日あれ程泣いたのにまだ出るのか

そんな事を考えていたら駅に付いたようだ

車から降りた私はホームに向かって歩いて行く

その足取りは酷く重く感じた

(……最後にまた二人に会いたいな……)

そう思った瞬間

「箒!!」

聞こえるはずの無い声が聞こえてくる

そして振り向くと……

そこには私が会いたかった二人が……

蓮と一夏が立っていた

S i d e 箒 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

箒に一方的に別れを告げられた俺たちはその後篠ノ之神社に行ったがやはり政府の  
人がいて門前払いされてしまった…

だがやはり納得できない俺たちはどうすればいいのか話し合いをしていた

「あんな一方的な別れで納得できない！」

「ああ…そうだな…」

声を荒げる一夏に少し落ちこんでる俺

「…………このあとどうすればいいとおもう？」

一夏は俺にそう尋ねてくる

どうする…か

そんな事は決まっている

「…俺は明日箒を探す」

「…明日は学校だぜ？」

確かに明日は学校がある

しかしここで箒に合わなければきつと後悔するだろう

「それでも俺は探す、それが悔いなき選択だからな」

俺がそう言うのと一夏は…

「へへッ…蓮ならそう言うと思っただぜ！俺も箒を探す！あんな別れは嫌だからな！」

「…一夏…よし！そうと決まれば作戦タイムだ！」

まず移動手段だが、車かもしれないが電車…または新幹線の可能性もある

近くに空港は無いからおそらく飛行機はないだろう

すると車・電車・新幹線の3つでところになる

車なら追いつけないが電車か新幹線なら駅のホームで話す事ができる可能性は高い

そうして地図を広げて近くの駅を探す

しかし近くの駅が複数あり何処に行くか分からない

「…どの駅か分からないんじゃないんじやなあ…」

しかしまだ絞り込む事ができるはずだ

余り人の居ない駅の可能性が高い

それに電車だとボディガードの人がいるから悪目立ちしてしまいそうだ

ならば新幹線に乗るかもしれない

人が少ない新幹線が停車する駅は…

あった

しかし2つあるどちらかの駅の可能性は高い

車は追いつけないし話せない

ならばこの2つの駅に掛けるしかない

「……2つ、か…どうする？二手に別れるか？」

一夏はそう聞いてくるが…

「駄目だ」

俺は即答で断った

「俺たち3人揃わないと意味がない」

「…それもそうか」

どちらの方角に行くか分からない以上はどちらかの駅で待つしかない

それに時間も分からない

だが朝は電車通勤の人がいそうだからある程度は過ぎてからだろう  
「となると時間は9時から10時くらいかな？」

そしてしばらく話し合いをしてその日は解散になった

翌朝

俺は一夏と共に駅に向かっていた  
学校には無断欠席してしまった…  
帰ったら絶対怒られるな…

時刻は8時半過ぎ

目的の駅に付いた

箒の姿は見えない

「…箒は来るのかな？」

「あとは待つしかないッドウワッフ!?」

突如として俺の背中に衝撃が走る

「いっつってえ……」

何だよ!?

めちやくちや痛いじゃ無いか!!

後ろには紙に包まれた石のような物があつた

俺は紙を広げるとそこには:

箒の乗る駅と時間が乗っていた

何でこんなものが?

……いや一人いるなこんな事ができる人

時間も無いので走り出した

「一夏! もう一つの方の駅だ! 時間が無い! 走るぞ!」

「……ッ!? 分かった!」

俺たちは走り出したそして俺は叫んだ

「東さんありがとう!!」

……箒ちゃんをお願いね

そう聞こえた気がする

しかし振り返らずに走り続ける

今までで一番の速度が出たと思う俺たち

ペース配分など考えずにひたすら走る

疲れて息も荒く足も痛い

それでも俺たちは走り続けた

そして駅が見えそこには…

箒がいた

そして声の限り叫んだ

「箒!!」

振り向いた箒は驚いた顔をしていた

「ハアツ…ハアツ…間に、合った!」

「ゼエツ…ゼエツ…良かった」

息切れの激しい俺たちに箒が話しかけてくる

「な、何で二人がここに…?」

「んなもん、箒に会いに来たに決まってるだろ」



「そうではない！学校はどうしたんだ!？」

何だよそんな事か

「学校より箒の方を優先させるのは当然だ！」

「そうだぞ！あんな一方的な別れじゃ俺たちは納得できない！」

すると箒は俯いてしまった

「…仕方ないだろ…ああでもしないと決心がつかないのだから…！」

そして俺は俯いている箒に近寄り…

頭にチヨップした

「いたっ!?!何をする!?!」

「お前バカだろ」

呆れながら俺はそう言った

「何で一人で抱え込んでんだよ、そんなに頼りないか？俺たちの過ごした2年間ってそんな程度の絆なのか？」

「!?!そんな訳無い!！」

そりゃそうだ

2年間って短い時間だったけれど俺たちの絆は本物だ

「確かに別れは辛い……それでもあんな別れは駄目だろ？ それにもう二度とあえない訳じゃないんだから」

たとえ離れ離れになってもまたいつか出会える

「だからさ、一人で抱え込まないで俺たちにも頼ってくれよそれが友達だろ？」

「……！ ああ……そうだな……！」

すると若干空気になっていた一夏が

「箒はこれからも剣道が続けるのか？」

「……ああ、剣道は昔から続けてきたし何より……お前たちとの繋がりの一つだからな」

そうだな……剣道が俺たちを繋げてくれたんだ

あの日道場に行つて箒と出会えたんだ

俺たちの初めの繋がり……それが剣道だ

「なら次にあうのは中学の全国大会か？ それまでにお互いにもつと強くならないとな……！」

「そうだな！ 今までは勝つたり負けたりだったけど次にあうまでに二人を完勝できるくらいに強くなっているからな！」

「俺も蓮と箒に負けなくらい強くならないとな!!」

いつの間にか暗い雰囲気は無くなり互いに笑いながら話す3人  
すると…

『まもなく列車が到着いたします。黄色い線よりお下がり下さい』

ホームにアナウンスが響き渡る

「……もう時間か……」

「ああ……だけでもう涙は要らないよな？」

「そうだな！次にあつた時が楽しみだ！」

箒、俺、一夏の順に話す

そして互いの拳を前に出し

「「またな!!」」

そう言つて拳をぶつけ合った

再会の約束をして箒は新幹線に乗り込み手を振る

その顔はいつもの笑顔に戻っていた

そして新幹線は動き出し俺たちはホームの端まで走つて手を振り続けた

そして遂に見えなくなつてしまった…

「……さて帰るか！説教が俺たちを待っている！」

「……ああ……忘れてた……」

いや忘れんなよ一夏…

「……蓮？お前……泣いてるのか？」

俺の頬に一筋の水が垂れる

「……ちげえよ。これは雨だ」

天を仰ぐ俺に一夏は…

「……ああそうだな……雨だ」

そして俺たちは家に向かって歩いて行くのだった…

また友達一夏だけかあ…（泣）

# 原作前第12話 新たな出会い!転校生はチャイニーズガール!?

前回のあらすじ!

東さんの開発したISによって箒が転校する事に!?

一方的な別れをした箒だったが駅のホームには蓮仁と一夏が!

3人で再会の約束をして箒は転校して行くのだった…

S i d e 蓮仁

箒が転校してから数日がたった

箒を見送った俺たちはあの後滅茶苦茶怒られた…千冬さんなんて俺たちを尻たたきしてきたし…

うっ!!?思い出したら尻が!?

そんな感じで数日がたったのだった…

あれから俺たちの生活は変わった……いや昔に戻ってしまった

道場にも行かなくなり自主練習だけじゃ物足りなく感じでしまう

あれから千冬さんも何かしているらしく最近はとても忙しそうにしている

……それと俺と一夏の顔を見て申し訳なさそうにする時がある

そんなこんなで俺と一夏は退屈な日々を過ごしている

……箒は新しい友達できたのかな？

元気になっているかな？

……また3人で遊んだり稽古したいな……

おつといかんいかん！

こんなにナイーブになっていたら箒に笑われてしまう！

次にあうまでもっと強くならないとな！

しかし他に道場無いし中学生になるまでは自主練習だな……

どっかに俺を鍛えてくれる人いかなあ……？ いるわけ無いかあ↑（フラグ）

そんな事を考えていたら先生が入ってきた

「皆おはようございませう！ 何と今日は新しい友達が増えます！」

『おお〜おっ!』

「先生男子ですか〜？ それとも女子ですか〜？」

とクラスの女子が先生に聞いていた

え?名前知らないのかつて?.....あれだよ...阿部.....

うん阿部までしか分からない!以上!

そんでその阿部さんの質問に先生は:

「喜べ男子!!転校生はかわいい女子だ!!」

この先生のノリの良さはけっこう好きです(\*・ω・\*)

「ふうふうつふうつ!!!」

「つしゃおらあああん!!!」

「女子だど!?!しかもかわいのお墨付き!?!」

「ハアツ::ハアツ::興奮してきた::」 // // //

「ヤバイ、達する達する!」

おい後半二人ヤベー奴いるぞ!?

しかも最後の奴何処ぞの変態墮天使だよ!?

一夏もドン引きしている::

すると俺の頭に何かビビビツときた:::!

「?..どうしたんだ蓮?」

「…今から来る奴は俺たちのつまらない日常を変えてくれる気がする…!」  
「はあ? 何言ってるんだよ?」

呆れる一夏はヤレヤレと頭を振る

「間違いない! 俺のサイドエフェクトがそう言っている!」

「!? 何んだって!? マジかよ 凄え! 蓮はサイドエフェクトが使えるのか!?」

「んなわけないじゃんアホなの?」

「……そっか、嘘か…」

珍しく落ち込む一夏

つか嘘って人聞きが悪い事言わないでくれよネタだよネタ!

「まあ変えてくれる気がするのは本当なんだぜ? 何かビビビツと頭にきたんだよ」

「!? そ、それってつまり… ニュータイプに覚醒したのか!？」

「んなわけないじゃんアホなの?」

「……そっか、そんな訳無いか…」

「……いやどうした!? 何かおかしいぞ一夏!!」

どうやら箒が居なくなつた事と千冬さんとの時間が取れなくなっておかしくなつてしまつたようだ…

「これは末期だなあ…」



千冬さんにもうちよい構ってあげるように言っておこう

困ったシスコン野郎だ

「やっぱり二人だどつまらないしなあ…」

…まあそうだよな

そんな事を話していると転校生が入ってきた

「中国から転校してきた凰鈴音フアリシンインさんです! 皆さん仲良くしてくださいね!」

ほうほう中国からの転校生か…

オラわくわくすつぞ!

「では……緋龍くんの隣の席に座ってください! 緋龍くん? 分からない事があつたら教

えてあげてくださいね?」

「了解しました!」

敬礼しながら返事をする

そして凰が隣の席に座った

「……………」ジー

何かめっちゃ見てくる…

とりあえず挨拶しとこう

「ニイハオ?」

とりあえず中国語?で挨拶したけどこれで合ってるかな?

「……………」ジーン

ナズエミテルンデイス!!

それと何か喋ってよ!?

「い、一夏!中国語の挨拶って今のじゃなかったっけ?」

「お、俺もよく分からない…」

うーんこれはクマった

じゃなくて困った

と考えていたら

「……ごめんなサイ!中国語の挨拶でビックリして!」

と返事をしてくれた

何だ…日本語話せたのか良かった

若干片言だがしっかり喋っている

「大丈夫、大丈夫!俺は緋龍蓮仁!よろしくな!んでコイツが友達の…」

「織斑一夏だ!よろしくな!」

「よ、よろしく!私は凰鈴音!鈴リンって呼んで?」

「じゃあ俺は蓮でいいよ!よろしく鈴」

「俺は一夏でいいぜー!よろしく鈴」

こうして俺たちは鈴と仲良くなっていくのだった

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 鈴

中国から日本に引っ越す事になってしまった私は今までと違う環境に行く事に不安になってた

中国の友達とも離れ離れになってしまい日本に馴染める気がしなかった  
新しい学校に一人だけはとて心細いし

違う国の人だからとハブられ無いか不安だった:

しかしそんな不安も今はもう無くなっている

隣の席の人が私に:

「ニイハオ?」

と話しかけてくれたから

発音も下手くそだったけど不安でいっぱいだった私にはとても嬉しかった

その人はの名は緋龍蓮仁それと友達の織斑一夏も話しかけてくれた

私たちは名前呼び合うようになった

私が転校して数日がたった

この数日は蓮と一夏という事が多かった

二人には日本語を教えてもらったり

逆に中国語を教えたりもした

放課後に遊びに誘ってくれたり日本文化も教えてもらったりもした

そんな二人を見てどう接して良いか分からずに遠目に見ていたクラスの人達も話し

かけてくれるようになった

本当にあの二人には感謝してもしきれないわ

そんな事があつてすっかりクラスに馴染んだ私は転校前の明るい性格に戻っていた

だけどそんな私が気に入くない奴がいたみたい……

B 「おい！お前パンダみたいだな名前だ？リンリン！」

C 「そうだそうだ！」（便乗）

B 「中国人はカンフー使えるんだろ？見せてみろよカンフーパンダ！」

C 「そうだそうだ!」(便乗)

本当に何なのこいつらは?

中国人だからって皆がカンフー使える訳無いでしょう?

あとカンフーパーダは映画じゃない!!

まだ2までしか見てないから3も見たいのよね…

つと今は関係なかつたっけ

「うっさいわね!何なのよあんたら?」

B 「ああん?何だよ生意気だなあ」

C 「そうだそうだ!」(便乗)

…!こつちに近づいてきた!

同年年とはいえ男子に絡まれた私は怯えてしまった

「ん、んないで!」

B 「調子に乗ってんじゃねえぞ中国人が!!」

私は恐怖で目を閉じてしまった

殴られる!そう思った

しかし

「そおしい!」

B 「へぶうつ!？」

そんな気の抜けた声が出たあとに汚い悲鳴が聞こえて目を開けると：  
そこには蓮が立っていた

「おめえらあ……まあだ懲りてなかったのかよ？」

いつも以上にたくましく見える背中はとともカツコよく見えた

S i d e 鈴 S i d e o u t

S i d e 蓮 仁

クラスの女子から鈴が虐められてると聞いて急いで向かうとそこには：  
かつて箒を虐めていた3人組のうちの二人がいた  
そして片方が鈴に掴み掛かろうとしていたので：

「そおいー」

と言いながらそいつにソバットを食らわせてふっ飛ばした

B 「へぶうつ!?!」

中々良いのが決まった!

じゃなくて

「おめえらあ……まあだ懲りてなかったのかよ?」

B 「いつてえ……またお前かよ緋籠!!」

またつてそれはこつちのセリフだつーの

B 「あの時の恨みを忘れたことはねえ……!」

C 「そ、そうだそうだ!」(恐怖)

あいつ相変わらずそうだそうだしかわらないなあ

B 「お前のせいで安達は……安達はああ!!」

安達?……ああ俺がゴールデン・ボール・ブレイカー食らわせてやったやつか

安達がいったいどうしたんだろう?

B 「安達は男の娘になっちまったんだよ!!」

「ゑ?」

俺も、よく分かってない鈴もこんな声しか出なかった

「……男の子?」

B 「違う!男の娘だあ!」

……まじかあ

「どうやら俺のせいで安達は新たな扉を開いてしまったようだでもインガオホーじゃね？」

B 「口調は変わるし…服も女の服だし…髪型もすつから女の子だし…」

C 「普通に可愛かった」

おいC！お前いきなり普通に喋りだすんじゃないよ！

「あ、あんた何やったのよ？」

鈴…頼むから今は聞かないでくれ…

「安達の事は本当に申し訳ない！だが友達なら安達の新たな旅立ちを祝ってやったらどうだ？」

「いやそれは無理じゃないかしら？」

冷静なツツコミありがとうな鈴

B 「…っ！たえそうだとっても納得できないんだよお！」

「そりやそうよね…」

…鈴…遂に自分を虐めていた奴に同情し初めやがった…

あと完全にツツコミポジションになったな



B 「たとえ負けるとわかっていても俺はあ…戦う!!」

C 「そうだそうだ!」(気合)

…完全に俺が悪者見たいになってきたよ…

何でだ?

「…ならお前たちも安達の後を追わせてやろう!」

そう言つて構えた俺

「いやそれは止めなさい!」

しかし鈴に止められてしまった…

「…ふん!鈴に感謝しな!今回はゴルボ(ゴールデン・ボール・ブレイカーの略)は使

わないでやる!」

再び構えた俺たち…

奴らは様子を見ていて攻めて来る気配は無い

ならこちらからしかける!

そして俺は二人に一瞬で近づく

「おらあ!」

そして二人の弁慶の泣き所を思いつき蹴っ飛ばした

BC 「んばあつあああああ!?!」

悶絶する二人は足を抑えて転がり回る

そんな二人に近づくとおれは：

「最後の忠告だあ…次にこんな事したら今度こそゴルボつて安達の後を追ってもらうかなあ」ニツコリ

千冬さん直伝の笑顔も添えておきます！

そして悶絶する二人を置いて俺たちは教室を出て帰る事にした

つか一夏は何処に行ったんだ？

「俺なら此処だぞ？」

「っひょう!？」

ビックリして変な声が出ちまった：

てか心の声読まないでくれよ

「…んだよ、いつからいたんだ？」

「『おめえらあ…まあだ懲りてなかつたのかよ?』くらいから」

ほぼ最初から居るじゃねえか!!

なら少しくらい手伝えよ！

「いや蓮なら二人程度余裕だと思つたから」

だから心の声読まないでくれ!!

すると鈴が…

「…蓮ありがとうね!正直凄く怖かったから…本当にありがとう!」

良い笑顔だなあ

「鈴は俺の(友達として)大切な人だから当然だろ?」

「んなあ!?!た、大切な人!?!」

何かめつちや顔赤いなあ

どうしたんだろう? (鈍感)

「い、いきなり何て事いうのよ!?!蓮のバカ!」

そう言つて走つて行つてしまった…

なんでえ?

「…何で?俺何かしたかなあ?」 (鈍感)

「…うゝん?何でだろうなあ?」 (鈍感)

しばらく鈴はよそよそしかったが数日するといつももの鈴に戻っていた  
なんでも『あんたの性格(唐変木)はよくわかったから…』

と遠い目をしながら言っていた

よく分かんなかったけどまあいつか☆

「全然良くないわよお!!」(泣)

# 番外編 一夏の（恐怖の）お料理教室 ※生徒は蓮仁のみ

S i d e 蓮仁

やあみんな！緋龍蓮仁だ！

今日はうちの両親が出かけるので俺一人だ

……え？父親？居ますよまだしばらく出て来ないとおもうけどね

そんな訳で今日は自分で料理を作って食べようと思う

別に鈴の家の中華料理屋でも良かったけどせっかくだから自分で作るのも悪くな

いって思ってたんだよ

冷蔵庫を漁っていると…

ピンポーン♪

と誰かがチャイムを鳴らした

ピ・ピ・ピ・ピンポーン♪

むっ！このチャイムの押し方は一夏だな！

独特な鳴らし方をしてきた一夏を入れるべく玄関に向かった

「よう一夏！今日もウザいチャイムの鳴らし方だなあ？」

「よう蓮！お前だつてチャイムの鳴らし方ウザいだろ？」

ちなみに俺の鳴らし方は…

ピ・ピン・ピ・ピン・ピンポーン♪

です

どうでもいいですなはい

「にしても良いタイミニングで来たな？丁度今から昼飯を作ろうとしてたんだよ、食つてくだろ？」

「お？蓮は料理できたのか？」

「分かんない」

「分かんない!?!」

だつて作つたことないんだもん…

仕方ないじゃん！食戟のソーマ読んでたら作りたくなつちまつたんだよ！

『おあがりよ』や『おそまつ！』とか言いたいんだよお！

そんなこんなで料理開始！

一夏にはやたら反対されたが何とか説得して座つて待つて貰つた

そして食材を確認した俺は包丁を手に持つたのだつた…

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

俺は今蓮の家に来ている

今日は一人だけと言っていたから鈴の家の中華料理屋で昼飯を食べようと誘いに来たのだが…

何故か蓮が昼飯を作ろうとしている

しかも料理をしたことが無いらしく俺は反対したが…

『大丈夫！食戟のソーマめっちゃ読んだから！』

と説得（？）されてしまった

かなり不安だがここはおとなしく待つ事にする

ドンガラガッシャーン！

………やっぱり不安だあ

そしてしばらくして蓮が料理を運んできた

俺は運ばれてきた料理を見た

白いご飯

味噌汁

そして…

茶色いマツシユポテトらしき物体

………なにこれえ？

「………これは何だ？」

と聞いた俺は蓮の発した言葉に耳を疑った

「肉じゃがだ！」

ニクジャガ？あれえ？

俺の知ってる肉じゃがはこんなにマツシユなポテトしてないけどなあ…？

だが見た目はアレだが味はどうだろうか

「おあがりよー！」

そんな自信満々に言うなよ…



まずご飯、次に味噌汁、最後にマツシユ…じゃなくて肉じゃがを食べて箸を置いた  
そして…

「不味い！こんなもん食えるかああ!!」  
と叫んだ

「ご飯はベチャベチャだし、味噌汁はただお湯に味噌溶かしただけで出汁も何も無いし  
…」

肉じゃがは原型無いしただひたすらに醤油の味しかない！

マツシユポテトに醤油かけたほうがまだマシだ！

とても食えたもんじゃ無い!!

「蓮!!お前レシピ見たか!」

と聞くと…

「え?見てないよ?」

と、答えやがった

…ははっこやつめ

ふざけるのも大概にしるよ…

この日俺は静かにキレた

「…おい蓮、俺がお前に料理の指導をしてやる…キッチンに行くぞ…」

「…いい、一夏さん？怒ってます…？」

「そう思うならあくしろよ…」

「ヒエツ…リョウカイシマシタ…」

そして俺たちはキッチンに向かった

さて何を作るか…

いきなり煮物なんて作れる訳もないしな

俺は蓮に聞く事にした

「蓮は煮物以外で作りたい物あるか？」

「うーん、煮物以外かあ…ハンバーグかな？」

ハンバーグかあ…それはそれで初心者には難しいとおもうけどなあ…まあ良いか

よし！

材料は足りるな

【材料】

油  
牛豚合い挽き肉 玉ねぎ パン粉 牛乳 卵 塩 白こしょう ナツメグ サラダ

「それでは始まりました！一夏のお料理教室〜！」パチパチ

「そういうのいらぬから」

「アツハイ」

もつと真面目にしてくれよまつたく…

「合い挽き肉は冷蔵庫で冷やしておく、次に玉ねぎをみじん切りにする」

「よし！任せろ！」

そう言つて包丁を持った蓮

しかし

「おい蓮！左手が危ないだろ！左手は猫の手だあ!!」

「ヒエツ…リョウカイ…」

そしてみじん切りにした玉ねぎを炒めて冷ましておく

パン粉を牛乳に浸しておく

そして合い挽き肉をボウルに入れて練っていく

「練るときにボウルの下を氷水で冷やしながら練るのがポイントだ」

「何でだ？」

「手の温度で合い挽き肉から肉汁が逃げないようにする為だ」

次に塩、白こしょう、ナツメグを入れて粘り気が出るまで練っていく

「こんくらいか？」

「全然駄目だ！もっとと練れ！」

「ヒエツ…おつかないよお…」(泣)

粘り気が出たら玉ねぎと牛乳に浸したパン粉と卵を入れて練っていく

そしたら手にサラダ油を塗って肉ダネの空気を抜いていく

「……………」ペチペチ

「もつとしつかり空気を抜け！」

「はあい…」(泣)

それから形を整えて表面を滑らかにする

フライパンを熱して油を敷いて馴染ませたら肉を焼く

「中火で両面を3分程焼くんだ」

「はい……」（泣）

「……何泣いてんだよ？」

「何でも無いです……」（泣）

それから弱火で5分、更に火を消して5分蒸らす

あとはお好みのソースで食べる

「今回は和風ハンバーグにしよう」

大根おろしと刻んだ大葉を乗せてポン酢をかける

「これで完成だ！」

「お、おおく凄え美味そう……」ゴクリ

そう言つて一口食べた蓮は……

「……！溢れ出す肉汁！牛肉の旨味がしつかりありつつ豚肉の甘味もしつかり感じる……

！柔らかくフワツとしながらも確かな食べごたえ……！美味しい!!!」

すると蓮の服が弾け飛んだ  
ん？弾け飛んだ？

いやしつかり着ているよな？

何だか変な幻覚を見たなあ……

そして俺もハンバーグを食べるのであった

「ごちそうさまでした！」

ハンバーグを食べ終わり洗い物を済ませた俺たちは正座で向かい合っていた……

「蓮、これからは俺がお前の料理技術を鍛えていく」

「い、いやそこまでは……『あゝん？』……何でも無いです……」（泣）

「なら定期的に教えるからしつかり技術を磨けよ？」

「はあい……」（泣）

こうして第一回お料理教室は終わるのだった……

原作前第13話 更に向こうへ! Plus Ultra

!!

前回のあらすじ!

新しく転校してきた凰鈴音<sup>ファンリンイン</sup>

蓮仁と一夏は鈴に話しかけて仲良くなり、クラスにも馴染めたのだった  
虐めっ子を蓮仁が撃退して二人の仲はより縮まった……のかな?

S i d e 蓮仁

……今俺は家から少し離れた山の中にいる…

そして…

知らないお爺さんと木刀を構えた状態で向かい合っていた…

何でこうなった…？

遡る事2時間前…

今日は天気の良い日曜日

そんな日の朝から俺は竹刀袋を肩にさげて走り込みをしていた  
少し離れた山に向かってなるべくスピードを出して走っている  
前回より早く走る事ができているし体力も増えてきている

1時間くらい走って山に到着した俺は竹刀袋から木刀を取り出して素振りを始める  
今まで篠ノ之道場で学んだ事の反復練習だ

一通り終えたら新しく買って貰った剣道の本を読んで動きや技を真似していく  
本当はもつとしっかり技術を習いたかったが無い物ねだりは出来ない

今は手探りの状態でも少しずつ力を付けていく

中学の全国大会で箒と再会した時のためにも強くならないとな  
ちなみに一夏とも一応ライバル関係なので別々に鍛えている

と言つてもお互いに手探り状態なんだよなあ…

一夏は千冬さんに色々聞いたり、忙しく無い時に練習を見てもらったりしているらし

い



俺も誘われたが断った

『俺は一夏とは違うやり方で鍛えていくよ!それに互いの手の内は知られたくないだろ?』

『…それもそうか…分かったよ!でも千冬姉が『一人だといつか限界が来るから困った時は私を頼れ。蓮も私の大切な弟なのだからな…』って言ってたから、困ったら頼れよな!』

『サンキューな一夏!あと千冬さんは完全に俺を弟認定したのかあ…』

『……がんばれよ!色々!』

『色々って何だよ!?!』

……何て事があつたんだよなあ

弟認定されたのかあ

一夏の言うとおり大変そうだな

まあ困つたらありがたく千冬さんに頼らせて貰おう

そんなこんなで素振りを続けている

「お主はこんな所で何をしている？」

すると突然誰かに話しかけられた

しかもすぐ隣にいつの間にか立っていた

「っ!?!」

とつさに横に飛ぶ

ビックリした…いつからいた？

確かに考え事をしてはいたがすぐ真横に居ながら声を掛けられるまでまったく気づ

かなかった…

「ほう…思っていたよりは良い反応速度だ…」

見ると老人がいた

老人がそう言った次の瞬間には俺の目の前にいた

「んなっ!?!」

まったく見えなかった!?!

木刀を構えた状態で後退る

すると老人は

「そんなに身構えるでない、取って食いはしない」

「っ…信用出来ないなあ」

この爺さんともんでもないプレッシャーを放ってるし

そんな信用出来ないだろ

「……………ふっそれもそうか」

そう言った爺さんはプレッシャーを解いた

……………この人は多分…いや、確実に千冬さんや東さんより強い

プレッシャーを受けている間生きた心地がしなかつた

「はあっ…はあっ…」

実際にプレッシャーだけで息切れが起きてしまい冷や汗も止まらなくなつた

「おお、すまんな加減したんだがお主にはまだ強すぎたな」

そう言ってお茶を差し出ししてきた

俺はそれを受け取ると一気に飲み干した

「ングングングー……………つぷはーはあっ…はあっ……………ふうー」

ようやく落ち着いた俺は改めて爺さんをみる

白髪に短く切り揃えた髪

浅めのシワに鋭い眼光

右目の上には切り傷

程よく焼けた肌

朱色の着物を着てその上には黒い生地ひがんばんに赤い彼岸花ひがんばんの模様の羽織を着ている

その着物の下には細いながらもしつかりと筋肉が付いている

足には下駄を履いている

そして黒い竹刀袋を担いでいる

見るからに剣の達人といった感じの佇まいだ

「……あなたはいったい誰なんですか？」

と質問した

「ふむ？俺か？俺は時雨しぐれ厳仁げんじしが無い剣士だ」

と爺さんは答えた

更に続けて

「野暮用でこの街に来てな……今は散歩をしていたんだがそこでお主を見つけてな少し気になつて話しかけてみたのだ」

……つまり野暮用の剣士が散歩途中で見かけた俺にいきなり近づいてプレッシャーをぶつけて来たつて事か……

何してんのこの爺さん!?

小学4年生にする事じゃないよ!?

トイレ済まして無かったら悲惨な事になつてたよ!?

そんな事を考えていると…

「それで? さっきも聞いたがこんな所で何をしておる?」

……まあ悪い人では無さそうだな

てかこんな人から逃げられないな

うん、諦めよう

そして俺は道場で鍛えていたが都合によりその道場の師範が引越す事になった事  
その引越す師範の娘と全国大会での再会を約束して一人で修業していた事を話した

「…ふむ、なるほどなそういう事情か…所でその道場は篠ノ之道場か?」

「…! 知ってるんですか!」

「そりゃあな、ちよつとした知り合いでもあったが剣士として一目置いていたからな  
……: そうか、アイツの何処の門下生か…」

そして何かを考え始める

するといきなり…

「よし俺が稽古をつけてやろう」

そうやって竹刀袋から木刀を取り出して構えた

…いや何で!?

「ちよつと何言ってるか分からない!」

いつもの富○たけしのネタをする

しかし

「剣士と剣士の目が合ったら戦うのは当然だろ?」

何そのポケモントレーナー理論!?

そんな殺伐としたバトルはやりたく無いよ!?

すると

「それに…強くなりたいんだろ?今の手探り状態では強くはなれ無いのは分かっているだろ?」

……!痛い所を突いてくるな…

確かに手探り状態の今では強くはなれ無いのは分かっている

何が正しくて何が間違いなのかも分からない状態で鍛えても変な癖がついてしまっているぞ…

「……分かりましたお願いします!」

そう言っただけ俺も木刀を構えた

そして冒頭に戻る

……その場の勢いで構えたがめっちゃ後悔している今日この頃

だってあんな動きする人の相手になる訳もないし

詰んだなこれ

それでも強くなりたいから頑張ろう

戦いは負けた方が分かる事も多いからな

……けど、この人まったくスキが無いからどう攻めれば良いか分かんないや…

「……どうした? 攻めてこんのか?」

…ツクソ! やるしか無い!

俺は木刀を八双に構えて一気に駆け出す

そして相手の左肩から右足に掛けて切り込む

しかし…

「…ふむ、悪くない動きだ」

いつの間にか目の前から後ろに移動して俺の首筋に木刀を当てている

「…っ?! っ?! っ?! っ?!」

「お主が切り込む瞬間には後ろにおったぞ」

いや速すぎいい!?

じゃあ俺が切ったと思っただのは残像!?

ヤベエエエ！リアル残像拳じゃねえか！！

「ほれ、どんどん掛かって来い」

「…っはああああああああ!!」

向き直った瞬間に突きを放つ

しかし

「ほれ」

そう言つて俺の突きを突きで受け止める

木刀の先端と先端がまったくのズレも無くぶつかったのにまったく音がしない？

「今のはまったく同じ力がぶつかった時に起こる」

そう説明された

そして俺は連続で突きを放つ

しかし

その全てが音もなく相手の木刀の先端で受け止められる

「マジかよ!!全部狙って止められた!?!」

いくら相手が小学生だからってそんな芸当を狙って使えるなんてとんでもない人だ

…

それから俺は切り込み続けている



だがまともに当てられない…というか掠りすらしない

籠手、胴、面、突き、逆胴、フェイント、連続切り込み、下がりつつ切りつけ  
様々な攻撃を仕掛けるがこと如く避けられるか受け止められる

「はあああああああつ!!」

魂心の一撃

しかし

「ほれ、終わりじゃ」

その一撃は途中で止められてしまった

更に木刀を吹き飛ばされてしまった

「…っ！何も…できなかつた…!」

一矢報いる事も出来ないまま終わってしまった…

「何をそんなに焦っておる」

…?焦ってる?俺が?

「…ふむ、自覚は無しか…まるで誰かに追いつきたくて、少しでも近づきたくて焦っておるようだぞ」

…ああそうか…千冬さん達に追いつきたくて焦っていたのか  
まったく自覚が無かつたなあ…

「焦る事は無い、確かにまだ弱いがお主は才能に胡座をかく事無く己を鍛えている、必ず強くなるだろうな……しかし今の環境ではまず無理だな」

……やっぱりそうだよな

こんな修業じゃすぐ限界が来てしまうし

こんなんじや箒にも一夏にも置いていかれてしまう……

現実を突き付けられて唇を噛みしめる

すると

「一つ提案だが……俺の弟子にならないか？」

突然そう言われて驚いた

確かにこの人は強い

でも何でだ？

「……何でですか？」

「……俺の流派は一子相伝の流派……本来は血の繋がらないお主には教えられないのだ」

じゃあ駄目じゃないのか？

一子相伝の流派って本当にあるんだな

「しかし俺の妻は40年程前に先立ってしまった……まだ互いに20代で結婚して数年だったな……元々妻は体が弱くてな……出産の時に子供と共に亡くなってしまった……」

昔を懐かしむように、悲しそうな目でそう喋る

「父からは一子相伝を絶やすなと再婚を強いられたが俺は妻以外を愛する事ができなかった…」

空を見上げて更に語る

「それからは俺はただ刀を振るつて生きてきた…ただ剣技を磨き続けてきた…それで気づいたらこんな老いぼれつて訳だ…」

そんでお主を見た時に俺は思った…

コイツは鍛えたら俺以上に強くなると、ただ刀を振るつて年老いて死に流派が絶えるより、お主に俺の全てを叩き混んで鍛えたいと思つたんだ」

そして俺の目を見つめる

そして驚いた顔をする

「…お主何故泣いておる?」

あれ? 本当だ…いつの間にか泣いていた

でもあんな話し聞いたんじや仕方ないよな…

「…お主は優しいのだな」

そう言いながら手ぬぐいを渡してくれた

「それでだ、俺はお主に流派を受け継いで貰いたい。普通の流派とは違う特殊な流派で、

血反吐を吐く程に厳しい修業になる、それでも構わないなら……俺の弟子にならないか？」

そう言つて俺に手を差し伸べる

「……俺は……強くなりたい……超えたい人がいる！守りたい人がいる！だから！」

俺は差し伸べられた手を力強く握る

「俺を……鍛えてください!!」

「……ふつ、良い目だ！なら今からお主は時しくれりゆうけんじゆつ雨流剣術の門下生だ！厳しく鍛えるから覚悟

しておけよ！」

「はい！師匠！」

こうして新たな師匠ができた俺は更に強くなる為に進む

例えばその道が修羅の道だとしても、俺は進む！

更に向こうえ！Plusウルトラ!!

「所で今更だがお主の名を聞いていなかったな」

あ、忘れてた

「俺は緋龍蓮仁ひりゅうれんじんです! よろしくお願いします!」

そう名乗ると師匠は目を見開いた

そして微笑む

「ああ、よろしく蓮仁」

そしていつの間にか日が暮れかけてる事に驚いたが本日はここまでにして家に帰っていくのだった…

全然帰って来ない蓮仁を鬼のような顔で待っている母親のいる家に…

Side 厳仁

蓮仁の背中を見送った厳仁は夕暮れの空を見つめる

「……妻と息子の命日に面白い少年にあつたもんだな」

そう今日は厳仁の妻と息子の命日だ

墓参りをして近くをさまよっている時に蓮仁と出会ったのだ

その顔は何処か嬉しそうだ

「なあ? 信じられるか? まさか俺たちの息子と同じ名前の少年を弟子にするとはのお」

蔵仁は男の子なら名前は【蓮仁<sup>れんじ</sup>】にしようと思った

しかし自分を産んで亡くなった母を追うように亡くなってしまった

そんな二人の命日に出会った少年の名前が息子と同じなのだから驚いてしまった…

「これも運命のイタズラか…」

竹刀袋から一本の刀を取り出して鞘から抜く

赤い刀身の刀を空に向かって掲げる

「今度こそ…今度こそ守ってみせるーこの【朱時雨<sup>あかしぐれ</sup>】に誓って！だからそつちに逝くのは

弟子が一人前になって俺が必要無くなってからだ」

夕日が反射して更に赤く染まる刀を掲げたまま愛する妻と息子に向かって…

「だからもう少し俺と弟子を見守っていておくれ二人とも」

日が暮れ始めた空に向かってそう呟いた

## 原作前第14話 修業が地獄過ぎた…

前回のあらすじ！

山で修業していた蓮仁

そこに謎の老人時雨厳仁が現れる！

蓮仁は厳仁と戦いその圧倒的強さを見せつけられた！

自分の弱さを改めて知った蓮仁は厳仁の提案により弟子になることに!?

さらなる強さを求めて更に向こう！Plus Ultra！

S i d e 蓮仁

現在は2023年…俺は小学六年生だ

俺が師匠の…時雨厳仁の弟子になってから早くも二年の月日がたったのだ  
ん？早い？いきなり二年も飛ばすな？

気にすんな話しが進まなくなるから

それで現在小学6年生になったんだが

この二年色々あった：

一夏のお料理教室をしたり

鈴の家の中華料理屋に通い詰めたり

千冬さんがIS乗りになったり

その千冬さんが第一回モンド・グロツソつて言うISの大会で見事優勝して初代ブリュンヒルデになったり

：ISで思い出したが去年の11月に白騎士事件並の：いやそれ以上の事件も起きたな：

既に死者が大量に出ているし、これからも増えていくだろう：

まあこの話は置いて

この二年の間俺は師匠の元で修業してきた

今までの修業はとてつもなく大変で何度か死にかけたりした：

どんな事をしたかと言うと：

—————





『なるほど!』

『最終的には体中の関節を全て外せるようにしてもらおう』

『はい? え、関節?』

『こんな感じだ』グニヤン

『ヒエツ…軟体動物みたいになってる…』

『いきなりは無理だからまずは体を柔らかくするぞ』

『は、はい! ……いだだだだああああ!?!』

-----

『次は筋力を付けて貰う』

『はい…』

『別にボディビルダーみたいにムキムキにする訳ではない、必要な筋肉を鍛えるから細いながらもしなやかで力強い筋肉になる』

『はい!』

『よしならば重りを付けて重り付き木刀での打ち合いだ』

『…!? おつもおおおお!?!』

『ほれ、さっさと掛かってこんか』

『んばあああああ!?!』

『次は重りを付けたまま川を泳いで貰う』

『は、はい…』

『重りはさつきのを使い回す』

『!?! あんなん付けたまま泳いだら沈みますよ!?!』

『何だもう音を上げるのか? ヤレヤレがっかりだ…』

『ぬぐぐぐつ…! やります! やりますよ!』

『よし! 気合い入れて行け!』

『うおおおおお!! ……ぶくぶくぶくぶく……』

『沈みおったか……』

『次は体幹を鍛えて貰う』

『はい…』 ゲソッ

『この川に浮かべた丸太に乗り体幹を鍛えるのだ』

『ええ…』

『なあとすぐに慣れる、ほれ早く乗れ』

『ふうー……よいしょ！……おっおっ！以外とイケる！』

『よしそのまま2時間バランスを取っている』

『ファツ!? 2時間!? あっ…あっあっ! ああああああ!』 ドボン

---

『次は食事だ健康な肉体は食事が不可欠だ』

『はい!』

『ほれ食え、残すなよ?』

『……え? この量を俺一人で?』

『そうだぞ? まあ4キロって所だ、まだ少ないほうだぞ?』

『……モグモグ…美味い…』

『全部食えよ?』

〜1時間後〜

『うつぶ……気持ち悪い……』

『おいおい、しっかりしろ』 ドン



5時間全速力で走るのも息切れが激しいが日に日に良くなっている

体を柔らかくするのも気持ち悪いくらい柔らかくなった：関節はまだ全部は外せないけどな：（白目）

日常生活でも常に重りを付けているので筋力はかなり成長した

その重り付きで普通に泳げるようになったし

丸太でバランスを取るのも片足立ちで5時間もイケるようになった！

：ただ飯を食う量が増えてしまったのは困った：：家で炊飯器2台分米を炊いて貰わないと足りなくなる

母さんには本当に申し訳ないと思ってる：

それから師匠と切り合ったりできるくらいに動体視力が上がった師匠のスピードを目で追って体が反応できるようになったのだ！

流石の師匠もこれには驚いていたなあ

中学生になったら今以上に厳しくなるのかあ：

俺は生きていけるか？

Side蓮仁Sideout

S i d e 嚴仁

俺が蓮仁を弟子にしてから約2年がたった

正直無理難題な事が多かった故に音を上げるのかと思うたが…

まさかここまで粘るとは…

俺らの時代とは違い、今はゆとり世代とか言われているからのお

逃げ出さずに良くここまでこれたもんだ

才能もあるが何より努力を怠らない

実に素晴らしい

しかし…：…いかんせん心が…メンタルが少し弱い

…：…ふむ、その辺りの修業も考えておくか

この2年で肉体の方はそこそこ出来上がってきた

いよいよ次は時雨流を扱うのに必要な修業をしなければならぬか…

時雨流剣術は特殊な剣技

それは《気》を使う剣術だからだ

《気》は様々な物にやどる

その力を身体と刀に纏わせる

それが出来て初めて時雨流剣術を名乗る事ができる

しかし…この《気》は誰にでも扱える訳では無い

実際に他に兄弟が居たが扱えたのは俺だけだった

そもそも《気》を感じる事ができる者さえほとんど居ない

故に蓮仁が《気》を扱えるか分からない

扱えないとしたら蓮仁には時雨流を継いでもらう事はできん

だが…きつとあやつなら成し遂げるだろう

なんたって俺の弟子なのだからな

—————

「今までは基礎的な能力向上の修業だったが、これからは特殊な修業に移る」

その言葉を聞いて目を輝かせる蓮仁

「遂にですか!？」

「ああ、今のお主は身体の基礎がかなり出来上がってきたからな、いよいよ本格的に修業を開始する」

そして巨大な岩のある場所まで来た

「特殊な修業とは《気》を扱う修業だ」



「気？何ですかそれ…？ドラゴンボールですか？」

「どらごんぼーる？何だそれは…」

「《気》は様々な物に宿る…生き物にも、植物にも、水にも、風にも、火にも…当然人間にもな、時雨流剣術はこの《気》を身体と刀に纏わせるのだ」

刀を抜刀して八双に構える

「ぬん!!」

そして岩を斬る

「……え？ええええええええええ!!」

叫ぶ蓮仁

「喧しい！まだ《気》を纏わせてないぞ！」

「はあつ?!?!今ので?!え、じゃあ素の状態であれ切ったの!?!」

素の状態です直径5メートルの大岩を斬ったのにまだ《気》を使っていない

そして近くの大岩に移る…

その岩は先程の倍以上ある大岩だ

そしてまた八双に構える

「はああつ!!……ふう……」

刀を振り下ろし鞘に収める

収めた瞬間

ガラガラガラガラ

岩が小さなブロック状になって崩れ落ちる

それを見た蓮仁は

「……ああ、夢か……そうだよな、夢だよなあ……ははっ、早く覚めないかなあ……」  
現実逃避していた

S i d e 敵仁S i d e o u t

S i d e 蓮仁

師匠にとんでもない技を見せられる夢を見ている俺……

早く覚めないかなあ……

「何を言っておる！しつかりせい！」ピシッ

痛え!? チョップされた!!

……………ん？痛い？

……………これ現実だあつ!!!

なんだよお!?!世界観が違うだろ!?

インフィニット・ストラトス何てSFなロボットがあるのにこの人は何で刀で岩を小間切れにしてんの!?

戦うの？刀でISと戦うの!?!↑（フラグ）

何なの!?!ONEPIECEなの!?!大海賊時代なの!?

そんな感じでしたよ今の技!?

ゾロじゃん！完全にゾロじゃん!!

絶対斬撃飛ばすよこの人おおお!?!

……………ふうっ

少し落ち着いた…

「……………落ち着いたか?」

おっと師匠に心配されてしまった…

まだ現実を受け入れ難いが…まあその辺は慣れるしか無いなあ

「何とか大丈夫です…説明を続けてください」

「そうか…ならば続けよう、《気》を纏わせる事により身体能力を向上させる事ができる。更に武器に纏わせる事により武器の強度が増し、切れ味も鋭くなる。そして《気》を感じる事により離れた気配を感じたり、相手の動きが分かるようになる…所謂第六感と言うやつだ」

ふむふむ、これは覇気かな？

武装色と見聞色の覇気にしか思えないなあ…

…霸王色の覇気もありそうだな

「師匠、その《気》を使って相手を威圧して気絶させたり出来ますか？」

「ああ、できるぞ。と言うかお主と初めてあった時に威圧しただろ？」

ああ、あれかあ…※第13話参照

……………

やつぱりONE PIECEじゃ無いか!?(困惑)

言い方違うだけで完全に覇気じゃねえか!?(驚愕)

やべえよ…世界観がやべえよ…

このまま海賊王の宝を探しに海にでるのか…?

そんなん望んでねえよ!

……いや、でもそれはそれで楽しそうだな…？

……………(妄想中)

はっ!? いかんいかん!!

駄目だ! 3刀流の事考えたら駄目だ!!

今度こつそり練習しよう何て考えたら駄目だ!!

……ま、まあ、ちよつとくらい良いか

うん、こつそり練習しよう

「……………落ち着いたか?」

あ…またしてもやっちゃまった…

「……………ゴホン! それでだ、これからの修業は《気》を習得して貰う…具体的に言うとならば、森の中で暮らし自然を感じ、その自然から生命エネルギーを吸収するのだ」

……どうやら俺は森で暮らすようだ…

なんぞえ?



何で夏休みに山籠りの修業なんだよお!?

一夏と鈴と遊び行きたかったのに!!

3人でプール行こうって話してたのにいいいい!!

ちくしよおおおお!!

……グスン

因みに夏休みの宿題は最初の3日で終わらせました…

自由研究とか工作とかも終わらせました…

残りの日記は山籠りしながら書きます…

「ほれ、ついたぞ」

すると師匠が止まった

そして山を見る…

明らかに近所の山と違う…

まさしく大自然

話によると滝なんかもあるらしい

そして山に入り進んで行く俺たち…

すると俺はある物を見つけてしまった…

『熊出没注意?』

……大自然過ぎるだろお!?

そして歩くこと4時間

山道はそこそこ慣れているがこの山は別格だ…

崖はあるし、谷はあるし

体力がガンガン削られた

何で師匠は汗一つかかないでスピードも落とさないうで歩けるんだ?

コレが例の《気》の力か?

すると師匠が足を止めた

「さて、この辺でいいだろう…」

そうやって俺に一振りの刀と袋を渡してきた

「お主には暫くこの森で暮らして貰う…お主一人だな」

………はっ!

え、何て言った? 一人で?



「刀は本物だ、扱いには気をつけろ…あと袋の中身は塩だ大事に扱え」

頭が回らない俺を気にしないで話を続ける師匠

「ここで生き残りたくば《気》を身に着ける！自然から学び強くなるのだ！時が来たら迎えに来る、それまで死ぬなよ我が弟子よ…ではさらば！」

そう言つて師匠話消えた…

は？マジで…？

そして俺の山生活が始まった…

「師匠おおおおおおおお!!?あんだ俺を殺す気かあああああ!!?」

気かああああああ…

気かああああああ…

気かああああ…

気かああああ…

そんな声が山に響き渡つた

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

## 《夏休みの日記帳》

## 1日目

俺は師匠に連れて来られた山に一人取り残された

山から脱出しようにも4時間掛けて来たから道が分からない

現実逃避したい気持ちを抑えて周りを探索した

まずは水を何とかしたい

じゃないとマジで死ぬ

探索したが水場は見つからなかった：

木に目印を付けながら進んでいたが日が暮れてしまったので明日に引き継ぐ

夜になり腹が減るのを我慢する

木の上に登って寝ようとしたが周りから獣の唸り声が聞こえてきた

怖くて怖くて堪らなかった

結局朝まで息を殺して震えていた

：誰か助けてくれ

2日目

ろくに眠れなかったからか明るくなると気絶する様に寝てしまった

今の時間も分らないが水場を探して進んでいく

要約川を見つけた

そして俺はその水を飲んだ、乾きに耐えられずに飲んでしまった

結果、腹を壊してしまいこの日はまともに動けないまま一日が終わってしまった

…辛い

3日目

腹痛も何とか治って今日は川を辿って上流に向かって進む

途中で腹が減って堪らなくて木の皮を剥いで食べた

とても食べたものでは無かったが無理矢理飲み込んだ

飢えを凌いで進んでいたら水が湧き出ている場所を見つけた

テレビで湧き水は飲んで大丈夫と聞いたので飲んでみた

今まで飲んだ水で一番美味く感じた

此処を拠点としていこう

そして夜になり木の上で寝ようとするとまた唸り声がした

恐る恐る下を見ると野犬の群れが木の下から俺を見上げている  
登る事は出来ないみたいだ

結局この日も朝まで眠れなかった

…苦しい

4日目

深刻な寝不足だ

このままでは倒れてしまう

腹も減った、まともな食べ物が入らない

水で空腹をごまかす

今日は火をおこす

火があれば獣も寄って来ないかもしれない

………

あれから弓きり式の火起こしをしている

中々火が起こらない

日が暮れる前に何とか起こせた

火を見ていたら何だか落ち着いてきた

火をつけたまま木の上で眠った

5日目

久しぶりにまともに眠れたが…

火につられて虫が来た

身体全体を刺されてかゆい

また刺されないように泥を身体に塗った

今日はいい加減空腹が限界なので食べ物を探す

しばらく探すとスベリヒユがあつた

ビタミンやミネラルを含んでいる有り難い野草だ

シャツを脱いでスベリヒユを包んで拠点に持ち帰った

……

灰汁抜きをしたいが鍋が無い事を思い出した

仕方ないので洗って食べた

6日目

今日は魚を取ろうとしたが全然捕まらない

木の棒とツタで釣り竿を作るがこんなんじや釣れなかつた



雨が降ってきた

寒い、夏なのに寒い

火も起こせないからこのままだとまずい

雨をしのげる場所を探していると洞窟を見つけ

嬉々として入ったのが間違いだった：

その洞窟に熊がいたからだ

勝てない

見ただけで分かる

3メートルはある巨体の隻眼の熊

左目に刀で斬った様な傷がある

そこからは無我夢中で逃げた

雨でぬかるんで走りにくいが逃げる

そして崖に追い込まれた

最悪だ

餌を前にした熊がゆっくり近づいてきて前足を振り上げ、俺に向かつて振り下ろす

躲そうとしたが左眉を切り裂かれた

痛い痛い痛い痛い

怖い怖い怖い怖い

俺は雨で洪水になってる崖の下に刀を抱いて飛び降りた

……誰も助けてはくれない

8日目

川に流されたが何とか生き残った

拠点からそんなに離れていないのが幸いだ

左眉の傷はかなり深い、傷跡が残るだろう

足も裸足で走り回ったから傷だらけだ

……いや、身体全体が傷だらけだ

何でこうなった……？

なんの為にここに居る……？

……そうだ、《気》を学ぶためだ

《気》が使えなければ生き残れない

生き残る為に死ぬ気で《気》を感じる

……何も感じ無い

そもそも《気》が何なのか分からない

この日は特に何も出来ないまま終わった



…自分の力で生き残るしか無い

9日目

まだ薄暗い時間に飛び起きた

奴だ…あの熊が俺を探している

何故か分からないがそう感じた

木の上で縮こまり周りに意識を向ける

……来た薄暗くて見えないはずの熊が分かる

俺は必死に気配を消す

いや、消すと言うより自然と同化する感覚だった

熊は一瞬こちらを見たが直ぐに離れていった

俺を殺そうとする奴のおかげで《気》を感じる事が出来た

皮肉って言うのかな？

感覚を忘れない内に座禅を組んで目を閉じる

……！

感じる…確かに感じる…！

目を閉じているのに生き物の《気》を感じる

…！野犬の群れが近づいてきてる

急いで木の上に避難して朝の感覚で気配を同化させる  
すると野犬はこちらに気付くことなく離れていった

…死ねない、こんな所で

10日目

今日は《気》を探りながら探索する

しかしまだ動きながら使えないので時々止まりながら使う

動物以外にも植物の《気》が分かる

結果ブルーベリーとラズベリー、ワラビとゼンマイを手に入れる事が出来た

ベリー系は野生なので酸っぱかったけど美味しかった

残りの時間は《気》を感じる訓練に費やした

…学べ、それだけが生き残る方法だ

11日目

今日は動きながら気配を探る訓練をしている

しかしうまくいかない

集中しないと直ぐに《気》が霧散してしまう

まともに使える様になるのはまだまだ先になりそうだ

いい加減タンパク質を摂取しないと不味い

しかし動物を殺すのは抵抗がある

虫を捕まえた

セミが3匹、バツタが7匹、コオロギが5匹

腹をよく洗い火で炙って食べる

クソ不味い

母さんの唐揚げが食いたい：

一夏のハンバーグと鈴の家の中華料理も食べたい

そんな事を考えながら修業した

……生きてここから抜け出す

## 12日目

今日も訓練を続ける

昨日よりは使えていると思う

自分の《気》だけでは足りない、だから自然からも吸収して補う

あとはこれを呼吸する様に使うだけだ

まあ、それが難しいからまだ出来ていないんだけど

釣りをしながら修業をした

魚の《気》を探ってそこに釣り針を投げて引つ掛けて釣る

普通に釣るより効率が良いし修業も出来て一石二鳥

って思ったけど釣り針を狙った場所にピンポイントで投げられない

魚に引つ掛ける必要があるから難易度高かった：

結局釣れなかった

タンパク質は当分虫だろう

### 13日目

歩きながら探索する

歩きながらの状態で作れる様になったのでかなり便利だ

また野犬の群れを感知した

しかし今日は逃げない

刀を抜いて迎え撃つ

相手を《気》で捕捉しながら戦う

前よりは戦えたがやはり数が多くてまだ勝てない

牽制しながら離脱した

野犬も無闇に追いかけて来なかった

拠点に戻り釣りをしに行く

昨日の方法で釣りを続けるがやはり狙い通りに行かない

竹の釣り針だから軽くて狙い辛いのでは？

そう思つて針に重しをつけた

するとさつきより圧倒的に狙いやすい

見事に一匹だけ釣り上げた

多分イワナだと思う

内蔵を外してウロコを取つて洗う

水気を取つて串に刺し塩を振る

火で焼いて食べた

嗚呼：要約までもな食事ができた

あまりの美味しさに泣いてしまった

きつとこの味を忘れる事は無いだろう

この日は熟睡する事ができた

14日目

今日は身体の調子がすこぶる良い

周りの《気》も良く感じる

今日も修業を続ける

日に日に上達している、走り回りながら気配を探るのもあと少しで出来そうだ  
また釣りをする

昨日のコツを思い出しながら

するとあつという間に5匹釣り上げた

かなりの進歩だ

残りの時間を素振りに使う

感覚を研ぎ澄ましながら野犬の群れと戦うイメージで振るう  
速く、鋭く、力強く！

15日目

今日で早くて半月がたった

1日目はあんなに怯えていたのが嘘みたいだ

ある程度《気》を扱えているのか？

……いや、まだまだか

夏休みの事を考えるとおそらくはあと半月くらいで師匠が迎えに来るだろう

それまでの目標がある

隻眼熊の討伐だ

アイツを超えた時にようやく胸を張って帰れる

必ず…必ず超えてみせる…！

あと今日はいつも通りの修業をおこなった

16日目

今日もいつも通り修業した

そして遂に走りながら《気》を使える様になった

……ようやくだ

あとは走りながら気配を消す修業もしたがこちらは直ぐにできた

《気》をある程度は使いこなせてきたからだろう

さて、今日はあいつ等との決着をつけようと思う

野犬の群れとの戦いだ

走りながら気配を探る

しばらくして見つける事ができた

気配を消しながら刀を鞘に収めた状態で奇襲を仕掛ける

いきなりで混乱した所を一気に蹴散らす

しかし直ぐに体制を整えて攻めてくる

だが《気》で相手の動きを読み躲しながら攻撃した

一時間くらい戦い10匹の群れを全て倒した

殺してはいない

何故かコイツ等を殺したく無かった

……自分でやったが可哀想になり手当てをした

結果懐かれた

どうやら群れのリーダーに認められたみたいだ

今日は皆で眠ったがあつ苦しかった：

## 17日目

今日は群れを率いて狩りをした獲物は野ウサギだ

何だか東さんを思い出しながら狩った



魚や虫以外で初めて命を殺した

罪悪感はあるが生きる為に俺の血肉になつて貰う

血抜きをして内蔵を取り出す…内蔵は犬達が美味しく頂きました

皮も剥いで水で良く洗つた

…：犬達が見てくる…お前らさつき自分達で狩つたウサギたべてたよね？

肉の中に自生していた香辛料を詰めて大きめの葉っぱに包んで土に埋める、その上で

焼き火をして蒸し焼きにする

焼いてる間に釣りをして犬達に食べさせた

余つた分は天日干しにして保存食にする

肉が焼き上がり土から掘り起こす

葉っぱを外して見ると…

そこには肉汁を滴らせながら香辛料の匂いが漂うウサギ肉が！

半月ぶりの肉…

頂きます…

そしてかぶり付いた

美味い…美味すぎる!!

涙が止まらなかった

あつという間に食べ終わる

そして……ご馳走さまでした……!

ウサギに感謝を捧げながらそう言った

改めて食事の有り難さが良く分かった

骨は犬達にあげた

18日目

今日も群れを率いて狩りをする

今日は鹿を狙う

群れの特性を活かして連携する

……何故か分からないが犬達と意思疎通が出来る

あいつ等の次の動きも分かるし、あいつ等も俺の動きを理解している

まるでずつと一緒にいたみたいに連携ができる

……これも《気》の影響か?

無事に狩り終えてその場で吊るして血抜きをする

解体は拠点でしょう

拠点に戻り皮を剥いで内蔵を取り出し犬達にあげる

水で洗い慣れない手付きで解体していく

ウサギと違ってデカイから苦勞した

一人と10匹で分けてもそれなりに食べそうだ

犬達に肉を食わせながらふとある事に気づく

：コイツ等デカくね？

てか犬か？…まさか狼…？

でも日本には狼はもういないしなあ

多分だけどシベリアンハスキーの血が流れている雑種だと思う

：あとコイツ等寝るとき群がってくるから暑い…

でもカワイイから許す

19日目

今日から《氣》を身体や刀に纏わせる修業を開始した

氣配を感じたり、消したりが出来たので次は攻撃に《氣》を使う

じやないとあの熊には勝てない

俺が勝つには《氣》を纏わせる他にない

だが中々上手くいかない

イメージが難しい

修業している内に夕方になつていた

急いで釣りをして魚を取った

犬達に与えようとしたが何とウサギを獲つてきていた

自分達で食べるのかと思つたが何と俺にくれた

感動して号泣してしまつた：

その肉は最高に美味かつた

寝る前に皆を撫でまくつた：本当にカワイイ奴らだ

## 20日目

早くてもう20日も経つのか

最初は恐怖だの孤独だの空腹だので辛く、苦しかったが

今ではこの生活に慣れた

：いや、むしろ楽しんでる

恐怖は無い：強くなる事で恐怖を克服してきている

孤独でも無い：今は仲間が：家族がいる

空腹も無い：山の生命を頂き血肉としている

ドス黒い感情が湧き出ていたのが嘘みたいだ…

…：…だいぶ変わったなあ

今までは無かった気持ちだ…

でもこの生活もそう長くは無いだろう…

21日目

今日も《気》を纏わせる修業だ

ONEPIECEの覇気の修業シーンを思い出したので参考にしてみる

鎧を纏う様なイメージ

…：…

一応出来たが…これじゃただ防御力が上がっただけだ

師匠は身体能力が上がると言っていたから今のイメージじゃ駄目だ

でも防御用として使えるからこれはこれで修業する

別のイメージ…：…《気》を纏う…纏う…

…：…そうだ

今度はあれを試してみよう

僕のヒーローアカデミアのワン・フォー・オール フルカウル

このイメージでやってみよう

……お?

いい感じだ、さつきとは全然違う

あとはもう少し自分に合わせたイメージに変えていこう

## 22日目

今日は身体能力がどのくらい変わっているか確かめる事にした

犬達との追いかけてこだ

まずは普通の状態

…割と頑張ったが捕まって舐められまくって身体中ベトベトになった…

川で洗い流してから続きを行う

今度は《気》を纏う

するとかなりのスピードが出た最初は速すぎてビビったけど直ぐに慣れた

今度は犬達にも追いつかれなかった

またベトベトにされなくて良かった…

夜に事件が起きた

天日干しにしていた魚が無くなっていたのだ

熊が此処まで来た…？

何て思っていたが違った

犬の一匹から魚の匂いがした

問い詰めたら耳を下げてつぶらな瞳で見ながら『クウウーン…』

何て鳴くんだもん

それは反則だ…

許すほか無かった俺だが…仕方ないよな…？

## 23日目

ここで自身の身体の変化に気づいた

視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚が明らかに良くなっている

昨晚の犬から魚の匂いに気づいたのも普通にあり得ない

ほとんど獣臭しかしい中でほんの僅かな魚の匂いに気付いた

それに直感も冴え渡る感覚がする

…まるで野生に帰ったみたいだ

いや、帰ったみたいでは無く、本能が目覚めたんだろう

野生の生活に野生動物との行動…

それらが俺の中の野生を目覚めさせたんだ

…全神経が研ぎ澄まされた様な感覚

これも新たな力なのだろう

## 24日目

今日は刀に纏わせる

刀に纏わせるのだとイメージはやっぱり武装色の覇気だな

しかし刀は黒くならないから微妙にイメージしにくい

もつと自分のイメージを…

イマジネーションを…!

纏う…纏う…

刀にただ纏わせるのは違う

刀を…《気》で覆う…

……違う

刀に直接《気》を流し込む…

…!これだ!

このイメージで刀を振るってみる



すると太さ60cm程の木を斬れた！

…ギヤグみたいになったな

あとは身体強化と合わせて使う修業だ

## 25日目

修業しているが身体と刀の二つ同時に纏わせるのに苦戦している

二つともイメージが違うので中々難しい

しかしコレができないと奴には勝てない：

だから絶対に諦めない！

久しぶりに皆を率いて狩りをした

…のだが、気づいたら刀を咥えて4足歩行で走っている

しかも違和感が全く無いしめちやくちや速く走っている

何だろう…？俺の前世は犬か狼だったのか？

だがこれも新たな戦法になるかもしれないので今日はこのまま狩りをした

…どんどん野生に近づいてきている：

## 26日目

相変わらずイメージを二つ同時にするのに苦労している  
それとは別に身体強化の種類を作った

全体的に能力を上げる【身体強化・全】

拳や足に《気》を集中させる攻撃特化【身体強化・攻】

身体を硬質化させるように纏う防御特化【身体強化・防】

足に集中させて纏う速度特化【身体強化・速】

とこんな感じになっている

全だとバランス良く上がるし、攻だと攻撃力だけ上がる

防だと防御力だけ上がるし、速はスピードだけ上がる

まあ、わかりやすく言うと30ポイントあつたとして

全が各10ポイント

攻が攻撃に30ポイント

防が防御に30ポイント

速が速度に30ポイント

つて振り分ける感じ

今の状態だとこんな極端な強化しか出来ないが

いずれはもっと調整出来るようにしよう

27日目

今日も同時に《気》を使う修業をしている

もう余り時間が無い

しかし冷静に集中する

そして：

遂に同時に使える様になった：

まだ荒削りだが要約まともに戦える力を手に入れた

あとは同時に使いながら身体強化の切り替えも出来るようにしないとな

このまま修業を続けた

日が暮れて来たので魚を焼き、山菜をお浸しにして食べた

：残りの塩が少ない

大切に使って来たがもう少しで底を尽きる

あと少しで決戦だ

28日目

今日も身体強化と武器強化を使って修業する

技のキレが上がっているのが分かる

あとは体術の修業をした

【身体強化・攻】の状態だと素手で木を砕く事が出来た

あとは犬達の動きを観察してその動きを再現した体術も作った

【じゆうろうけん獣狼拳】つてところかな？

戦いの準備が出来てきた

あとは技の熟練度を少しでも上げる…！

この日は1日修業に費やした

29日目

今日は犬達と狩りに出かけた

多分皆での最後の狩りになるからだ

皆で狩りをしたあとは魚を取った

俺は釣りをして、犬達は直接捕まえた

山菜や木の実も取りに行った

そして夜にここに來てから初めてのご馳走を用意した

皆で食べていると思いき出が蘇る

木の下から俺を睨みあげ

命懸けの戦いをし

共に山を駆け

狩りで獲物を仕留め

皆で眠った：

：コイツらとの生活は楽しかった

少し泣きそうになった：

皆して舐めてくれたのは嬉しかった：

：それから皆で寄り添って眠った：

30日目

いよいよ今日が決戦の日だ

あの隻眼熊との決着をつける

皆には悪いがアイツは俺一人で倒す

一人で倒さないといけない

皆には見守ってもらおう

これ以上日記が書かれていかなかったなら俺は死んだのだろう

……もし、もしこの日記帳を見つけた人が居るのなら  
俺の……緋龍蓮仁の生きた証として残してほしい  
……それじゃあ、行ってきます

………パタン

厳仁は置いてあった日記帳を読み終えて閉じる  
実はこの一ヶ月間ずっと蓮仁を見守っていた  
しかし蓮仁はそれに気づくことは無かった……

「……さて、どうなるか」

そう言つて蓮仁の元に向かうのだった

S i d e 蓮仁

遂にこの日が来た

あの熊との戦いだ……！

この一ヶ月の修業の成果を見せてやる

……あの日受けた左眉の傷がじんじんと痛む

気配を探りながら走っていると感知できた

向こうも気づいたらしくこちらに近づいてくる

「お前たちは此処で見ている、手出しはするなよ？」

犬達にそう言い聞かせる

コイツ等も一緒に戦いたいみたいだがそれは駄目だ

アイツとはサシで勝ちたい！

『クウウーン……』

心配してくれている……

本当にカワイイ奴らだよお前たちは

「そんな声出すなよ、俺を信じろ！」

『ワン！』

元氣よく返事をしてくれた

……さて

奴が来たみたいだ

「グルルルルウ…」

…！やっぱり凄い殺気だ

ビリビリ伝わってくる

だけどなあ…

前とは違うんだよお!!

俺も全力で殺気を叩きつける

「グルウ!?!」

へへッ！驚いたな？

要約エサから敵に認識を変えることが出来た

刀を抜刀して構える

「さあ…行くぞ!!」

足に《気》を集中させて一気に近づいて斬りつける

が、避けられた

「…!?!今の避けんのかよ!?!」

クソツ…！コイツやっぱり強い！

スピードで翻弄しながらヒット&アウェイの攻撃を繰り返す



何回か避けられたが攻撃が入る

武器強化した状態で切っているのにほとんどダメージが入って無い…？  
斬りつけても硬くて切れない

コイツまさか…！

「コイツも《気》が使えるのか!？」

もしそうならかなり不味い

今の俺より《気》の扱いに慣れている筈だ

幸い少したがダメージは入ってる

持久戦になりそうだ

ヒット&アウエイを繰り返していた次の瞬間

俺はいきなり吹っ飛ばされて木に激突した

「がはっ!？」

ヤバイ…【身体強化・防】を咄嗟に使ったけど諸に喰らった

俺の動きを読んで前足で吹き飛ばしやがった…！

かなりダメージが入っちまった…

だけどなあ…

こんな所で終われないんだよ！

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!」  
叫びながら立ち上がる

身体強化で無理矢理身体に力を入れて走り出す  
刀を八双に構え斜めに振り下ろして斬りつける

「グガアルウウ!?!」

会心の一撃を食らわさせて相手を怯ませる

どうやら攻撃重視で無いとダメージが余り入らないみたいだ

俺は刀を口に咥えて姿勢を低くする

手が地面に付きそうな程の低姿勢

4足歩行に近い姿はまるで狼のようだ

「【獣狼拳】……!」

そう言って駆け出す

手と足に《気》を集中させて走っているので二足歩行より俊敏に疾走れる

刀で相手を斬りつけながら走り回り翻弄する

「グウオオオオオオ!!」

熊は叫びながら手を広げて俺を捕まえようとする

「ベアーハグはお断りだ!!」

それを避けて懐に潜り込む

両手に《気》を集中させる

「【牙狼】!!」

指を牙のようにして熊の腹に噛みつき固定、そこを手の腹部分で相手を押し出すようにして穿つ

「グウオオ!?!」

最大威力で内蔵目掛けて放った一撃はかなり効いたみたいだ

しかし毛が威力を殺してしまったようでまだまだ倒れそうに無い

「ハアツ…ハアツ…クソツッ! やっぱ手強いなー」

このままじゃジリ貧だ…

時間を掛けるのはこちらが不利になってしまふ…!

でも俺の攻撃威力じゃ相手を倒しきれないし

《気》が限界に近づいてる

これ以上は《気》を周りから吸収しないと不味い

でも相手が待ってくれないし…

そう考えながら相手に斬りかかる

【獣狼拳】の俊敏を活かしながらの斬り、スキを作って体術で攻撃する

クソツ！どうすれば…！

考えろ…！考えるんだ…！！

この局面をひっくり返す様な打開策を！！

《気》が残り少ない…

だが相手は待ってくれない…

周りから吸収するのは集めるのに時間がかかる…

………周りから集めるのに時間がかかるなら、元々集まっているのを吸収すれば…？

これだ！！

あの熊が纏う《気》！あれを奪って俺の《気》にする！！

ニヤリと笑う

「グアツ!?」ビクツ

熊がビビリやがった

ふ、ふふふ…

「さあ…お前の力を…よこしやがれえ!!」

一気に近づいて相手の腹に触れるそして相手の纏う《気》を自分の《気》に付けて引つ

張る……！

「ハアアアアアツ!!」

「グルウ!？」

熊も俺の意図に気づいたらしく引き離そうとする……が

「残念！もう遅い!!」

熊の《気》を根こそぎ奪って自分に吸収した

「ハアツ……ハアツ……成功だあ！名付けて【フィジカルハント身体狩り】！」

まんまバンさんの技名ですね

他に思いつかないから仕方無し！

さあ……この一撃で沈める!!

再び懐に潜り込もうとするが何回も入らせてはくれない

前足で切らかかってきた

それを刀で受け止めるが、刀を弾き飛ばされてしまった

しかし熊も体制が崩れ、そのスキに潜り込む

右手に全ての《気》を纏わせて腰を落とす

身体を捻りながら相手の腹に向かって回転をかけた拳を打つ

【雅龍旋】!!  
がりゆうせん

熊の腹に決まった会心の一撃は相手を後方に回転しながら吹き飛ばす

そして木に激突した熊

「ハアツ……ハアツ……どう……だっ!!」

息が荒くもう立ってるのが限界だ

右手も赤く腫れていてまともに動かない

頼むからもう起き上がるな……!

しかし

「グルルルルウ……」

熊は起き上がった

「……ちくしよおお……!」

近づいてくる

ただだ俺の身体は動かない……

ここまでか……

目を瞑るがいつまで経っても何も起こらない

目を開けると……

すぐ目の前に熊がいた

「ヒエッ」

しかし何もしてこない

なんでだ…？

「えーと？ トドメ刺さないの…？」

「グアッ」 ☒ ・ ? ・ ☒

頷いて答えた熊

……あといきなり顔文字付き始めたぞ？

突然シユールに何の止めて貰えます？

そして俺の前に背を向けて座る

「……？ 乗れって事か…？」

「グアッ！」 ☒ ・ ? ・ ☒

またしても頷いて答えた

恐る恐る背中に乗る

そしてそのまま歩き出す…

しばらくするとある木の前で止まる

そして木の上から師匠が飛び降りてきた

「ファツ!?し、師匠!？」

久しぶりの師匠との再会だ

「中々良い戦いだつたぞ、この一ヶ月間良くぞ生き抜いたな」

「え?え?あ、ありがとうございます?？」

混乱する俺は何が何だか分からなくなってしまった

そんな俺を背負った熊は師匠の前に俺を降ろす

「ここまで運んでくれるとは思わなかったぞ?？そんなにコヤツが気に入ったか?」

「グアツ」

なんか師匠と熊が話始めた…

あと熊!何照れてんだよ!

「どういった関係…?？」

と師匠に聞くと…

「コイツとはお前同様に殺し合った仲だ、コイツの左目を斬ったのは俺だ」

……………マジすか

話によると師匠の子供の時に殺し合った熊の子供らしい

そして親子2代で師匠と殺し合う仲…

よく分かんねえや…



「それにしても、まさか相手の《気》を奪う方法を自分で編み出すのは流石に驚いたな……それとあの獣の様な動きもな……」

師匠に褒められた！

「だが……最後に諦めたる……？」

うぐつ……！痛い所を付かれた！

「いいか？最後まで諦めるな！意地汚く全力で足掻け！諦めるのは死んでからにしろ！生きてる限り最後まで立ち向かえ!!分かったか!!」

「は、はい!!」

師匠はやっぱり厳しいや……

長かったサバイバル生活も終わりを告げ山の麓まで降りてきた俺たち

犬達と熊が見送りに来てくれている

「じゃあな……お前たちとの生活楽しかったよ……また会いに来るからそれまで元気だな……」

『クウウーン……』

そしてリーダー犬の前に来てそいつに刀を渡す

「こいつはリーダーのお前に託す、今日からお前の名は…【シフ】だ！」

「ワン！」

ダクソのあの狼の名前と刀を贈る

刀を啜えた姿はまさしく【灰色の大狼 シフ】だ

次に熊に向き直った

「お前とは完全な決着を付けられなかったな…」

「グアツ…」 ☒ ・?・?・? ☒

顔がいちいちカワイイな…！殺気を叩きつけてきた奴とは思えないんだけど！

「次に来たときは必ず勝つからな！覚悟しとけよ！」

「グアツ！」 ☒ ? ☒

別れを終えて歩き出す

「皆！じゃあな！」

新たな力を身に着け、家に帰るのだった…

「その前にお主臭いぞ…先に風呂に入れ」  
「……はあい」

## 番外編 織斑さん家のお引越し

前回のあらすじ！

山に一人置き去りにされた蓮仁！

そこでの一ヶ月の生活により新たな力を手に入れた！

その力で熊との壮絶バトルをおこなった

しかしあと一歩及ばず勝てなかった…

リベンジを誓い山を後にした蓮仁であった…

S i d e 蓮仁

遂に…遂に帰ってきたああああ!!

一ヶ月ぶりのお！我☆が☆家!!

嗚呼…一ヶ月経つとかなり懐かしく感じるなあ…

玄関をあけて…

「ただいまー！」

と元気よく言うとは…

「お帰り、蓮!!」

……………あれえ?

何で一夏と鈴がおるん?

「久しぶりだな蓮!俺も鈴も心配してたんだぜ?」

「べ、別にアタシは心配何かしてないんだから!勘違いしないでよね!」

「ツンデレ乙」

「くオラア!!あんたらハモってんじゃ無いわよ!」

リアルツンデレだ!

ええもん見れたあ〜(^^)

「久しぶりだな一夏に鈴!でも何で二人がいるんだ…?」

「その事何だけど…カクカクシカジカ…」

「マルマルウマウマって事か…ってマジかよ!」

「ちよつと!二人で話をすすめないでよ!読者の人達にも伝えなさい!」

「メタい!メタいよ鈴さん!!」

「まあ、タイトルで大体わかるけどな」

「一夏!?!お前もメタいぞ!」

いきなりメタ発言する鈴と一夏にびっくりだよ…

さて、それでは…説明しよう！（ヤッターマン風）

何と一夏は引越す事になったのだ！

あ、いや転校とかでは無いよ？

この地区内での引越しらしい

その話をする為に鈴と数日前からちよくちよく来てたらしい

「そっかあ…遂にあのボロアパートから引越すのかあ…」

今までの一夏と千冬さんの暮らしていたアパート

そこは俺にとつても思い出深い場所だ

良く遊びに行つたなあ…

「そんでどの辺に引越すんだ？」

「ああ…話すより見たほうが早いな…ついて来てくれ！」

そう言つて外に出る一夏

俺と鈴も追いかけて外に出る

そして左側に数歩歩いて立ち止まると…

「此処だ！」

……いや、隣やん!?

「まさかのお隣りさん!?!…あつ! 空き地だった筈なのに新築一戸建てが…!?!」

いや、いくら一ヶ月間居なかったからって家建つの速すぎい!?

普通は一ヶ月じゃできない!?

え、何? 最新技術なの?

……ほへー、俺が原始人生活してる間に未来の技術的なものでねえ…

俺がアナログ以下な時に家がねえ…

……立派な家だなあ (現実逃避)

そして再び家に戻った

「にしても、何か変わったよな蓮」

「そうね…オーラが違うって感じかしら…」

そういえばまだ何をしていたか話して無かったな

そして二人にこの一ヶ月の生活を話した

「……………」

二人は絶句していたよ…

ははっ…笑えよ…？

原始人野郎って笑えよお!?

『虫食う何て無いわー』とか言えよお!?

夏休みずっとサバイバルしてた俺を笑えよおおお!?

ハアツ…ハアツ…

…落ち着いた

「に、にしてもまさか熊と戦ったなんてな…」（苦笑い）

「そ、その傷も熊にやられたのよね？だ、大丈夫なの…？」（苦笑い）

何か気を使われてる!?

「傷は大丈夫！それよりこの話し終わり！引越しの話ししよう！」

そこから無理矢理話しを変えて引越しの詳しい話しを聞くことにした

「ほら、二人も知ってるだろ？モンド・グロツソで千冬姉が優勝したの…あの優勝賞金で新しく家を買おうって千冬姉がいきなり言っ来てんだ…と言うか、その時には既に家を建始めてんだ…」

…千冬さんがいつの間にか相談もせず建てちゃったと…

何やってんのあの人!?



相談くらいしなよ!?

「もちろん説教したぞー!」

千冬さん! 弟に説教されすぎ!!

「…でも、感謝もしてるんだ! 凄いなんだぜ! 特にキッチンが!」

突然キッチンが素晴らしさを熱く語り始めた一夏

鈴は頭を抱えて『またか…』と言っている

「そんでオーブンが付いていてさ! すっごいデツカインだよ!」

長くなりそうだなあ…

まあ、気長にまつか

「更にコンロがIHクッキングヒーターとガスコンロの二種類が付いてるんだぜ!?! IHも良いけどやっぱりガスコンロは嬉しいな〜」

~~~~~1時間後~~~~~

「更に更に! 自動洗浄機まで付いてるから洗う物が楽になるんだよ! いや〜! 今から楽しんで眠れないんだよな! あ! あと『ちよつと待とうか!?!』…ん? どうしたんだ?」

「どうしたんだ?…じゃねえよ! 何でキッチンの良さを一時間も聞かされないといけないんだよ!?! 俺さつき帰ってきたばかりなんですけどおおおお!?!」

一ヶ月の修業で肉体的にも精神的にも疲労した俺にキッチン説明で更に疲労の追い打ちを仕掛けてくんなよおおおおお！

疲れたんだよおおおおお！

あと鈴！こつそり寝てんじやねえええええええ！？

「ふあつ!?ね、寝てない！寝てないから！目を閉じてただけだから!!」

「ヨダレ垂れてるのに…?」

「え!?嘘!?嘘よね!」

ところがどすこい!あ、間違った

ところがどっこい!本当なんだよなあ

そつと手鏡とティッシュを差し出す

鏡を見て顔を赤くしている鈴は放置しといて

「…それで?いつ引つ越すんだ?」

「実は明日なんだよ」

明日かあ…

夏休みの残り数日は休みを貰ったから手伝うか

「よっしゃ!なら俺も手伝うか!」

「もちろんアタシも手伝うわよ!」

そうして明日の引っ越しを手伝う事にした俺たちは晩ごはんはんに母さんの唐揚げを食べるのであった

嗚呼…まともな飯だ…（感動）

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

今俺は荷物を纏めている

何故ならば今日は引っ越しの日だからだ

「一夏く？これで全部か？？」

蓮がダンボールを抱えながら聞いてきた

「ああ、これで全部だ」

俺もダンボールを持ち上げて部屋からでる

家が近いのと荷物が少ないので歩いての引っ越し作業だ

荷物を下まで運び一度降ろす

すると千冬姉が近付いてきた

「荷物は全て出し終わつたな？よし、ならば最後の挨拶だ」

俺と千冬姉…そして蓮も並んでアパートに向かつて

「長い間お世話になりました！」

と言つた

すると鈴も

「アタシは短い間ですがお世話になりました！」

この中では一番付き合いが短いけど挨拶をしてくれた

挨拶をしているとアパートの大家さんが出てきた

「千冬ちゃんに一夏君、遂に引っ越しちゃうのね」

「大家さん！長い間お世話になりました」

「良いのよ！これからもたまに顔出しに来てね！」

「はい！ありがとうございます」

「大家さんありがとうございます！」

「一夏君も元気だね！蓮君は…元気だから大丈夫だね！」

まあ、蓮だから大丈夫だよな

大家さんとの別れも済ませて荷物を運ぶ事にした

……少ないと言ってもタンスとかあるのに…

「ホイホイつと」スタスタ

何で蓮はタンスを軽々と持ち上げてるの!?

「れ、蓮…う？大丈夫なのか…？」

と、千冬姉も聞いている

すると蓮は…

「ふっふっふ…千冬さん、修業を終えた今の俺はこの程度余裕のよっちゃんですよ!」ド

ヤツ

うーんウザい!ドヤ顔がウザい!

あとそのネタはもう古いよ!

でも、確かに凄い

千冬姉もびっくりなこの成長っぷり

俺も負けてられないな…!

大体千冬姉が運んで一番重いタンスを蓮、残りを俺と鈴で運んでいる

そしてあつという間に到着した

「皆、あと少しだ片付け終わったら出前でも取ろう」

千冬姉のその一言で俺たちのヤル気が更に出た

「つしやオラア！サツサとおわすぞおお!!」

「おおおおお!!」

蓮の掛け声で作業に取り掛かったのだった

あれから一時間位で荷解きも終わったので

出前の蕎麦を食べている

引つ越しにはやっぱり蕎麦だよな！

「光る 光るぜ♪光るそば♪引つ越ししたら光るそば♪『作り方教えて?』ネット  
ネットだ♪♪引つ越ししたら光るそば♪♪そしてネットを引くなら♪ドコモ光イイイ  
→→!」

何か蓮が一人で歌ってるけどスルーで

蕎麦が美味しいな〜!

「……………ねえ、誰か突っ込んでよ?……………ねえ!」

スルーで

昼飯も食べ終わった俺たちは食後の休憩をしていた  
すると蓮が…

「それにしても荷物が少ないから殺風景だな」

と、言ってきた

確かに、元々荷物が少ないのもあるけどこの家はそこそこ大きい

まあ隣の蓮の家も大きいんだけどな

この2軒だけ周りより大きいから割と目立つ

すると千冬姉が

「家具の必要不可欠な物等は注文してあるから大丈夫だ、あとの細かい物は一夏を連れて選んでくる」

そして俺に向き直って

「喜べ一夏！ベッドで寝れるぞ?」

「……っ?!マジで?!よっしやあああ!?!」

今まで床に布団を敷くだけだからベッドで寝れるなんて夢みたいだ!

「良かったな一夏!」

「ああ！寝るのが楽しみだ！」

その後届いたベッドを部屋に運び組み上げたのだった

S i d e 一夏 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

引越しの手伝いを終えた俺は自分の部屋で寛いでいた  
一夏のベッド俺のより良いやつだったなあ…

低反発枕まであったんだもんグッスリ眠れるだろうなあ  
何て考えていたら

コンコン

と窓から聞こえてきた

……え？

ここ二階だよ…？

え？何…？お化け…？

皆さん実は俺はお化けとかホラーが大の苦手です…



真夏の心霊映像的な番組の一番最初の方で既に失神する程苦手です…

……………どうしよう

コンコン

ヒエツ…ヤバイヤバイヤバイヤバイ!

どうしよう…カーテン開けるのも怖い

「開けたくないでござる!!!絶対に開けたくないでござる!!!」

なんて言っている場合じゃねえよ!

木刀を持って窓に近づいていつでも逃げられるように【身体強化・速】を使っておく

そして木刀でカーテンを開けると……

「よー蓮ー!」

そこには一夏が…

「ギャアアアアアア!?一夏だあああああ!?!」

……………ん?何だ一夏か…

「びつくりしたな…何叫んでんだよ?」

びつくりしたのは俺じゃない!

この野郎!お化けかと思つたじゃないか!

それにしても窓の向こうは一夏の部屋だったのか

「まさか一夏の部屋がこんなに近いとは…」

少し危ないがそれを注意すればここから互いの部屋に遊びに行ける程の近さだ

「ま、これからもよろしくな蓮！」

「ああ、よろしく一夏！」

こうして俺たちは寝る直前までお喋りを楽しんだ

次の日一夏から『ベッド最高！』との報告があった

良かったな！

でもな……寝てる時に窓から乗り込んで来んなよ！びつくりしただろ！

こうして小学校最後の夏休みを過ごしたのだった

## 第2章 波乱万丈の中学生編

### 原作前第16話 波乱万丈!?中学校生活の幕開け!

前回のあらすじ!

修業から帰還した蓮仁!

家に入るとそこには一夏と鈴が!?

何と一夏と千冬さんはお隣りに引越す事に!

そして引越しを手伝う蓮仁であった

S i d e 蓮仁

2024年 春

「ふっ!はっ!せいっ!やあっ!!」

家の庭で木刀を振るう一人の少年がいた

「ハアアアアッ!ゼイヤアアアッ!!」

「コラ！蓮！何時まで木刀振ってるの！遅刻するわよ！」  
そう、その青年こそ緋龍蓮仁である！

「うわっ!?!もうそんな時間か!?!」

時計を見ると時刻は8時15分

残り15分しか無い!?!

「やべっ！遅刻する！」

急いで部屋に戻り着替える

カバンに荷物を詰め込み急いで玄関に向かう

「まったく！いつも稽古で遅刻しそうになって！」

母さんがそう言ってくる

けどさあ…

サボると師匠に殺されそうになるし

これでも朝4時半に起きてるんだよ!?!

俺朝から4時間近く運動してるんだよ!?!

「仕方が無いじゃん！サボると師匠に怒られるんだから！」

靴を履いてカバンを背負う

「はい、朝ご飯」

「サンキュ、ってフランスパン!?何で!?」

朝からフランスパンを渡してくるか!?

普通食パンじゃ無い!?

でも時間も無いのでフランスパンとコーヒー牛乳を受け取って家を出る

「いつてきまーす!」

「いつてらっしやい!」

家を出るとフランスパンを啜えて塀の上に飛び乗る

更に屋根の上上がり走り出す

障害物をパルクールで躲しながら走る

「おう、蓮坊!また遅刻ギリギリか?」

「お、田中のじいちゃんおはよう!遅刻はして無いから大丈夫だ!んじや!」

「oh!レンジ!オハヨウゴザイマース!朝カラジャパニーズニンジャが見レテカンゲキデース!」

「オッス!ゴンザレス!また日本語上手くなったじゃん!んじや!」

「てやんでい！まあた屋根の上を走りやがって！壊したら俺が修理するんだからな！べらぼうめい！」

「んげ!?棟梁!?き、気を付けまーす！さいなら！」

「おーい！緋龍くーん！待っておくれよー！」

「モツキユ、モツキユ、ゴクン ……?あんた誰だ？」

「僕だよ！二つ隣のクラスの下山だよ！」

「ああ、二つ隣のクラスの下山君ねえ……………いや、知らないよ!?何だよ二つ隣のクラスって!?まだクラスの人の名前すら全員分覚えてないのに知らないよ!?じゃあな！」

「ああ〜！待っておくれよ〜！」

こんな感じで街の人達と話しながら屋根をパルクールで移動する

……残り時間は5分か

このまま校門からだと言間に合わないな

携帯を取り出し電話をかける

『もしもし? 蓮か、またアレか?』

「おう! 話が早くて助かるよ弾!」

俺は校門では無く自分のクラスの窓に向かう

すると窓が開けてこちらに手を降ってくる

「おーい、蓮! 準備OKだぞ!」

「了解! 一気に行くぞ!」

俺はそのまま壁を走って登り二階にあるクラスに入る

「ギリギリセーフ! サンキューな弾!」

「気にすんな! 朝から面白いモン見れたしな!」

こいつの名前は五反田<sup>ごたんだだん</sup>弾

中学に入って知り合ったんだが、中々面白くて話が合う

一夏や鈴、今はいない筈以外で胸を張って友達と言える奴の一人だ!

「ちよつと! あんたまた壁を登ってきたの! 普通に登校しなさい!」

「落ち着けよ鈴... おはよう蓮、今日もギリギリだったな」

弾と話していると鈴と一夏が来た

「おはよう！一夏に鈴母ちゃん！」

「くオラア！誰が母ちゃんよ！」

「「H A H A H A H A H A！」」

「3人して笑ってんじや無いわよ！あと笑い方がウザい！」

朝から鈴のツツコミが冴え渡る！

やっぱり鈴のツツコミが無いと一日が始まった気がしないんだよなあ

「おはよう蓮君。朝から元気だね」

「お！おはよう数馬！朝からフツメンだな！」

「朝からフツメンって何!?!ずっとフツメンだよ!?!……………って何言わすのさ！」

「「H A H A H A H A H A！」」

「だから!!あんた達の笑い方がウザいのよ！」

「ほげげげっ!?!」

鈴が攻撃してくるが全て躲して弾に受けて貰った

あと弾……『ほげげげげっ』て何だよ……

もつと他に悲鳴無かったのかよ……



さて!説明が遅れたがコイツは御手洗数馬!

弾と同様に中学に入ってから知り合った!

ゲームとか漫画に詳しくて俺のネタにも付いて来れるもう一人の友達だ!

あとフツメンだ!

「最後の説明要らなく無い!?!」

「そんな事無い」

さて、こんな感じで新しい友達も出来た中学生活が始まった!

キーン  
コーン  
カーン  
コーン♪

チャイムが鳴ったので席につくと担任の先生が入って来た

「おはよう諸君!突然だが荷物検査をおこなう!」

体格がよく、おっかない顔の俺たちの担任、齊季松先生だ

ラオウっぽい感じを出しているけど、と言うか画風が完全に北斗の拳な人だが実は優

しい

しかも見た目の割に弱いんだよなあ…

初登校の日に座り込む女子生徒に手を伸ばしてゐる所にローリングソバットを喰らわせた時に一撃で倒してしまった

しかも座り込む女子生徒の話によると、転んだ女子生徒を起こそうとして手を差し出していらしい

先生が起きた時に速攻でキリモミ大回転ジャンピング土下座をしたんだが…

『他の人の為に迷い無く動けるのは素晴らしい事だ！だから気にせず誇ると良い！』  
と言ってきたんだよ

やべえ…この人めちやくちや良い人だ…

しかも動物が好きらしいから意気投合したし

何て考えていたら数馬の荷物検査が始まった

「むっ！何だこの漫画は！『5等分の花嫁』だど!?この齊季松の推しは二乃だ！だがこれは没収！放課後に取りに來い！」

何か要らん情報まで喋るな先生…

でもちゃんと放課後に返してくれるから優しいよな

ちなみにおれは三久推しです

一夏と弾は大丈夫だったみたいだ…

弾が大丈夫だったのが以外なんだけどな

しかし鈴は捕まってしまった様だ

…ん?鈴の顔が凄い事になってやがる…

「むっ!何だこの本は!『胸を大きくする方法全集』?……………その…何だ…強くなれ

!女なら強くな…」

「うわあああん!何でいちいち声に出すのよお!先生のバカあ!!うわあああああん

!!」

「ま、待て!凰鈴音!!先生が悪かった!すまない!だから待ってくれ!」

泣きながら教室を出ていった鈴とそれを追っていった先生

カオスですねぇ…

…にしても時間がなあ

仕方ない

「流石に時間的に不味いから俺が捕まえて来るわ…」

『よろしく!』

クラスの皆さん息びったりだな!

そんな訳で捕まえにいつてきまーす!

~~~~1分後~~~~

「ただいまー」

『早っ?!?』

鈴をお米様抱っこ、齊季松先生をアイアンクローしながら引きずって連れ戻した  
……え?先生の扱いが酷い?気のせいだよ

先生を離して、鈴のメンタルケアをしている内に俺の番が来た

「むっ!?な、何だこれは!?!何故カバンの中に鉤縄なんぞ入ってる!?!」

「え?何故って言われても……冒険の必需品ですよ?」

アンチャーテッドでも普通に持つてるじゃん

高い場所上がったたりするのに重宝するんだよなあ

「学校に冒険は関係ないだろう!?!」

「学校に冒険を求めるのは間違っているだろうか?」

「間違っているだろうが!これは没収!放課後取りに来い!」

没収されちゃった…

解せぬ…

そんな感じで授業は進んでいった

そんなこんなで放課後だ!

「いきなり放課後になつたな」

「お、一夏! ようやくまともに話せるな!」

「ああ、朝の挨拶と笑うとこでしか喋つて無いからな」

先生から鉤縄を返して貰い一夏と下校中だ

家が隣だから帰りは大体一緒だ

まあ小学校から大体一緒に帰つてるけどな

他のメンツは部活や家の手伝い何かで早く帰つたみたいだし

「そういえば部活はどうするんだ? やっぱり剣道部か?」

箒との約束もあるしな

「俺は……実はバイトしようと思つてるんだよ」

俺はその言葉を聞いて驚いた

まさかバイトがしたいだなんて

なら部活に入らないのか!?

「剣道は!? 箒との約束はどうするんだよ!?」

「……! わかつてる! わかつてるけど……これ以上千冬姉に苦勞をかけたくないんだよ……少しでも良いから、金銭的にでも助けになりたいんだ……!」

その言葉を聞いて俺は……

「はえ?」

「え?」

俺の間の抜けた声に一夏も驚いたように返す

と言うかコイツは……

「あのなあ……千冬さんは別に金銭的に困って何か無いぞ?」

「え? い、いやでも! 家を建ててしまったから優勝賞金なんてほとんど残って無いんだぞ!?!」

「いやいやいや! 確かに優勝賞金はもう無いだろう! けどな! 千冬さんはブリュンヒルデになってあらゆる雑誌に載ってテレビ番組でも引つ張りだこ! 更にCMや告知何かもしてるんだぞ?! ハッキリ言おう! 今の織斑家は緋龍家よりも遥かにお金持ちだ!」

もはやテレビ番組で観ない日は無いくらいの人気者になっている

しかもブリュンヒルデになってから一年以上経つのに人気は衰えるどころか更に勢いがついている

だから今の織斑家には下手したら億単位程の金が有るかもしれない!

「な、何だつてー!?!」(驚愕)

……………こ、こいつ

アホだアホだとは思っていたけど此処までアホだとは…

「いや、蓮には言われたくないよ」

「ナチュラルに心を読まないでくれるかな…?」

コイツ時々俺の心を読むからな…

千冬さんも読んでくるけどな

「いや、蓮も時々俺の心読むじゃん」

また読まれた!?!

ま、まあ俺も時々読めるけどさあ…

……………つて、かなり話が脱線したな

「それで…?結局どうするんだ…?」

「う、うーん…一回千冬姉に色々聞いてからもう一度考えるよ…」

うん、それが良いだろう

千冬さんもだけど一夏も大事な事を相談しないからな

「一夏…お前が千冬さんに心配掛けたくないってのは分かってる…けどな、今はまだ千冬さんに頼ったって良いんだ…そのかわりに俺たちが千冬さんに頼られるような立派な大人になって恩返ししてやろうぜ！な？」

「……ああ！そうだな！サンキューな蓮！」

「気にすんな！さーてと！早く帰ってゲーム買いに行こー！」

「何だゲーム買いに行くのか？」

「そうなんだよ！ようやく小遣いが溜まったからな！」

「前々から欲しかったからすっごい楽しみ何だよ！」

「その後家に帰ってから私服に着替えてゲームを買いに向かった」

「……ただ今俺はゲームを買いにお店にいる」

「欲しかったゲームを探しているが見つからない」

「なので店員に聞いてみた」

「ああ、このゲームですか…実は在庫切れで再入荷も何時になるか分からないですよ」

「…」



「な、なん…だと…!?」

俺は膝から崩れ落ちる

実はこの店で3軒目なのだがお目当てのゲームが何処にも売っていない…

どんだけ人気だよ!

四つん這いで泣いている俺を見兼ねて店員が別のゲームを薦めてきた

「か、代わりにこのゲームなんてどうでしょう!? コチラも人気で在庫が残り僅かですよ!  
!」

「? ( ; ω ; )」

薦めて貰った物を手に取り見てみる

……ほう? 銃を使うゲームかあ

俺のやりたかったファンタジーとは違うけどこれは面白そうだ

…あ、年齢制限が……

「あの一? お客様?」

「は!? か、買います! これ買います!」

「はい! お買い上げありがとうございます!」

ゲームとそのゲームをプレイするのに必要な物も買う

おかげで諭吉さんが大量に消えてしまった…

「店員さん！ありがとうございます！」

「いえいえ！…あ！そういえばそのゲームには年齢制限が…アレ？」

店員が年齢制限を確認し忘れていたので一応確認しようとしたが既に店から脱出していた

「欲しかったのとは違うけど、これも面白そうだ！」

買ったゲームを抱えて急いで家に帰る

抱えているゲームの名は

ガンゲイル・オンライン

もう一つの物語が動き出すまであと少し…

原作前第17話 俺、剣道部に入部した筈だよね…？

前回のあらすじ！

中学生になった蓮仁達！

新たな友達も出来たのだった！

そして勘違いからバイトをしようとしていた一夏!?

しかし蓮仁の説得により考え直したのだった！

そして蓮仁は新たなゲームを買ったのであった！

Side 蓮仁

ゲームを始めて数日

めっちゃハマってます！

いつも刀を使うから銃を使うのが楽しい！

まあ、最初は金があんまし無いから光剣で言うライトセイバーで戦ってたけどな

銃弾にも金がかかるから光剣は重宝した

金かかないし、剣術も活かせるからさ

人型は戦いやすかったけどサソリ型とかの異形は慣れるまで大変だったなあ……もう慣れたけど

それで金も溜まったから拳銃を買ったんだけど、思ったより簡単に当てられた  
「何だよ……結構当たんじゃないやねえか……フツ……」

何て言ってみたり

ちなみに死んではないからね？

希望の華は咲かして無いからね？

さてゲームの話はこの辺にしよう

ただ今放課後の学校だ！

一夏と共にある場所に向かっている

そしてある部屋の前で止まる

その部屋の表札には……

【剣道部】

「失礼します！」

戸を開けて挨拶する

すると先生が近づいてきた

「おお！待っていたぞ！」

この人は剣道部顧問の鷹たかなべ南部先生だ

先生も剣道をしていて若い頃はブイブイいわせていたとか

それから俺達が剣道部に来たのは他でも無い

入部するからだ!!

一夏もあの後千冬さんとよく話し合って剣道部に入る事にした

いや〜良かった、良かった!

あの日の約束をこれで守れそうだ!

一夏も今まで自力で鍛えて更に千冬さんにも指導して貰ったから結構強いぞ!

「さて、君たちで今年の新人部員は最後だな！それではいきなりだが試合をして貰う！」

……え？

いきなり試合？

何か昔もこんな事あったなあ…※第4話参照

「剣道経験者にはどの程度の実力が有るか見るために試合をして貰うのがうちの部の伝

統なんだよ」

そんなこんなで試合をする事になった

……のだが……

「し、勝負有り……」

一夏が試合をした結果あっさりと勝ってしまつた……

まあ、千冬さんを相手にしてるからあれくらいなら勝てるよな  
すると部員の一人が出てきた

「次は俺が相手をしよう」

「に、仁志にしむら叢部長!？」

おっと、どうやら部長さんの御出ましのようなだ

あの人は強いぞ……

千冬さんよりは全然弱いが今の一夏だと勝てないかもしれない

「一夏……あの人は強いぞ……油断するなよ?」

「おう!行ってくる!」

そして試合が始まつた

最初は部長が攻めてくるが一夏は全て躲している

他の人達もこれには驚きだ

「アイツスゲえ！部長の攻撃を避けてる！」

確かに凄い：

だけど部長も凄い

一撃がかなりの確だし鋭い

無駄の無い動きをしている

でもあれくらいならまだ勝機がある

すると一夏が攻め始めた

相手の動きに慣れたのか攻撃の合間を縫って反撃していく

しかし流石は部長だ

一夏の攻撃も避けられた

時間も過ぎて残り数十秒：

一夏が左手を握ったり開いたりし始めた

「あつ…詰んだわ」（察し）

あれは一夏が調子に乗つてゐる時にする癖だ  
俺は死亡フラグと読んでゐる

あれをして勝つた事は一度も無い  
ほぼ確実に負ける…

そして…

(……スキあり！)

一夏が打ち込む

しかし……

「掛かったな……！」

そのスキは部長がワザと作つたものだった

そして部長の一撃が決まり試合は終了した…

さて…お説教だな…

「一夏く〜ん？」( # ^ ω ^ )

「ヒエツ…れ、蓮…」

顔面真っ青で冷や汗ダラダラにしながら震えだす一夏

「最後…油断したよなあ…？俺言つたよなあ…？あの人は強いから油断するなよつて

…」



「い、言いました……」ガクガクブルブル

そこかしばらく一夏を説教していたが他の人達を待たせていたので早めに切り上げた

「ほっ……」（↓。——）

「続きは帰ってからだな」

「………あ？」

「これで終わりなわけないだろ？」

「＼（＾p＾）／オワタ……」

絶望する一夏は置いとして……

次は俺の番だ

「お待たせしました！始めましょう！」

「……ちなみに織斑君より強いのかい？」

先生がそんな事を聞いてきた

すると一夏が

「蓮は俺よりずっと強いですよ！俺の超えたい人ですから！」

「……一夏……そんな事言っても説教は無くならないぞ？」

「あ、駄目だった……」

「ま、まあ少し位は短くしてやる……」

（（うわっ……チョロいなコイツ））

その場にいた全員がそう思った

「よし、ならば仁志叢！君に決めた！」

「そのポケモンぽい感じ止めて貰えますか!?!」

面白いなこの人達

実力もあるし楽しい雰囲気もあるから良い部活だなあ

そして部長と戦う事になった

互いに構える

「最初に言っておく。俺はかーなーり強い!!」

「おっゼロノスだな！俺もかーなーり強いぞ？」

流石は部長だ

ネタが通じる！

「それでは……構え！始め！」

バシイイイイン！

「……………はっ！」

始めの掛け声と共に面に一撃を決めた俺

だが誰も目で追えなかった

いや、一夏は辛うじて動きを捉える事はできた

「…め、面有り…」

その言葉に周りがざわめき出す

「嘘だろ!?! まったく見えなかった!?!」

「始まった瞬間にはもう音が聞こえてきたぞ!?!」

「やべえよ…やべえよ…」

「も、餅つけ!?! じゃ無かった!?! 落ち着け!」

「「オメエが落ち着けよ!?!」」

おおく驚いてる驚いてる

修業の成果が出ているな!

因みに素の状態です

《気》を使った身体強化は一切使ってません

身体強化を使えないと弱い何て事にならないようにしっかりと鍛えてますから!

「さて、2本目に行きますか!」

「一夏みたいに調子に乗らずに次も戦う！  
と思っただが……」

「……………いや、やめておくよ……俺の負けだ……」

いきなり部長がそんな事を言い出した

「「ぶ、部長!?何故ですか!?!」」

これには他の部員達も驚きを隠せない

「緋龍と俺の実力差があり過ぎる……悔しいが今の俺では勝てん……それにさっきの一撃で  
まともに動けない……」

部長は竹刀を杖代わりにして立っている状態だ

フラフラしながら近づいてくる

「正直此処まで強いとは思わなかった……俺もまだまだだな……緋龍!そして織斑!ようこそ  
そ剣道部へ!歓迎する!!」

すると周りから歓声が上がる

「スゲえよ!あの二人!期待の新星だな!」

「即戦力ゲット!部員が少なかったから滅茶苦茶頼りになる!」

「これでこの部も安泰だな!」

「来いよ『高み』へ」(エース)

「オメエは何様だよ!?!」

やっぱり面白い部だな!

すると一夏も近づいてきて…

「やっぱすげえよ、蓮は…」(オルガ)

「バナージ…」

「ちげえよ!?!オルガだよ!?!中の人ネタやめろ!!」

「メタイよ!中の人とか言うなよ!」

最近メタ発言が多くなってきた…

そして皆に歓迎されてる中、鷹南部先生だけが険しい顔で何かを考えていたのだった

…

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 一夏

部活も終わり只今俺の部屋で反省会と言う名のお説教をされている

ガシッ

「おう、聞いたるんかワレ？ ああん!？」

ヒエッ…

ヤバイよ…完全にヤクザだよ…

ある意味千冬姉以上の怖さを持っている蓮

口調まで変わってやがる…

「大体のお、油断すんな言うたのに何を左手グッパしとんじや、おおん!？」

「すいません調子こいてすいません勝てると思ってすいません」

この状態の蓮は手こそ出さないけど威圧が凄いから怖い

「別に勝てると思って良いんだよ…負ける気で挑むより遥かにマシだ…ただな…あの負け方は何だ！警戒してれば見抜けた筈だぞ！」

ぐう…確かに…

散々千冬姉を相手にしたから罨かどうか何てしつかり見れば分かったのに…

「………本当に自分が情けないよ……」

「………一夏…お前のアレはもう癖だから治らないだろうな…だからピンチになっても対処出来るようにすれば良いんだよ」

「……いーそうだなー！ピンチをチャンスに出来るようにしないと！」

ピンチの場面を形勢逆転出来るようにすれば良いんだ！

でもその為には今よりもっと頑張らないとな！

「よおし！頑張るぞお！」

「よっしや！そのいきだ！」

そしてそのまま二人で料理を作り上げて千冬姉と3人で食べるのであった

S i d e 一夏 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

本日も学校が終わり部活に向かう

昨日の試合で俺達の實力も分かって貰えただろうし今日から本格的にスタートだな  
一夏と共に部室に入ると先生が来ていた

「先生？お疲れ様です」

「お疲れ様です」

すると先生は俺達に気づいたらしくこちらに近づいてきた

「おお、待っていたぞ緋龍！」

…？俺を待っていた…？

一体どう言う事なのか分からない

「とりあえず他のメンバーが来るまで待て」

そう言われて道着に着替えて待つ

するとしばらくして他の部員も揃った

そして先生が皆を集める

「集まって貰ったのは他でも無い、緋龍の事だ」

「…え？俺？」

困惑する俺を置いて話しは進む

「正直言つて緋龍の実力が高すぎて俺ではこれ以上に鍛える事が出来ない…寧ろ能力を下げってしまうだろう」

他のメンバーも頷いている

……部長？そんなにヘッドバンみたいな勢いで頷かなくても良いんじゃないんですか



…?

「困り果てていた俺だが、昨日とある人から緋龍の訓練は任せて欲しいと言われてな…  
その人の話を聞いて検討し検討して更に検討した結果任せる事にした」

めっちゃ検討したなあ

すると体育館の扉が開き誰かが入ってきた

「あの人が緋龍の訓練を担当する…」

「時雨厳仁だ、よろしく」

と、師匠がやってきた

……………いや、ちよつと待つて!?

「アイエエ！師匠!?師匠ナンデ!?!」

突然の自体に驚愕する俺とよく分からない部員達、初めて見る俺の師匠に目を見開いている一夏

「何故だと言われてものお…部活の先生も困っておるだろうからとこの話を持ってきたんだ」

た、確かに…今までの師匠の修業（地獄）を乗り越えてきた俺からしたら部活の訓練じゃ……

でも大会に出るために入部は絶対条件だったから入らない選択は無かった

「つまり師匠は部活で少なくなつた修業時間も取れて、先生は自分より実力の高い師匠に俺を鍛えて貰うWin-Winな感じですね」

…（ ー ー ）フウ…

…俺、剣道部に入部した筈だよね…？

剣道部に入ったのに結局今までと変わらない生活ってことか…

まあ、強くなる為にも全然OKだけどな

部活終わりに自主トレしようかと考えてたし

「そんじゃ、行くぞ。荷物は全部持って来いよ」

そして荷物を全て持っていていきいっもの修業場所に付いて部活（？）を始めるのだった

因みに中学に上がってから修業のレベルが上がって今の俺でもかなりキツイ…

丸太の振り子みたいな奴を片手で受け止めたり

巨大岩を動かしたり

その岩を斬ろうとしたり

川に刺さつたほつそい棒の上でバランスとったり

師匠と組手したり

《気》を身体の中で巡回させて能力向上させたり

槍や弓矢や投擲術何かも新しく習い始めた

俺が思った事はただ一つ…

「俺が思った部活と違う…」(泣)

## 番外編 猫の恩返し的なもの

前回のあらすじ！

剣道部に入る事にした蓮仁と一夏！

するといきなり試合を申し込まれる!?

一夏は部員一人を倒し、部長に惜しくも敗れた！

そして蓮仁と部長の試合は蓮仁の圧勝で幕を閉じたのだった！

S i d e 蓮仁

オッス！オラ蓮仁！

最近暑くなってきたてきてもうすぐ春が終わるって感じる今日この頃な蓮仁だ！

今朝のノルマを達成した俺は珍しく時間に余裕があったので歩いて学校に向かって  
いる

あ、一夏もいるぞ？

このまま鈴の家にも行く予定だ

「にしても珍しいな、蓮が遅刻ギリギリじゃ無いなんて」

「俺だって成長してるってことだよ」

剣道部に入って……入ったって言って良いのか……？

ま、まあ師匠との新しい修業をしているから更に強くなっている

丸太を受け止めたりするのはヤバかった……

《気》を使ってるならまだしも素の状態を受け止めるんだもん

あんな物量の丸太が遠心力で更にヤバい状態で向かってくんだもん……

何回ぶっ飛ばされた事か……

モンハン3でアイルーにやらせてたのがここまでキツイとは……

ゴメンな……アイルー……

岩を動かすのは割と頑張ってるから少し動かせる

まあまだ岩を斬れないけどな

師匠は鉄も斬れてるからこの段階でアラバスタ編のゾロ位強いのは確定だ……

でも本気を出してる様には見えないしなあ……

あ、話が脱線した

あとは川にほっそい棒立ててその上でバランスとる修業

これは余裕ですねえ

暇だから釣りしてました

ついでに捌いたけど捌いてから焼けない事に気づいたんだよな…

結局修業してる間に師匠に食われたし…

ちくしよお…

あとは他の武器の修業だな

ぶっちゃけ他の武器要らなくね？って思ったがそんな事言ったら師匠に殺されそうだから黙って修業したけど…

槍は意外としつくりきたんだよな

師匠にも褒められたし

あとは弓矢だな

これが難しい…

GGOで銃を扱ってるけど弓だと中々当たらない

思った通りに行かないからかなり大変だ

これはひたすらに修業するしかない

次に投擲術だな

基本は石を投げる

小学校の時にキャッチボールしてたからこれは余裕だ

しかし他の投擲が難しい

ナイフとかクナイなどの刃物の投擲が厄介だ

相手に刺さるように真っ直ぐ投げたいのに回転してしまう

……てか、何でクナイ何て持つてるんだ？

前に貰った鉤縄もそうだけど…実は忍者の一族…？

……まさかな！

そんな事を考えてたら鈴の家に着いた

既に鈴は家から出ている

「おはよう！あら？珍しいじゃない！蓮が朝から居るなんて！」

朝から元気一杯だな

「おはよう鈴！今日は余裕があったからな！ゆっくり学校に行くのは久しぶりだ！」  
挨拶をする俺

そして一夏も挨拶をする

「おはよう鈴！何か今日は嬉しそうだな！」

一夏がそんな事を言うのと鈴が顔を真っ赤にして…

「んなつ!?そ、そんな事無いわよ!?アタシはいつも通りよ!?変な事言わないでよ!」

「……？そ、そうか……？」

いや……どう見てもテンパってんだろ

ま、そんな事より早く行きますか

「そういえば鈴は何部に入ったんだ？」

俺と一夏は剣道部に入ったが鈴の部活はまだ聞いて無かったんだよな

「アタシはラクロスよ」

「え？マクロス？」

「違うわよ!?ラクロスよ！ラ・ク・ロ・ス！」

なるほどなあ……ラクロスかあ……マクロス△じゃなくて……

「なあ一夏……ラクロスって何だっけ？」

「え？あ、アレだよ……あの……な？分かるだろ……？アレだよ……」

お前も分からんのかよ！

何だよアレだよって！

分かるだろ……？じゃねえよ！分かんねえよ!?

「はあ……本当にアンタ達はアホね……」

「まあ、一夏（蓮）には負けるけどな」



……あ? ( # ^ ω ^ )

「おう、一夏あ…今何だった…? あ”あ”ん?」

「そう言う蓮は何だったんだ? お”お”ん?」

メンチを切る俺と一夏は頭をぶつけあいながら威嚇しあう

「ちよ、ちよつと! やめなさいよ!」

これには流石の鈴も焦りだす

「ちつ…一夏、お前とはやっつてられねえよ」

「蓮、お前それ本気で言ってるのか?」

睨み合う俺達と顔を青ざめて慌てる鈴

そして俺は一夏に向かって言い放つ…

「本気だったらお前と登校してねえよ」

「デヘヘヘヘヘヘヘヘ!」

喧嘩するかと思つた? 残念! ネタでした!

ズッコケる鈴!

て、おい! お前スカートだろ!?! 気をつけろよ!!

「あ、アンタ達ねえ…本気で喧嘩するかと思つたじゃない!」

「ねえねえ！今どんな気持ち？喧嘩するかと思つたらネタだった時つてどんな気持ちな” つグバアツフ!?”」

「アンタウザいわよ！」

な、何て速さのパンチだ：

俺でも見逃しちゃうね：

あ、あと：クリティカルヒットしたから痛い：

鍛えてるのに痛い：（泣）

すると一夏は：

「鈴：：中学にもなつてクマさんパンツは無い” つグバアツフ!?”」

「アンタぶつ殺すわよ!?”」

な、何て（以下略）

てか一夏はちやつかりパンツ見たのかよ：

このラッキースケベ野郎！（建前）うらやますうイイ！（本音）

因みに俺もクマさんパンツ持つてるゾ！

ONE PIECEのバースロミュー・くまのだけどな！

一夏にもクリティカルヒットしたからか悶絶してやがる

しかも俺の時より威力有りそうだったしな

「まったく！ほら！早く行くわよ！」

ぶんすかしながらサツサと行ってしまった鈴を追いかけるのだった

顔をさすりながら歩いている俺と一夏

朝から酷い目にあつたぜ：

ふと前を見ると黒猫が歩いていた

カワイイ！

まだ小さいな

そしてカワイイ！

モフモフしたいなあゝ

何て考えてたら一夏が：

「お、おい！あの猫危ないぞ！」

一夏の声で黒猫を見ると道路を渡ろうとしていた

その横からトラックがきている！

トラックのドライバーは気付いていない！

トラックの存在に気付いた黒猫

しかし突然の事に身体が硬直してしまった

「っ!? マズイじゃない!」

鈴がカバンを放り投げてラクロスのスティックを持って走り出す

(…っ! お願ひ! 間に合って!)

あと少しでトラックと衝突する

もう駄目だ

誰しもが諦める

しかし

ヒュン!

「…っ!?!」

未だに走り続ける鈴の横を何かが高速で横切る

そしてそれは黒猫に巻き付いて引っ張られる

「んにゃ!?!」

「よつと! 大丈夫か? まあ、大丈夫だな」

高速で横切る何かは蓮の投げた鉤縄だった

それを随分違わずに黒猫に投げて巻き付けた

ポカーンとする鈴に一夏

「ゴメンな鈴……」モフモフ

そして突然謝られた鈴は困惑する

「え!? な、何で謝るのよ!？」

「いや、だって……リアル猫の恩返ししのワンシーンだったのに横取りしちやったから」モフ

モフ

それを聞いて鈴は……

「……やっぱアンタアホね」

呆れながらため息を吐く

「でも凄かったわよ……その……カ、カツコ良かったわよ……」

「お、サンキューな! 聞いたか一夏! カツコ良かったってよ!」モフモフ

「ん? 気のせいじゃ無いか?」(難聴)

「ふえっ!? そ、そうよ! 気のせいよ!!」

(何で聞こえてんのよ! 小声で言ったのに!)

そうかあ?

気のせいじゃ無いと思っただけだなあ

空耳か…

モフモフ

「それにしても完全に鉤縄を使いこなしてたな…」

「これぞ修業の成果だ！」モフモフ

「まったく…あんなに必死に走つたのに…まあ猫が無事だから良いわ」

「でもあの時の鈴カツコ良かったぞ！あ、あとこれカバンな」モフモフ

「あ、ありがとう…」

「気にすんな！」モフモフ

「……………」

……？何だ？急に二人して黙り込んで…

モフモフ

「あんた…さつきからずっと猫をモフモフしてるはね…」

「助けてからずっとモフモフしてたな…」

……は!?

ほ、本当だ…！

いつの間にかモフモフしていた…!!

モフモフ

駄目だ！止められない！止まらない！  
モフモフ

「そろそろ止めてくださいにや…  
ニヤニヤニヤーニヤーニヤー…」

「ニヤニヤ！」

「にやんですと!? 話を通じるにや!?  
ニヤニヤニヤ!? ニヤニヤニヤ!?」

「ハツハツハ！俺は猫語が理解出来るのだ！  
ニヤニヤニヤツ！ニヤニヤニヤツ！ニヤニヤニヤツ！」

「これは驚きだにやん…  
ニヤニヤニヤニヤニヤ…」

「実は俺も驚きにやん…何で理解出来るんだ?  
ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ？」

「助けていただきありがとうございますにや!  
ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ！」

「良いつて事よ!  
ニヤニヤニヤニヤ！」

「……蓮の奴何やってんだ…? なあ、鈴?」

「(\*、ω、\*)」

「(ニヤーニヤー言ってる蓮がカワイイわ…)

「……り、鈴さん?」

「はっ!? ほのぼのしてる場合じゃ無いわよ! そろそろ行かないと遅刻するわよ!」  
(ほのぼのしてたのは鈴だけなんだけどな…)

「ほら! あんたも行くわよ!」

と、鈴が俺に言ってくる

「よし! 行くぜ!」モフモフ

行くにや!  
「ニヤニヤ!」

黒猫をモフモフしながら走り出す俺!

しかし

「ちよつと待ちなさい!」

鈴に止められてしまった!

「何で連れて行くこうとしてるのよ!? 猫は置いて行きなさい!」

「は!? マジで言ってるのか!」モフモフ

「当たり前でしょ! 学校に猫なんて連れて行けないわよ!」

くっ…いし、しかし…

「それでも…それでもコイツをモフモフしていたんだ!」モフモフ

「わがまま言うんじゃないわよ! ほら! 行くわよ!」ガシッ



「あ”あ”あ”あ”あ”あ”猫オオオオオ!?”ズリズリ

「……………朝から騒がしいなあ…」テクテク

こうして学校に向かうのだった…

↳放課後↳

「うばあああ…」(ゝ ; ω ;ゝ)

放課後になつたがいまだに気分が落ちたままだ

嗚呼…猫ちゃん…

モフモフな猫ちゃん…

「うばあああ…」(ゝ ; ω ;ゝ)

そして机に突つ伏した

「蓮…いつまでそうやってるんだ?早く帰ろうぜ?」

「ほら!いつまでも落ち込んでないで立ち直りなさい!」

「一夏…鈴…」

二人してわざわざ待っててくれたのか…

……はあ……

いい加減諦めて帰るか

「…よし、帰ろうぜ」

そして俺達は帰路につく

「それにしても今日はずっとあの調子だったな…そんなに猫がショックだったのか？」

「ああ、箒が転校した時くらいショックだった…」

「いや、ショック受けすぎい!？」

うるせえ！俺の中ではそれくらいショックだったんだよ!!

トボトボ歩いていたら突然鈴が…

「れ、蓮！アレってもしかして…」

「…ん?…?!」 シュバツ

鈴が指差した先には…

あの黒猫がいた!

50メートルくらい離れていたが一瞬で距離を詰めた

「は、速過ぎて見えなかった!？」

この時、蓮仁は無意識の内に地面を一瞬で十回蹴って高速移動したのだ

蓮仁は新しく【剃<sup>ソル</sup>】を覚えた！

「うおおおおお!!猫ちやあああん!!会いたかったああああ!!」ガシツ!モフモフ!スリ  
スリ!

「んにやあああああ!!」

抱き上げるとモフモフしながらスリスリもする

顔中が毛だらけになってるけど気にしない!

そして一夏と鈴が追い付いてきた

「な、何だよさっきの!全然見えなかったぞ!」

「もう人間辞めてるわね…!」

「酷い!?ただでさえ感想に『ニンゲンヤメマスカ?』とか来てるのに!追い打ちかけるな

よ!」モフモフ

「ちよつと!あんたもメタ発言してんじゃない!」

「何か最近増えてきたな…あと作者…俺のセリフの後ろに何つけてんだよ!」↑(バナ  
ジ)



マタタビ

猫じやし

謎の虫の死骸

うーん、この

なんだろうこのラインナップは？

マタタビと猫じやしはまだわかるよ？

猫だもんわかるよ？

でもね…

最後のこの虫何??

何かコオロギっぽいけど本当に何？

どっから捕まえてきたの？

ほら見ろよ…俺はコオロギとか食えるくらいには大丈夫↑（異常）だけど

鈴が凄く後退ってるよ？

あ、一夏は平気か



「必ず両親を説得してみせる！例え指の1, 2本犠牲にしたとしても!!」

「それはやりすぎだ!」

こうして猫を連れて家に向かうのだった

家に着いた俺達…

一夏と鈴には見届け人になって貰う

「ただいま母さん!話がある!」

扉をスパアーン!と開けてリビングに入る

「この猫家で飼いたいです!お願いしまああああす!!」

大ジャンプキリモミ大回転スライディング土下座

俺の最強の土下座技だ

この先の説得の為に俺の本気を見せ『良いわよ』…ええ?

「え?」

「だから、良いわよ」

……え？

「「うそん？」」

簡単に決まり過ぎて何かなあ…

「ち、ちよつと待つてください！こんな簡単に決めて良いんですか!？」

流石一夏!!

俺達の聞きたいことを聞いてくれる！

そこに痺れる憧れるう！

「全然良いわよ！それに…私も動物大好きだから！」

「…この親にして、この子ありつてことね…」

そういう事で飼う事になった！

「やったぜ！成し遂げたぜ!!」

さて！なら名前を考えないとな！

「それでは…これより名前決め大会を開催します！」

「「いえーい！」」



皆で案を出しあおう！

因みに黒猫は♂だぞ！  
オス

一夏は…

「真つ黒クロスケ」

……うーん

何かなあ…

「無いな」

「無いわね」

「ニヤニヤ」  
無<sup>い</sup>に<sup>や</sup>

一夏の案は却下で

続いて鈴は…

「ヤマト」

……うーん

「これは…クロネコヤマトかな…？」

「宅急便だな…」

「微妙だにや…  
ニヤーニヤ…」

鈴の案も却下で

続いて混ざりたくなつた母さんは…

「ダークネス・シャドウ・『『却下で』』…ブーブー！」

コラそこ！ブーイングするな！

母さんのネーミングセンスがヤバすぎてびっくりした…

何だよダークネスとかシャドウとか…

中二病かよ…

確かに母さんは見た目が若いからなあ…

一緒に出かけて『蓮仁の姉ちゃんか？』って言われた時の複雑な気持ち…

千冬さんより若く見えてしまう…！

…っ!? ヒエツ…隣の家から殺気があ…

で、でもいくら若く見えるからって中二病はなあ…

俺は早くも卒業したのに…



こうして新しく家族の増えた緋龍家だった…

「やっぱり母さんのダークネス・シャドウ・『』却下で！』』…せめて最後まで言わせてほしかったわ…」

原作前第18話 夏だ!山だ!修業だあああ!

前回のあらすじ!

久しぶりに一夏と鈴と登校した蓮仁!

その途中に車に引かれそうになった黒猫を助けた!

帰り道でその猫から御礼がしたいと言われて飼う事に!?

黒丸と名付けて緋龍家の新たな家族が増えたのだった!

S i d e 蓮仁

今年も夏休みがやって来たあああ!!

そして当然の様に修業で山に来ましたあああ!!

な、夏休みがあああ!?

って思っていた時期が俺にもありましたよ…

しかし！今年の修業は夏休み全てを修業に費やす訳では無い！

去年のは俺に《気》を覚えさせる為にした事！今年はまだ覚えてるから必要以上の修業は無い！

つまり！今年は一夏と鈴と！あと弾と数馬とも遊べるぜえええ！

おかげで俺のモチベーションが上がりまくりだぜ！

これで修業も頑張れる！

そんな訳で修業にレッツ！ゴー！

と、言う訳で去年の夏休みにサバイバルした山にやって来た！

去年は修業場所に向かうのに4時間もかかったけど、山歩きに慣れ、《気》を覚えた今の俺なら1時間ちよいでついた

師匠が先導してくれたけど：

速すぎて追いかけるの大変だった：

まったくあわせてくれない：

どうやら既に修業は始まつてる様だ

そして拠点にしていた場所に到着!

……懐かしいなあ

まるで昨日の事のように思い出す

師匠に置き去りにされて……

サバイバル生活をして……

野生動物と戦って……

……うん

小学生にさせる内容じゃ無いね

あの夏休みの日記提出した後凄く大変だった……

先生から母さんと一緒に呼び出されたり

PTAからも児童虐待だの何だのと……

母さんが上手いことやってくれたがな

それに俺も頑張ったよ

『今の女尊男☒になりつつある世の中で生きていく為にやった事です!最後に頼れるのは自分の力です!助けを求めるより自分で何とかする為に俺は鍛えて貰ったんです』

！  
』

とそれっぽい事を言っただけ…

まあ、確かに男性の生きづらい世の中になってしまったからな  
変な事件に巻き込まれるかもしれないし

…：なんだろう…：凄く巻き込まれそうな気がする

…まあ良いや

さて…：修業場も懐かしいが…：あいつ等がないな？

呼んでみるか

息を吸い込み遠吠えをする

「ウオオオオオオオオオオオン!!」

ウオオオオオオオオオオオン…

ウオオオオオオオオオオン…

ウオオオオオオオオオン…



ウオオオオオオン…

ウオオオオオン…

俺の放った遠吠えが山中に響き渡る

すると…

『ウオオオオオオオオオン!!』

…!返事が来た!

そして俺は高速でこちらに向かう複数の反応を感知した

そして

「ウオン!」

最初に飛び出して来たのは刀を咥えた灰色の犬

そしてそれに続いて9匹の犬達も現れた

「はははっ!シフ!皆!久しぶりだな!元気にしてたか!」

「ウオン!」

うん!元気いっぱいって感じだな!

元気そうで本当に良かった



「話せる訳無いだろ」

…ええ

つまり《気》は関係無い?

ますます謎が深まったな…

…:うーん? 考えても分からんし諦めて受け入れよう

さて! 修業だ!

でも何をするんだろう?

「またサバイバルをするんですか?」

「今度は俺が直接鍛えながらのサバイバルだ」

なるほど…

「あとはコイツらにも手伝って貰おう」

シフ達を見てそう言うのと師匠はニヤリと笑う

「お主は気づいておるか? コイツら《気》を纏っておる」

「…っ!? ほ、本当だ!! でも何で!？」

「大方アイツが鍛えたのだろう」

師匠の視線の先には隻眼の熊がいた

「あああああああ!?!クマさん!久しぶり!」

そう、この熊こそ一年前に激闘を繰り広げたクマさんである!

因みに敬意を込めてクマさんと読んでいるゾ!

「グアツ!」・?

相変わらず顔がかわいいいっすね…

とりあえず抱きついておく

うーん、ちよつとゴワゴワしてるけどこれはこれで…

モフモフパラダイスだな此処は

前は生きるのに必死でそこまで余裕が無かったからな

「それに…あの場所にも連れて行つたな?」

あの場所?

一体何の話だ?

師匠に促されクマさんにくつついていく

あ、誤字じゃないよ?くつつくつてよりはしがみつくつて感じだけどな

さして、出発!

しばらく歩いていたら開けた場所にたどり着いた

そしてあまりの光景に驚いた

とても神秘的で《気》が満ち溢れている

泉があり、中央から水が湧き出ている

木々の隙間から光が入り込み水に反射してコバルトブルーに輝いている

まるで御伽話にでも出てきそうな場所だ

妖精でもいそうだなあ

しばらく見惚れていたが師匠の声で我に帰る

「いつまで呆けておる」

「…っ!?!し、師匠!何ですかこの場所は!?!」

「今から説明するから落ち着け」

それから師匠の説明を聞いた

どうやら《気》が満ち溢れているこの空間は神聖な場所として時雨家で代々守つて来

た場所、修業にも使われている様だ

更にあのクマさんはこの場所をテリトリーにして守っていたらしい  
いわゆる守護者のなのだ

それで満ち溢れる《気》の出元はあの水が湧き出ている所らしい

い  
それでシフ達はこの水を飲んでクマさんに鍛えて貰って《気》を使える様にしたらしい

…何だこのファンタジー設定は（困惑）

作者はもつと設定考えろガバガバ設定すぎるぞ（憤怒）

…：うん？俺もこの水飲んで師匠に鍛えて貰ったら良かったんじゃない？

サバイバルする必要無かったか？

と、師匠に聞いてみたら…

「バカモン！」

と言って拳骨してきた

そして俺は意識を手放したのだった…

バシヤ！

……!?

「ぶはっ!?何!?何事!?!」

「何を気絶しておる」

……おっと、気絶すら許してはくれないらしい……水をかけられた

激オコプンブン丸してらっしやる

「何の苦勞も無しに手にした力なんぞまったくの価値は無い!樂をしようとするな!常に険しき道を選んで進め!」

「は、はい!」

やっぱり師匠はスパルタだ……

でも確かに樂をしようと考えていたのは甘い考えだった……

……常に険しき道を選んで進めか……

妥協せずに自分に厳しくするって事か

よし!甘い考えは捨ててやる!

今までだって地獄の修業を乗り越えてきたんだ!

これから先にどんな地獄が待ち受けていたって何度でも乗り越えてやる!

「よし、では修業を開始する。まずは脱げ」

「……………あ？」

俺は今ですね…

ふんどし一丁になっています

最初は脱げと言われて身の危険を感じたけどな…

師匠が青いツナギを着たイイオトコに見えてしまいケツをおさえて後退ってしまった

しかし滝行をするからだっただけらしいゾ！

まったく紛らわしいな…

そんな訳で師匠の用意したふんどしに着替えた

そんですぐ近くの滝まで来たんだけど…

威力がヤバい（白目）

なんですか？アレはちよつと威力も水量もヤバいと思う

多分一瞬で呑み込まれて流されるよ



これ俺を殺しにかかっている?

死にたく無いです(切実)

しかもだよ…

「あとは滝に打たれながらコレを読め」

と言つてアクリル加工された紙を渡してきた

般若心経が書かれていますね

え? コレを読見ながらあの滝に打たれると?

「し、師匠…流石にあの滝に生身は無理何で《気》は使つても良いですか?」

これで駄目だったら今日中に死ぬ…

皆様ご愛読ありがとうございます! たつてなつちやう…

「寧ろ使え。《気》の持続力を鍛える為の修業だ」

良かったあああああああ!?

マジで死ぬかと思つたああああああ!!

そんな訳で滝行スタート!

結果から言おう：

滝の威力が強すぎて《気》を使った身体強化でも30分位しかもたなかった  
あと般若心経が水で読めないという問題点もある

しかもだ：般若心経読みながら《気》を維持するのめっちゃ難しい  
多分身体強化だけなら1時間位粘れるかもしれないけど

とりあえず今日は終わりだ

あと般若心経は早めに覚えなくちゃ（使命感）

「師匠：滝行で般若心経を読む意味って何ですか？」

しかし：

「直ぐに答えを求めると、自分で考えろ。それもまた修業だ」

何か奥が深いなあ

新たな課題も出されてしまった：

続いては時雨流剣術の技を教わる!

中学になったら教えると言われていたがようやくか!

とりあえず師匠に色々見せて貰ったけど:

鳥肌がヤバイ!

やっぱり必殺技とか憧れるよな!

要約教えて貰えるけど中々難しそうだ:

この期間中に何個身につける事が出来るのか:

そんな訳で修業スタート!

「時雨流・穿ち!」

突きを放ち木を貫通させる

しかし

「ただの突きだな」

ですよー

自分でもそう思った

ここで技の説明だ！

【時雨流・穿ち】

突き技で、身体を捻りながら突く事により体重が乗って威力が上がり、更に刀の回転で貫通力も上がる

初級技だけど普通の人じゃ扱えないだろうな

……うん？ 今ただの突きで木を貫通させた俺も普通じゃ無いって…？

ハハハッ！ 何を言ってるんだよ！

俺はいたって普通の中学生だよ？（現実逃避）

ただ身体を捻りながら突く訳では無いんだよな

今まで身体を散々柔らかくしてきたからもつと柔軟な捻りが必要だ

身体自体は完全に柔らかくなくなったし、関節も外せる様になったけど…中々難しい

……うん？ 身体全体の関節を外せるのはやっぱり普通じゃ無いって…？

ハハハッ！ 何を言ってるんだよ！

あんまり調子に乗った事言うと穿ちの練習台になってもらうゾ？（ハイライトオフ）

……さて修業の続きだ！

身体を捻りながら突く…捻りながら…

「時雨流・穿ち!」

……うん

「全然駄目だったぞ」

ですよねー

次の修業はシフ達とクマさんとの大乱闘スマッシュブラザーズだゾ!!

ハハハッ!全員俺を狙ってくるからヤバイ(白目)

何か初日から既に死にかけてるんだけど

一週間もつかな…?

そんな訳で修業開始!

「ガールルル!!」

「うお!? シフが殺しにかかってるぞ!」

啞えた刀を俺に向けて斬りかかってくる

しかも刀に《気》を纏わせて威力上げてやがる!?

『ガルルル!!』

他の奴らも来やがった!

全員《気》が使えるから格段に強くなってる!?

しかも今更だけど体格も一回りデカイ!

スピード特化のシフ達…

厄介なチームワークでヒット&アウェイに徹するものの、確実に急所を狙ってくる

殺意が高すぎる(困惑)

「グウオオオツ!!」

「あつぶな!」

腕を横薙に振るってくるクマさん

しゃがんで避けたけど威力が凄まじい

だつて岩を砕いたんだもん

こっちは攻撃力重視か：確実に前より強くなってる

シフ達のトリツキいな連携に合わせて強力な一撃を叩き込んでくる

全て躲したり受け流して、スキを見つけて反撃する  
しかし当たる前に他の奴らが妨害してきやがる!  
クソ!一対一なら勝てるが一対多だと全然勝てない!  
これはかなり苦戦しそうだ

結局、互いに一撃も入れられ無かったので引き分けになった

続いての修業は:  
師匠との稽古だ!  
しかも真剣でな!  
うん、完全に殺しにきてますね  
師匠いわく痛み慣れるためだそうです  
俺さ…泣いても良いかな?

あ、駄目ですか…はい、頑張ります…

きつと今の俺の顔は死地に向かう兵士の様な顔なんだろうな…

「さて、始めるか。…つと、その前にホレ」

そう言つて刀を渡してきた

何で？もう持つてるのに…？

予備かな？

「お主二刀流の練習しとるだろう？」

「ギクツ!？」

な、何でバレたの!？」

こつそり練習してきたのに！

わざわざ左手の刀の扱いも上達させる為に利き手並みに左手を扱える様にしたのに

！

「時雨流にも二刀流技がある。技は早いが二刀流の指導は開始するぞ」

…!?!二刀流もあるの!？」

凄いな！



やっぱり二刀流とか憧れるからさ!

「まあ、流石に三刀流は無いがな」

「ギギクツ!?!」

そ、そつちもバレてたの!?

ゾロに憧れてこつそり練習してきたのに!?

わざわざ顎の力を鍛える為に岩を吊るした紐を啜えて修業してたのに!

「ほれ、油断するな」

いきなり斬りかかってくる師匠

しかし

「別に油断はしてないですよー」

それを受け流して斬りかかる

が、あっさり避けられる

それを追って追撃の二太刀目、三太刀目を放つ

やはり全て避けられる

そこで一度距離を離す

「良いぞ。常に警戒し奇襲を防ぎ、一手、二手先の攻撃も考えてある。そして引き際を見

誤らない…ふっ…中々成長しておるな」

確かに前よりかなり強くなってるけどまだ師匠に一撃どころかカスリ傷さえ付けた事が無いんだよなあ…

そこからは息付く暇すら無いほどの打ち合いが始まる

師匠の攻撃を躲し、いなし、受け流す

二本の刀を使い攻撃と防御を同時に行う

しかし師匠には届かない

相手は刀一本なのに俺より攻撃の回数が多い

まるで一太刀で十回攻撃されているようだ

「思ったよりまともに扱えておるな…誰かに習ったのか？」

「漫画の力は偉大って事ですよっ！」

喋りながらも永遠と斬り結ぶ

結局かすり傷すら与えられずに終わった

因みに俺は身体全体が傷だらけで真っ赤になってるよ

この傷どうすんの？

またPTAが騒いじゃうじゃないか（憤怒）

さて、本日の修業は終了!

あの泉に戻ってきました!

《気》で止血程度に治癒力を上げたけどもう駄目だ:

《気》も体力も底を尽きた:

ただいま血を落としてへばってます

そうしてたら師匠に首根っこを掴まれて泉に投げ込まれブクブクブクブクツツ:

「つて何をするんですかあああああつ!」バシヤアツ!

何て鬼畜な師匠なんだ!

普通に投げ込まれたゾ!?

「その泉に浸かって《気》を吸収しながら傷を回復しろ」

だからつて投げ込ま無いで!?

ちくしょお:

傷を回復させてから飯準備を開始した

修業中は俺が飯を作る

修業してる間にシフ達が無サギを捕まえてきたので血抜きして内臓と皮を剥ぐ  
水で洗い、腹の中に塩を塗って香草を詰め込んで葉っぱに包んで土に埋める  
その真上で火をお越して蒸し焼きにする

今回は鍋とある程度の調味料を持参した

鍋に湯を沸かしてる間にさつき釣ってきたイワナを捌く

3枚に卸して骨を鍋に入れて出汁をとる

身の方は粘りが出るまで叩く

ここで二刀流の成果が出て高速でミンチにしていく

小麦粉を加えて団子形にしてツミレにする

鍋から骨を取り出してツミレを入れて、山菜も入れる

灰汁を取って味噌を入れて溶かす

あとは残ったイワナを串に刺して塩をかけて塩焼きにする

☆今晚のご飯☆

ウサギの香草蒸し焼き

イワナのツミレと山菜の味噌汁  
イワナの塩焼き

「完成!」

俺も一夏の(地獄の)料理教室のおかげで料理の腕が上達したなあ…  
うっ…思いだしたら頭痛が…!

すると師匠が

「驚いたな…まさかお主がここまで料理上手だとは…」

びつくりした師匠の顔何て久々に見たぜ!

「いただきます」

……うん!美味しい!

ウサギ肉も1年ぶりだけど美味しく調理できた

ツミレ汁も出汁が出るし、山菜も入ってるから栄養バランスも良い

塩焼きは新鮮な魚を使ったから素材の良さが出てるし美味しい

師匠を見ると微笑みながら

「誰かの作った料理なんぞ久々に食ったな…実に美味しい！」

こうして初日が終わった

それから一週間はあつという間に過ぎていった

滝行では《気》を意識的には無く、自然に扱える様に修業できた

わかりやすく言うと、手や足を使うのに意識しないみたいに関える様になった…と言いたいけど、まだ少し意識してしまうからまだまだだな

あとは持久力も伸びたな

あとは技だが、「時雨流・穿ち」とその他にも一つ覚えられた

他の技はやり方は教わったからコツコツ覚えていこう

あとはシフ達との大乱闘スマッシュユブラザーズだな

全員は無理だったけど大分倒せたから俺の勝ちだ！

しかしまだクマさんには勝てなかったよ…

あとは二刀流だな

これは漫画を参考にした動きと時雨流の動きを合わせながら師匠に直されてやっと型になってきた

三刀流は自分で勝手に覚えろだそうだけどな

あと師匠に料理を褒められたし中々充実した一週間だった!

……だったけど

シフ達とクマさんとお別れか…

またあえるけどやっぱり寂しいな…

「じゃあなシフ…皆を任せただぞ」

「ウオン!」

「クマさんも次こそは勝つからな!」

「グアツ!」 ・ ? ・

荷物を持って師匠のもとに向かう

そして振り返って

「元気でなーっ！」

こうして長いようで短い修業は終わった

さて、いよいよ夏休みだ！

既に夏休みだけど、俺の夏休みはこれから始まるんだ！

ウキウキしながら帰路につくのだった



原作前第19話 夏だ!青春だ!エンジヨイだあああ!

前回のあらすじ!

ふたたびあの山に修業に来た蓮仁!

更に強くなったシフ達とクマさん!

新たな修業で己を鍛えていく!

そして一週間の修業を終えて帰るのだった…

S i d e 蓮仁

夏休み…それは子供達にとって夢と希望に満ち溢れたものである

だが楽しい事ばかりでは無い

そう…膨大な量の宿題があるのだ!!

しかし!

俺は!

「ヴアツハハハハハ！終わったあああ!!」

最初の一週間ちよつとで全て終わらせた！

修業中もコツコツと進めていったかいたがあつた：

これで心置きなく遊べるってわけだ！

さて、ここからは夏休みのエンジョイをダイジエストでお送りするぞ

く海に行こう！く

「「「海だああああ!!」」」

俺達は海に来ています！

泳ぐ前の準備運動を忘れずに！

「ストツプ水難事故！」（・▽・）bグツ！

「誰に言ってるんだよ…」

そんなの画面の向こうの皆にだよ！

「これが俺の準備運動だ！」グニヤ

関節を全て外して身体全体をほぐす

その姿はまるで軟体生物の様だ

「キツモ…」

おつふ…鈴さんの言葉がクリティカルヒットした…

「そ、それより…何かアタシに言う事は無いの?」チラツチラツ

めつつちやチラ見してくんな…

わかっているよ水着を褒められたいんだろお?

母さんに『女性の服装は褒めるべし!』

と教わったからな

「水着似合…『鈴!その水着はお前には早く無いか?』…だ、弾?」

コイツ…何て事を…!

「……弾…それはどういう事かしら…?」ゴゴゴゴ

「そりや、その水着を着るには胸が小さ『テメエの血は何色だああああ!』ぐふあつ!」  
だ、弾の奴…あの禁句を言いやがった…

鈴の飛び膝蹴りを喰らった弾は砂に犬神家したとき

「よし！遊ぶぞー！」

「「おう！」」

「お、おう……」ボロ

一名程重症だが、まあインガオホーだな

まずはやつぱり競泳だな！

掛け声は保護者役で来てくれた千冬さんだ

あと母さんも来てるぞ

「位置に着いて……ヨォーイ、始め！」

一斉に泳ぎ出すが……

「ウオオオオオ！」

俺が一番速いな

重りを付けながら泳いで鍛えたからな（白目）……余裕だぜ

あともはや泳いでるのか？

何か水を蹴って進んでる感じがする……

蓮仁は新しく海中散歩マリソウウォークを覚えた!

結果発表

一位 蓮仁

二位 一夏

三位 鈴

四位 数馬

五位 弾

一夏は運動神経抜群だからかなり速かったな

鈴も運動得意だし妥当な順位だ

あとは数馬と弾だけ…

数馬は運動はあんまり得意じゃ無いから遅かったな

弾はさっきのダメーじでかなり遅れていた…

すると千冬さんがこっちに来て

「しばらく見ない内にまた強くなったな」

「あ、分かりますか? 夏休み最初の一週間は地獄だったので…ハハハッ!」(白目)

「そ、そうか…」

(完全に目がヤバいでは無いか! いったい何があった!?)  
白目で見えなかつたけど絶対ドン引きされたな

「では、私と競泳で勝負してみないか?」

ほほう?

千冬さん相手に勝負何て昔は考えもしなかつたけど…

今ならイケる!

手合わせすら最後にしたのは小学5年生の時だ

今の人間辞めかけてる俺ならイケる!

……遂に自分で人外化を認めてしまった… (遠い目)

そんな訳で勝負開始!

「それでは始まりました。緋龍蓮仁選手と織斑千冬選手による競泳対決です。実況はわたくし五反田弾と…」

「解説の御手洗数馬と…」

「同じく解説の織斑一夏です」

「そして開始の合図を務めますは…」

「合図担当の風鈴音です……つて何これ…」

何か始まつてるなあ…

身体をほぐしながら一夏達を眺める

そして位置についた

「それでは…ヨイ…始め!」

そして一気に砂浜を走り出し、海に飛び込む俺と千冬さん

弾「ああつと!速い!20メートルはあつた距離を一瞬で走り海に飛び込んだ!」

数馬「二人共姿がブレる程の速度でしたね」

一夏「千冬姉は分からないけど、蓮なら更なる加速も可能でしょう」

弾「解説の一夏さん、それはどういう事でしょう?」

一夏「蓮は既に目で追えない程の速度を出せる筈です…そう、アレはまさしく六式の

一つ【荊】…!」

数馬「それを使わないのはおそらく泳ぐ時の為に脚の負担を減らしたかったんでしょ

うね」

弾「なるほど…おつと!?既に二人共折り返し地点に到着している!速い!開始から一分もたっていないのにもうゴール目前だ!」

一夏「もう人間の領域を超えていますね」

数馬「お前から人間じゃねえ!」(タケシ)

弾「唐突にネタが入りましたが…どちらが先にゴールするのか!」

そして、勝者は…:

弾「ど、同時!同時だああ!!二人同時にゴー…ール!!」

数馬「サツカーのノリですな」

一夏「実に良い泳ぎでした」

こうして蓮仁VS千冬の競泳は引き分けに終わるのだった

それからビーチバレーをしたり(蓮仁VS千冬の闘いもありました)ビーチフラッグをしたり(蓮仁VS千冬の闘いもありました)

砂の城作りをしたり(蓮仁VS千冬の闘いetc)釣りをしたり(蓮仁VS千冬etc)

c)



そんなこんなで海を満喫できました!

……うん、ほとんど千冬さんと対決してたなあ……

~~~~~

〜祭りに行こう!〜

「「「祭りだああああ!!」」」

今日は夏祭りに来たぞ!

前は篠ノ之神社の祭りがあったけど、今はもう無いからなあ……  
だから他の祭りに来ています!

さて、祭り何て去年は行けなかったからな

めっちゃ楽しみだ!

軍資金も十分にあるな!

GGOのリアルマネートレードは最高だな

プロなら月に20万稼ぐらしいけど、俺はログイン時間が短めだから精々5万が限界

だな

それでも祭りを楽しむには十分な金額だ！

あまりの楽しみに高速反復横飛びが止められない、止まらないいいいい！！

「かなり浮かれてるわね…」

そりゃそうだ、去年の分も楽しまなきや損だ！

「そ、それより…何かアタシに言う事は無いの？」 チラツチラツ

わかってるよ

浴衣を褒められたいんだろお？

母さんに『女性の服装は褒めるべし！』

と教わったからな

……？この前も同じ会話をしたような…？

「浴衣似合ってるゾ！」

すると弾が…

「確かに似合ってる…似合ってるけど……」

「……弾…似合ってるけど…何よ…？」 ゴゴゴゴ

「やっぱり胸が寂し『テメエに今日を生きる資格はねえええええ！』ぶうつはああつ！？」

だ、弾の奴…デジャブってやがる…

アイツわざとやって無い?

弾は実はドM説が出てきたゾ!

キリモミ回転しながら顔面着地をキメた弾…

あと鈴が北斗の拳になりかけてる…

「よし、遊ぶぞー!」

「「おう!」」

「お、おう…」ボロ

ここまで完全にデジャブだな

さて、どこからいこうか!

### 輪投げ屋

「投擲術に比べたら余裕つしよ」

景品総取りしてやったぜ

店のオツチャンが真っ白に燃え尽きちまつたけどな

「ちよ、ちよつと！流石にやりすぎよ!?」

「そうだぞ」

「良いぞもつとやれ！」

「止めなさい！」

鈴がオカンになつとる

## 射的屋

「おう、そこの兄ちゃん！次はウチの射的をやらんか？目玉商品の巨大ぬいぐるみは手強いぞ？」

「ほほう？腕が鳴るな！」

金を払いコルク銃を手取る

玉を込めて狙いをさだめる

「よく片目を閉じる奴がいるけどアレは駄目だ……しつかり両目を開けないと少し狙いがブレるからな」

一夏「何か語り始めたぞ……」

数馬「画風がゴルゴ13になってるよ?」

鈴「本気になってるわね…」

弾「あ、そこのお姉さん一緒に射的でもどうです?」

狙いはぬいぐるみの眉間

狙いを定めて引き金を引く

コルクはすいぶん違わず眉間にあたる

しかし…

「……ふっ、残念だったな兄ちゃん」

倒すにはいたらなかった

「オッチャン…まだ勝負は始まったばかりだぜ?」

そしてコルクをつめて再び構える

しかし先程とは構えが違う

銃を右手にもち、左手を前に出して右手を後ろに引く

その構えは…

一夏「……!?あ、あの構えは…間違いない!」

鈴「あの構えがわかるの!」

一夏「あの構えはまるで…新選組3番隊長…斎藤一の技…牙突の構えに酷似している…!」つまりアレは突き技の構え…!

そう、その構えは夏休み最初の一週間の修業にて覚えた突き技の構えだった

一夏の言葉に物珍しさから集まっていた野次馬達がざわめきだす

射的に突き技の構えをとる謎の行動…

その場の誰しもが固唾を飲んで蓮仁を見守る

そして遂に蓮仁が動き出す

その時、この光景を見た者は後にこう語る

—————

彼はコルク銃を持っていたが、俺にはあれがコルク銃には見えなかった…そう、アレはまるで…

刀の様だった

意識を集中させて狙いをさだめる

そして

「《時雨流・穿ち》！」

銃を捻りながら前に突き出し引き金を引く

突きの勢いと身体全体を捻りながらの回転が合わさりコルクは凄まじい速度と威力でぬいぐるみに当たる

狙いとは少しズレたがぬいぐるみは後方に吹き飛んでいく

顎が外れる程に口を開けるオツチャン

騒ぎ出す周りの野次馬

腕を組んで頷く一夏

ヤレヤレと頭を振る鈴

目を輝かせる数馬

ナンパに失敗して頬に紅葉マークのついた弾

そして俺は…

フッ

と、銃口に息を吹きかけて…

「狙った獲物は…逃さない…！」（ー、ドー）キリッ

そう言うのと周りの野次馬達から歓声上がる

そしてぬいぐるみを受け取って射的屋を後にするのだった…

人混みから抜け出して要約一息つけた俺達

そして皆の視線が俺の持つてるぬいぐるみに集まる

熊のぬいぐるみで左目に傷のデザインがある

要するにあの山のクマさんみたいな感じのぬいぐるみだ

そしてデカイ

1メートル50センチくらいデカイ

ほぼ鈴と同じサイズだ

…どうしよう…



祭りの初っ端からこんなデカイの取っちまった

コレをどうするか考えていたら視線を感じ振り返る

すると目を輝かせる鈴がいた

……スツ（右に移動）

スツ（付いてくる）

……スツ（左に移動）

スツ（付いてくる）

……

「……欲しいのか?」

「っ!?べ、べべ別に!?ほ、欲しい何てこれっぽちも思って何か無いわよお!?勘違いしないでよねえええ!?!」

めっちや動揺してるじゃないか（困惑）

そんなに欲しいのか

よし、ここは……

「あー、困ったなー……ぬいぐるみは別に要らないからなー?誰か貰ってくれないかなー?チラッ……このままじゃメルカリに出品だなーチラッチラッ……本当に誰か貰ってくれ

ないかなー」(口)「ジーツ」

(「めちやくちや棒読みなうえに、すつごいチラ見してる!」)

「…!そ、そう!ならしよすがないから…本當にしよすがないからアタシが貰つてあげるわ!」

「おつ、そうだな」

鈴の家も近いしこのまま置いてくるか

じゃけん鈴の家行きましようね

「そ、その…ありがとう…」

「どういたしまして」

この後滅茶苦茶屋台で買食いした

~~~~~

〜肝試しに行こう!〜

「嫌だあああああ!」

俺達は今肝試しにきている

いつものメンバーで突然『花火しようぜ!』と言われてノコノコ付いていったら心霊スポットでした

コイツら…

普通に誘っても来ないからって花火で俺を釣りやがった…

俺の純情な心をもてあそびやがった…

ちくしよお…(泣)

ここはそれなりに有名な心霊スポットの廃旅館

テレビ番組何かでも出てたらしい↑(恐怖で気絶してたので未視聴)

そしてだ…

ここで修業の成果が仇となった!

俺の習った《気》!纏わせたり、気配を感じたりできる

そしてだ…霊《気》…コレも《気》です

つまり靈感があるって事だ

そして……見えました(泣)

廃旅館の窓からこちらを覗く無数の霊

気絶したいけど此処で気絶したらヤバい

だから皆を説得している

「皆帰ろうぜ!? 此処は本当にヤバい場所だゾ! 行きたくないでござる!!」

必死に説得するが……

「何言ってるんだよ? 幽霊何ている訳無いだろ?」

「そうよ、ほら! 大丈夫だから一緒に行きましょ?」

「確かに怖いけど……皆一緒なら大丈夫だよ」

と、弾、鈴、数馬の順に言う

そして俺は……

「嫌だ嫌だ嫌だああ! 行きたくないいいいい!!」

滅茶苦茶駄々をこねてる

バク転して高速反復横飛びして倒立前転してブレイクダンスしてコサックダンスしながら駄々をこねる

しかし……

「なら蓮は此処で待つてな。俺達で行つてくるから」

無情にも3人は行つてしまった……

「……っ!い、一夏……」

残つた一夏は……

「……蓮、此処がヤバイのは信じるよ……でもあの3人が心配だから……俺も行くよ」  
そして一夏も向かつて行つてしまった……

「……………一夏」

クソツ!止められなかった!

俺も追いかけるべきだが足が竦んでしまう

クソツ!情けない!

あれだけ修業したのに!

怖くてまともに動けないなんて!

「ちくしょおおおおお!!」

……………

あれからどれくらい経つただろうか

まだ数分な気もするし、もう何時間も経った気もする  
すると…

『うああああああああああつ!?』

「…っ！悲鳴?!皆あああああああ」

俺は走り出した

恐怖はある

でもそれ以上に皆を失う事が怖くてたまらない

近くに落ちてた木の棒を掴み廃旅館に入る

気配を全力で探り皆を探す

何処だ！何処にいるんだ!?

廃旅館中に立ち込める霊達の気配が邪魔をする！

速くしないと…!

…落ち着け…慌てるな…集中しろ…!

…!見つけた!

そこから全力で走り出す

邪魔な壁を破壊しながら皆の元に一直線に走る

「うおおおおおおおお!!」

この壁で最後!

壁を切り裂きながら飛び込む

そこには:

無数の霊達に囲まれる一夏達がいた

壁を破壊しながら入って来た俺を見て驚いた顔をする

「「蓮!!」」

手に持つ棒に《気》を纏わせる

「邪魔だあああ! 其処おおお退けええええ!!」

群がる霊達を切り裂く

『アアアアアアアツ!』

霊達が怯んで下がりだす

一夏達の前に立ち構える

「れ、蓮……」

「危ないから皆は下がってろ」

……修業であの泉に入って《気》を吸収してから更に周りの《気》に敏感になった  
そして霊も見える様になってしまった……

最初の遭遇は山での修業中

それは突如俺の前に現れた

それは身体中に血を流し、見るも無残な女性の姿だった……

俺は恐れ慄き腰を抜かしてしまった

すると突然師匠が現れてそいつを消した

『し、師匠……今のはいったい何ですか……』

『……昔、この山に死体を遺棄しようとした輩がおった……そいつを俺が捕まえて警察



に引き渡した時に聞いたが……その輩は女を惨殺しておつたらしい……その時の女の霊だろう』

嗚呼……なんて事だ……身体の震えが止まらない

『……お前には先に別の技を覚えてもらおう』

そして穿ちとは別の技を覚えさせられた……

『恐れるな。その技があれば恐るるに足りん』

『そんな事言われても怖いものは怖いです!』

『まったく……ならばもしこの技を使う時に恐怖したらこの言葉を口ずさみ立ち向かえ。————』

「……我が刀は魔を断つ刃……恐れを打ち消し畏れを断ち切る! まつろわぬ魂達を黄泉の国へと誘わん!」

棒に《氣》を……《靈氣》を纏わせる

《時雨流・送り火ノ蝶》!

棒に纏わせた《氣》が炎の様に揺らめき霊達を……廃旅館中を包み込む



そして鈴の頭を撫でながら…

「(幽霊はもう居ないから) 大丈夫…(怖くないから) もう大丈夫だから」

と、言う…

「「れ” え” え” ん” ん” ん” ん!!」」

一夏と弾と数馬まで抱きついてきた!

「(抱きつかなくて) 大丈夫! (鈴が抱きついてるから) もう大丈夫だから!」

止めろ! 男はノーサンキューだ!

あと顔が凄まじい事に!

うおおおおお!?! 離れろおおおおお!?!

そして…

「あ、もう限界だ…」

バタッ

張り詰めていた気が一気に緩んで気を失ってしまった…

次に目を覚ますと自室のベッドに寝ていた  
既に朝日が昇っている

それから皆が様子を見に来てくれたので部屋に招いて全員を正座させて説教をした

「これで分かっただろ！面白半分であんな場所には行っちゃ駄目なんだよ！今回は何とかなったけど、本当に危険だったんだからな！もう二度とするなよ？もしまたそんな事したら……」

「……し、したら……？」「……」（冷や汗）

「俺専用の修業メニュー1週間の刑だゾ♡」

↳ 蓮仁専用修業メニュー

朝の練習

朝4時半起床、ストレッチ

50キロのランニング(全力疾走+低酸素マスク着用)

腹筋、腕立て、スクワット、懸垂、e t c ……(重り50kg着用)

各種素振り千本(重り50kg着用)

技の練習

ストレッツチ、プロテイン

夜の練習

片手懸垂、片手逆立ち腕立て、e t c ……(重り着用)

技の練習

無手の練習

投擲術の練習

弓矢の練習

槍の練習

オリジナル技の考察・練習

漫画・ゲーム技の考察・練習

50キロのランニング(全力疾走+重り着用+低酸素マスク着用)

ストレッツチ、プロテイン

……とまあこんな感じだ

因みに一人の時のメニユーな

師匠がいたら更に更に組み手や斬り合い何かもするから

一夏は青ざめて震えですが：

俺の練習量を知らない他の3人はキョトンとしてる

でもこの4人の中で一番運動が得意な一夏が青ざめて震えてるのでヤバいのだと悟ったようだ

「分かったかな？」

「「アツハイ」」

最後の最後で酷い目にあつたりもしたが充実した夏休みを過ごせたなあ

やっぱり皆と遊ぶのは楽しいな!

もうすぐ学校が始まるのか……

楽しい事はあつという間に過ぎていったな

物思いにふけっていると……

ピンポーン♪

……ん?誰か来たな

玄関まで行き扉を開けると……

「蓮!!宿題を手伝ってくれえええ!?!」

バタン

……さて、ゲームでもするか(スルー)

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン  
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン  
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン  
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン  
ン♪

「やかましいぞクオアラ！」

「ぐはっ!？」

とりあえず弾に飛び膝蹴りを食らわせる

よく見ると一夏と鈴と数馬もいるし…

お前らは終わったよな…？

「頼むよおおお…このままじゃ終わんねえよおおお」

「ええい！まとわりつくな！何で少しづつ終わさないんだ！」

夏休みあるあるネタをやるんじゃない！まったく！

一夏達は残り少しだけだったが…この馬鹿は一切手を付けてない

「頼むよおおお！教えてくれよおおお！頭良いだろう!？」

そんなに良くねえよ!!

中の上くらいの成績だよ！

……ん？弾の成績は下の上から中の下くらいか…やっぱり馬鹿だなコイツ（確信）

こうして皆で泊まり込みの徹夜で宿題を終わらせたのだった……



あ、  
眠い……  
……。  
—ω—  
Z  
Z  
Z.  
.  
.

# 原作前第20話 遂に登場！奴の名前は緋龍蓮也！

前回のあらすじ！

修業も終わり、本格的に夏休みを楽しむ蓮仁！

皆で海に行ったり祭りに行ったりと楽しんだ！

しかし様々なハプニングが蓮仁達を襲った!?

そして遂に夏休みが終わったのだった……

S i d e 蓮仁

木の葉も色付き、少しずつ冷え込んできた今日この頃

そんな中でも元気に修業をしている者がいた

家の庭の木に的をぶら下げてクナイを構える

「せいっ！やあっ！はあっ！」

コン! ココン! スコココン!!

両手に持つてるクナイを構えて的に向かつて投擲する蓮仁は、六本全てを的に当てた。そして新たにクナイを持ち、今度は走りながら的に向かつて投擲する。

「ふっ! はっ! ぜあっ!」

コン! ココン!

しかし今度は六本中の二本しか的に当たたら無かった。

「ああ……駄目だ当たんねえや……やっぱ難しいなあ……」

クナイを回収しながらつぶやいてると……

「俺から見たら十分に凄いなと思うけどなあ」

と、隣の堀からこちらを見ていた一夏が言う

暇だったのか飽きもせずと眺めていた一夏……その手には竹刀が握られてい  
る

「一夏は修業しないのか? 何なら相手になろうか?」

久々に誰かと戦いたいから丁度いい

「うーん…止めとく。また今度な」

「そっかー」(・ω・)

そしてまた投擲練習を開始するがやっぱり難しいなあ…

師匠は動きながらも百発百中だし、わざと投擲した武器をぶつけ合って軌道を変えたりするからな…

……あの人生まれる世界間違っていない？

すると…

「困ってるみたいだな？蓮！」

「…っ!?そ、その声は!?!」

俺と一夏が振り向いた先には…

「よっ！ただいま！」

「お、親父!?!」

そこには蓮仁の父親の緋龍蓮也が立っていた!

「お、親父だど!?父さんと呼べよ!」

「シヤラツプ!もう父さん何て古いんだよ!これからは親父だ!」

「ちくしよお!反抗期かよ!でも、母さんには反抗しないのは何でだ!」

「母さんに反抗したら三節棍振り回しながら永遠と追いかけて来るからだよ!怖いんだよ!」

「分かる!でもそれを差し引いても俺の嫁さんは可愛いんだよ!」

「止めろ!息子の前で惚気話をするんじゃない!」

まったく!久々に帰って来たら惚気話なんか始めやがった…

あ、親父の説明をするぞ!

名前は緋龍蓮也で見た目は完全にハガレンのマス・ヒューズだゾ!

見た目は作者がデザイン思いつかない時にハガレン読んで『おつ!コレでええか!』みたいなノリで決定!

そんで何の仕事してるか分からない(教えてくれない)けど少し前から新事業を始め

て忙しいらしくて泊まり込みが多い。

それでふらつと今日みたいいきなり帰って来るんだよなあ…時前に連絡くらいしてくれよ

「蓮也さんお久しぶりです！」

「ん？おお！一夏じゃないか！久しぶりだな！蓮也さん何て他人行儀に呼ばずに父さん呼んでくれていいんだぞ！」

「あ、あははは…」

これには一夏も苦笑いだ

徹夜しすぎてテンションアゲアゲ状態だから面倒くさいな…

「それでさっきの続きだが、困ってるみたいだな蓮？」

「……まあな…投擲はあんまり得意じゃ無いし…」

「そうかそうか…ふっふっふっふっ！」

何かいきなり笑い始めた…もう寝てきなよあんた疲れてんだよ…

「よし!なら俺が教えてやろう!」

「あつ、遠慮しときます」

「何でだよ!?!さては俺の実力を疑ってるな」

「うん(はい)」

「一夏も!?!」

だつていきなりそんな事言われてもなあ…

「俺はなあ!見た目だけじゃなくて投擲術もマース・ヒューズ並みの実力があんだぜ

!?!蓮よりは俺の方が得意だろうな!」

「ふーん」ハナホジホジ

「へえー」ミミホジホジ

「蓮も一夏も酷い!?!泣くぞ?!いい歳したオッサンが泣き喚くぞ!?!」

止めろ見苦しい!

「そんなに言うならやってみてくれよ」ポイツ

持つてるクナイを投げ渡す

「へっ、俺の実力を見せてやるっ！はあっ！」  
走りながら投擲をすると…

コン！ココン！スコココン！

「んなっ!？」

「ま、マジかよ…」

見事に全てを的に命中させやがった…！

「ふふん！どうだ！」ドヤッ

イラッ

「行け！黒丸！」

「ニヤーン！」

「うお!?!待て！何する黒丸！あつちよ！グバッファッ!？」

黒丸の体当たりで吹っ飛んでいった



「ふっ…家の猫は最強だな!」

実は夏休みに修業に行った時に泉の水を持ってきて与えたんだよな。そんで俺が《気》を教えたらあつという間に覚えて強くなったんだ!

ついこの間まで子猫だったのに、今じゃここの辺のボス猫になったからな

「ち、ちくしよお…母さんや蓮にも勝てないのに黒丸にまで勝てないのか……」

「蓮也は緋龍家にて最弱なり」

「ぐふっ!」

止めの一撃を放って撃沈するのであった…

Side 蓮仁Side out

## Side 一夏

今、蓮と蓮也さんのやり取りを見てたが：  
あんたら家族は異常に強いよ!?

段々人間離れしてきてる蓮仁

三節棍を使わせたら最強の専業主婦ならぬ戦闘主婦の華さん  
投擲術の腕はピカイチの蓮也さん

猫なのに人間を倒せる黒丸

………

何だこの一家は？（困惑）

セコムやアルソックより万全な防犯対策な気がする：  
まあ、うちも世界最強が居るけどな

この2軒に泥棒が入ったら無事ではすまないだろう

.....

二人の騒いでる姿を見てると羨ましくなる

俺にも父親がいたらあんな感じだったのかな?

だからこそ蓮也さんが父さんと呼んでくれて良いって言うてくれた時は本当に嬉しかった...まあ気恥ずかしいから呼べてないんだけどな...

華さんにも千冬姉共々お世話になってるし、母親の様に思ってる

蓮も...本人には恥ずかしいから言わないけど、兄弟みたいに思ってる

嗚呼、こんな日常がいつまでも続くと良いなあ

Side一夏Sideout

Side蓮仁

さて、非常に癩だが…本当に非常に癩だが、投擲術を教えて貰っている  
しかも教え方がわかりやすく直ぐに上達したよ。あと一夏も教えて貰ってたけど  
…まあ最初からは出来ないか。練習あるのみだな。

「よし！次は動きながら動くに命中させるんだ！」

これはまた難易度の高い事を……

「ん？でも動く的是何にするんだ？」

「俺が的を持ちながら走るからそれに当てろ」

いや、身体張り過ぎい!?

あんた仕事で疲れてんのにこんなにするか普通!?

と、聞いた所…

「確かに疲れてるが、仕事を言い訳に家族の時間をないがしろにはしたくない」  
だっさ

……まったく、良い父親を持ったもんだよ。本人には恥ずかしいから言わないけどな

さて、そんじやせつかくだからお言葉に甘えますか!

クナイを構えて走り出す

親父も的を持つて走り出す

……………!ここだ!

「せい!やあつ!はあつ!」

コン!コン!スコココン!

「よっしや!5本命中!」

ん?残りの一本?

それは……………

「ふおい!ふあぶなあふあつふあぞ?!」

(おい!危なかったぞ!?)

親父が口で啜えているよ

「……………ナイスキャッチ！」 d (\*、▽、\*) b

「ナイスキャッチ！じゃねえよ！狙っただろ!? そうだろ!？」

「ソナナワケナイ…」

「すっごい棒読みじゃないか!？」

「行け！黒丸！」

「ニヤーン！」

「ちや!?! だから何で黒丸を、ブラベツフ!？」

……………さて、黒丸で有耶無耶にした事だし、そろそろ終わりにするか

「一夏、晩ごはんの買い出しに行くから手伝つてくれ。今日はご馳走だから一夏と千冬さんも一緒に食べよう」

「いいのか？」

「もちろん料理も手伝つて貰うからな？」

一夏に料理を教えて貰ってかなり腕前が上がったけどやっぱり一夏と母さんには敵わないや

親父はインスタントラーメン位しか作れないし、千冬さんに関してはおはや料理じゃ無い。アレを見た瞬間に俺の危険察知的なのがピンピンに反応したから窓からエスケープしたよ。

料理持つて追いかけてきた千冬さんを見た時は死ぬかと思った……

「何だ? 買い出しに行くなら俺も行くぞ」

「ん? 別に大丈夫だぞ? 晩飯までゆっくりしてろよ」

「いや、まだしばらく泊まり込みだから……色々買つとかないと……」(白目)

目がヤバイ

「な、なら3人で行くか……」

「ちよつと待ちなさい!」

と、母さんが塀の向こうから飛び出して来た  
塀の向こうからな！大事な事だから2回いったゾ！

「……何なんだこの家族は……」（困惑）

い、一夏が困惑しているだと……!?

「私だけのけ者にしようとしたってそうはいかないわよ！」

いや、別にのけ者にはしてないけど……母さんが回覧板回しに行つたまま話し込んで戻つて来なかつただけじゃん……

そんな訳で皆で買い物に行つたゾ！

く買い物中く

「今日は唐揚げだな」

「蓮はいつも唐揚げだな」

「おっ、そうだな」



ん?母さんと親父は…?

「すみません、警察です。女子高生を連れ回す不審な男性がいると通報があったのですが、お話よろしいですね?」

「えっ?ま、待ってくれ、違うんだ!」

「では、娘さんですか?随分仲がよろしいようですが」

「いや、それも違って…」

「……とりあえず署まで同行願います」

「ちよっ!は、華!何か言ってやってくれ!」

「んもう!女子高生ですって!嬉しいわ〜!」

「華?華さん!助けて!ちよっと聞いて!た、助けてくれ〜!」

「……………」

「……帰るか」

「……………そうだな」

あの後結局親父を引き取り家に戻って一夏と母さんと3人で料理を作っている

ISの訓練から帰ってきた千冬さんと親父は既に呑み始めてる。いやー、千冬さんが手伝うって言った時は俺と一夏が必死に説得したから何とかなったが……死ぬかと思っただ

そんなこんなで料理もできて皆で食べていると…

「そういえば来年に第2回モンド・グロツソがドイツでおこなわれるのですが、3人も来ませんか？」

と、千冬さんが言ってきた

「んー…気持ちは嬉しいが…多分無理だな。仕事忙しいから休みは入れられないかな」

「私も黒ちゃんのお世話しないとだから無理ねえ…」

「ニャー」

「俺は行きたい!いや、行く!絶対に行く!」

「こんなの行かない訳無いだろ!

「なら、パスポートの準備をしないとね」

「んじゃ一夏も今度一緒に行こうぜ。どうせまだ作って無いだろ?」

「ああ、まだだから一緒に行くよ」

「いやー、今から楽しみだなあ!何かテンション上がってきたから一発芸します!」

「この後も宴会が続き千冬さんと親父は次の日二日酔いになった……」

## 番外編 束さんからの贈り物

前回のあらすじ！

投擲術の修業をする蓮仁！

そこに久しぶりに父親の蓮也が帰還！

投擲術を教えてもらう事に!?

そして一夏と千冬を誘い夕飯を食べていると来年のモンド・グロツソに誘われたのだった…

S i d e 蓮仁

………おかしい…

此処にあった筈のアミユスファイアが無くなっている…

昨日寝る前には確かにあったのに……

せつかくの土曜日だから遊びまくろうと思っただのに…っ！

母さんも知らないし、親父は既に仕事だからそもそも居なかったし……一夏は勝手に持っていたりしないし、千冬さんも忙しいから家に来てないし……

となると……

「黒丸か？」

「ニヤ？」

「あ、違うか……」

まあ、違うよな……

はて、困った……泥棒では無い筈だ……もし部屋に入ったら分かる筈だし、俺が寝てる間に奪う何て不可能だ

山での修業で身につけた眠っていても気配を感知する技は既に癖になってるし……あつ、でも完全に熟睡したら使えないけどな

うくん……

すると

「蓮〜？荷物が届いたわよ〜？」

「はあ〜い」

むうー、アミユスファイアは最悪買い直しかあ…アレ滅茶苦茶高いのに…

階段を降りて下に向かうとダンボールを渡された

部屋に戻り差し出し人を見るが、名前が無い

大丈夫か？爆弾とか入ってないよな？

恐る恐る開けると……

「…っ！アミユスファイア!?あ、あと何かのゲームか?」

何故かアミユスファイアとゲームが入っていた

ん？手紙？

ハロハロ〜！

久しぶりだねレンくん！皆大好き東さんだよー！

いつも修業を頑張ってるレンくん！特別に東さんからのプレゼントだよ♪

どんなプレゼントかって？それはプレイしてからの楽しみー！

それじゃ頑張ってるね！

p s

そのアミユスファイアは東さんがこっそり持ち出したレンくんのアミユスファイアを改造した特別製だからね♪

「……………えっ？」

ちよっと待て…

この手紙に書いてある事ってかなりヤバイゾ？

一つ、東さんに何かしらの手段で見られてる

二つ、俺に気付かれ無いで部屋に侵入できる

三つ、アミユスファイアを（魔）改造された

……うん

怖いんだよなあ…

完全にヤバい奴何だよなあ…

現在進行形で監視されてるかもって思うと……

……うん、ゲームでもするか（現実逃避）

カセットを入れて、頭に被って……

「リンクスタート」

……はて？ 此処は……？

何か真つ白な空間に立っていた

キャラメイクとか無いの？

自分の身体を見ると……



「いつもの姿だ…」

現実とまったく同じ姿だな

すると突然文字が出てきた

「……チュートリアル…か」

とりあえずチュートリアルどうりに進むか…

【まず、身体を動かしてください】

軽く歩いたり走ったりジャンプしたりする

ふむ、問題無いな

現実とまったく同じで違和感無いなあ

【違和感はありませんか？】

YES・NOのウィンドウが出てきたのでYESを押す

【次に《気》が使えるか確認してください】

……はっ？

え？何……？そこまで知ってるの……？怖……

つか、ゲームでも使えるの？ヤバいな

とりあえず身体に纏わせるが……

「すげー……まったく違和感無い」

【？能力はこのゲーム内でしか効果が発動しません】

……まあ、そりやそうだよな

こんな感じでチュートリアルを全て終わらした

……さて、まったく同じだったな……

しかもこれから現実で成長しても勝手に強さが同じに更新されるらしい……

流星は天災だなあ……だからって勝手に（魔）改造はしないで欲しかった……

さて、遂に始まる訳だが…

チュートリアルが俺の身体の事しか無かったよね？

結局どんなゲームか分かんないんだけど…

ん？

【最初は全てランダムになります。次回から自身で選べます】

………うーん、この

何か怖くなってきたよ…

お化けとかとは違う怖さだよ…

すると突然…

【ステージセレクト】

ステージがかわり、どこかの林の中にいる

【キャラクターセレクト】

すると突然目の前に誰かが現れた

「……………えっ?」

そこには緑髪の左耳にピアス、左目に傷そして…

腰に差した3本の刀を持った人物…

「……………ロロノア…ゾロ…」

そう、ONEPIECEに出てくるキャラのロロノア・ゾロが目の前にいた…

「ああ?俺の事を知ってるのか?」

「しや、喋ったあああああああ!?!会話出来たあああああ!?!」

す、凄い…滅茶苦茶凄い!

「お前、3刀流の修業をしてるらしいな?」

「は、はい！」

「そんなに固くなるな……まあ良い、俺が手ほどきしてやる。実戦方式でな」

そう言つて刀を3本抜いた……

つて、よく見たら刀が秋水から閻魔になつてる!?

あれ喰らつたら一撃で死にそう……

……あれ？

「俺の刀は？」

「知るか……自分で探せ」

マジかよ……

とりあえずGGOと同じやり方でメニューを開くと……あつた！しかも他にもいろんな武器が入ってるし！

刀を3本取り出して構え、そして

「よろしくお願いします……！」

そう言つて斬りかかるのだつた……

クツソボロボロにされた……  
本家には勝てなかつたよ……

しかもだよ？ コレ痛みがあるんだよ？ 最初斬られた時はマジでヤバかつた……

何でも現実の身体に影響が出ないくらいに痛みが再現されてるらしい……ハハハッ

ご丁寧にどうも！（白目）

「何だあ？ もう終わりか？」

こゝ、この鬼畜があ……

人の事をモザイク処理が必要なくらいにズタボロにたくせにい……！

「技術はそこそこあるからあとは実戦で学んでいくんだな。あとは覇気の代わりに気を代用して俺の技も再現してみろ」

「……っ！はいっ!!」

「それじゃ今日の俺の変分は終わりだ」

「ありがとうございます！」

そして消えていくのだった……

「疲れたあああああ……もうログアウトしよ……あれ？」

……おかしい……ログアウトボタンが無い……

【本日のノルマが達成されていません。ログアウトは不可です】

……はっ？









「輪切りにしてやるぜ！」

『ソイヤ！オレンジ・スカツシユ！』

「はあああああつ！！」

「あ”あ”あ”あ”あ”！」

9人目

「ハハハッ！キング・ブラッドレイとかまじかよ…」（泣）

「この最強の眼から逃れられると思っっているのかね？」

「思ってねえよ！あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”！」

つ、次でラストだ…

とりあえず今の状態を一言で表すと…

オデノカラダハボドボドダ！

ですね

ランダムなのに人選酷くね？

バージルとかリヴァイ兵長とかサスケとか……

多分武器が剣のキャラで統一したんだろうけど、バージルとかサスケは刀使って無いらね？サスケに関してはもはや避ける事すら不可能な速度と威力の技だったし……

しかもバトル終了後にはある程度戦闘方法何かも教えて貰って更にボドボドダ！しかもアルトリウスが喋ってくれないから凄く分かりづらいし……

富岡義勇にいたってはさっきのバエルの呼吸で怒ったっぽいし……代わりに鱗滝さんが何故か現れて教えてくれたよ……

めっちゃ怖かった……

全集中の呼吸を教わってたけど、いきなりは出来ないし……そしてめっちゃ怖かった……（泣）

さて、10人目は誰だろうか？

ザザザッ

Error Error Error

…っ!? エラー!?

何かヤバそうだぞ!?

しかししばらくすると収まった…

何だったんだ? いったい…

すると10人目が現れた

しかし…

「……? 誰だろう…? あんなキャラ見たこと無いな…」

目の前に現れたのは全身に真つ赤な鎧を纏って、左手には十字架の模様が入った盾を、右手には同じく十字架を象った剣を持つている男…

「あの…貴方は誰ですか?」

「ふむ…私か…そうだな、ヒースクリフと呼んでくれ」

ヒースクリフ? うーん…やっぱり知らないキャラだなあ…

「君は？」

……え？い、今名前を聞かれた？

さっきまで誰一人として聞いて来なかったのに…

「…緋龍蓮仁です、よろしくお願いします」

「そうか、ではレンジ君始めるとしよう」

…相手は剣に盾持ちか…

刀一本じゃ手数が足りないか…なら！

「…！ほう、君も二刀流か…！」

…？君も？…何かさっきまでのキャラと違うな…

「そんじゃ、行くぞ！」

高速ステップで近づいて斬りかかる

しかし盾で塞がれてしまう

…！硬い！

ビクともしないじゃ無いか！

「ふっ！」

「っ！はっ！」

あ、危ない……！シールドバツシユしてきやがった……！

あと少し遅れてたら吹っ飛んでたな

威力よりも手数での戦法に切り替える

「身体強化【速】！」

「……素晴らしい反応速度だ！だが……」

脚に《気》を集中させた《身体強化【速】》で高速連撃を叩き込む。しかし盾で塞がれ、

剣でいなされる

「ちっ！攻撃が届かない！」

なら……少し戦法を変えるか……！

懐に飛び込む、するとヒースクリフは盾を構えて防御仕様とするが……

「それを！待ってた！」

「っ！何!?グアっ！」

腕の関節を外して軌道を変えて盾の横を潜り抜けて斬りつけた。威力は落ちるがとりあえず一撃を入れられた

しかしここで油断はしない。左手の刀を逆手に持ち替えると空中に飛び上がる

「…!？」

驚いた顔でこちらを見るがもう遅い!

「はあああああああつ!!」

回転しながらヒースクリフの身体全体を切り裂いていく

「ぐっ、ぐおおおおおっ!？」

「はっ!どうだ!リヴァイ兵長直伝の回転斬りは!」

さっきのバトルの後に教わったリヴァイ兵長が女型の巨人の腕とかを斬ったあの技だ。いきなり成功するとは思わなかったけどな

「ふっ、なるほど…少し甘く見ていた様だ」

そしてヒースクリフが攻めに転じた

…ちっ!速いし盾でも攻撃してきやがる!

直接受け止めないでいなしたり、受け流したりして攻撃を回避する。しかし徐々に攻撃が届き始める

「ぐっ…!？」

「素晴らしい…素晴らしいぞ!」



「そりやどうもーふんー！」

ガギイーン！

鏢迫り合いをしていると盾で殴り掛かってきた

しかしそれを回避して攻撃に転じる

「ハアツー！」

「グアアツー！何だその動きは!？」

富岡義勇の直伝技……いや、鱗滝さん直伝だな……とにかく！流流舞いをアレンジした技だ。水の流れる様な動きに関節を外した特殊な軌道の技……名前はまだ決まって無い！

コレは攻撃にも回避にも使えるからかなり良い技だな！

腕を鞭の様にしならせた一撃は遠心力も加わり強力だ

回避も滑らかな動きに関節を外した複雑な動きで避ける

「ぐつーまさかゲームでは出来ない様な動きをしてくるとはな……」

「さて、そろそろ終わりにしようぜヒースクリフ！」

「ふつ、そうしようかレンジ君！」

ここで出す技は師匠より教わりし新たな技！

「《時雨流・かち上げ斬り》！」

この技は相手の武器を吹き飛ばしたり、相手自体を吹き飛ばす技だ

「……っ！」

盾でまともに受け止めたヒースクリフの手から盾が吹き飛んでいく

「《時雨二刀流・旋風刃》！」

身体を回転させて旋風の斬撃を起こしてヒースクリフを切り刻んでいく

「ぐおおおっ!?!」

そして旋風が収まった場所には……

ヒースクリフが立っていた

「……！まだ立てるのかよ！」

しかし……

「ふふふっ、流石にもう戦え無いさ……おめでとうレンジ君君の勝ちだ」

……俺の……勝ち……？

「……でも、あんたまだ本気じゃ無かったろ？」

「……ほう、バレていたか」

「まあ、今はいいや……いつか本気のアんたを倒してみせるからなヒースクリフ！」  
指差してそう宣言する俺

「ふっ、楽しみにしているよ。それでは今日はここまでだ、また次回に会おう」

「おっ！ やつとログアウトボタンが出た！ んじゃあなヒースクリフ！ また今度！」

そうしてログアウトするのだった……

「ああ〜！ 中々良い体験だった！ 修業にもなるし漫画キャラとも戦えて更に技も教えてもらえたし！ タカキも頑張ってたし！ 良いゲーム貫ったなあ。」

そして時計を見て驚いた

たった三時間位しか経っていない!?

絶対7時間位戦ってたろ!?

「はあっ…流石は大天災だなあ…東さん、ありがとう!」

多分見てるだろう東さんにお礼を言う

「よっしゃ! さっきの動きを忘れない内に練習してこよう!」

服を着替えて竹刀袋を持って走り出すのだった…

「……それで、結局ヒースクリフって誰だったんだ?」

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e ヒースクリフ

「ふむ…実に素晴らしい実力だった…」

彼が、レンジ君が去った後に一人で呟く

もし、もしも彼がソードアート・オンラインの世界に入っていたら、キリト君に並ぶ実力があつたかもしれない…

いや、間違いなく私<sup>魔王</sup>を倒せるプレイヤー<sup>者</sup>になつていただろう。それ故に非常に残念だ…

しかし今日戦つていて実に楽しかった

しかも彼は少し前に習った技を直ぐに取り入れていた…彼の成長の限界がまるで見えやしない

いったい彼はどこまで強く慣れるだろうか

「君の成長を楽しみにしているよレンジ君」

そしてポリゴン片になつて消えていった…

## 番外編 千冬さんは掃除ができない

前回のあらすじ！

何故か無くなっている蓮仁のアミユスファイア！

しかし束さんの贈り物の中に魔改造されて入ってた!?

更に貰ったゲームでは色んなキャラとのバトル！

しかも最後は謎のキャラ、ヒースクリフが現れるのだった…

S i d e 蓮仁

昨日の束さんからのプレゼントを有効活用して、さらなる力を得るべく修業をしている日曜日…

それは起こった…

P L P L P L P L P L P L ♪

「ん？電話だ…相手は…千冬さん？」

珍しいな…今日は休みで一夏も出掛けるからゆっくり休むって言ったのに…  
とりあえず出るか

「もすもすひねもすう〜？」

「何だその束みたいなのりはっ!!」

「ヒエツ……」

こ、怖い…

何でそんなにガチギレしてんの…？

「ハッ…!?す、すまない！緊急事態で動揺していた…！本当にすまない…！」

「…緊急事態…？」

あの千冬さんの慌てよう…ただ事じゃ無い！

「すまない！蓮の力が必要なんだ…！今すぐきてくれ！」

「…っ！分かりました！」

そして家を出て織斑家の玄関の鍵を開けて入る

あつ、俺は織斑家の鍵を渡されてます。逆に一夏と千冬さんは緋龍家の鍵を持ってます

もはや家族っ！

そして中に入ると千冬さんがいた！

「……来てくれたか蓮！」

そりやお隣の家だからね、秒単位で来れるわ

「いったい何があつたんですか……？」

「……来てくれ……」

そして二階に上がるとある部屋の前で止まった

そして千冬さんが扉を開けて中を見た俺は絶句した……

「なっ……!?何だこの有り様は……」



部屋を見ると…辺り一面に散乱するゴミに服に雑誌に空き缶…  
まるで泥棒が入った様だ…

「……泥棒でも、入りました……？」

「……っ！は、入って……無い……」

「……なら、何でこんなに悲惨な事になってるんですか……？」

「……」

ほう？だんまりか……？

すると千冬さんは何か覚悟を決めた顔をして…

「頼む！助けてくれ！」

と、言ってきた

ので…

千冬さんの部屋から出て、一夏の部屋に入って窓を開ける

その光景を千冬さんは疑問符を浮かべて見ている

そして俺は……

「エスケープウウウウウツ!!」

すぐ目の前の俺の部屋に飛び込んだ!

「なっ!?ま、待て!」

千冬さんも追いかけて来ようとするがそれより速く窓を閉め、鍵も閉め、更にカーテンも閉めた

そして素早く部屋を出て他の部屋の窓や扉の鍵も閉めて最後に玄関の鍵とチェーンを閉めて更に扉を《身体強化【攻】》でパワーアップした腕力で押さえつける  
すると……

カチン

…っ!鍵を開けた!

ガチャガチャガチャ!

開けようとするので必死に抵抗する

「蓮!開けてくれ!頼む!お前が頼り何だ!」

「何ですか!?!どうせ部屋の掃除でしょう!?!自分でしてこいや!」

「やったんだ!やったが……更に酷くなったんだ!!」

「あれで掃除したの!?!ビフォーアフターじゃ無くてアフタービフォーになったの!?!」

「それだけじゃ無いぞ！ゴキブリまで出たんだ！」

「建ててから一年位なのに!?良かったですねえ!!新しい同居人ならぬ同居虫ができてえ!!」(ガチギレ)

「良い訳あるか!!」(逆ギレ)

何キレてんだこの人(憤怒)

「あんなの一夏に見つかったら怒られてしまう!頼むから助けてくれ!」

「甘んじて受け入れろおとおお!!」

「嫌だああああああああ!!」

「はあっ…はあっ…はあっ…!」

っ、疲れたあ…

叫び過ぎて疲れたあ…

いい加減に諦めてくれないかなあ…?

すると…

「……高級ホテルケーキバイキング…」

「…っ!?!」

な、何…!?高級ホテル……ケーキバイキング……だと…?

「ブリュンヒルデで、日本代表だとな……色々なチケツトとかが手に入るんだ……そして高級ホテルケーキバイキングのチケツトも貰ったんだ……甘党のお前はさぞ欲しいだろうなあ……?」

こ、こやつ……完全に俺の好みを理解してそこを攻めてきやがる!

「掃除を手伝ってくれたら……譲ってやろう……どうだ……?」

千冬さんが甘い言葉で俺を誘惑してくる……っ!

「……………」

こんな話し……乗らない訳無いだろ!!

そして俺は扉を開けると……

「分かった。鉄華団はあんたの側に乗ってやる」(オルガ)

「……………」では共に駆け上がるか」(マクギリス)

そして俺達は硬い握手を交わした……

必要な掃除用具を持って千冬さんと共に(二階へ)駆け上るのだった……

「さて、まずは足の踏み場から確保するか」

いや本当に今までどうやって歩いてたんだ？って位散らかってるな…

ゴミ袋を広げて燃えるゴミと燃えないゴミと空き缶にわけろ…

ポイポイポイポイ

……空き缶多いなあ…しかもビールばかり飲んでるし…

（数分後）

「よし…ゴミは片付いたな！」

その数およそ8袋！

いや、多すぎい!?

…さて、あとは脱ぎ散らかした衣類か…

（むっ…！衣類を片付け始めたか…ふっ、思春期の蓮はいつたいたいどんな反応をするのか…）

すると下着を手に取り…

「スリーポイントシューーートゥ!!」

洗濯かごに入れた

「んなっ…!?無反応……だと……?」(シヨック)

自分は魅力が無いのかと精神的にダメージを受けた!

(汚部屋の…ましてやゴキちゃん達がいる部屋の下着なんて汚物だ汚物。こんな汚物に欲情するHE☆N☆TA☆Iじゃ無いからね俺は…)

衣類を次々と仕分けていき下の洗濯機に入れるが…

ここで千冬さんに少しレクチャーしよう!

「衣類は白色物と色柄物を分けて洗うけど…まあ、基本ですよねえ?」

「……………基本だなあ…」

……絶対分かって無かったゾ…声ちっさいし…

駄目だ…根本的な事が駄目だ……

「千冬さあん……………はあ…とりあえず掃除に戻ろう……」

……………さて、まずは…

「千冬さんの同居虫達を仕留めるか……ふっ！」

部屋全体の気配を探る

生物は皆《気》が流れてるからこれでわか……

……

……うん？（・・―・）？

（つ㇗㇗）ゴシゴシ

（・・―・）っ1……2……3……38？

（つ㇗㇗）ゴシゴシ

（・・―・）っ1……2……3……38……

全38匹

／（・・）／マジカア……

「ど、どうした蓮……？さつきから百面相なんかして……？」

「……………千冬さんはしばらく一階にいて下さい」

「アツハイ」

「……………駆逐してやるっ……！一匹……残らずっ……！」

この時の蓮仁はとても恐ろしく、そしてたくましかった……そう千冬は語ったらしい

## S i d e ゴキブリ

「なんかうるさいですね。部屋の中にはゴミも無いしいつもとほえらい違いだ」

「ああ、家の戦力は軒並み此処に回してんのかもな」

「まっそんなのもう関係ないですけどね！」

「上機嫌だな」

「そりやそうですよ！皆で引つ越すし、タゴキも頑張ってたし、俺も頑張らないと！」

「ああ（そうだ。俺達が今まで積み上げてきたもんは全部無駄じゃ無かった。これから







SideゴキブリSideout

「……？気のせいかな？なんかフリージアが聞こえた気がする」

ま、気のせいかな

さて、コイツらで36…37…38つと

よし！駆逐完了！死骸もちゃんと取ったし完璧だ！

あとはハタキで天井のゴミを落として掃除機がけをして…

…っ!?こ、これは!!ダイソンの最新型掃除機…だと…!?

こんなお高い掃除機があるなんて…！す、凄い！なんて吸引力なんだ…！

(くっ…！蓮の奴め…！私の下着には無反応だったくせに、掃除機にはあんなにはしやぐなんて……ゆ”る”さ”ん”!!)

ふう〜！

大分片付いたし、一回昼飯食って休憩するか

「千冬さんそろそろ飯にしますけど冷蔵庫の食材使つて良いですか？」

「ああ、良いぞ。何なら私が作つ「俺が作ります」……しかし掃除も手伝つて貰つた「俺が作ります」……はい……」

千冬さんに作らせたなら駄目絶対

飯までフローリングの雑巾がけを頼んでおいた

さて、何作ろうかなあ？

あんまり手のかからないのが良いな

冷蔵庫の中身をチェックしながら何作ろうかなと考えてたが……酒が多いなあ……

まあ、一夏がちゃん和管理してるみたいだし大丈夫か。

そして簡単で早くて美味しいチャーハンに決定！

食材はチャーシューとネギとかまぼこでシンプルにいこう

材料を全て切つて卵を割つて混ぜておく。あとは隠し味を加えてつと！

さて、あとはフライパンを……つ!? な、何?!? 中華鍋だど!? しかも中華お玉まである

!

流石一夏だ…料理道具が充実してやがる…!!俺の料理の師匠なだけはある!

中華鍋を火に掛けて少し多めの油をなじませる。そこに溶き卵を入れて炒り、半熟状態でご飯を加えて鍋返しで一気に混ぜる。ここでのポイントは高温で一気に炒める事!

そしたら切っておいた具を入れて鍋返しで炒める。

味付けに塩、胡椒、酒、鶏ガラスープを加える。最後に火を止めてごま油を一垂らし中華鍋の縁から入れて…

よし完成!

これに市販の鶏ガラスープで作った手抜きだけど美味しい中華スープとセットにして本日の昼食完成!

☆今日の昼食☆

蓮仁特製チャーハン

手抜きだけど美味しい中華スープ

さて！千冬さん呼びに行くか

二階が上がって千冬さんの部屋に入る

「千冬さん昼飯出来ました…よ…」

……あれ？

部屋に入ると床が水浸しになっていた…

えっ？なんで？雑巾がけ頼んだのに水をぶちまけたのか…？

いや、きつとバケツをひっくり返したんだ…

「おお！蓮！見てくれ頑張って終わらしたぞ！」

……っ?!こ、これで雑巾がけをした…だと…？

駄目だ…絶望的に掃除ができてない…

よし、叱ろう。年上？（。ㇿ。）ハッ！関係ないね!!お説教の時間

じゃあああああああつ!!!

そして叱ろうと床から千冬さんに顔を向けるが…

「……………っ!？」

(な、何て顔で見えてくるんだ!?)

まるで獲物を採ってきて褒めてと見つめてくるシフ達みたいな顔をしてやがる…っ

!

悪い事をしたのに気付いてない純粹無垢な目で褒めてと訴えてくる…っ!

駄目だ!俺の良心が叱るのを拒否している!

こんな純粹無垢な千冬さんをはたして叱る事が出来ようか!?

答えは否!断じて否!!

てな訳で、説教は出来なかった…………

ふっ…度々一夏に『蓮は結構甘い所があるよな』って言われてたが……なるほど、今  
自覚したよ…

「……………昼飯食べましょう!」

「おっ、そうだな」

そしてお昼を食べるのであった…

「むっ？このチャーハン卵がフワフワしていて美味しい。流石だな」

「隠し味で卵に砂糖を入れたので」

「何？チャーハンに砂糖？」

「砂糖の特性で食材を柔らかくするからフワフワになるんですよ。でも入れ過ぎると甘くなるので一つまみ二つまみ位で十分ですよ」

「なるほど…勉強になるな」

（まあ、多分作れないけど）

「なら良かった！」

（まあ、多分作れないだろう）

この時蓮仁と千冬は同じ事を思っていた！

食べ終わったので皿を洗って片付ける

そして千冬さんに食後のお茶を出す

「ハイ千冬さん」

「気が利くな、ありがとう」



さて…千冬さんが休んでる内に二階の床を何とかしてこよう！  
そして二階にダツシユするのだった…

「お、終わった……」

あれからも掃除を続けていたが、千冬さんに手伝って貰ったら何かしらやらかすので  
余計に時間が掛かってしまった…

そして部屋を見渡す

おお！見事にキレイになった！

ビフォーアフター成功！

「助かった蓮。ありがとう…！」

「次からは汚さない様にしてくださいね？」

「……………善処する…」

いや、間が長いなおい！

「善処じゃ無くてしつかりやつてくださいね？」

「……………」

「や・っ・て・く・だ・さ・い・ね・？」

「(・・ω・・)」

うーん、このっ

「そんな顔で見ても駄目！」

「(・・ω・・)」

んぐっ!?

良心の呵責がああああああつ!?!?

い、いや！しかし悪いのは千冬さんだ…！俺が罪悪感に苛まれる必要は無い…！

無いが…

「(・・ω・・)」ウルウル

止めろお！そんな目で俺を見るなっ!?!捨て犬みたいな目で見るなあああああつ!?!

(あと少し……あと少しで蓮を墜とせる……！)

蓮仁の甘さに漬け込み、また掃除して貰おうとしている自称姉の織斑千冬（22歳独身）

一夏に見つかったら怒られるから蓮仁に掃除して貰えば良いじゃん！と思っている自称姉の織斑千冬（年齢イコール彼氏いない歴の独身）はつきり言わせて貰おう。最低であると!!

「俺は……俺はあああつ!!」

(墜ちろ! 墜ちろおおおつ!!) ↑ (途中から言葉に出してる) かし

「何やってんだ? 千冬姉?」 ゴゴゴゴ

「ヒエツ……い、一夏……?」

一夏が帰ってきた!

部屋を見渡して汚れチエツクをおこなう一夏

「……千冬姉…蓮に掃除させたな？」

「あ、いや…その…」

「まさか…蓮の優しさ…もとい甘さに漬け込み掃除して貰ったのかな？そしてまた掃除して貰おうとしたのかな？」

「ギクツ！な、何の事だ…？」（すつとぼけ）

「とぼけるな」

「すいませんでした」（土下座）

い、一夏が怖い……

ブリュンヒルデをも圧倒するオーラを放っている…

一夏は織斑家にて最強……！

「蓮もあんまり千冬姉を甘やかすなよ…？」

「アツハイ」

逆らったら駄目ですよ

家事に関する一夏は最強無敵だからな…

つまり家事関係で怒らせたら死ぬゾ！

さて、帰りますか！



## 原作前第21話 冬休みの予定？修業だよ（真顔）

前回のあらすじ！

突然千冬に呼び出された蓮仁！

急いで向かうとそこには悲惨な部屋があった!?

高級ホテルキーキバイキングを報酬に掃除をする事に！

しかし一夏にバレて叱られる千冬であった…

## Side 蓮仁

秋も終わり季節は冬

色々あったがもうすぐで一年が終わるなあ

文化祭でバンドやろう！とか言ってくる馬鹿数馬がいたけど当然いつものメンバーのほ

とんどが楽器を弾けないので来年の文化祭までに練習する事になったし…：…衝動買い

でアコースティックギターとベース買ったし…

いつものメンバーでクリスマスパーティーしたり……弾は彼女と過ごすとかほざいてたのに結局そんな相手はできなかつたみたいだし……

あとは幽霊部員になつて俺だから剣道部に行つて交流を深めて、三刀流の練習台になつて貰つて……あと、三刀流使いつて勝手に他の学校に広めた部長に三千世界を喰らわせたなりしたなあ……

お陰様で色んな学校から挑戦者が戦いに来たり不良達に喧嘩売られてるよ!全員三刀流でぶつ飛ばしたけどな!良い練習台になつたぜえ!

……まあ、そんな事くらいだな

さて、現在冬休みだが……

いつもの修業の山に来てます

あといい加減修業の山だと面倒くさいのでこれからは時雨山しぐれやまと呼びます

長期休みだと当然の様になるこの山

しかし冬では始めてだ

さて、まずは今の俺の状態を説明しよう

装備

ふんどし

刀

以上！

……真冬の雪山にふんどし一丁でいます

寒い、ただひたすらに寒い

常に身体に《気》を纏わせないと死ぬ

更にこれで滝行をするんだぜ？

最初は『冬に滝が流れるわけないだろ！凍ってるよ！』なんて安堵してたけど……  
まったく凍ってない（白目）

身体に《気》を纏わせて寒さと滝の衝撃に耐え、同時進行で般若心経を唱えて、更に  
周りから常に《気》を吸収しないとイケない……



もし《気》が途切れたら一瞬で死ぬ  
そんなヤバすぎる修業をさせられるぞ

……ハハツ(泣)

「観自在菩薩!行深般若波羅蜜多時!照見五蘊皆空!」

ドドドドドドドドドツ!(滝の音)

「度一切苦厄!舍利子!色不異空!空不異色!」

ドドドドドドドドドツ!(滝の音)

「んばあああああああああつ!!寒いいいいいっ!」

「般若心経を止めるな！」

「すいませんっ！」

くその頃の二夏達く

「コタツ温かいなあ。鈴」

「そうね。あ、ミカン取って弾」

「ホイよ。こんな寒いのに蓮は修業か。なあ、数馬」

「そうだね。でも蓮君居ないのにお邪魔して良かったの？」

「あら、いいのよ全然！賑やかな方が楽しいからね！」

「あ、華さんおせち作り手伝いますよ」

「あらありがとうね。一夏君がいると助かるわ」

「あたしは中華料理しか出来ないし黒丸と戯れてるわ」

「ンニヤ〜♪」

「俺はそもそも料理出来ないからなあ…」

「右に同じく」

「新しい技の修業だ。滝を斬れ」

「……はっ？」

「その名も《時雨流・空烈斬》だ。その名の通り空を斬り裂く」

「……空を斬り裂く……？」

「正確には刀を振り下ろした衝撃で雲が割れる」

(ヤベーイ……)

「まずは滝を斬れ」

(……今日、大晦日なのになあ……)

くその頃の二夏達く

「お鍋できたわよ」

「すげえ！カニ鍋だ！」

「流石蓮也さん！高給取り！」

「よせやい！褒めたつてお年玉しかでねえぞ！」

『ふう〜！』

「ささっ、蓮也さんどうぞ！」

「おっ、ありがとな千冬ちゃん！ングング：プハーツ！正月の酒は格別だなあ！」

『あはははは！』

「チタタプ、チタタプ、チタタプ」トントントン

「ワフワフ、ワフワフ、ワフワフ」

「お、シフも一緒に言ってくれるのか。チタタプ、チタタプ」

「ワフワフ、ワフワフ」

「……何を作っておる？」

「チタタプですよ。アイヌ料理です」

「ワン！」

「犬じゃ無くてアイヌな」

「……何故チタタブと言いなながら叩く？」

「そういう文化らしいです」

「……よう分からん文化だ……」

~~~~~

「はい、ウサギのチタタブ鍋の完成」

「いただきます」ズズズ

「味いいな。出汗が効いている」

「味噌味とも良く合いますねえ。ほらシフ達用に作ったチタタブだぞ」

『ワオン!』

「そうか! 美味しいか!」

♪ピロリン♪

「ん?」

メールが来たみたいだ

『カニ鍋最高w』

「(☒☒☒?)」ハッ?

こ、この野郎…

「…カシャツ…ピロリン♪」

くその頃の一夏たち

「おっ、蓮から返信が来たぞ」

「何だって?」

「えーと、『チタタプ鍋最高』だって」

「ちょwチタタプってwww」

「んまそうだな」

「あつ、ウサギ肉らしいぞ。しかも手作り簡易テントだって」

「思った以上にサバイバルツ!!」

「あと、ふんどししか着てないらしいぞ」

「いや…流石にそれは嘘だろ」

「あつ、画像来た」

「まじかよ…本当にふんどししか着てない」

「い、一夏。後で写真送って」／／／

「ん?別にいいけど…こんな写真を何するんだ?」

「えっ!?そ、それはその…」

「おいおい、何するってそりやナニに決まってグボハアツ!」

「弾…ちよつとOH☆A☆NA☆SIしましようか…」ニコッ

「＼( ^ o ^ )／」オワタ

「はあつ…はあつ…くそっ!全然斬れやしない!少し休憩!」

雪の上に大の字で寝そべると空を見上げる

雲つているけど隙間から星が見える

山の中だと星が綺麗に見えるなあ

「…綺麗だなあ…:…ん?何か今空に弾がサムズアップしてた様に見えた…疲れてんのかな?」

起き上がると刀を八双に構えて技練習を再開するのだった……

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 厳仁

12月31日 大晦日

蓮仁を連れて修業の為に雪山に登った

蓮仁の格好はふんどしだけであとは刀を持たせただけ……

しかし……よもやこれ程までに《気》を扱えるとは……

いくら《気》を使っているとは言え真冬の滝に打たれても顔色一つ変えずにいるとは……

途中で寒いと弱音を吐いたが……あやつのやつてる事は寒いなんて言葉で普通は済まないはずだ……



もつとも過酷で危険な修業……環境への対応

過去に死者も出ている

俺の修業時代も死にかけてた修業のはずだが……

「ああ、寒い寒い」

何が寒い寒いだ!そんな程度で済むはずが無いだろう!

しかし実際に顔色一つ変えていない……

やれやれ……時々弟子が恐ろしく感じるわい……

……さて、ならば少し難易度を上げるかのお?

### 《時雨流》

代々時雨家に伝わる一子相伝の流派

それぞれの剣の刀に三段階の技がある

今蓮仁が使っている技

突きの《時雨流・穿ち》

抜刀の《時雨流・疾風斬り》

二刀流の《時雨二刀流・旋風刃》

これらは第一段階の技……つまり一番威力の弱い技だ

後に第二の上位技・第三の奥義に繋がる

そしてその第一段階の中でももつとも難易度が高い技

《時雨流・空烈斬》

今のお前になら扱える筈だ

乗り越えてみせよ…！

S i d e 巖仁 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

…さて、滝を斬れなんて言われたが…  
無理じゃね？

だって斬撃飛ばせて事でしょ？

無理じゃね？(困惑)

いや、百歩譲って斬撃飛ばせて言われたとしてもいきなり滝を斬れってさあ…  
そもそもどんな原理だ？師匠の技すら見せて貰って無いのに出せるか？

…はあっ…どうせ自分で考えろって事だろ？鱗滝さんみたいに判断が遅い！って  
言わないだけまだマシか

さて、斬撃…斬撃……………

【斬撃 技 アニメ】で検索つと

…ふむ、超究武人破斬、八刀一閃、天翔蒼破斬、冥空斬翔剣、煩惱鳳、などなど…  
色々あるなあ…

そんで一番参考に成りそうなのは…

月牙天衝

霊力を使って、刃先から高密度の霊圧を放出して三日月状の斬撃を飛ばす技

これなら出来るかな？

さて

刀に【気】を纏わせ八双に構える。そして月牙天衝を頭の中でイメージする

もつと…もつとだ…もつと強く…！

刀を持つ手に力が入り更に【気】の濃度が増していく

そして……

「……っ！はあああああつ!!」

全力で刀を振り下ろした

すると刀から放出された【気】が斬撃となり、その衝撃で地面を切り裂き雪を吹き飛ばしながらまっすぐ突き進み……

滝を切り裂いた

「……っ！や、やった……！」

しかし

パキンッ

手に持つ刀が砕け散った

そして

「……あれ？」ドサッ

俺は立つことさえ出来ない状態になり前のめりに倒れ伏した

あ、ヤバい……一撃で【気】を使い果たして体温の維持が出来なくなったから身体を動かせなくなっただ

寒くて身体が動かない……

あ……意識が……っ！駄目だ！しっかりしろ！死ぬぞ！

すると

「ワン！」

「あ……シフ……助かった……」

シフ達が俺に気付いて来てくれたみたいだ  
師匠も来てくれたみたいだし助かったあ…

「まったく…【気】を使い果たして死にかけるとはな

「うぐつ…面目ないです…」

シフ達に温めて貰って師匠から預かった服を着る

「しかし、滝を斬れたようだな。とりあえずは合格だ」

「とりあえずかあ…」

まあ、仕方無いか

一撃使って倒れたら駄目だしな

威力は申し分ないし使えそうな技だけど…

手がボロボロだな…豆も割れて血が出るし…酷使してきたのがさっきの威力に  
耐え切れなかったみたいだ

「だが…最終的には【気】を使わずに斬撃を飛ばして滝を斬れるようになって貰うから  
な」

「(・ω・)(マジカア…」

今程じゃ無くても【気】無しで斬撃を飛ばせる様にならないといけないのかあ…  
俺の手大丈夫かな?

まだまだ道のりは長いな

すると師匠が空を見上げ…

「見てみる」

と、言ったので空を見上げると…

雲が割れていた

「……ははっ……あれを俺がやったのか……」

とんでもない事をしたなあ…斬撃は飛んだけど…なんつって!

………何か寒いなあ…

星を眺めながらそんな事を考えるのだった……

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

## Side 一夏

「さて、そろそろ初詣に行くか」

「そうね。少し早いけど行きましょ」

蓮の家で大晦日を過ごしていた俺達は近くの神社に向かった

前は篠ノ之神社に行つてたが箒が引つ越してからは違う神社に行っている

何かこの辺神社多いんだよねあ…

……小学生になって蓮と知り合つてから初詣もずっと一緒だったから何か変な感じだなあ…

…？　そういえば小学生より前はどんな風にしてたっけ？

うーん…駄目だ思い出せないな…まあ、小さい頃ならしよすが無いか

「うわー…沢山いるわねー」

「ここら辺だと一番でかい神社だからな」

「おっ、そうだな」



「そろそろ年が明けるぞ!」

もうそんな時間か

来年はどんな年になるかな?

「3!」

「2!」

「1!」

「明けましておめで『ゴオッ!』:!?な、何だ!?!」

年が明けた瞬間に謎の音が鳴り響き周りがざわつく  
すると……

「な、何だよあれ……空だ!空を見ろ!」

誰かがそう叫び皆が空を見上げる

当然俺達も空を見上げるが……

「雲が……割れてる……?」

さつきまで降っていた雪も止んでいる……

この不可思議な現象に周りがどよめいている中で俺は雲が割れたと思われる根本の方を見てある事に気付いた

(あの方角は……蓮が修業に行った場所がある筈だ……)

ま、まさか……

「ねえ……あれなんだけど……」

「あ、ああ……」

「何だかね……」

「……多分皆同じ事考えてると思う……」

そして俺達は声を揃えて……

「「絶対に蓮がやらかしたっ!!」」

何の根拠も無いが俺達はその可能性しか無いと思った

Side一夏Sideout

S i d e 蓮仁

「ぶえつくしよん!!…ズビビ…風邪かな?」

「お主はそんな簡単に風邪なぞひかんだろう」

確かに身体を鍛えまくったからか病気にも掛かってないな

誰かが噂でもしてるのか?

「うーん…ま、いつか!明けましておめでとうございます!今年もよろしくお願いしま  
す!」

「うむ、よろしく。どれお年玉をやろう」

「おとおおおおっ!!」

「ほれ」

「……刀?」

「お前専用の刀だ。名前は自分で決めるんだ」

「あ、ありがとうございます」

（思ってたのと違うけど……お年玉とはいったい……？）

「それで名前は何にする？」

名前かあ……そうだな……

刀を引き抜き刀身に触れる……すると触れただけで手が斬れ血が伝って刀身を赤く染め上げる

余りの切れ味にビックリしたが……

「……【雪月赤<sup>せつげつか</sup>】、何てどうでしょう？」

「ふむ、悪くないが何故その名にした？」

「雪夜に見える月の光が刀についた血を赤く照らすつ……て感じですよ」

「ふつ、なるほどな。ならば今度名前を彫ってやる。それと刀に【気】を流し続けると刀に変化が出る時もある……例えば刀身の色が変わったりな」

「それって師匠の刀の【朱時雨<sup>あかしぐれ</sup>】と同じですか？」

「そうだ。この刀は先祖代々受け継がれ、持ち主の【気】を吸収してきた刀だ。言わば進化だ」

「……進化」

「そうだ、だからいずれその刀も本当に赤くなるかもしれん。あと【朱時雨】だがお前にいずれ免許皆伝と共に渡そう」

(まあ、何代も続いてようやく刀身が朱くなったからな……)からだ無理かもしれないが……)

「……っはい！」

「さて、今日はもう寝るぞ。滝も斬れたから明日からは冬休みを満喫するといい」

「はいっ!!」

こうして新年を迎えて新しい刀を貰い、テンションが上がった俺は結局一睡も出来なかったのだ……

あ、あとくまさんは冬眠してた!まあ、熊だからね!

## 原作前第22話 新年早々に不運の予感!?

前回のあらすじ!

大晦日も修業に励む蓮仁!

極寒の雪山でふんどし一丁で滝行!?

更に新技も会得! 斬撃を覚えた!

そして年を明かして家に帰るのだった:

S i d e 蓮仁

はああつ~~~~!

「やつと帰って来れたあああああつん!!」

雪山ふんどし生活もようやく終わりだ!

寒かったなあ:

さて:::温かい我が家に突撃!

「ただいま〜!」

「「おかえり〜!」」

うん! いると思っただよ! 君たち!

「当然の様にいるよなあ……あ! 明けましておめでとう!」

「「明けましておめでとう!!」」

さて、コタツで温まろう!

ガシッ

……えっ?

「……ねえ、何で腕掴むん?」

「初詣に行くから」

「あれ? 君たちもう行ったよね?」

「アンタはまだでしょ? それにい……少し聞きたい事もあるのよねえ〜?」

はて? 聞きたい事?

なんだろう?

心当たりは特に……

『見てみる』

と、言ったので空を見上げると…

雲が割れていた

『……ははっ……あれを俺がやったのか…』

↳ 原作前第21話より

めっちゃ心当たり有るツツ!!

昨日の斬撃に凄く心当たりが有る!

やべえよ…やべえよ…

……いや、待てよ…?まだそうだと決まった訳では無い…

ひよつとしたら昨日のチタタプ鍋かもしれないし、俺のふんどし姿の事かもしれない  
…

そうだ!まだ決まった訳では無いっ!



「何か空が割れたんだけど心当たりは？」

「(・ω・)マジカー…」

あかん、詰んだ

「ボクハナニモシラナイヨ？」

「「「すつこい片言!?!」」」

「ボクハナニモシラナインダヨ？ホントダヨ？」

「……………蓮…白状しろ…」

「ボクハナニモ『白状しろつつつてんだよオラアン!!』」

「すいません！俺がやりました！斬撃飛ばしましたあああつ!!」(泣)

怖いよお…めっちゃ怖いよお……………(泣)

その後全て白状し皆に…

「「「てめえは人間じゃねえ!」」」

「タケシイ…」

違うんだ…これも全部乾巧って奴の仕業なんだ…

そしてそのまま神社まで引きづられた…

さて！神社に到着！

早速お参りに行こう！

しかしかなり混んでいて時間が掛かりそうだ……

「もうすぐで俺達も2年生かあ…何だかあつという間だったな」

「確かにな！蓮といると退屈しなかったし」

「おいおい、それじゃ俺が普通じゃ無いみたいじゃ無いか」

「」「そうだよ」」

「(・ω・)」

駄目だ…コイツら俺を人外認定しやがった…

「そういえば弾の妹が中学に上がるんだっけ？」

「おお、そうなんだよ」

「ウチの中学か？」

「いや、蘭が行くのはお嬢様学校だな。エスカレーター式で高校まで行ける」

「ほーん、頭良いんだな。弾と違つて」

「凄いな！弾と違つて」

「良い妹さんだね！弾と違つて」

「そうね。弾とは大違いね」

上から俺、一夏、数馬、鈴の順番にそう言う

「泣くよ!?!泣いちやうよ!?!」

「勝手に泣いてろ」

「うわあああああつん!」

「さ、アイツはほつといて進もうぜ!」

そして弾を置いて『置いてくくなあ!』∴(・D・)チツ  
しょうが無いから弾も連れて進んだ

-----

-----

-----

-----

| | |

|

ようやく順番が回ってきた！

御賽銭（5円）を投げ入れて

二礼二拍手一礼して

蓮仁（今年も師匠の修業を生き残れますように……オデノカラダハボドボドダ！）

一夏（千冬姉が掃除出来る様になりますように。あといい加減蓮に掃除頼むのもやめますように）

鈴（蓮がアタシの気持ちに気付きますように。いや、いつそ告つてきますように！あの鈍感から告つてきてほしいのよ！）

弾（滅茶苦茶かわいい彼女ができてイチャラブチュツチュできますように。いや本当お願ひしますマジで）

数馬（フツメンキャラが何とか成りますように。もうフツメン何て呼ばれたくないんだっ！）

まともなのが無い…？

「さて、尺余ったからおみくじ引こっか」

「うん」

「スクシヨターイム！」

「スクシヨターイム！」

「はい、ポプテピピックは良いから早くクジ引くわよー」

「ノリ悪いなー」

「「ブーブー！」」

「あ”っ?”」

「「何でも無いですっ！」」

さて、それじゃ引きますか！

「お？何かレディースおみくじとメンズおみくじがあるぞ？せつかくだし引いてみるか

「？」

「そうねえ、面白そうだし引いてみるわ！」

「んじや俺達もメンスズおみくじを引きますか！」

「一夏は……」

「末吉かあ……凄く微妙だなあ……ふむふむ？何だこれ……変なのがあるな……【恋愛】『自身の性格を何とかするまで彼女はできない』？……どういう事だ？」

「「「ああ〜」」（納得）」

「てかそんなのあんのか!? 凄いな！」

「他のは何か気になるのがあるか？」

「ええと……【旅行】『危機が訪れる。友が解決の鍵』？何だこりや？」

「よく分からないけどまあいいだろう！」

「よし、次だ！」

「弾は……」

「おっ！中吉！よしよし！中々良いぞ！【恋愛】は……今年は諦めよ』？……」

「……弾……泣くな……」

「いつかできるさ……多分」

「うん……」(泣)

他のは特に無し

数馬は……

「僕は小吉だね。【恋愛】は……『時はまだ満ちぬ』……う、こ、これはまさか……!」

「いつか彼女が出来るってことか……!」

「か、数馬……てめえ……!」(血涙)

「まあまあ、それに弾も『今年』って書いてたし来年できるかもよ?」

「ぐぬぬ……」

他には目立つのは無し

次に行こう!

鈴は……

「末吉かあ……【恋愛】は……『頑張れ!やれば出来る!……多分……あと強敵現る』……」

「ああ〜」

「???」↑(鈍感ズ)

弾と数馬は何か分かったみたいだが俺と一夏は分かんないなあ……  
強敵ってなんだろう？

「つ、次は……【転居】『近い未来に訪れる。悪い事が起こるが友に頼るべし』……えっ？」

「おいおい……これじゃまるで引つ越すみたいじゃ無いかよ……」

「で、でもそんな話し聞いてないから……それにおみくじだからって絶対じゃないでしょ！」

まあ……確かにな

「……いや、この神社の神主の占いは良く当たるらしいんだ……あの白騎士事件の時も『ミサイルが落ちる事は無い』って予言して当てたらしいし」

……マジかよ……

「き、気を取り直して次を見るわよ！ええと……次は……ツツツツ!!?」

「!?ど、どうした鈴!? エネルのビツクリ顔みたいになってるぞ!?!」

アレは女の子がしちや駄目な顔だぞ!?!

「あ、あばばばばばっ……」ガクガク

「け、痙攣しだした!?! ちよつとおみくじみせろ!……ええと……【おっぱい】『限界近

し諦めよ』……」



(・・ω・・)

「こ、これは……」(・・ω・・)

「何て言うか……」(・・ω・・)

「お気の毒な……」(・・ω・・)

「……………」プルプル

「…鈴……胸を貸してやるから存分に泣けっ……!」

「う、うああああああああんっ!!!」ガシッ

「よしよし……ううっ……」(貫い泣き)

「(。(。ω。)(。)(。)(貫い泣き)

〜10分後〜

「…グスン…ありがとう…落ち着いたわ…」

「良いんだ気にするな…グスン………」

「………そ、その…蓮は胸がある方が良いの…?」

「…っっ!?!」

(い、言えない…!! 無いよりある方が良い何て絶対に言えないっつ!!)

「……好きになった女の全てを愛す……胸が大きかろうと小さかろうと……それが  
漢だっ!」キリッ

(蓮の奴…誤魔化しやがったな)

(だね。絶対大きい方が好きだね)

(鈴の反応は…)

「……」ポッ

(ときめいてるっ!?)

(マジかよ…)

(恋は…盲目)

(数馬は何を言ってるんだよ!?)

「そ、そうよね! 大きさ何て関係ないわよね!」

「おっ、そうだな」

さて、次に行こう!

蓮仁は…

「ええと……はっ? 大凶……だと……?」

「「「!?!」」」

マジかよ……

あ、アカン……泣きそうになってきた…

「れ、【恋愛】……『お前は爆発すべし。あと女性との出会いが多数有り』……何故に爆発!?!」

「……っ!」

(おい! 鈴! 顔が般若みたいになってるぞ!)

(……っ!?! あ、アタシとした事が…)

「次は…【旅行】…『命の危機が訪れる。しっかり備えよ!?!』」

「お、おい……これって……ヤバいんじゃないか……?」

「完全にヤバイやつだよ!」

「そうだよ」（便乗）

「あ、あばばばばばつ…」ガクガク

「今度は蓮か痺攣しだしたぞ!？」

「し、しつかりしなさい!ほら!このおみくじ!」【運】つて欄があるわよ!」

「あばばばばばつ…」ガクガク

「駄目だ!反応が無い!代わりに俺が読む!……【運】『貴方は豪運の持ち主。しかし運に頼り過ぎてはならない』だってよ!ほら豪運だぞ!」

「……なきや……」

「……ん?」

「修業しな きやあああああつ!!

師

匠おおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

そして俺は師匠の元に走って行ったのだつた……

Side蓮仁Sideout

S i d e 一 夏

……蓮が走り去ってしまった……

それにしても……何て不穏なんだろうか……

俺に鈴……そして蓮……

いったい俺達に何が起ころうとしているんだ……?

そして俺達は自分達の家に戻るのだった……

## 番外編 数馬と弾、漢の決意

前回のあらすじ！

初詣に行つた蓮仁達！

しかしおみくじを引いたらまさかの大凶!?

更に不吉な事まで書かれていた!?

命の危機を感じた蓮仁は修業に行くのだった……

S i d e 数馬

やあ、おはよう・こんにちは・こんばんわ。

僕の名前は御手洗数馬

ゲームや漫画、アニメが大好きな所謂オタクだ。でもいつものメンバーの中で一番頭が良いからね？

あ、あと……フ、フツメン……ですつ……!

くっ……！自分で認めるとダメージがエゲツない……！

さて……自己紹介はこの辺にして、今の僕の状況を説明しよう

「おい！さつきから何ブツブツ言ってるんだよ！ああん!?」

ヤンキーに絡まれてます（泣）

僕は何時だつてそうだ……

見た目陰キャだしオタクだし……気も弱いから直ぐにこんな奴らから目をつけられる……

中学に入つてすぐにも絡まれてカツアゲされそうになつて……

その時は……

「おいお前！数馬に何やってんだ!」

そう、こんな風に弾が助けに来てくれたんだっけ

「ああん？何だよやんのかコラ!」

「ヒエツ……お、おうとも！やってやるよ!」

「そうか……なら死ねえ!」

「ぐはっ!」

「…!?だ、弾っ!!」

弾がヤンキーに顔をおもいつきり殴られて吹き飛ばされた

「ふん、ザコが…」

「…ケツ…何だよこの程度か?」

「はあ?」

「蓮のパンチならなあ…軽く5メートルは吹き飛ばんだよ!これくらいなんてことあねえ!」

……ああ。蓮くんと喧嘩した時に吹き飛ばされてたな

因みに喧嘩内容は弾が蓮くんの宿題を映そうとしたから

蓮くんは『自分でやれ!』で弾は『ケケケチすんなよ!』って感じで喧嘩になった。そして弾は瞬殺された

「お前なんか蓮や一夏の足元にも及ばないんだよっ!」

「……っ!調子に乗ってんじやねえ!」

そしてまた顔に向かって拳を放つ

しかし……

「その攻撃は見切った!オラアッ!!」



「…!?グフツ!」

弾がぎりぎりまで攻撃を躲し相手にボディーブローをきめる

「ぐ、ぐおおおっ……」

「はっ!どうだ!悔しかったら掛かってこいよ!」

すると

「なら、お言葉に甘えようか」

「……えっ?」

周りを見るとヤンキー達に囲まれていた……

や、ヤバいよ……こんな人数に勝てる訳無い……

すると弾はフツと笑い……

「そんなに掛かってこいとは言ってないよお……」(泣)

……うん、まあそりゃ泣くよね……僕も泣きそう……

「てめえ等【白虎隊】に手を出してタダですむと思うなよ?」

「ぬ、貫村さん!」

(なっ…!? 【白虎隊】の貫村!?)

(か、数馬…知ってるのか?)

(【白虎隊】はこの辺を縄張りに行っている不良集団で人数もかなり多い…そしてアイツは

【白虎隊】ナンバー4 《栓抜き貫村》だよ…)

(だ、ダセエ二つ名だな…)

(名前はね。アイツは栓抜きを使って相手の指の骨を折るエゲツない奴だよ…)

(はあっ!?骨を折る!?)

「さて…なあ?お前らの指…折らせてくれよおおおつ!!」

「ヒエツ…」

「「「「「オラオラオラアツ!!」「」「」「」」」」」

「こ、こうなったら…数馬!」

「アレだね!弾!」

「「逃げるんだよオオオオオオオオオオオつ!!」」

「待てやコラア!」

そして僕達は走って逃げ始めた

-----

-----

-----

-----

-----

-----

|

しばらく走り続けて人通りの少ない裏路地に追い詰められてしまった……

「はあっ……はあっ……クソツタレ……ここまでか……」

「はあっ……はあっ……はあっ……弾、ごめん……」

「お前が謝る事じゃねえだろ！」

すると貫村が前に出てきて

「さて……楽しいパーティーの始まりだなあ……」

「おっ、そうだな」

「そうだよ」(便乗)

……うん？何か後半二つの声が聞いた事あるぞ？

「……？誰だ……？」

周りを見るがその声の主は何処にもいない  
すると……

「とうっ！」

上から蓮と蓮に担がれた一夏が降ってきた

「俺、参上！」

「俺は強制的に参上……」

何か一夏はグロッキー状態だし……

「誰だてめえら!!？」

「はっ！俺か？名乗る程の緋龍蓮仁じゃねえさ」

「「いやおもいつきり名乗ってる!?!」」

「てかお前ら何処から来た!?!」

「屋上から」

「屋上!?!」

すると一夏が…

「クラスの人から弾と数馬が追いかけられてるって聞かされたらいきなり担がれて、  
縄で立体機動装置みたいに飛んで来たんだ…うぶっ…」

「鉤縄で立体機動!?!何処の調査兵団ですか!?!」

「やっぱりニンゲンヤメマシタ?」

「おい数馬…何となくだけど人外扱いしたろ…?」

「ギクッ!?!…気のせいだよ」

「本当かあ?」

「そうだよ」(迫真)

「そっかあ…」(…ω…)

…ホッ

何とか誤魔化せた

「てめえら何無視してんだコラア！」

「うるさいなあ……一夏！弾と数馬を連れて逃げろ！」

……!? 相手は10人以上居るのに一人で戦うつもり!?

そんなの一夏が止めるでしょ…

「よし！分かった！」（絶対的信頼）

あれえく？止め無いねえく？

「気を付けろよ蓮！」

「おいおい一夏…俺が負けるとでも…?」

「いや、相手にあんまり怪我させない様に気を付けろよって事」

「そっかあ…」（…ω…）

何か心配されなくてしょんぼりしてる……



「何だあ？随分余裕だなあ…？」

「はっ…そんなザコ共を倒しただけでいい気になるなよ？俺は【白虎隊】のナンバー4  
《栓抜きの貫村》だぜ？」

「えっダツツツツツツツツツツ二つ名…！」

「ブチツ…そうか…そんなに死にたいのか！」

そう言うのと両手にメリケンサックをはめて殴り掛かってくる

………

「いや栓抜き使わんのかいッツ!!」

何普通にメリケンサック使ってるの!?

もはやメリケンサックの貫村じゃん!?

「お前馬鹿か？栓抜きで相手を倒せる訳無いだろ！」

「ごもつともな意見である！」

しかし！

(…えっ？普通に出来るけど…???)

この男にかかれば大体の物は武器になるのだ！



「オラ死ねっ！」

相手が殴り掛かってくる

しかし

(うわっ遅……)

師匠の残像を残すスピードに慣れた蓮仁には遅かった！

そして

「アンパーンチッ！フンツ!!」

バギヤツツ!!

「つつ???!ぎやあああああああつ???!」

相手の拳（メリケンサック付）に自分の拳（何も無し）を当てて相手の腕を弾き飛ばす

相手のメリケンサックは粉々に砕け、拳からは血を流して肩も外れておりのたうち回っている

対してコチラは手には一切傷が無く振り抜いた拳の残心をとっている  
そしてフツと笑い……

「アカン……やり過ぎた……」

顔を青くしていた……

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

「ふう〜とりあえずコレで良し!」

ザコ共はタダ気絶してるだけなので放置した

それで貫村に対しては肩を嵌め直して拳にも応急処置を施した

本人は肩を嵌め直した時に気絶したけど……

拳も後遺症何かは無さそうだが一応病院に行くように書き置きをしておいた  
いや／＼それにしても敵にも優しくするなんて自分でも甘いと思ってしまった……  
ま、まあ今回は力加減を間違えた俺が悪いけど……

しかし……まさか身体強化無しで鉄製メリケンサックを砕けるとは……やっぱニン  
ゲンヤメタのかなあ……？

……いやでも師匠ならデコピンで鉄塊を砕けそうだしまだ俺はニンゲンだな！

だがしかし！まだまだ満足できない！もっと強くなつて死を回避するまでは慢心は  
しない！！

おっと、そろそろ一夏達に追いつかないとは

そして鈎縄立体機動で飛んで行くのだった……

Side 蓮仁 Side out



「誰だ!？」

「誰だ!？」

「誰だ!？」

「空のかなたに踊る影♪白い翼の♪」

「ガツチャマ〜ン♪って喧しいわ!」

と、言いながら蓮が着地した……

やっぱりニンゲンじゃねえ

「コツチも大丈夫そうだな」

「うん、一夏が助けてくれたから大丈夫だよ」

「流石は一夏!略してサスイチ!」

「うん、略さなくていいゾ」

まったく……あの人数を一人で倒したのか……

「それにしても……今回の件で完全に【白虎隊】に目を付けられたよ……」

うっ……そうだった……

今回も蓮と一夏が来なかつたら今頃……  
あんな雑魚を倒すのがやつとな俺が情けない…

このまま蓮と一夏に助けて貰うのか？

……いや、そんなの駄目だ！そんなの自分自身が許せない！

「……蓮、一夏！頼む！俺を鍛えてくれ！」

「!?な、何だよいきなり？」

「いきなりステーキ」

「「はっ？」」

「あつ、すいません…何かシリアスだったから…」

うーん…このっ！相変わらずマイペースな奴だよ蓮は…

「いつまでも蓮や一夏に助けて貰うのは甘えだ！だから自分で何とか出来るようにしたいんだ！だからお願いします！」

そして頭を下げる俺

すると…

「ぼ、僕もお願ひします！いつまでも弱いままなのは嫌何だ！お願ひします！」

そして

「弾、数馬…顔を上げろ。お前たちの覚悟はよく分かった」

蓮がそう言った

「!!なら『ただし』…?」

「お前たちは俺達に助けて貰わない為に力を求めるのか？」

…?…どういう事だ…?」

「いいか?力なんてのはだ。使い方を間違えたらただの暴力になる。なら「何の為に使うのか」これが重要だ。」

……!

「俺が力を求めるのは大切な物を守る為…あとは強者と闘いたいからだ…今回だって弾と数馬を守る為に力を使つたさ。」

そこで一度区切る

「お前たちは何の為に力を求める?ただ相手を倒したいからか?弱いのが嫌だからか?」

そう問いかけてきた…

「…俺は…守る為に力を使いたい…友達を助けたいから！」

「ぼ、僕はいつまでも守って貰うのは嫌だから！僕も誰かを守れるようになりたい！」

「そうか…一夏は何の為に力を使う？」

「俺は…家族を、千冬姉や蓮を守れるようになりたい！その為に強くなりたい！」

「へえ？世界最強の千冬さんに雲を割る斬撃を飛ばす俺を守るか…前途多難だなあ？」

「ウンウン」

「うっ…し、精進します…」

…でも、きつと一夏ならあの二人に追いつけるさ

「ま、偉そうな事言っただけど結局使い方を決めても暴力は暴力だからなあ。さつきも相手に怪我を負わせちゃったし…二人の覚悟はよく分かったから鍛えるけどなあ！」

「!!よっしゃー！」

「ただしー！」

「？」

蓮は口を三日月のように歪めて……

「地獄を味わう事になるからなあ？逃さないから…覚悟しろよ？」

「／（ 〇 ）／」



後悔し始めた…(泣)

「あ、一夏もな？」

「え”っ!？」

「あたりまえだよなあ？俺と千冬さんを守るんだろおん？」

「(・ω・)」

……きつと一夏には俺達より過酷な修業が待ち受けているんだろいな…

「よし！明日からさっそく始めるぞ!!」

「!!おおおおおおおお!!」(やけくそ)

こうして俺達は新たな決意を胸に進むのであった……

Side弾Sideout

「走れ走れく！オラオラオラアツ!!」

「!!ヒイヒイヒイヒイヒイッ!!」



「オラア！次は格闘訓練だ！もつと腰を落として構えろ！」

「ヒイイイイイイイツ!?」

「一夏は俺と組み手だ！掛かってこいやあ！」

「日頃の恨みいいいいいいつ！『オラオラオラオラアッ！』へブブブブ!?」

「ヒエツ…」

「チツ…気絶したか…次はお前等だ掛かってこい！」

「うっ…うああああああああああつ!!」

「オラオラオラオラオラアッ！」

「へブブブブブブブ!?」

「……チツ…気絶しやがったか…」

「「あああああああつ……………」」

「お前等…はあつ…」





「まだまだですよ師匠！行きますよおおおおおつ!!」  
「フツ…青二才が…」

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

後日、蓮仁はオーバーワークでぶっ倒れて病院に運ばれて両親と千冬と巖仁に滅茶苦  
茶怒られた

# 新春お正月スペシャル!～2021～

蓮仁「明けまして!」

その他大勢『おめでとうございます!』

作者「今年もよろしくお願いします!」

『新春☆お正月スペシャル〜!!』

作者「いや〜2020年も終わったな〜」

蓮仁「色々有った年だったからなあ」

一夏「それにしてもこの小説が始まってからもう4ヶ月ちよつとか〜」

千冬「ふっ…早いものだな」

鈴「それなのにまだアタシ達は中学生編なのだけど?」

作者「うっ?!い、いや〜ほらさ!外伝のSAOの方も書いてるからさ?」

蓮仁「インフィニット・ストラトスー 紅蓮ノ太刀ー 外伝 紅きサムライの妄想

物語」も是非読んでくれよな!まあ、ここのメンツだと俺しか出ないけどな!」

一夏「唐突に宣伝してるなあ…」

東「むっ！聞き捨てならないなあ！東さんだつて出てきたよ!?」

作者「電話だけな」

東「むうくっ！もつと出番が欲しいよ！」

千冬「コラ東。贅沢を言うな」

箒「そうどうぞ姉さん！私なんて本編に出てから3ヶ月ちよつとも出番無しだぞ!?電話だけとはいえ外伝までに出れたのだから良いではないか！」

金髪ドリル「そうですね！ワタクシ達なんてまだまだ先の登場ですわよ!」

男装女子「早く出番欲しいなあ〜」

シスコン会長「お姉さんも早く出たいなく？」

シスコン会長の妹「私も出たい…」

銀髪眼帯「フッフッフ…」

金髪ドリル「な、何を笑っておりますの…?」

銀髪眼帯「私は！近々！出番が！有るツツ！」

「?!?!」

箒「ど、どういう事だ作者!」ガシツ

作者「グエツ!?剣道女子強い！」



箒「早く話さんかつ!」

蓮仁「ほ、箒!もちつけ!作者が死ぬ!」

一夏「ほら!白目向いてるから!な?な?」

箒「……分かつた」

作者「はえ、助かつた……サンキューな二人とも。……さて、今度ドイツに行つてモンドグロツソ見るだろ?そんな時に出るんだよなあ」

千冬「私のカツコイイ戦闘シーン満載のモンドグロツソだな……フッフッフ……観客や読者の皆を魅了してやろう……!」

作者「あつ、千冬さんはあんまり出ないよ」

千冬「(・ω・)」

作者「まあ、あんまり詳しくは言わないからこの辺で終了!」

弾「続いては質問コーナーだ!」

数馬「誰の質問かな?」

蓮仁「それでは〇〇県〇〇市在住の友人Aさんからの質問です!」

鈴「結局知り合いからの質問なのね……」

蓮仁「『何故こんなに時間がかかっているんですか?はよ本編に行け』だそうです!」

作者「なるほどなるほど！結論から言う……無理です！外伝が中学生編でオーディナルスケール編まであるからめっちゃ時間掛かります！すいません！」

一夏「そもそも何で小学校からスタートなんだ？」

作者「いや、最初から強いにより、修業して段々強くなる方が作者的には好きだからさ……」

蓮仁「なるほどなるほど……つまり作者のせいで俺は地獄の修業をしないといけなかったと……ゆる”さ”ん！」

作者「ヒエツ……た、助けて師匠！」

厳仁「止めんか」

蓮仁「んげっ！?!し、師匠!？」

厳仁「なんの努力も無しに手に入れた力の価値など無い！努力し、精進しろ！」

蓮仁「は、はいっ！」

作者「ふ……助かった。さて、続いての質問です！」

千冬「次は○○県○○市在住の友人Bさんだ」

東「質問は『今の蓮仁と千冬さんは戦ったらどっちが強い？』だよ♪」

作者「ふむふむ！良い質問だ！今戦ったら千冬さんの方が強いぞ！」

箒「姉さんどだったらやっぱり姉さんの方が強いかな？」

作者「うん、そうだよ！」

一夏「やっぱり蓮でも千冬姉には勝てないかな？」

作者「でも千冬さんも無傷とはいかないね。蓮仁の現最強技の《時雨流・空烈斬》を喰らったら大ダメージだね」

鈴「それでも倒せないの!? 衝撃波で雲を割る威力なのに!？」

千冬「まだまだ負けんさ」

作者「まあ、千冬さんと束さんでも厳仁師匠相手だったら数秒で負けるけどね」

「!?」

作者「まあ、刀を抜かせないで数秒だけどね」(笑)

「!?!」

作者「ちなみにIS纏った状態なら流石に刀使うけど、30秒持たないかな」(笑)

蓮仁「この小説で最強のキャラじゃないか!?! よく生きてられたな俺は…」

作者「大丈夫大丈夫! ちゃんと死なないギリギリで加減してるらしいからさ! まあ、これから更に厳しい修業になると思うけどな」

蓮仁「(…ω…)」

作者「さて、次の質問だ！」

華「続いても友人Bさんからの質問よ」

蓮也「『蓮仁の母の華さんは見た目は高校生くらいらしいけど実年齢は？』…だそうです」

作者「華さんの年齢は『私は永遠の17歳よ』…い、いや実年齢は『永遠の17歳よ…？』…だから実年齢！」

華「作者さん？ゴニヨゴニヨゴニヨ…さて、私の年齢は？」

作者「はい！永遠の17歳であります！分かったか友人B！」

蓮仁（母さんは多分この小説で二番目に強い…）

蓮也（それでも俺の嫁は可愛い）

蓮仁（惚気んなよ親父コラ）

作者「で、では質問はこれまで！感想で質問とか書いてくれたらまた質問コーナーで答えちゃうゾ☆」

蓮仁「どしどし応募してくれよな！」

一夏「わざわざ作者の無茶振りで質問を考えてくれた友人Aさんと友人Bさん！ありがとうございます！」

作者「さてさて、あとは特に書くこと無いし、モンスターのガチャ結果でも発表しようか!」

弾・数馬「爆★死!爆★死!爆★死!爆★死!」

作者「テメエ等を爆死させるぞコラッ!」

弾・数馬「ヒエッ…」

作者「…ゴホン…それではまずビンゴの発表です!」

蓮仁「結果は…?」

作者「……………1列も揃わなかった…」(泣)

一夏「お、おおう…」

鈴「ドンマイとしか言いようが無いわね」

作者「さて…盛り下がった所でガチャ結果発表です!」

東「結果は…?」

蓮仁「デデデデデデッデン!」

作者「お正月エクスカリバー&お正月シャーロック・ホームズ！そ・し・て！新キャラのアルセーヌも当たりましたっ!!」

『はああああああああっっ?!?!』

友人B「お前?!ふざけるなよコラッ！俺なんか40回引いて30回爆死して要約出たのがモーセ（4体目）だぞ?!コノヤロー!?!」

友人A「あつ、俺もアルセーヌとお正月エクスカリバー当たった」

友人B「はあっ!?!」

友人A「しかもソロモンとハレルヤも当たった」

友人B「(；ω；)」

作者「なんか…ゴメン……」

蓮仁「さ、さてさて！友人Bさんは元気出してくださいね！其れでは少しばかり短編をお読みください！」

短編1 鬼ごっこ

蓮仁「一夏く!鬼ごっこしようぜ!」

一夏「またかく?まあ、いいけど」

千冬(鬼ごっこか……ふっ、久しぶりに参加するか。だが、いい歳して鬼ごっこに自分から参加するのも恥ずかしいな……よし!あっちから誘って来るのを待つか!)

蓮仁「ジャンケンで決めよう」

一夏「嫌だよ!蓮だと何を出すか見てから出せるだろ!」

千冬(HUNTER×HUNTERのやつだな)

蓮仁「しょうがないなら今日は俺が鬼な!よし始め!」

そして構える蓮仁と木の棒を持って構える一夏…

千冬「むっ?」

蓮仁「素晴らしい提案をしよう」

千冬「むっ??」

蓮仁「お前も鬼にならないか?」

一夏「ならない」

千冬「鬼ごっこつて鬼(滅の刃)ごっこかっ!?!」

短編2 麻婆豆腐

鈴「いらつしやいませ〜…つて何だあんた達か〜」

弾「おいおい酷いな…」

数馬「後で一夏と蓮くんも来るよ」

鈴「そ、そう!」

弾(露骨に喜んでやがる)

蓮仁「オツス!お邪魔します!」

一夏「こんにちは〜」

鈴「いらつしやい!」

蓮仁「よお鈴!俺は回鍋肉セット大盛りで!」

一夏「俺は酢豚セットで」

〜十数分後〜







ビリビリビリ↑(袋やぶき)

蓮仁「……んなつ!? エ、エロ本……だと?!? な、何を考えてんだあのエボルラビツトおおおおおおおおおつ?!?」

華「ちよつと朝から何を叫んでる……の……あつ(察し) あらあら……ごゆつくり〜おほほほ」

蓮仁「待つて母さん! 違うから! 誤解だからああああああつ?!?」

〜30分後〜

蓮仁「はあつ……なんとか誤解が解けた……まったく何を考えてんだかあのエボルラビツトは……そもそもなんだよこの【ポニーテール幼馴染の巨乳剣道女子】って……どんだけ属性盛ってんだよ……」

ガラガラガラ

一夏「蓮く弾と数馬と遊ぼ……う……あつ(察し) 悪い……ごゆつくりな」

蓮仁「だから違うんだよおおおおおつ!?!」(泣)

その後なんとか誤解を解いた

エロ本は弾にあげました

## 原作前第23話 ヤクザ祭りだワツシヨイワツシヨイ！

前回のあらすじ！

不良に絡まれた数馬！

そこに駆け付け不良を倒したのは弾！？

しかし他にも仲間がいたので逃走！

絶対絶命の二人の前に現れたのは蓮仁と一夏！

蓮仁が囷になり、なんとか助かった

そして弾と数馬、あと一夏は蓮仁に修行をつけて貰う事になったのだ……

そして

「IS—紅蓮ノ太刀—外伝—紅きサムライの仮想物語—」

のあらすじ！

ようやく買えたゲーム「ALO」をプレイするレンジ。

そこで出会ったプレイヤー、キリトとリーファの3人（+ユイ）で世界樹を目指す事に。

様々な戦いを乗り越え、遂に世界樹に到着した。

しかし、キリトとリーファにトラブルが発生。

二人は互いの本音をぶつけ和解する。

そして世界樹攻略が始まった。

しかし圧倒的な戦力差によりピンチに陥った…

その時、シルフ、ケットシー、サラマンダーが増援に駆け付け、ガーディアンの軍団を見事に突破した。

そしてレンジとキリトは世界樹の頂上に到着した。

キリトはアスナと再会し、喜びあっていた時にオベイロンこと、須郷伸之が現れGM権限を使って二人を追い詰める。

しかしヒースクリフこと茅場晶彦の力を借りたキリトと、大天災籐ノ之束の力を借りたレンジがオベイロンを倒した。

そして現実世界にて蓮仁は須郷を捕まえ、束に引き渡した。

キリトは無事にアスナと再会を果たすのだった…

## Side 蓮仁

なんだろうか：スゲー久しぶりな気がする：

まあ、話が進むの三ヶ月ちよいぶりだからかな？

300人を人体実験に使っていたり、女性<sup>アスナ</sup>をゲーム内に閉じ込めて（\*、旦、）ハアハアしていた変態を倒した今日このごろ

キリトの知り合いも紹介してもらったし充実したゲームライフを送っているよ

まあ、しっかり修行もしてるけどな

弾と数馬もだいぶ良くなってきたな

体力は無いけど：

一夏はかなり強くなった

正直言つて一夏は俺より戦闘の才能がある

もしも俺の修行を一夏が受けていたら、おそらく俺より強くなっただろう……

まったく、織斑家の血筋は凄まじいなあ

「蓮く?ちよつと買い物に行つて来てちようだい」

おつと、母さんに買い物を頼まれた

パパパツと終わらせて来よう

「了く解!」

「はい、コレが買い物リストね。余つたお金はお小遣いにして良いわよ」

「え!?マジで!よつしゃあ!行つて来ます!」

そして靴を履いて玄関のドアを開ける

「行くぞ黒丸!」

「にゅあ〜!」

肩に黒丸を乗せながら走り出す

お小遣いを求め!レッツゴー!

なんて思ってた時期が俺にもありましたよ……

もらった金額が明らかに少ない

そしてエコバッグに入ってるメモとスーパーのチラシ……

なるほどな……

く、くくく……

「母さんめ……俺に小遣い渡すつもり無いなあッ!?」

「にやあッ!?」

ぬわああああああん!!!

ちくしょう!

ふざけんなよマジで!この金額だと一箇所のスーパーで全部は買えないじゃないか

よ!?

わざわざご丁寧にいろんなスーパーのチラシ入れやがって!

スーパーを駆け巡って商品を最安値で買い揃えろってかちくしようおおおッ!??

くそっ……!こうなったら貧乏時代に最安値の商品を知り尽くした一夏に頼るしか

ねえ……!

という訳で電話をかけてつと……

……





「ンニャー！」

「一晩に単身丸腰で抗争相手の事務所を十ヶ所潰したと言われている伝説のヤクザ  
不死身の籠<sup>ふじみみたう</sup>」

しかし今は足を洗って専業主夫である

「お久しぶりです龍さん！」

「元氣そうで何よりや。倒れた言うから心配したで。黒丸も元氣そうやなあ」

見た目完全にヤクザから足洗ってない人だけどいい人だ

母さんとも主婦仲間らしいし

あと動物大好きだし

「それで、なんか困つとるんか？」

「実は……」

今までの経緯を話す

すると……

「なるほどなあ……体力に自身はあるか？」

「あります！」キリッ

「にゃー！」キリッ

黒丸もキリッとするのか（困惑）

ずっと俺の肩に乗ってるのに……

「なら……体で稼いでもらおか」

……うん?

体で稼いでもらおか?

い、いつたい何を……

「もやしとキャベツはマツヨスーパ―! 卵はハイワマートが最安値ええ!」

「はいっ!」

「にやっ!」

俺達は今スーパーを駆け巡っている

龍さんの最安値で商品を買っているか、特売になってる商品のスーパーを聞きながら走る走る

そして黒丸は俺の頭に乗ってる

いや走れよ!?

「次はあそこのスーパーやでええ!!」

「はいっ!!」

「にやっ!!」

(くっ、めちやくちや足早いやないかい…)

様々なスパーを巡り、あと残すは唯一つ…

「あ、後はハイワマートの卵だ…!」

そしてハイワマートに入った俺達は卵コーナーに行く

そして最後の一つの卵!しかし俺達は二人…

俺は龍さんに振り返ると…

「行くんや!」

「龍さん…!」

龍さん…ありがとう!

そして卵に手を伸ばし…俺の指と誰かの指がぶつかった

「あっ!」

「蓮仁くん!」

「直葉!」

なんとぶつかった相手は先日ゲームで知り合った桐ヶ谷直葉であった

そして最後の一つの卵…

ならばする事は一つ…

「これは直葉が買うんだ」

「えっ、でも最後の一つだよ?」

「大丈夫だ。だからこれは直葉が…」

俺はそう言つて直葉の買ひ物カゴに卵をそつと入れた

そして俺は直葉に背を向けて歩く

卵は手に入れられなかったが悔いは無い

せつかく譲つてくれた龍さんにも誤らないとな

すると直葉から声をかけられた

「蓮仁くん……割り勘にして半分こにしない?」

「するする!お願いします!」

その手があつたか!流石直葉だ!

思わぬ助け船が来やがったぜ!

マジでありがとうな直葉!

持つべきものはシルフの友だな!

そして卵を割り勘した、半分こにした卵パックを直葉から受け止る

「本当にありがとうな直葉。それじゃキリトによろしくな!」

「んにゃ」

「うん!またね蓮仁くん!」(そういえば今更だけどなんで頭に猫乗せてるんだらう…)

?)

そうやって俺達は別れた

そして龍さんとの帰り道

なんとか買い揃える事ができました！

しかもなんと2000円のお釣りもゲット！

やったぜ！成し遂げたぜ！

そしてクレープ屋を発見した

「あ、龍さん！俺クレープ買ってきます」

そうやってクレープ屋に向かい注文する

「バナナクリームスペシャルデラックス一つ下さい」

「は〜い。バナナクリームスペシャルデラックスね」

すると龍さんが反応した

「お前は…虎二郎…!!」

“不死身の龍”と双壁をなすと言われてた超武闘派ヤクザ  
剛拳ごうけんの虎とら”  
しかし今は組が潰れクレープ売りである

そしてコテを龍さんに投げたのでキヤツチする

「久しぶりだな龍よお……てめえ……俺がいねえ間に組潰しまくってくれたそうじゃねーか?」

「あの……クレープは?」

「おかげで俺あ行くアテもなく、今や露天商よ……」

「クレープ……」

「そんなお前が……こんな所で何してやがる……おお!」

「(・・ω・・)」クレープ……

「俺は今専業主夫や」

「はっはっはっは! 喧嘩しか能のなかった奴が専業主夫だあ!?!……笑わせんじゃねえ!!」

「(・・ω・・)」スルーサレタ……

「……俺は専業主夫、お前はクレープ屋。俺らの流儀やり方は分かっとなるな?」

「……上等だ」

そして二人は食材を取り出して何かを作り始めた

……俺のバナナクリームスペシャルデラックスは……?

そろそろ泣きそうだよ……？（・ω・）

そして何かが出来たようだ

「完成や」

「トロピカルフルーツジャンボデラックススペシャルクレープ!!」

長い（小並感）

「杏仁豆腐とフルーツジャムの苺添え!」

オシヤレ（小並感）

そして自身の作ったスイーツの写真を取りツイッターに載せた

そして俺はスイーツを頂いた

「はむっ……モグモグ……!美味い!はむっ……モグモグ……!こつちも美味しい!はむっ……モ

グモグパクパクモグモグパクパク……」

そして食い終わった時に勝敗は決した

龍さんにいいね!が入って勝ったのだ

……さてそろそろ帰ろうかな?

PLPLPLPLPLPLPLPLPLPLPL

んあ?電話だ。相手は……弾?

「もすもすひねもす?」



『れ、蓮! 大変だ! 一夏が!』

「…!? 一夏がどないしたんや!」

『何で関西弁!? 一夏が集英組っていうヤクザの家に連れてかれたんだ! お、俺…見てる事しか…出来なくて…クツ…!』

「弾…:分かった直ぐに行く。よく連絡してくれた! だから気に病むな!」

『蓮…すまねえ! 一夏を任せた!』

そして電話を切つて気づいた

後ろに龍さんと虎さんがいる事に

「…行くんか?」

「はい」

「そうか…なら俺も行くでえ…主夫仲間の一夏くん奪還や」

一夏とは主夫仲間だったのか (困惑)

「なら俺も行くぜえ…集英組か…あそこには竜之介つて名前の奴がいるからなあ…龍はコイツ一人で十分だ」

「んにゃ!」

※一緒に行くにゃ!

「龍さん、虎さん、黒丸…!」

「ほな、行くでえ！」

そして俺達は進むのだった……

くその頃の一夏く

「これ、先生から預かったプリントな」

「いやくありがとうな。織斑」

「いや気にしなくて大丈夫だ。それより風邪は大丈夫なのか一条？」

「大丈夫だ。ただ竜達が大袈裟に騒ぎ過ぎなだけだから……」

「ははは……それにしてもヤクザの二代目だとはなあ……囲まれた時はヒヤヒヤした……」

「わ、悪いな……よく言い聞かせるから……あと！二代目じゃ無いから！」

「そうなのか……？　そういえば何か親近感が湧くんだよな。……声か？」

「同じ声優出しな」

「メタいぞ一条……」

「……なあ、下の名前で呼ばないか？　嫌じゃ無ければ……」

「うん? いいぞ? なら、楽だな」

「ああ、一夏!」

こうして休みだった一条<sup>いちじょう</sup>楽に先生から頼まれたプリントを届けた一夏は新陸を深めるのだった

「ここが集英組か…」

待つてろよ一夏! 今助けに行くからな!

そして扉を蹴り破…るのは流石にどうかと思うので、普通に扉を開けて中に入った  
そして俺達3人は声を揃えて叫ぶ

「「カチコミじゃあああッ!!」」

その声を聞きつけてゾロゾロとヤクザが出てきた

「なんだなんだあ!?! ……?!?! 不死身の龍に剛拳の虎!?! そして…誰だ? ……カチコミ  
じゃあ! 出逢え出逢え!」

さあ、戦闘開始だ！

そして俺達は突っ込んでいった

龍さんと虎さんの猛攻でどんどん敵を蹴散らしていく

「オラア！」

「まだまだ行くでえ！」

「んにやあああああつ！」

「ぐはっ!?こ、この黒猫……強い……」ガクツ

黒丸も次々にヤクザを引つ掻き、噛みつき、体当たりしてふっ飛ばしていく

この二人と一匹……強い……！（確信）

そして俺もただ見ているだけでは無い

「フツ！」

「があっ!?!」

鳩尾に決めて一撃で倒し、投げ技で気絶させて無力化していく

そしてドスを奪い取り引き抜く

（……！恐ろしく手に馴染む……！なんだこれは……？）

初めて握るドスなのに手に馴染む……しかし好都合だ

手に馴染むなら扱いやすい

俺はドスで相手の服を切り刻み、ふんどし一丁にする

「「「きやあああああ!?!」」」

おい止めろ! そんなドスのきいた声で女子みたいな悲鳴を上げるな!?

あとふんどし隠すのは分かるけど、なんで乳首まで隠す!?

お前ら男だろ!?! 隠すなよ! 逆にキモいんだよ!

「ん? 今日随分騒がしいな一征?」

「んん? 確かに。何かあったか?」

「く、組長!」

「なんだ! 今は客の相手をしてるんだぞ!?!」

「そ、それが! 不死身の龍と剛拳の虎、そして恐ろしく強い中学生と黒猫がカチコんで来  
やした!」

「なに? 龍に虎だと?」

(恐ろしく強い中学生……まさかな……)

そして組長の一条一征とその客人は立ち上がり蓮仁達の元に向かうのだった……

「派手にやってくれたのお？不死身の龍に剛拳の虎……ああ？」

「お前が竜之介か……」

「おとなしく一夏くんを返すんやなあ……」

一種即発の空気

そして最初に動いたのは蓮仁だった

「はっー！」

「ぐおっ!!」(なんじゃああ!!この力は!!押し負けてる!!)

ドスとドスで鏝迫り合う

蓮仁の怪力に押される竜之介

「一夏を……一夏を返しやがれ!うおおおおお!!」

一気に力を込めた瞬間

ゴチン

「へふっ!!」

後頭部を思いつきり殴られた

「くくくッ!こ、この痛み…まさか!」

顔を上げた先にいたのは

そう、蓮仁の師匠の時雨厳仁だった

「アイエエ!師匠!?師匠ナンデ!」

「そりやあここの組長とは知り合いだからな」

「Σ(。▽。ノ)ノ」

マジすか!?!師匠は実はヤクザと繋がってた!?

「それで?何をしておる?」

「実はカクカクシカジカでして…」

一夏が連れて行かれたと説明をしていた時だ

「蓮?何をやってんだ?」

「!?!いい、一夏!?!無事だったのか!?!弾にヤクザに連れて行かれたって聞いたから心配した

ぞ!?!」

「…?無事も何も、ただ楽にプリント届けに来ただけだぞ?」

「えっ?」

そして同じクラスの一条がいる事に気付いた

一条にプリント届けに来た↓ここが一条の家

つまり…弾のはやとちり…!

俺はその場に座り左手を広げながら地面に付けた

そして右手に持ったドスを左手の小指目掛けて振り下ろす…

「待て待て待て待て!」

一夏と一条に止められた

「くっ…離せ! ケジメつけなきゃいけないんだよ俺は!」

「だからといって指を切り落とすな!」

「マジで止めるよ!?! ここ通る度に『あ、ここで同級生が指を切り落としたなあ…』とか思

い出すだろうが!」

「せやで蓮仁くん! ここは俺が指を詰めたる!」

「アンタも止める!」

そしてしばらくして落ち着いてきたので話し合う

「この度は私の勘違いにより多大なる迷惑を掛けてしまい誠に申し訳ありませんでした

…」



俺達は土下座をしていた

それはもう完璧であり、美しい土下座である

見ているヤクザ達も『ほう…』と感嘆の声をあげている

「すまないな一征…弟子の不始末は師匠である俺の不始末だ…今回のブツはタダにするからそれで手を打ってくれんか？」

「まあ、こちらとしては面白いもんが見れたからいいんだがなあ…まあ、貰えるもんは貰っておこう」

そう言つて許してくれたようだ

師匠！ありがとう御座います!!

「そういえばブツって何ですか？」

「刀だ」

「ファッ!?刀!?!」

「なんだ知らんのか?お前さんの師匠は知る人ぞ知る凄腕の鍛冶師だぞ?刀と包丁作りの腕なら右に出る者はいない程のなあ!」

マジか!師匠すげえ!今までお金とかどうしてたのか気になってたけど鍛冶師で稼いでたのか!

「ん?なら俺の刀も師匠が作ったんですか!?!」

「そうだ」

だからドスが異様に手に馴染んだのか！

師匠が作ったものなら手に馴染む筈だよ！

「それにしてもウチの連中をあんなに簡単に倒すとは流石はお前の弟子だな」

「まだまだ半人前以下だ」

おつふ…師匠が厳しい…

俺はまだまだハーフボイルドってな…

「どうだ？ウチの実息子が家業を継いだら右腕になってみないか？」

「親父！ヤクザは継がねえって言ってるんだろ！」

一条は継ぎたくないらしい

夢は公務員になる事だつてさ

「まあ…仕事に困つたら考えておきます」

「そうかそうか！はっはっはっはっは！」

こうして無事(?)に解決し、俺達は解散した

龍さんと虎さんにもお礼と謝罪をして別れた



## 番外編 バレンタインとは男の戦いである

前回のあらすじ！

買い物をしている蓮仁！

元ヤクザの龍や虎二郎とあったりしていた！

そこに弾からの連絡で一夏が連れて行かれた!?

集英組にカチコミした蓮仁達！

しかし弾の勘違いで一夏は無事だった!?

その後一条楽と仲良くなり無事？に帰ったのだった…

2月14日 バレンタインデー

この日、男達はいつもと違った様子をしている  
身だしなみチェックをする者

髪型を整える者

歩き方さえも変えている者……

その者達は皆、同じ事を思っているだろう……

((((チョコが欲しい!)))

そしてここにもチョコを欲する人物が……

赤い長髪にヘアバンド、いつもより気を使っている気さえするその髪の毛のツヤ……

顔はイケメン

しかし中身は残念……

五反田弾である

学校についた弾は下駄箱の前に立つ

その手は緊張に震えていた……

(落ち着け……きつと大丈夫だ……一人くらい俺を好きな女の子はいる筈だ! 義理でも良い

! だから! 俺は開けるツ!)

弾は勢いよく下駄箱を開け放つ

「……!?!」

そこには…

靴しか無かった……

「ジーザスツツ!!」

「何をやってるの?」

そこに現れたのは弾の親友にしてフツメンの御手洗数馬

「数馬! 下駄箱にチョコが入って無かったんだ!」

「そっか。まあ予想通りだね」

そう言つて下駄箱を開ける数馬

その下駄箱には…

靴しか無かった

「よ、予想通りだね…」

「はっ! やっぱり無いか! 俺達は所詮貰えないんだよちくしょう!」

「何やってんだ二人して?」

そこに現れたのは織斑一夏に緋龍蓮仁の二人である

二人はいたつて普通であり、いつも通りだ

「けっ、来やがったなこの野郎」

「朝から機嫌悪いなオイ……」

そう言つて下駄箱を開けた蓮仁

その下駄箱には……

靴しか無かつた

「はっはっはっは！なんだよ！お前もこつち側の人間かよ!? オイオイオイ！なあ？俺達はズツ友だなあ！H A H A H A H A H A H A H A H A!!」

「イラッ……」

「はあ……」

蓮仁と数馬は凄くウザそうにしている

弾は喜々として二人と肩を組んでいる

「さて、一夏あああッ!! テメエ早く開けやがればカ野郎コノ野郎!」

「うわっ、なんだよ弾? ビートたけしみたいになつてるぞ?」

そう言つて下駄箱を開けた瞬間……

ドサドサドサドサドサ!

チヨコの雪崩が起きた

「うわっ! ビックリした」

「「……………」」

もはやークラス分はあるだろうそのチヨコの量に圧倒された3人  
そして弾は膝から崩れ落ちた…

「だ、弾！しつかりしろ!？」

「まだ机の中にあるかもしれないよ!？」

「はあっ…はあっ…そ、そうだ…まだ、戦いはこれからだ…」

既に満身創痍の状態の弾を抱えて四人は教室へと向かう

そして教室の扉を開けると……

もはや机の中に収まりきらずに机の上までチヨコが乗っている一夏の席が…

「んぐっ!？」

「弾！見るな！お前には刺激が強すぎる!？」

「早く席に連れて行こう!？」

蓮仁と数馬の二人は弾を席に連れて行く

弾はこの時既に瀕死の重症である

これを回復するにはチヨコを貰うしか無い…!

覚悟を決めた弾は机の中を覗く

昨日のうちに中身は全て出した空の机…



その中は…

空だった

「ぐはっ!」

「弾!」

弾は吐血した

床に倒れ、意識が朦朧とするなか見えた光景…

「お、織斑くん!こ、コレ受け取ってください!」

「ん?くれるのか?ありがとう」(イケメンスマイル)

一夏が手渡しで…大事な事だからもう一度言うが手渡しでチョコを貰っている光景

…

それを見た弾は…

「だからよ…止まるんじゃねえぞ…」キボウノハナ

弾は弾長団長になったのだった…

「だああああん!!」

そして弾の意識は暗転した…

## Side 蓮仁

弾がチョコを貰えないショックで気絶したでござる…

いや、チョコが貰えない事より一夏のチョコの量にショックを受けたんだろぅなあ…  
俺も一つも貰えないから悲しい…（・ω・）

見ろよあの一夏の机の上。まるで富士山…いや、あれはエベレストだな…もはやそんな感じの量だよあれ…

まったく…：小学校の時からあれだから本当に凄いやなあ…

え？羨ましいかって？

はっ！別に全然羨ましくなんて…羨ましくなんて…

羨ましいよコンチクショウツツ！

分かるか!?毎年一夏のおこぼれでチョコを貰ってきた俺の気持ちか!?

『織斑くん！コレどうぞ！あ、緋龍くんにもあげる。はい』

軽い！俺のは軽いな！

凄くボンと渡してくるもん

（あつ、義理だな）としか思えない渡し方だもん！

昔なら別にどうとも思わなかったよ！

貧乏時代の一夏は…

『よっしや！食費が浮いた！』

とか言ってたんだぜ!?それを隣で聞いた俺は何か泣きそうになったよ!

チヨコを飯代わりにしようとするんだもん!

だからその日は一夏と千冬さんを連れて(連行)ウチで一緒に飯食ったよ…!

思い出したら切なくなってきた!

それがだよ!

そんな一夏が今では何て言ってると思う!?

「こんなに食べ切れるかな?」

「食べ切れよお前!一つも無駄にすんなよお前!」

ちくしよ!何が食べ切れるかな?だよバカ野郎!

俺だってそんな事を言ってみたいよ!

因みに俺は大食いだから生半可な量じゃそんな事を言わないぜえ!

「よう蓮仁」

そう聞こえたので振り返ると

「おっ、楽か。おはよう」

先日仲良くなった一条楽がいた

声だけ聞いたなら一夏と勘違いしそうになるんだよなあ

「楽はチヨコ貰えたか？」

「いや、俺は…」

そう言つてとある女子をチラチラ見ている

ははーん？

「なるほどなあ？」ニヤニヤ

「な、なんだよ！」

「いや、青春してるなあゝって」

にしてもあの女子…なるほどなあ？（2回目）

「楽の気になる娘はズバリ小野寺だよ！なあ楽？」

「おま！集！何を言つてんだ!？」

「ああ、やつぱり小野寺さんか」

「な、蓮仁まで!？」

滅茶苦茶慌てふためく楽は置いてこう

「あんだけチラ見してれば分かるよなあ？なあゝ舞子？」

「ねえゝ？逆に気づかれないと思つたのか楽う？」

「そ、そんなに分かりやすいか!？」

「そっだよ」

流石にあんなに見てたら分かるっつーの  
にしても小野寺さんか

誰にでも優しく可愛いと人気の女子だ

因みに実家の和菓子屋は俺の行き付けの店だ

オススメはどら焼き！

「でも楽はまだ話した事無いんだってさ」

「は？なんだよビビってんのか？」

「べ、別にビビってねえよ！ただ話す機会が無いだけで…」

それはビビってるから話しに行けないのでは？（凡推理）

「なら話しにいけよオラァ！」

俺は背中を押すが頑なに拒否する

「馬鹿止めろ!!心の準備つてもんがあるだろう!!」

「それに今行ってもチョコが欲しいアピールしてる奴にしか見えないんじゃないやね？」

舞子の言葉に動きを止める

ふむ…確かに今はタイミングが悪いか…

まあ、いつか機会があるだろう

樂を押すのを止めた俺は席に戻る

するとそのタイミングで鈴が教室に入ってきた

いつもはもつと早く来るのにどうしたんだ？

しかも目が血走ってて隈まである

怖い（小並感）

ギロツ

ヒエツ…

こ、こつちを見た!?

しかもこつちに来た!?

や、やべえよ…俺何かしたかな…?

俺がガクブルしているうちに目の前に鈴がいた

「お…おおお…おはよう御座います鈴さん…」ガクブル

「な、なんで敬語なのよ！まったく…は、はい！コレあげる！」

そう言つて差し出してきたのはチョコだった

「お!?おおおお!?神だ…神が降臨した…!」

突然鈴に後光が指す

なんと神々しいことか…ありがたやありがたや…

「ちよ、ちよっと！なんで拝むのよ!？」

「鈴が神だからだ！」

「言っとくけど手作りじゃ無いから…」

「ん？手からチョコの匂いするから手作りだと思ったけど違うのか？」

「アンタは犬か！」

「まあ、ありがとうな鈴！今年一つ目のチョコゲットだ！」

「そ、そう！アタシが一つ目なのね！ふふん♪ほら弾に数馬に一夏！アンタ達にもあるわよ！」

「神だ…神が降臨した…」

「アンタ達もか!？」

弾と数馬もチョコを貰って鈴を拝み出した

にしても手作りじゃ無かったか

やっぱり手作りチョコには憧れちゃうよなあ…

Side蓮仁Sideout

(い、言えない……納得のいくチョコを徹夜で作っててようやく出来たのがガッツリとハート型で恥ずかしくなつて砕いてしまったなんて言えない……事前に市販のチョコ買つててよかつた……)

鈴は蓮仁に手作りのチョコを渡そうと徹夜で作っていたのだ

しかしなかなか納得のいくものが出来なくて朝になつてようやく出来たのがハート型のチョコだった

それを見た鈴は急激に恥ずかしくなりチョコを砕いてしまった

勢い余つた鈴は時計を見て絶望しながら学校の準備を済ませて泣く泣く市販のチョコを持つて登校したのだ

「さてさて、先生が来るまでまだ時間あるしちよつと食べちゃお」

「よく朝から食べるな……」

一夏は呆れながらそう言う

蓮仁は袋を開けて一つチョコを取り出して口に入れた

「モグモグ……ングッ!?!」

変な味に驚き飲み込んでしまった



不味くは無いが美味しい訳でも無い、今まで食べた事の無い味のチョコだ  
もう一度食べてみるがやはり変な味がする…

そして数分が経った時に変化が現れた

「あ…？なんかフラフラする…」

「は？どうしたんだよ蓮…」

一夏がそう訪ねてきた時に、蓮仁は椅子から落ちて倒れた

「!?おい蓮!?どうした!?!」

突然倒れた蓮仁に一夏が抱き起こす

「！顔が真っ赤だし目の焦点もあつてない！」

周りの人達もざわつきだした

しかし蓮仁はうまく動けない様子である

足元もおぼつかないらしく立ち上げることが出来なくてまた倒れてしまう

そして…

「あ…：…あ？一夏がたくしやんいりゆう…」

「…：…は？（待て待て…この状態って酔っ払った千冬姉そっくりだぞ？まさか…）」

一夏は蓮仁の食べたチョコのパッケージを見る

そこにはウイスキーボンボンと書かれていた

そのパッケージを横から見ていた鈴が声をあげる

「嘘!?! それパパ用に買ってたウイスキーボンボン!? 間違つて持つてきちゃった!」

「つまり…蓮は酔つてるのか…」

「おりえは酔つてにやい!」

「「酔っぱらいの言うセリフじゃねえか!?!」」

しかも呂律も回らない状態まで酔っぱらっていた

たった2つのウイスキーボンボンで

「蓮つて酒に弱かったのか…」

「意外だな…」

「弱点として使える…?」

「弾、止めといた方がいいと思うよ?」

「おりえは! 酔つてにや スピー」(。—ω—) z z z

? 『寝たあああッ!?!』

その後保健室まで運ばれた蓮仁は結局放課後まで起きなかつた

S i d e 蓮仁

起きたら放課後だった(絶望)

何故か保健室に寝ていて、起きたら放課後だった(絶望)

起きてしばらく絶望したら一夏と鈴が来た

「……起きたのか蓮!」

「ほっ……良かった……」

「なあ……なんで俺は保健室に寝てたんだ?」

「は?覚えてないのか……?」

「は?何を?」

そこからカクカクシカジカと説明された

鈴が渡してきたのは鈴の親父さんに渡そうとしたウイスキーボンボンだった

俺はそうとは知らずに食べてしまつて酔っぱらつた

そこから泥酔いして保健室まで運ばれた

……………

まったく記憶にねえ……!

え、怖っ!? 記憶に無いのってこんなに怖いのか!?

てかウイスキーボンボン2つで酔っぱらうとかどんだけ酒に弱い俺は!?

「……………帰ろっか」(現実逃避)

「そ、そうだな…」

「帰りましょうか…」

荷物を持ってきてきてくれたので職員室に寄ってから校舎を出る

体感的にさつき学校に来た感じがするからなかなかあ…

そう考えながら校門を出ようとすると一台のバイクが止まっていたそしてその横にいる二人の顔を見てビツクリしたよ

キリトと直葉が居たんだから

「よーやつと来たな」

「やつほー蓮仁くん」

「キリトに直葉? どうしたんだこんな所まで?」

そう聞いたら直葉がこつちまできて紙袋を差し出してきた

「こ、これ! バレンタインのチョコだから食べて!」

「お、おおお! ありがとう! 大切に食べる!」

「う、うん! そ、それじゃあまたね! 行こうお兄ちゃん!」

「え、ああ……じゃあな蓮仁！」

そう言つてバイクに乗つた二人は走り去つていった

「……………」 ゲシゲシ

「……………あのー…鈴さん？無言で脛を蹴らないでくれる？」

「アンタ……誰よあの女は!?! こんな超絶美少女の幼馴染が居るつてのに！ いったい何処から引つ掛けてきたのよ!?! オラアン!?! とつとと白状しなさいよこの無自覚女誑しの大馬鹿野郎が！ やつぱり男なんて胸のデカイ女の方が好きなのよ！ 女の価値は胸の大きさだけじゃ無いんだからね！ うああああああん!?!」

そう言いながらひたすらに俺の足に蹴りを入れてくる鈴

しかも滅茶苦茶泣いてるときた

そして痛い（泣）

「ちよ!?! 痛いから!?! 止めてくれ！ 弁慶の泣き所を蹴るの止めてくれ!?! あと無自覚女誑しは一夏の方だろ!?!」

「は？ 俺は女誑しなんかじゃないぞ？」

「アンタは黙つとけ！」

「ヒエツ……」

一夏が鈴の覇気にあてられ萎縮してしまつた……

鈴は霸王色の覇気の使い手か…（困惑）

「待て鈴！直葉とはゲームで知り合ったゲーム友達であって決してやましい関係なんかじゃ無いからな！ゲームのフレンド！オーケー？」

「ならなんでゲームのフレンドがわざわざチョコを渡しに他校に来るのよ!? うあああああん!?!」

「マジでどうした!?!落ち着け鈴!」

結局鈴を宥めて、更に説明を長々としてようやく帰ることが出来た……

疲れた…

そして一夏と千冬さんを誘って家でご飯を食べてリビングでくつろいでいると千冬さんがチョコをくれた

「いつも世話になっっているからな…私からの感謝の気持ちだ」

おお…ありがたやありがたや！チョコ3つも貰えたぞ！

母さんからも貰ったけどそれはノーカンだ！

さっそくラッピングを外すと…

謎の物体が現れた

「今年は手作りだ」ドヤツ

…：…うん？これは…：チョコ？

いやいやいや…：チョコじゃ無いよね？

だつて紫色だよ？

しかもドロドロしてるし、なんか目と口みたいなのも見えるような…

アアアア…

待て待て待て待て！今の何!?今チョコからなんか聞こえたよ!?

何コレ生きてるの!?!ヤバいだろコレは!?

なんかもうポケモンのベトベトンにしか見えなくなってきた!?

「こ、これは…：なんというかずつと見ておきたいですね…」

ずつと見ておきたい↓見るだけで食べたくない

遠回しに食べたくなないと伝える作戦に出た俺氏

しかし…

「ふっ…：安心しろ。まだ沢山あるから…」

そう言つて沢山のベトベトン<sup>チヨ</sup>を出して来た

「( ^ o ^ )」

絶望する他ない…何故なら逃げ道を断たれたのだから…

俺は紙を取り出して文章を綴る

まあ、要するに遺書だ

このベトベトン<sup>チヨ</sup>を食つて生きている保証は無いからな  
遺書だけでも書いておかないと…

そして俺は意を決した

「いただきます…!」

そう言つて口にベトベトン<sup>チヨ</sup>を入れて一気に飲み込んだ

決して味わう事はしない

味わつたら死ぬ(確信)

飲み込んだ…飲み込んだぞ俺は…!

はっはっはっは!見たか!飲み込んだぞ俺…!は…!は…!は…!

.....

.....



.....

.....

.....

.....

S i d e 蓮 仁 S i d e o u t

その後、千冬の手作りチョコを食べた蓮仁がどうなったのか？  
それはご想像におまかせしよう

ただこれだけは教えよう  
バレンタインデーの夜にとある病院に運び込まれた男子中学生がいたらしい：

# 原作前第24話 行くぜドイツ!モンドグロッソと不穏な影!?

前回のあらすじ!

バレンタインデーの日にチョコを期待する男子!

しかし一夏ばかり貰っていて誰も貰え無い!

荒れ狂う男子達

そんな男子にチョコをあげた鈴は神になった!

蓮仁はウイスキーボンボンで酔っ払い、最終的に千冬手作りチョコ暗黒物質を食べて瀕死になるのだった:

S i d e 蓮仁

季節は春

3月に入りもうすぐで春休みが始まる

そして春休みに入つてすぐにドイツにて第二回モンドグロッソが開催され、俺と一夏の二人は千冬さんを直接応援しに行く事になった

鈴や弾に数馬も誘つたがそれぞれ忙しいようだから二人だけだ

パスポートも既に作つてあるし荷物もまとめ終わつた

残り数日の学校生活が終われば春休みに入るから、最初の数日で宿題を全部終わして  
いこう！行きたい場所を調べよう！お土産は何があるかな？などと話しに花を咲かせている

そして俺は今エギルことアンドリユー・ギルバート・ミルズさんの店《ダイシー・カフェ》に来ている。夜はバーもやつてるみたいだし今度千冬さんに教えよう

そしていつものゲームの面々がいる

まあ、平日だから仕事のクラインと、まだ入院してるアスナは居ないけど

こうしてゲーム意外で合うのはなんだか微妙に緊張しちゃうんだよなあ

でもみんな見た目がゲームもリアルも同じだからそこまででもないか

「てな訳でドイツに行つてくるから春休みはしばらくALOにダイブできないからそんなところよろしく！」

『待て待て待て！』

「だが断る!」キリッ

「いや、断るなよ!」

「蓮仁くんってブリュンヒルデの織斑千冬さんと知り合いだったの!」

「隣の家だし弟の織斑一夏とは幼馴染だYo!」

『隣の家に幼馴染!』

「てかこの前にキリトと直葉が学校に来た時に俺と一緒にいた男が一夏だけ?」

「ええ!」

意外な所で超有名人の親族にあっていたのには二人もビックリだ

そしてシリカこと綾野珪子が身を乗り出して鼻息荒く質問してくる

「さ、サインはあるんですか!?!写真は!」

「ちよ!近い近い!?!落ち着けよ!?!サインは持って無いけど写真ならあるから!ほら!」

俺はスマホの写真を見せた

そして皆が食い入るように見ている……ってエギルまで見てんの? 仕事でしよ貴

方は…

あ、エギルの奥さんにお盆で叩かれた

しかも凄まじい音がしたぞ…あの人…強い(確信)

「ちよつとちよつと…これが織斑一夏!?!すごいイケメンじゃない!」

「おっ、そうだな」（、、、、、、）

そう言つて一夏に興味を示したのはリスベットこと篠崎里香である

「その甘いマスクと誰にでも優しい性格により落とされた女子の数は計り知れない。そして滅茶苦茶鈍感な性格により泣かされた女子の数も計り知れない……一夏はそんな男なのさ姐御……」（遠い目）

「そ、そう……（なんか凄く遠い目しててんですけどお!?これ私のせい!?）てか姐御って呼ぶな!」

「それはそうと、一夏の奴この間のバレンタインにチョコ何個貰ったと思うよ? はいキリト!」

「え!?!俺に振るの!?!う、うーん………20個くらい……?」

「残念ハズレ!」

「お兄ちゃん……流石にそんなには貰えないでしょ……」

「正解は83個でした〜!」

「……………うん?」

「い、今なんて言つた……?」

「83個」

「あ……アタシ疲れてるみたいね……幻聴が聞こえたわ今……」

「私もみたいですりズさん…」

「だから83個だつて…現実を受け入れろ。俺は受け入れた…」

「そんな簡単に受け入れられないわよ!?!そんなに沢山貰つてると思わないわよ普通!?!」  
「これは…クラインが聞いたら血涙流すな…」

確かに

クラインなら間違はなく血涙流すな

弾も流して…いや、弾は吐血したんだつたな

「蓮仁はいくつ貰えたの?」

そう聞いてきたのはフィリアこと竹宮琴音だ

えーと…母さんからののはノーカンだとして…

「俺?俺は3…3か?うーん…いや、1つダイクマター暗黒物質だつたから実質的に2個だな」

「暗黒物質!?!何があつたんだ!?!」

「聞くな…思い出したくない…」

あの凄まじいダメージがトラウマなんだよ…

まるで内臓を握りつぶすかの様な痛みが襲つてきたんだから…

すぐに気絶して目覚めたら病院だつたからな

俺バレンタインの日の大半寝てたんだよなあ…

「まあ、直葉のが一番旨かったな」

「ツ！そ、そうなの!？」

めっちゃ食い気味に反応してきた：

いやだつて鈴のはウイスキーボンボンだったし、千冬さんのとは言わずもがな……それを食った後に直葉のチョコ食ったらゴディバのチョコが霞む程旨く感じたよ。いやマジで。

ホワイトデーのお返しには手作りブラウニーをご馳走したぜ！

ダイシーカフェの調理場を借りてね

エギルにも手際を褒められたしバイトしないかとも聞かれたけど俺まだ中学生だからね？

それからしばらく他愛もない話しをして家に帰った

家に帰ったら東さんが普通にいた

リビングでくつろいでたし何なら母さんにお茶貰ってるし

「ハロハロ〜！レンくん久しぶり！」



「もしもし千冬さん?」

「ちよ!?待って!?シヤレにならないからね!」

「H A H A H A H A!冗談ですよ!……半分ね…」

「ねえ今ボソツと半分って言ったよね!?半分本気だったの!」

本当にいきなり来る人だなあ…

……ん?なんか知らない女の子がいるぞ?

銀髪で目を閉じているまるで人形の様な少女だ

「あ!この娘が前に話した束さんの娘になったクーちゃんだよ!」

「はじめましてレンくん様。クロエ・クロニクルです。気軽にクロエとお呼びください」

おおぅ…スッゲー可愛い娘ですなあ

礼儀も正しいし束さんとはえらい違いだ

あと《レンくん様》って何?束さんがレンくんって呼んでるからレンくんが名前だと

思ったのか?

よし、しっかり挨拶して名前を覚えて貰おうか

「ドーモ クロエ・クロニクルニサン ヒリユウ・レンジです」

「なんでニンジャスレイヤー!」

「…?束様、ニンジャスレイヤーとは何ですか?」

おっと知らないのか

これはアニオタに染め上げるしか無いよなあ？

「…って話が進まないよ！本題に入るよ?！」

「なんだクロエを紹介するのが本題じゃ無いんですか?！」

「うん、これからは内密な話しをするからレンくんの部屋に行こう」

そして俺と東さんとあとクロエの3人で部屋に向かった

部屋に入ったら俺のベッドにダイブしようとしたので途中で叩き落とした

「それで? いったいなんですか?！」

「うん、今度ドイツにちーちゃんのおんねにいくよな?！」

何で知ってるのか一瞬思ったけど、まあ気にしたら負けだな

突然現れたりもするしもう何でもできんじゃない?!

「実は怪しい動きを見せている奴らがいるんだ。…何をしでかすかわからないけど

…」

「…? 随分と曖昧ですね…」

「それが…東さんが調べただけの情報で全然手に入らなかったんだ…おそろく…東さんレベルの頭脳の持ち主が隠蔽工作をしている可能性が高いよ」

「ッ!?!」

東さんレベルの頭脳の持ち主!? そんな奴がいたなら何で今まで世に出てこなかったんだ!? しかも東さんでも情報を手に入れられないとは…

「あ、でも東さんにもプライドと意地があるからね! なんとか尻尾は掴んだよ!」

フンス! と胸を張る

あ、やべえなこの胸。ただでさえデカイのに張ったら更にヤバイ…: 目のやり場に困ったのでクロエの方を向いたら自分の胸をペタペタして絶望した顔してた…

…: きつとこれから大きくなる…: だからよ…: 止まるんじやねえぞ…! (激励)

「それで分かった事は?」

「うん、分かった事は怪しい動きを見せている組織の事だよ。組織の名は…:

「ファントム・タスク」

「ファントム・タスク…: いかにも悪の秘密結社みたいなネーミングですね」

東さん曰く、第二次世界大戦に生まれた組織であり裏の世界で暗躍する秘密結社。現在が2025年なのでおよそ80年以上前から活動しているらしい…。また組織は運営方針を決める「幹部会」と「実働部隊」の二つに分けられているがなんの目的があつて活動しているのかは不明…:

「…: …: 穏やかじゃ無いですね…: …: それで? こんな事を話すんだ…: 俺に何かして欲しいんでしよう?」

「うん…レンくんの実力は良く知ってるからね。奴らを炙り出すのを手伝って欲しいんだ」

「なるほど。だが断る！」キリッ

「……だよねえ…寧ろ受けてたら困惑しちゃうよ」

流星に危険過ぎるし俺もそこまで自分の力を過信してないからな。万が一でも命の危険があるなら危ない橋を渡る必要もないだろ…ドイツに行くのも危ないか…

「これは私の憶測だけど…奴らの狙いはちーちゃんを優勝させない事だと思う」

「………」

「もしそうなら多分いつくんかその知り合いを人質に取ると思うの…だからレンくんといっくんがドイツに行かないなら十中八九此処が実働部隊に狙われるだろうね」

「…ッ！つまり、俺と一夏がドイツに行つた情報を奴らが掴んだら間違いなく一夏を狙いに来ると…」

「そうだね…」

敵には東さんレベルの奴がいる…なら空港なり何なりにハッキングでも掛ければ一夏がドイツに渡つたかも分かると…

「それ実質的に一択しか無いですよね…ハア…やるしか無いか…」

「…本当に良いの？確かに人間離れしてるレンくんでもかなり危険だよ？組織の情報が

掴めてないけどひよっとしたら…うん、確実にISを持つてるよ?いくらレンくんでも生身じゃ勝てないよ」

うん?今サラっと人外扱いされてデイスられた?

「持つてるって言つても精々2、3体でしょう?ISコアって確か500も無かったでしょ?なら裏の組織じゃそんなには所有してないと思います。それにVRゲームで人外とは散々戦ってきましたしね!それに…もし本当にISを使ってるなら、俺はそいつ等を許せないですしね…」

「ツ!」

おっと、殺気が出てしまった…二人がビクついてしまったな

あとクロエ…割と真面目な話しをしてるのに黒丸と戯れるなよ…まあ美少女と猫の戯れる姿は眼福だけだな

「レンくんがちーちゃん張りに怖い…何でそんなに許せないの…?」

「だってISは東さんが宇宙に行くために作ったのに、兵器として使つてやがる…許せる訳ねえよ…」

「レンくん…!東さんの為に怒ってくれたの…!ありがとうレンくん大好きだぜええええ!」

「ツ!千冬さん直伝!アイアンクロー!」



素晴らしい……!

「中に色々入っているから確認してみてね。ブレスレットの一部がスライドするからそこをイジるとウィンドウが出るよ」

そう言つて左腕に装着してくれたので言われた通りにスライドすると空中にホログラムのウィンドウが現れて拡張領域に何が入っているのかが表示された

「しゅごい!」(語彙力低下)

「物を取り出す時は取り出したい物をイメージすると出てくるよ。試しに東さん特製のスマホが入ってるから右手に意識を集中させて取り出してみて」

右手に意識を集中……あ、出来た

すっげえ……

語彙力低下する程すっげえ

「戻したい時は……『しゅごい!』色々入ってる!おつ、コレは何だ!』ええ……もう使いこなしてる……」

「おお!ちゃんと愛刀の雪月赤も収納できた!」

「凄いですね東様……」

「うん……完全に使いこなしてるよ……」

そして色々と説明を受けてこのブレスレットについて理解を深めた。素材はIS素

材で超頑丈。金属探知機に反応しない特殊加工。更に水や火、雷にも強いときた。

しかも東さん特製スマホは色んな機能搭載してるし衛星電話にもなってるらしい。因みに衛星は東さんが独自に撃ち上げた物らしい…

やっぱり規格外だこの人…

「さて、それじゃ纏めるよ！レンくんはいつくんに付き添って守る！東さんは移動ラボで近場に潜んで奴らの動向を探る！クーちゃんはレンくんの居ない間は緋龍家に居てパパさんとママさんを守る！この事はいつくんとちーちゃんには内密に！以上！」

「所々気になる事があったんだけど！移動ラボって何？クロエは家に滞在するの！？」

「うん！移動ラボはまあ…また今度ね！クーちゃんにはさっきも言ったけど此処を守って貰うよ！」

「はい。私には東様から頂いた専用機【黒鍵】があるので必ず守りぬきます。ですのでレンくん様…どうかご心配なさらずに」

「専用機ってISの!?マジか…：…なら大丈夫か…？…あとレンくん様って止めてくれない？蓮仁って呼んでくれて良いからさ…」

「かしこまりました。蓮仁様ですね」

「いや様が一番いらぬヤツううッ!？」

「むう…前処します…」



前処するって言う奴程前処しないんだよなあ（※番外編 千冬さんは掃除ができないより）

でも『むう…』って言うの可愛かったからOKで

「よし!みんな十分に気おつけよう!」

「うん♪」

「はい」

こうして話し合いは終了した

そして普通に晩ごはんを食べてから帰った

うん?クロエの滞在の事?母さんに話したら即OKしましたよ。娘が出来たみたいで嬉しいらしいです…

親父の許可?親父はあんまり帰って来ないから別に許可いらねえだろ。今も仕事で居ないし

そして翌日から戦闘に備えて師匠の元で修行をする為に何時もの修行場に来ている。師匠は文明の利器を使わないから連絡も取れないし、住所も知らないから家にも行けな

いから不便だ。決まった曜日の決まった時間に修行場に行かないとまず出会えない。

あ、でも前に一度師匠が鷹の足に手紙括り付けて飛ばしてきたなあ……。あの時は俺に向かつて滑空してきた鷹にビビったなあ……。つうか鷹なんて何処から捕まえてペツトにしたんだ？

俺も欲しい！

そして修行場にたどり着くと既に師匠が来ていた。しかしいつもと違った様子で眉間にシワを寄せている

「……………来たか」

そう言つて俺の前に来た師匠は俺を見据えて話し始めた

「今度ドイツに行くと言つておつたな？」

「え、はい……それが『行くのは止める』……っ！」

「嫌な予感がする……俺の感は……いや、《気》を会得した者には自然と第六感に目覚める。その第六感が反応した……何かが起こる筈だ、だからドイツに行くのを止める……！」

「……………ッ!!」

師匠に勘付かれた

何の話もしていないのだ

まさか第六感で気付くとは……予想も出来やしない……

「……師匠。実は……………」

俺は全てを話した

ドイツで裏の組織が暗躍している事

その狙いがおそらく千冬さんの大会棄権の事

間違いなく一夏を狙うこと……

「だから俺はドイツに行きます。一夏を守る為に」

「……………馬鹿弟子が……………覚悟は出来てる様だな。なら出発までに更に鍛えるぞ。前々から教え始めていた上位技の完成を最優先にする!分かったか!」

「はい!」

「……………それと、コレを預ける……」

そう言つて師匠が渡してきたのは師匠の愛刀にして時雨流剣術免許皆伝し、なおかつ当主になる者にだけ受け継がれてきた刀《朱時雨》だ。何故未だに初級技しか扱えない俺にコレを渡してきたのか……?疑問に思いながらも手に取つた時だ

ゾワッ

「ツツツ?!」

急激な寒気に背筋が凍り、刀を落としそうになった。しかし寸前で正気に戻り何とか持ち直した。そして刀を見て改めてその異質さに恐怖した。

なんだこれは？俺は何を持っている？

濃厚な死の気配を纏うソレは恐ろしさしか伝わって来ない。呼吸は浅くなり、身体中が震えて手に持っている刀がカチャカチャと音を鳴らしている

「呑まれるな！正気に戻れ！」

「はっ!?はあっ…はあっ…:…:…」

師匠に肩を掴まれて揺すられた事により正気に戻る事が出来た俺は地面に座り込んでしまった

直ぐに刀を地面に置いて手を離すとおぞましが消えた

「……:…:師匠……この刀って……」

「ああ、妖刀だ。……:…:歴代の所有者の中でこの力に呑まれた者は早死にしておる……:…:それも悲惨な死を迎えた者ばかりだ……:…:今のお主ではどうしようと扱えない代物だ」

妖刀……:…:実在する物だったんだなあ……:…:

本気でヤバかった……:…:この世の物じゃない気がする……:…:

なんだか呪術廻戦みたいになってない？これ多分だけ特級呪物的なサムシング？

何コレ？ISなんてSFなワードスーツのある世界なのに、俺は刀を使って鬼滅の刃みたいに修行して、BLEACHみたいに斬撃飛ばして、最終的にはONE PIECE Eみたいに岩とか鉄とかスパスパ斬らないといけないのに、ここで更に呪術廻戦みたい



春休みに入り遂に出発の日を迎えた

俺は朝早くから師匠に修行を付けて貰っていた

そして修行が終わり出発しようと修行場を後にする

「蓮仁」

俺は振り返る

そこには不安そうにこちらを見る師匠がいた

俺に近付いた師匠は切り火をして清めてくれてから肩に手を置いて…

「必ず…必ず生きて帰って来い」

「師匠…はい！分かりました！」

そして俺は再び歩き出した

（何故だ…何故今になって死んだ妻と息子を思い出す…！くっ…！二人共……どうかあ

の馬鹿弟子を守ってやってくれ……!)

その時、ブレスレットの拡張領域にて朱時雨が淡く光ったのは誰も知らない……

◇

俺達は親父の運転で空港まで連れてきて貰った

千冬さんは準備やらなんやらで既にドイツにいたので俺と一夏は現地での合流になる

「本当に二人で大丈夫かしら……?」

「おいおい母さん、二人をいつまでも子供扱いしてやるなよ。男の成長つてのは早いんだぜ?」

母さんと親父がそんな会話をしている中で一夏は初めての空港にワクワクしていた

「すっげえな!なあ蓮!……?……?……蓮?」

「ん?あ、ああ……どうした?」

「なんか元気がないみたいだけど大丈夫か?」

「なに?具合が悪いのか?」

「そうなの?」

一夏に続いて親父に母さんまで心配してきた

「だ、大丈夫だよ！朝から師匠の所で修行してたから眠くて眠くて…」

「そうなのか？こんな日にも修行なんてやつぱり脳筋だな」

「おいコラ！何サラつとデイスってんだよ！」

みんなにばれないように空元気で誤魔化すがやつぱり不安で仕方がない……それに朱時雨を預かってから妙に落ち着かない…

俺に出来る事は全てやった筈だ。修行にて時雨流剣術の上位技も何個か会得したし、ブレスレットに師匠から貰った様々な武器や束さんのくれたアイテムなんかも入っている…

しかしやはり不安が拭いきれない

そしていよいよ出発の時

母さんと親父と別れ飛行機に乗り込む。この時、ひよつとしたら最後になるかもと二人を見た時、二人は心配そうな顔をしていた

…はっ！やつぱり両親には俺の空元気なんてお見通しか…

飛行機の座席に座り窓から外を眺める

俺は再びこの地に戻って来れるのか……



すると一夏が満面の笑みで

「楽しみだな蓮!」

と言ってきた

…何だかごちやごちや考え過ぎたな…

それにせつかく外国に行くんだから楽しまないとな!

「ああ、楽しみだな」

一夏にそう返すと飛行機が動き出した

そして遂に飛行機は飛び立つのだった……

S i d e 蓮 仁 S i d e o u t

S i d e ???

「ふむ…まあ、こんなモノかな…」

そこはとある施設の研究所

その研究所にて白衣を着た男がISの…ラファール・リヴァイブの前でウィンドウを操作して最終チェックを済ませていた

「やれやれ、幹部会も面倒な要求をしてくるものだよ…：私の実験はまだ活用できる段階では無いと言うのに…：」

そう言いながら白衣を椅子にかけてコーヒーを飲む

すると部屋の自動ドアが開き一人の女性が入ってきた

「入るわよDr. ゲノム。ISの方はどうかしら？」

「ん？ああ、スコール君か。ラファールの改造は既に済んでいるがとても実用段階では

無いよ。そもそも私の研究は…」

『私の研究はまだ完成していない』でしょう?もう聞き飽きたわ」

「おっと、すまないね。レディに何回も同じ話しをするとは。それで?これは誰が扱うのかな?」

「オータムよ」

「オータム君か。なら大丈夫そうだね。しかし危険も伴う事は伝えておかないとね」

「そう言つてDr. ゲノムと呼ばれた男はカバンに荷物を纏めていく」

「あら?何処かに出かけるのかしら?」

「ああ、私もオータム君と共にドイツに向かうよ。あそこにはVTシステムの研究所があるからね。私の研究にも取り入れたい」

「ヴァルキリー・トレース・システムね…でもまだ完成していないわよね?」

「だから私が完成させてくるよ」

「いとも簡単にそうのべた男は最後にラファールを待機状態にして荷物を持って扉を出る」

「早く行かないと飛行機に間に合わなくなるわよ?」

「なに!?!急がなければ!?!」

「そう言つて急いで駆け出して行つた」

スコールと呼ばれた女性は少し呆れながら部屋をあとにするのだった……

こうしてドイツに役者が揃い出す

ドイツにていったい何が起こるのか……

蓮仁と一夏はどうなるのか……

様々な思いを乗せ、飛行機はドイツへと飛んでいくのだった……

TO BE

CONTINUED

## 原作前第25話 ドイツでの死闘!蓮仁VS亡国企業!

前回のあらすじ!

いよいよドイツに行く事になった蓮仁と一夏!

しかし束さんによると謎の組織が暗躍している!?

千冬さんと一夏を助けるべく作戦をたてた!

すると師匠の厳仁にも知られてしまった!?

事情を説明してさらなる成長の為に修行を開始!

そして遂にドイツに向けて飛び立つのだった……

様々な思惑を乗せて………

S i d e 蓮仁

12時間のフライトを終えて飛行機から降りた俺達

ずっと座ってたから身体がバツキバキだ〜!なんて事は無く、ファーストクラスだつ

たから全く負担にならなかつたゾ！

千冬さん張り切り過ぎい!?

にしてもこのブレスレットは金属探知機にも引つかからないのか…もはやコレさえあれば密輸し放題だなあ…

そして割と久しぶりな地面に足をつけたので謎の安心感がある中

「ドイツキタアアアアアツ!!」

俺達は声を揃えてそう叫んだ

初海外でテンションが自然と上がってしまう!

空港を散策していると見知った人を発見したので二人で近付いていった

「千冬姉!」

「千冬さん!」

「おお、待っていたぞ二人共」

千冬さんと無事に合流を果たした俺達はタクシーに乗って滞在先のホテルへと向かった

モンド・グロッソは明日からだし千冬さんは準備で忙しいから今日はホテルで過ごす事になってるんだよなあ

だから観光とかも当然できない

「あくあ…今日は観光できないのか…したかったな…」

「右に同じく(だけど何処に敵がいるか分からないから下手に動けないんだよなあ…)」

「大会が終わったら観光に連れて行ってやるから我慢するんだ」

「は〜い」

そしてホテルにチェックインした俺達は千冬さんを見送つてくつろいでいた

「あ” あ” …ファーストクラスでも12時間のフライトは結構疲れるな…」

こいついつも疲れてんな

「いや疲れたのは一夏がはしゃいでたからだろ? ハーゲンダッツでテンション爆上がり

だったじゃん」

一夏はもう凄くはしゃいでた

離陸する時も、音楽聞けるの分かった時も、ハーゲンダッツの時も、食事出た時も、着

陸する時も……

……コイツずつとはしゃいでんな(呆れ)

横で寝ようとしてたけど全く寝かせて貰えなかったゾ

そして案の定はしやぎ疲れてるのかアクビをして目を擦り始めた

「ふあああ…眠くなってきたな……いや! せつかくドイツに来て眠れるか!」

「いや寝ろし。晩飯になつたら起こしてやるから」

「いやいや、せつかくだしちよつとだけ外に行こうぜ？蓮はドイツ語話せるだろ？な？な？」

そうです。俺は少しならドイツ語を話せるんです！

ん？何故かつて？

いやほら、男子なら高確率でかかる病気があるじゃん？つまり厨二病ですよ。そして俺も通過した訳であります……ほら？ドイツ語つてカツコいいじゃん？だから色々調べる内にね？興味持つて本格的に覚えちゃった（\*ノω・\*）テヘ

前に一夏にドイツ語で話し掛けたら『（・ω・）？』つて反応された。因みに鈴は『は？（憤怒）』つて言つたよ。

『Kleine Br・ste』つて言つたら半殺しにされたでござる……意味？《胸が小さい》つて意味さ！

ハハハッ！コレを見てるソコの君！例え外国語でも相手を馬鹿にする発言は控えよう！女子は感が鋭いからなんとなく意味を察するゾ！（死んだ魚の目）

つと、話がズレてた

そして困つたな……外に出たら十中八九拉致られるはコレ



「夏守りながらなんて流石に戦えないしなあ…

……………よし!

「一夏一夏、ちよつちこつちにおいで〜」

「ん? 何だ? 『オラアン!』 グベツ!?!」 バタンキュー

「……………よし!」 (現場猫)

「一夏を寝かしつけた (物理)」

「全然よしじゃないよね!?! 何やってr 『オラアン!』 グベツ!?!」 バタンキュー

「……………よし!」 (現場猫)

「突然現れた束さんも反射的に寝かしつけた (物理)」

「だっていきなり現れるんだもんしょうがねえよなあ?

「束さくん。束さん起きて〜」 ペチペチ

「う、うくん…あと5時間…」

「いや長いな (困惑)」

「5時間も寝たら千冬さんが帰ってきてきてアイアンクローされますよ?」

「あつ、起きます」

「よし!」 (現場猫)

「いやよし! じゃないよ!?! 何でいきなり気絶させてくるの!?!」

「だつて一夏は外に出たがるし…東さんはいきなり現れたし……ん？俺の悪い要素無くな？」（開き直り）

「なんでさ!?!」

「そんで何しに来たんですか?」

「ああね。このホテル既に見張られてるよ」

「マジすか?」

「マジです!」

やべえ…ドイツに到着してまだ1時間くらいなのに既にホテルまで特定されてらあ

…

え?ならこのまま外に出たら問答無用で拉致られてたつて事?

…:ツぶねええええ!俺フラインプレーじゃん!

ナイスウ!俺ナイスウ! (自画自賛)

「てな訳でちーちゃんが戻るまでは東さんがここに居るよ!」

「おお!なら安心ですなえ!じゃあ俺も寝ますね」

「え、待つて待つて。東さんの相手はしてくれないの!?!」

「ええ…」

「うわ、うわああ!あからさまに面倒臭そうな顔してる!いいもんね!レンくんが寝た

ら寝込みを襲う(意味深) からね!」

「は? アンタ正気か? 8歳差もある中学生を襲う(意味深) とか普通に警察案件ですよ?」

それに束さんスタイル抜群やし、何ですかその特大メロン×2は? いったい何を食ったらそうなるんだ?? 少し鈴に分けてあげて(切実)

そんでそんな抜群スタイルに襲われたら俺の暴れん坊將軍(意味深) が大暴れ(意味深) してしまうでしょうが!

一夏いんのにそんな事出来る訳ないでしょうが!

……ん? 今の言い方だと一夏が居なかつたらヤツてた?

う〜ん……って何考えてんだ俺は!?

「戦いに備えて英気を養うんで! 襲わないでくださいよ!？」

「全く! 本当に襲う訳ないでしょ! ぶんぶん!」

「まあ、処女の束さんじゃ無理ですよねえ」

「しよ、処女ちゃうわ!？」

その反応が既に処女なんだよなあ(呆れ)

「そ、そう言うレンくんだって童貞じゃん!」

「俺はまだ中学1年生だからセーフ」

「あ、そっかあ」(納得)

いや納得するのか…(困惑)

なんかアホな会話してたら本格的に眠くなってきた…

「それじゃ…俺は寝るので…後は…お願いしますね…。(。—ω—) z z z」

「寝るの早!」

そして初日は何事も無く終わった

くモンド・グロツソ会場く

『織斑選手!強い!流石は初代ブリュンヒルデ!その強さは更に磨きをかけており圧巻の戦いぶりです!』

「すつげえ…何だあの動き…」

「千冬姉の動きが他の選手と全然違う…」

しかもブレード一本で相手を倒してるし…

いきなりスピードが上がって一気に距離を詰めた千冬さん

するとブレードが光を放って相手を斬り裂いた。なんとその一撃だけで残りのSEを全て削った

『試合終了おおおッ!勝者は織斑千冬だああああッ!!ブリュンヒルデの実力は伊達じゃない!』

ん?ガンダムかな?

「れ、蓮…今の千冬姉の使った技って…」

「ああ、間違いない…アレは……」

「リボルケインだ…ッ!!」

『違う!断じて違う!』

『おっと?いきなり織斑選手が叫び出しました?何事でしょうか!』

何で聞こえてるんですか!?

千冬さんとの距離大分あんのに!?

※千冬さんはハイパーセンサーで蓮仁と一夏のセリフを読唇術で読み取ったゾ!

—————

モンド・グロツソが始まって早数日

本日よりよ第二回モンド・グロツソ決勝戦である

各国の猛者達を退けて決勝戦に進出したのは当然のように千冬さんと専用機《暮桜》くれざくらだ。

確かに猛者揃いだった。武を嗜む俺から見てもかなりの強者達だ。それでもやはり千冬さんには敵わない。相手が銃を操おうが全ての弾丸を切り落として相手を一刀両断だ。よくもまあブレード一本でここまで勝ち抜けたものだなあ……

でもそも……なんだっけ？あのリボルケインみたいなの……？……ああ、確かワンオフ・アビリティの《零落白夜》れいらくびやくやだったな。それがもう必殺の一撃になってるからエグいエ

グイ…

そんな千冬さんの相手をするのがイタリアの国家代表のアリーシャ・ジヨセスターフだ。使用するISは《テンペスタ》と言う機体でコチラも単一仕様能力を発動させている。風を操る能力で凡用性に優れているから色々出来そうだな。分身作ったりもしてたし。これはアレか?ダンまちのアイズさんのリル・ラフアーガかな?

実力もかなりのものだけど千冬さんには及ばないな。つまり単一使用能力を上手く扱えるかが勝負の鍵だ…

まあ、多分俺は試合を見れないだろうけどな…

決勝戦が始まるまであと2時間といった所で一夏がトイレに行くと言い出した

「トイレ行ってくるな」

「あつ、おい待てい」(江戸っ子)

「ん?何だよ蓮も行くのか?」

当たり前だよなあ?一人にしたら速攻拉致られるもんなあ?

てな訳で一夏を連れてトイレにGO!

……………つけられてますねえ…

数は大体…8人か…

そしてトイレに入った俺達、一夏は小用をたして手を洗っている。その一夏に近付いて…

「一夏…悪いな…」

そう言つて鳩尾を殴り気絶させた

「がつ!?!…れ、蓮…何…を…」

気絶した一夏を個室に押し込んでブレスレットの拡張領域からウィッグを取り出して被る

これでほとんど一夏だな。あとは左眉の傷を隠して、少し身長も小さく見えるようにしてつと。あとは服の下に対スタンガン用の防具（束さん作）を着込んで、更に靴を鉄板入りの強化シューズに履き替えて準備完了

そしてトイレを出た瞬間に男8人に囲まれた

「お前が織斑一夏だな？」

「……はい、そうです…グッ!?!」

すると男が腹部にスタンガンを当ててきたけど、対スタンガン用の防具着てるから全くのダメージが無いけど気絶したフリをする

「織斑一夏を捕えた。今からそちらに向かう」

『了解した。くれぐれも後をつけられるなよ』



何処かに通信してから俺を車に運び入れ、出発した。

目は瞑ったまま、しかし大体の方角はコッソリ確認し、聴力を極限まで研ぎ澄ませて外の情報を取り入れる。

周りの音、信号の音と数、大体の速度と移動時間など

：

それらを脳内に纏めて大体30分程して目的の場所に着いたようだ。割と近いな…

「オータムさん連れて来ました」

「おう、なら椅子に縛り付けときな」

何処かの廃墟?みたいな感じの建物に複数人の奴らがいる…

男が16人、しかも全員武装しているな…そして女が6人、この中の何人がISを使うのだろうか…

そして男達は俺を縛り付ける

するとリーダー格の女、確かオータムとか呼ばれてたな、ソイツが話しを始めた

「それじゃあ俺を含めたIS部隊四人が会場に待機する。残り二人はこの守備だ。男

共はソイツを見張りながら織斑千冬に連絡を入れて大会を辞退させろ」

そう言つてオータムと3人の女が出ていった

しばらくしてから残りの女達が男達に話しかける

「あんたらさぼらないでよね？」

「そうそう。I Sを使えないんだから見張りくらいしつかりしなさいよ。アハハハ！」

そう言い残しながら部屋を出ていった

何だよあの女尊男卑全開の奴ら？あんたらも大変だねえ…（同情）

「チツ！I Sが使えるつてだけで偉そうにしゃがつて！」

「おい止めろ！もし聞かれたらどうする！」

「…チツ、悪かったよ…」

そして一人の男が電話を掛け始める

『もしもし？誰だ？』

「お前の弟は預かった。返して欲しくば今すぐに決勝戦を辞退しろ」

『…何？今なんと言つた貴様ツ！一夏をどうした!?!』

怒り狂う千冬さんの声がコチラまで聞こえるな

皆がその通信に気が向いてる間に関節を外して縄抜けする

さあて…いっちょやりますか

まずは近場の男に近付いて口を塞ぎ一瞬で意識を刈り取った。そこでようやく異変に気付いた奴が二人。しかし音も無く目の前に移動し鳩尾に一発。もう一人はサマーソルトで顎を蹴り上げた。

まずこれで3人

そして倒れた音に気付いた残りの13人がコチラを見た。その表情は驚愕である。そして反応が遅れている所にさつき気絶させた奴を投げ飛ばし、二人を巻き込んで転倒、我に返った他のやつらが銃を構えて来た。

ブレスレットから愛刀の雪月赤を取り出した俺は抜刀の体制のまま【ソル剃】を使い一瞬で距離を詰めて銃を破壊した。

この段階でほとんどの銃が破壊されてしまったのだ。

更に突然刀を取り出した事にまたもや驚愕してしまったのが運の尽き。銃を向けてきた内の5人を次々に意識を刈り取っていく。

これで8人

そして先程気絶した奴を投げつけて転倒した奴ら二人を顔面にパンチして気絶させた。

これで10人

あつという間に半数以上が無力化されて恐れおののく男達。電話を掛けていた男は携帯を落として壊してしまうのだった。

そして俺はブレスレットからある物を取り出した

ソレは巨大な円盾だ。束さんが防御用に渡してくれていたから使ってみよう。

「クソツッ！撃て！ただし殺すなよ！」

それが合図となり次々と発砲してくるが全て盾で防いで刀で斬り落とす

「何だよコイツは!?化物か!?ツッ……グハツ!?」

すぐさま近付いてシールドバツシユを喰らわせて壁に叩きつける。これで11人

そして円盾を投げて周りの敵にぶつける

「グアツ!?!」

「クソツッ!」

気絶まではさせられなかったがスキは出来た

すかさず天井に張り付き足をめり込ませ、右手の刀を突き刺して固定し左手にISに  
使われる強度のワイヤーを取り出して敵に巻きつける

「ワイヤーアクション……ペン<sup>筆</sup>デユラム<sup>子</sup>ッ!」

ワイヤーを巻き付けた男を振り子の用に振り回して周りの敵を巻き込みながら壁に  
激突して気絶。これで12人

他の奴らもかなりのダメージを喰らっているようだ。そんな相手にも無慈悲に攻撃を喰らわせて気絶させていく。これで15人

そして最後の一人に振り返ると他の気絶した奴から奪った銃を撃ってきた

俺はそれをジャンプして回避する。そして空中で回転しながら遠心力で破壊力のました踵落としを食らわせる

《時雨流体術・獅子威し》ッ!

「ガ……ア……」

そして最後の一人を倒した俺は刀を鞘に戻して円盾とワイヤーをブレスレットにしたまま

「だいたいこんなもんか……」

とりあえず束さんに連絡……はしなくて良いんだな。なんか常にコチラの状況を把握してるとかストーカー宣言してきたし。なら千冬さんに無事だと伝えないとな。

そして千冬さんに連絡すべく電話を取り出したのだった……

S i d e 蓮仁Sideout

## Side 千冬

決勝戦に向けてストレッツチなどをしていた時に電話が掛かってきた

「ん？知らない番号だな…」

最初は一夏と蓮が応援に電話でも掛けてきたのだと思ったがどうやら違ったらしい  
そして電話に出る

「もしもし？誰だ？」

『お前の弟は預かった。返して欲しくば今すぐに決勝戦を辞退しろ』

電話に出た瞬間に加工された声でそう告げてきた

…弟は預かっただと…!?

「…何？今なんと言った貴様ツ！一夏をどうした!？」

『彼は今の所無事だ。だがお前の判断によつては…』

「くっ…！決勝を辞退すれば良いんだな…!」

『ああ、その通…ツ!?!何だ！ヒツ!?!』

ガチャン……プー……プー……

すると電話の相手が突然何かを叫んで電話が切れた

「オイ!オイ!?!何があつた!?!一夏!一夏はあ!?!……クソッ!」

何が起こつたんだいったい!?

直ぐに助けに行かなければ!蓮は無事なのか!?

そうだ直ぐに束に連絡しなければ!

すると控え室の扉をノックされた

「すいません!至急お伝えしたい事が……」

「今は一大事だ!後にしてくれ!」

焦りで声を荒げてしまった……

そしてスタッフの人は怯えながらも話しかける

「ヒツ……し、しかし……弟さんが……」

その言葉に私は動きを止めた。そしてスタッフに詰め寄り問いただす

「一夏がどうした!無事なのか!?!」

「あ、あの……男性用トイレの個室で意識を無くしていたのを他のお客様から聞いて、別室に運んで休ませています……」

「直ぐに連れていけ!」

そしてスタッフの案内で直ぐさま一夏のいる部屋に向かうのだった

部屋に入ると一夏が寝かされていた。直ぐに近付いてケガなどが無いか調べるが特に外傷は見当たらない……

すると一夏が呻きながら目を覚ました

「う、うう……あれ……？ 千冬姉……？」

「一夏！ 良かった……いったい何があったんだ!？」

「え……えつと……蓮と一緒にトイレに行つて……ッ！ そうだ！ 蓮に鳩尾を殴られて気絶したんだ!」

「何？ 蓮が……？ (何故そんな事を……ッ！ まさか!)」

「あ、そういえば『一夏……悪いな……』つて言つてたな……」

ああ……ああ！ さっきの電話のは一夏じゃ無い！ 蓮の事か！

まさか一夏の身代わりに……!

すると電話が掛かってきた

私はすぐさま部屋を出て電話を確認する

すると電話の主は蓮ではないか

直ぐに電話に出る



『もしもし千冬さん?』

「蓮!大丈夫か!?今何処にいる!?いったい何があつた!」

『うわっ!?声がデカイですよ!とりあえず無事なんで落ち着いてください。事情を説明するので…』

「…っ!…:そうか…良かった…:それでいったい何があつた?」

『簡単に説明すると千冬さんの大会優勝阻止の為に亡国企業って組織が一夏を誘拐しようとしました。そして一夏を気絶させて一夏になりすまして奴らにわざと捕まりました。人数は今分かつてるだけで武装した男が16人とおそらくISを所持している女が6人です』

「なッ!?大丈夫なのか!」

『とりあえず男16人は制圧して縄で縛り付けました。女6人中4人は会場に向かって、残り2人は男達に仕事任せて何処かに行きました』

「は?16人の大人の男を、しかも武装した奴らをたった一人で制圧したと?」

「…:はあく…:まさかここまで強くなつてるとは…」

「だがまだISを所持している奴らがいるなら危険だ!場所は分かるか!?今すぐに助けに行く!」

『それは駄目だ千冬さん』

「何を言っている!? ISの危険性が分からないとでも!？」

『そうじゃ無いです!この大会でISの危険性は分かったので!』

「なら!」

『千冬さんが決勝戦に出ないのは勝手だ。けどそうなった場合、誰が一番責任を感じると思う?……万じょ……ん”ん”!……一夏だ』

コイツいま万丈って言おうとしたぞ

しかも聞いた事あるセリフだと思ったら仮面ライダービルドのワンシーンのセリフじゃないか……

『考えてください。自分を守る為に友人が攫われて、姉が棄権したなんてなったら一夏は自分を許せますか?アイツは絶対に責任を感じて自分を責めますよ?』

……ツツ!!一夏ならやりかねんな……

「……………分かった。ただしドイツ軍に応援要請をする。場所は分かるか?」

『大体なら……』

そして場所を聞いてから連絡に向かって喋る

「相手を倒したら直ぐにそっちに向かう。だから……死ぬなよ……!」

『流石に戦いたく無いので逃げるのを最優先にしますよ。あと、直ぐに来たいからって対戦相手を蔑ろにしないで下さい。圧倒的な力で完膚無きまで叩きのめして下さい』

「…中々エグい事を…:はあ…分かった。相手にも、観客にも、私の圧倒的な強さを見せつけてから助けに行く。だから気おつけろ」

『千冬さんも頑張れ!』

フツ…全く頼もしい限りだ…

む…そういうえば最後に聞きたい事があった

「何故お前が組織の名前や目的を知ってた?」

『…えっ…』

「まさか…この事件、束も一枚噛んでるのか?」

『…あ、そろそろ行かなければ(棒読み)そんなやさいなら!』プツツ

…ふう…帰って来たら束共々いろいろ聞かなければなあ?

そして私はもうすぐ始まる決勝戦に出るべくピットに向かつて歩き始める

もちろんドイツ軍への応援要請も忘れてはいない

あと、一夏にも無理せず休むように連絡しなければな…

Side千冬Sideout

## Side 蓮仁

ヤツベエエエ！千冬さんにバレたああああッ!?

偶然勘付いて一夏の身代わりになったって設定だったのに、計画的な身代わりだったとバレたああああッ!?

アカン！このままで帰ってから怒られるうううッ！

今のうちに東さんに全責任をなすりつける作戦考えなきや！

てか早く脱出しないと！あとウィツグも外しておこう！

俺はとりあえず扉を中から塞ぎ、ダクトに入って脱出を試みる

因みに俺は身体の関節全部外せるから頭が入れば大体の場所は通れる

そしてダクトを通り外を目指して進むと明かりが射し込んでいる場所を発見

どうやら外に繋がってる様だな

周りに人がいないか確認してからダクトを飛び降りる

そして素早く移動し………た先に居ましたねえ………

女二人が居ましたねえ………

「「「……………」」」

「アー、道に迷って変な場所に来ちゃったなー。出口は何処かなー?」

そう言って反対側の道に戻ろうとした

が…

「おいアイツ!さつき捕まえた奴と同じ服装だ!」

「なんですって!?!あの男達は何をしているの!?!」

バレたあああああああッ!!

「うおおおおおおおおおッ!?!」

ダッシュで逃げる

剣を使って高速移動しながら逃げる

しかし相手はISを持っているのだ

空を飛んで追い掛けて来るし、銃までぶつ放してくる

しかもIS用の銃だからまともに当たったら致命傷になる

ああ…本当に致命的なミスをしちまった…

銃弾を回避しながらなので距離を詰められている

もう戦うか?

武器ならまだまだあるし身体強化すれば戦えるだろうし奥の手もあるし…

何よりここから出たら人通りがあって周りを巻き込みかねない…

……やるしかねえな…

俺は振り返るとワイヤーを取り出し一機に巻き付けた

「しんたいきようか身体強化！&ワイヤーアクション バインド拘束！」

「ぐっ!？」

そしてその拘束したISを地面に叩きつけた

刀を抜刀し、上段の構えから一気に振り下ろす

「しぐれりゆう《時雨流・岩砕割り》がんさいわツ！はあっ！」

《時雨流・岩砕割り》は斬るのではなく叩くや、砕くといった物理的な技でありかなりの高威力だ。名前の通り岩を砕き割る事ができる

その一撃を喰らってもなお大したダメージの無いISを見るにかなりの防御力がある様だな…

確か《シールドバリアー》に《絶対防御》だったな…

先ずはシールドバリアーのエネルギーを0にしなないとコチラに勝ち目は無いな

へっ、望む所だ！

俺は跳躍しもう一機に近付いていく

しかし銃で牽制されて上手く近付いていけない

そしていつの間にか復活したもう一機が後ろからブレードで斬り掛かってきた

まともに受け止めるのは不可能だ。俺の腕が吹き飛ぶ。だから受け流してから相手の顔面に殴りかかる。この時瞬時に腕にガントレットを装着した

「グアツ!? こ、コイツ!? (今突然腕にガントレットが現れた!? クソっ! いったい何なんだよ!?)」

流石に硬いな。顔面を殴りたかったけどバリアーに塞がれてしまった

「オイ! このガキの攻撃に気おつけろ! 既に3割削られた!」

「なんですって!?!」

なんですって!?! 2発で3割ですって!?!

いやまあ、初級技とは言えかなりの高威力だからなあ…多分岩砕割りで2.5くらいイッたな

…あれ? これ割とイケるのでは…?

ああ、いや慢心してる訳じゃ無いからな?

つと、あまり考えてる時間は無いな…

俺は直ぐに走り出して右手に持った刀を突きだす

「《時雨流・穿ち》ッ!」

とりあえず今はシールドエネルギーを減らさないと

次々と技を繰り出し、時にはクナイや投げナイフなども使うがやはり牽制程度しか威力が無い

そしてブレスレットからある物を取り出した俺は相手にソレを投げつけて直ぐに目を瞑る

次の瞬間辺り一帯を眩い閃光が包み込んだ

「グアアアアアッ！チクシヨウ!?閃光弾か!？」

「なんでそんな物持ってるのよ!？」

束さんに貰ったからです！

スキを生み出し勝負を一気に決めるべく奥の手を使う！

この技は今まで練習して来た中でもかなりの曲者だ。攻撃技じゃ無い、言うならば身体強化の更にと言った感じの技だ

しかし身体への負担がかなりのもので、しかも俺じやまだ20%しか力を引き出せない……

「ふううう………《しんたいきょうか身体強化》よりエゲツないからな……多少の怪我は覚悟しやがれッ！

《とうきかいほう闘気解放》ツ！20%ツ！」

自然から吸収し身体に貯蓄していた純度100%の自然エネルギーの全てを解放する。更に普段は無意識の内に脳がセーブしている人体の力の全てをリミッター解除。



それにより身体能力が爆上がりして全ての技が昇華する。更に五感に加え第六感のなにも使える状態になる

まあ、簡単に説明すると仙人モードとかスーパーサイヤ人とかギアセカンドとか、ワンプオーオール・フルカウルみたいな感じ

ただし使用後は肉体ダメージが凄くて場合によってはまともに動けなくなる。そもそも人が普段力をセーブしているのは筋力が持つ全てを使った場合、人体そのものが保たないからだ。

ソレを身体強化で身体を強化した状態にしてなんとか肉体を守ってるんだ。だけど肉体の力を全て解放に加え自然エネルギーで更にブーストさせるからもう無理。100%の力を使ったら俺は爆散するぞ(ガチ)

だから今は20%しか使えないし使いたくない。

このあと会場まで戻らないとだからサクツと倒してダメージは最小限に控えたい  
そして俺は一瞬で姿を消した

もはやI Sのハイパーセンサーで捉えることすらできない速度で移動したのだ。当然反応できる筈も無く、真上を取ることができた。そして腕に力を込めると筋肉が膨張し袖が引き千切れる。その腕に持った刀を上段に構えて一気に振り下ろした

「《時雨流 極》・鉄塊割り》ッ!!」

刀がISに触れた次の瞬間、爆音を響かせながらISが地面に激突し砂煙をあげた。その一撃の尋常では無い威力にもう一人は恐れおののいた。明らかに先程までと違うその威力・スピードに。今日の前にいるのは本当に人間なのか？ISを倒せるような奴が人間なのか？

すると砂煙が晴れていく。晴れた先には大きなクレーターができており、そこにはかろうじて膝をついてコチラを睨み付ける女がいた

しかし既に満身創痍といった感じであり頭から血を流している

「く……そが……はあつ……はあつ……シールドエネルギー全損させやがった……絶対防御まで発動したぞ……！はあつ……」

その言葉に愕然としたのは言うまでもない。まだ7割近くあつたシールドエネルギーをたつた一撃で全損させたのだ。ISが無ければ間違はなく死んでいた。その事を考えたら血の気が引くのは当然だ。

そしてそんなスキだらけの敵を放っておく訳が無い

「《時雨流しぐれりゅう 極きわみ》・五月雨さみだれ》ツ！」

無数の突き技がまるで雨のように降り注ぐ。先程の超威力の一撃とは違う無数の攻撃で削ってくる技。しかしISに対しては低い威力でも、生身の人間相手ならその一撃一撃全てが必殺の一撃だ。

その全てをまともに喰らい続けられればSEなんて直ぐに尽きてしまう。なんとか躲そうと上に飛び上がる。

しかし次の瞬間にはISにワイヤーが絡みついき身動きが出来なくなっていた

「なっ!?!このっ!…クツ!外れない!?!」

ワイヤーを引き千切ろうとするがビクともしない

「当たり前だよなあ? なんだってISにも使われる特殊なワイヤーなんだからなあ?」

「そんな物何処から手に入れたって言うの!?!」

「企業秘密だよ! オラアツ!」

ワイヤーを手繰り寄せ、ISが落ちて来た。そこに取り出したのは特大の大剣だ。刃渡り役150センチ持ち手を合わせれば200センチは超える大剣。重量はおよそ100kg級と人間ならまずまともに扱えない程の重さ…刃は潰してあるがその重量の一撃を喰らえば生身の人間なら挽き肉になる威力。ソレを落ちて来たISにまるでバツティングするかのようにな軽々と振りぬいてぶっ飛ばした

ぶっ飛んだ先の壁を貫いて進み、ようやく止まった時にはISの原型は既に無く、操縦者の女は白目を剥いて気絶していた

ソレを確認してから《闘気解放》を解除してもう一機に近づく。かろうじてISを纏っているが既にアシストは機能停止しており何の役にも立たない鉄塊に過ぎない。

「この化物がッ……！」

「黙って気絶してろ」

直ぐに手刀で気絶させた

「……勝ったか……はああああッ……しんど……」

そう言いながら壁に背を預けてズルズルと座り込んだ

「やっぱ20%でもかなりキツイなあ……明日は筋肉痛確定だなこりや……」

拡張領域からスマホを取り出して束さんに連絡しようとしたら電話が掛かってきた。

しかも束さんからだよ……マジで盗撮でもしてんのか？そう思いながら電話に出た

「もしもし、 たった今IS2機を撃h『今すぐに逃げて！』……はっ？」

突然そう叫んだ束さんに驚く

すると続けて叫んだ

『コチラは会場近くでレンくんの言ってた4人を相手にしてたけど、今は突然現れた謎の機体と交戦してるの！そして他の4機はソツチに向かっているから直ぐに逃げて！ISのスピードなら直ぐに到着する！それ……と……ザザッ……一機……ザザッ……ヤバイの……が……ザザッ……』プツッ

そこで通信が途絶えてしまった

「束さん！束さん!?クソっ！何だよ繋がらなくなりやがった！ジャミングか!?束さんは

無事なのか!？」

しかしやはり繋がらない

このままでは危ない。そう思い直ぐに逃げようとした時だ。

「……………ああ……………もう、最悪だな……………」

俺の真上に4機のラファール・リヴァイブが現れたのだった……………

## 原作前第26話　そして怪物は生まれ堕ちる

前回のあらすじ！

遂に動き出した亡国企業！

一夏を守る為に変装して態と捕まった蓮仁！

連れて行かれた先にて男達を撃破！

その後2機のISとも対峙！かろうじて撃破した！

そして東さんから不審な連絡が!?

逃げようとしたその時、新たに4機のISが現れた……

## Side 東

「コチラは今会場近くでレンくんの言ってた4人を相手にしてたけど、今は突然現れた謎の機体と交戦してるの！そして他の4機はソツチに向かっているから直ぐに逃げて！ISのスピードなら直ぐに到着する！それと一機だけ他のより明らかにヤバイのが『プ

『ツッ!?!レンくん!?!レンくん!?!ああもう!お前がジャミングしたのか!』

『その通りだ篠ノ之束。せっかく二人で話しているのに電話など無粋ではないかね?』

今対峙している謎の機体……全身銀色の装甲で身体全体を覆う全身装甲<sup>フルスキ</sup>。ロボットに近いISと違ってコイツはボディーアーマーに近いスタイリッシュな機体……

明らかにISとは違う得体の知れない奴だ……御丁寧に声まで加工してるし……

『おや?コレが気になるのかな?』

「はあ?別に?束さんはお前みたいなの象無象なんか興味無いから消えてくれない?」

『おっと、中々辛辣な……だがしかし、本当に私を有象無象だと?貴女のハッキングですら防いで見せた私が?』

チツ!ならコイツが例の奴か!早くレンくんの所に行きたいのに……でもコイツをほっとく訳にもいかないし……!

なら……

「ふん、あんなの本気な訳ないじゃん。あと急いでるから構ってる余裕無いんだよね」

……来い!ゴーレム!」

そう叫んだ瞬間に事前に潜ませていた無人機型IS「ゴーレム・プロトタイプ」が飛び出してきた。その数は合計5機。アイツ相手ならお釣りがくるくらいだね。

あとはゴーレムに任せてレンくんの所に行こうとした時だ。

バキッ！

『ふむ…無人機か…興味深い。だがこの程度なら大した脅威にはならないか…』

一撃でゴーレムが破壊された？ああもう…本当に何なんだよコイツ…！イライラするなあ！

「ああもう…：…そこまで言うなら束さん直々にぶつ潰してやるよッ！白騎士ッ！」

そう叫んだ瞬間に身体を白い装甲が覆う

【白騎士】…私が初めて作ったISのプロトタイプだ。今回最悪を想定して持って来  
といたけど…まさか本当に使う事になるなんて…

『ッ!?白騎士だと…?コアを初期化して解体し、企業などに技術提供の形で公開したゆ  
えにすでに現存していないはずの機体がなぜ……』

「残念だけどアレは予備パーツで組み上げたもう一つの白騎士だからね。こっちが本  
物」

そう、予備パーツで組み上げたもう一つの白騎士を技術提供に出したんだよね。流  
石に一番最初に作ったこの子を解体するのは嫌だったんだもん！でももう一機の方も  
しっかり作ったしちゃんとコアも入ってるから問題無し！

『く、くははは…まさかこんな所でISのプロトタイプと戦えるとは…この機体、私が  
長年研究して作りあげた機体のプロトタイプなのだよ。とあるシステムを搭載してい



てね。その名も「アー『ごちやごちやうるさいんだよ！死ねッ！』ッ！危ない危ない……  
流石に荷電粒子砲かでんりゅうしほうなんて喰らったらひとたまりもない』

アーもう！本当なんかウザいなコイツ！話してるだけでストレスマツハだよ！

「とつとと倒してレンくんのもとに行くんだから邪魔するなッ！行くぞゴーレム達！」  
そして謎の機体に向かってプラズマブレードを構えて飛び掛かるのだった……

Side 東Side out

Side 千冬

私は今専用機【暮桜】を纏いピットに待機していた

決勝戦まであと少し……蓮の事が頭を過る。やはり心配だ……本当なら試合なんか  
放り出して今すぐに助けに行きたい……！

『圧倒的な力で完膚無きまでに叩きのめして来てください』

……ああ、そうだな。お前の事ばかり考えて相手を蔑ろにするなんて失礼極まりない



ピットから飛び出すとジヨセスターフも飛び出してきた。

「この時を待ってたヨ…。千冬と戦えるこの時ヲ！」

片言の日本語で話し掛けてくるジヨセスターフ。よほど楽しみだったのかテンションが高めだ

「フツ……なら存分に相手になろう。……ああ、そうだ」

「……？」

試合が始まる前にコレだけは言っておこう

「今の私は…昨日より遥かに強い。だから…気を抜いたらあつという間に終わると思え…ジヨセスターフ」

「ツツ!?!」ゾクツ

今の私は負ける訳にはいかないし、負ける気がしない。不甲斐ない姿を見せられない！蓮にも一夏にも世界にも！私が最強だと世界中に知らしめてやろう…！

「まったく…とんでもない気迫だヨ……少しビククリしちやっただじやないカ…」

そして試合が開始されるのだった……

## Side千冬Sideout

## Side蓮仁

束さんから連絡を受けて直ぐに4機ものISが現れた。軽く今の状況を整理すると……IS2機を撃破したが既に肉体ダメージがかなりのものだ。武器は十分にある。あるが……勝つ見込みは無いな……逃げに撤するのが一番良いだろうな……。しかし相手はIS4機。しかもリーダー機と思われる機体は他のよりデザインが違うし強そう。閃光弾などで足止めしても逃げ切れるかどうか……。それに一般人への被害が出そうだし……やはりここで時間を稼いでドイツ軍か束さん、千冬さんが来るのを待つしか無いから……。

既にガタがきている肉体。無理すれば身体強化で戦えるが闘気解放を使ったらどうなるのか……。でも場合によっては使わないと死ぬ……。……ああ、命のやり取りなん

て山籠りして以来だな。前の方が幾分かマシだったけど。

さて、覚悟は決まった。刀を抜刀して構える

「《身体強化・速》ッ！」

スピード特化状態になり攻撃を仕掛ける。壁を蹴って飛び上がり背後に近付き上段に構え振り下ろす。

「《時雨流・岩砕割り》ッッ！」

「グアッ!？」

一機を地面に叩きつけ、追撃しようとした時

「調子に乗るなよクソガキが！」

「なっ!?!速……ッッグアッ!!!？」

いつの間にかすぐ近くに来ていたリーダー機に首を掴まれた。そして掴んだまま地面に向かって急降下し地面に叩きつけられた

「くくくくッッッッ!？」

凄まじい衝撃により肺から空気が抜けて声が出ない。そして背中から伝わる激痛により意識が飛びかけた。口からは血が吐き出され周りに飛散する

「ゲホッ!ゲホッ!グアアアアッ……」

「あん?なんだよまだ意識あんのか?コイツ本当に人間かよ」

そう言って再び俺の首を掴もうとしたのをかろうじて躲して距離を取る。急降下からの叩きつけにより内臓と骨が幾つかやられた……既に呼吸するだけで肺が焼けるように痛む。そんな中でも武器を手放さなかったのは修行の成果だ。

俺は再び刀を構えるがカタカタと揺れている。……俺の身体が震えているのか。痛み・絶望・焦り・恐怖が俺を襲う。本能が告げる。コイツには勝てない、今すぐに逃げろ。しかし奴らは逃がす気は無い。

ああ、もう全てを投げ出して逃げてしまいたい。武器を握るのすら辛い。でも……それでも逃げる訳には行かない……！今逃げたら他の人が危ない、一夏が危ない！それだけは絶対に嫌だ！

……だから、もうなりふり構つてる場合じゃ無い……この後どうなるかなんて分からない。それでも今よりはマシな状況になるかも知れない……

「ハアツ……ハアツ……ゲホツ………ふうー……《闘気解放》ツ……35%ツ！」

35%……それが今俺に使える最高の力。ただしダメージを負った今の状態で扱えるか分からないが……

そして俺は残像を残しながら走り出す。

「《時雨流・しくれりゆう幻像霧月・げんそうむげつ》」

幻像霧月……残像を残す速さで移動し敵を攪乱、そして敵を惑わせて斬り掛かる技。







「このクソクソクソクソがッ！穢らわしい男の分際でよくもやってくれたな!?死ね!苦しんで死ね死ね死ねッ!」

何度も何度も蹴り飛ばす。腹を、顔を、何度も何度も……胸ぐらを掴んで殴る、殴る、殴る。

もう意識がほとんど消えかかっている中でひたすらに罵詈雑言を履かれながら暴行されている事ははっきり分かった。

「おい、その辺にしとけ」

「しかしオータムさん!コイツは……」

「止めろって言うてんのが分かんねえか?ああ?」

「ッ!……すいません……」

そしてリーダー機……オータムがコチラに近付いてきた。

「悪いな。今業にしてやるッツ!グハツ!ゴホツゴホツ!」

「:!?オータムさん!」

突然血を吐き出すオータムに周りが戸惑う

「大丈夫だ……チツ、ゲノムの野郎が言つてたがまさかここまで肉体的負荷があるとはな……ゴホツ」

「確か改造機でしたよね?このガキのスピードに対応できるなんて……普通のラファア

ルならまず反応すら出来ませんよ」

「その分かなり危険だがな……。まあいい、待たせたな。今から楽にしてやる」

銃のトリガーに指をかけたその時

『待ちたまえ君たち。彼を殺すな』

「ああ？なんだよゲノム？」

突然通信が入り指を止めた

『戦いながらだが彼の力を……。グウツ!?……。ハアツ……。ハアツ……。彼の力を見た。素晴らし

い力だ。是非研究がしたい生きたまま連れて来てくれ』

「……。つまり何だ？このガキをモルモットにするのか？」

『モルモットだなんてとんでもない。実験に協力して貰うだけさ』

「（それがモルモットって言うんだよ）……。分かったがもう死にかけた。助かるか分かる

ねえからな」

『最悪死体でも構わない。コチラに着くまでに生きていれば延命措置くらいは出来る。

コチラも戦闘中でねッ！クツ……。結構手こずっている！頼んだぞオータムくん！』

そこで通信が途切れた

「チツ……。あのマッドサイエンティストが……。気にくわねえな……。お前ら！通信を聞いた

な！ソイツを可能な限り止血しておけ！」

……ああ……死ぬか、モルモットになるか……本当に……最悪だ……

……死にたく無い……まだ……死にたく無い……

もつと生きたい……まだ……やりたい事が……沢山あるのに……母さん……親父……

黒丸……シフ……師匠……箒……鈴……弾……数馬……キリト……ユイ……直葉……

束さん……千冬さん……一夏……誰か……助けてくれ……

……まだ皆と遊びに行きたかった……ALOの世界だつてもつと冒険したかった……

箒と再会する約束だつてしたのに……まだ……母さんにも親父にも……親孝行出来ない……

……

……誰か……誰か……誰か……

……

……

……

……

……誰も……助けになんて……来ない……

……助けを求めても無駄だ……自分でなんとかするしかない……

……力……力が……欲しい……！コイツ等を……コイツ等を殺せる力が……！

☒力を求めるか？☒

……………誰だ？

☒貴様は力を求めるか？☒

……………欲しい……………力が……………欲しい……………力が必要だ……………！

「だ……………から……………力を……………寄……………越せ……………ッ！」

☒ならば貴様の血を寄越せ。血の契約を結べ☒

突然左腕のブレスレットが光出すと朱時雨が現れた。俺は右腕を伸ばして掴む。

……………血ならいくらでもくれてやる、沢山流したからな……………

朱時雨を地面の血溜まりに突き立てる。するとみるみるうちに血が朱時雨に吸収されていく。

ソレを……………その光景をオータム達はただ眺めるしか出来なかった。余りに現実離れした、恐ろしいそのナニカにより動けなくなる。

☒足りない……………もつとだ……………もつと寄越せ……………心の臓に突き刺せ……………☒

「……………なら……………ゲホッ……………好きただけッ……………持って……………行けッ……………！」

俺は朱時雨を自分の心臓に朱時雨を突き刺した。もう痛みも何も感じない。心臓を突き刺した筈なのに、普通は死んでる筈なのに……………何も感じない……………

血を吸い取られる感覚が伝わる。

そして朱時雨を引き抜いた瞬間に意識を手放した……

Side 蓮仁 Side out

……その日、一匹の怪物が生まれ堕ちた。

憎しみ・怒り・殺意・悪意……それらが生んだ怪物はゆっくりと起き上がる。

「ツ!!今すぐに離れろ!様子が変だ!」

オータムがそう叫び部下を離れさせようとする。しかし蓮仁を蹴り飛ばしていた女は動けないでいた。

「ク”ル”ル”ル”ウ”ウ”ツ……」

そこに一歩ずつゆっくと歩いて来る蓮仁……。まるで獣のように唸り声を上げ、睨

み付けながら歩く。しかしその目は光を灯しておらず、黒かった瞳が血のように真っ赤に変色し、更に瞳孔が縦に裂けて爬虫類のようになっていた。

そして千切れ掛けている腕で女の首を掴んで持ち上げる。

「ガッ……ば、化物……」

ゴキツ

突如として鳴り響く音……そして力無く垂れる女の腕……。

オータム達は悟った。仲間が死んだ事を。

「う、撃てえええええええッ!」

そう叫び号令した瞬間。ISを破壊されたもう一人の女が縦に真っ二つになっていた。

「……は?」

つい数秒前まで目の前にいた部下が叫んだ瞬間に真っ二つになっている異常な光景に思考が停止する。そしてようやく理解した時に悲鳴が響いた。

「キヤアアアアアアアッ!」

恐怖の余りに叫んだ部下。そして次の瞬間……その部下の前に蓮仁が現れた。そして胸に朱時雨を突き刺した。

「……えっ……?ゴフッ!」





「て、撤退だ！戦うな！逃げろ！」

そう言つて飛び上がり最高速度で逃げるオータム。ふと横を見る。そこに並走する内の一機に乗つてる部下。

その部下の頭が無い。後ろを振り向いた。振り向いてしまった。怪物の左手に無造作に掴まれた物体を見てしまった。

部下の頭だ。ハイパーセンサーで見たその顔は恐怖に染まつていて絶望した顔で絶命していた。

胃の中身がこみ上げるのを抑え必死に逃げる。

その光景を見た蓮仁は……否、蓮仁の姿をした怪物は左手に持っている頭を放り投げて八双に構えた。筋肉が膨張し、朱時雨に途轍もない量の《気》が込められていく。

そしてその刃を振り下ろした

《時雨流》しくれりゆう // 極きわみ // 真空烈斬しんくうれつざん》

その一撃はあまりにも強力であり空気を斬り裂き真空状態すら作り出した。そしてその一撃を振り下ろした蓮仁の筋肉はブチブチと音をたて千切れ、健も断裂し、両手両足の骨は粉碎した。更に内臓にも多大なダメージを負った。





“Beware that, when fighting  
 monsters, you yourself do not become  
 a monster. For when you gaze  
 long into the abyss, the abyss  
 gazes also into you.”

“怪物と戦う者は、その過程で自分自身も

怪物になることのないように気をつけなくてはならない。

深淵を除く時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ”

## 原作前第27話 事件の収束

前回のあらすじ

蓮仁の前に現れた4機のIS

しかしリーダー機の圧倒的な力を前に敗北した

奥の手も通じず致命傷を負った蓮仁

そして悪意・殺意・怒り・憎しみに吞まれる

朱時雨との血の契約を交わし自我を失った

暴走し敵を殺戮するのだった……

S i d e 千冬

私は目の前で起きた事が信じられずに只々呆然としていた。

蓮が……蓮が人を殺す姿を目撃してしまった……。まるで獣のように自我を感じさ

せない瞳は真っ赤に染まり、瞳孔が縦に裂けている。

私はその瞳に恐怖を抱いてしまった。アレはいつた誰だ？本当に蓮なのか？今までに感じた事の無い濃厚な殺意を前にして頭が整理出来なくなる。只々一つ分かるのは、アレと戦ったら私は殺されるだろう。

既にフラフラで立ってるのが精一杯の筈なのに、それでも殺されるイメージしか出てこない……

すると突然殺気が消えて赤かった瞳が黒に戻る。そして蓮が倒れた。我に返った私は直ぐに蓮のもとに走る。

「蓮！蓮！！しっかりしろ！」

「ちーちゃん退いてッ！」

「ッ！束ッ！貴様何故蓮を巻き込んだッ！！何故私に秘密にしたッ！！」

「今はレンくんの事が先でしょ！？手遅れになるよッ！！」

……ッ！そうだ、まずは蓮が最優先だ。早くしなければ死んでしまうッ！！

改めて傷を見る。身体中に傷を負っている……。傷の無い場所を探すのが難しい程にだ。左耳は無くなり、左腕も千切れかけている……。脇腹や足も抉られて今もなお血を流している。明らかに致命傷だ。

「ッ……！止血するぞ！何か布か何か無いか！？」

「コレを使って！血が出ないようにキツく縛って！」

束から渡された布や包帯を傷に巻き付ける。すると束が蓮の腕に注射を刺して何かを注入していた。

「治療用ナノマシンだけど……この状態だと効き目は……」

「ツ！直ぐに病院に運ぶぞ！」

「待つて！病院よりドイツ軍の施設の方が近い！医療機関も充分な筈！」

それを聞いて直ぐ近くにいたドイツ軍人を選んで直ぐに移動を始めた。移動中も止血していたが段々と体温が低くなっていく蓮を見て焦り・後悔・怒りと様々な感情が湧き出てくる。

（何故私はあの時蓮を信じてしまったツ……！まだ中学生の子供を一人死ぬかもしれない場所に何故送り出してしまった……ツ！）

情けない……！何故私は……クソクソクソツツ！

そしてドイツ軍の施設に到着し直ぐに治療室に運び込み、直ぐに手術が始まった。束は流石に正体を見せるのはマズイので姿を変えて手術に参加している。

私は……ただ見てるだけしか出来なかった……

十数分がたった時に束が出てきた。何故出てきたのか分からないが手術が終わった訳では無いだろう。いくら束でもあの重症を十数分で治せる筈が無い。

「ちーちゃん……。落ち着いて聞いて……。このままでレンくんは……。もつて1時間くらいいの命なの……」

「ツ！なんとかならないか!?お前なら治せるんじゃないのか!？」

「……ツ！私だつて治せるなら今すぐに治したいよ！でも私だつて出来ない事くらいあるツ！辛いのが自分だけなんて思わないでツ!!」

「……ツ!?……すまない……。何か手は無いのか……?」

「有るには有るよ。ただ……。絶対に助かるか分からないし、なんなら死んじゃう可能性の方が遥かに高い……」

助かる見込みはもうそれしか無いようだ……。どんなに可能性が低くてもそれに賭けるしかない

すると束が何かを取り出した

「コレは前に私が作り出した治療用ナノマシン。ただとても危険で失敗作としか言いようが無い代物なんだ……。投与した者を爆発的な回復速度で治療するけど、回復する時に尋常じゃ無い痛みが襲うし、身体の構造そのものを作り変えちゃうんだ……。だからその痛みに耐えきれなかったらレンくんは……。死ぬ」



「…………その痛みには耐えるのはいったいどれほどの時間なんだ……？」

「…………前例が無いから分からないけど…………傷の完全治癒にまる1日、身体の構造を作り変えるのにまる2日……合計3日くらいだと思っ…………」

まる3日だと…………？その期間中に常人ならショック死する激痛に耐え続けるなんて…………！

「それにレンくんが暴れださないように3日間押さえ込まないといけないよ。レンくんの方がどっちちゃんと私が押さええるしか無いけど…………」

「みなまで言うな。直ぐに始めるぞ準備しろ！」

「う、うん！」

そして現在ドイツ軍に保護されている一夏の元に向かう。案内されて入った部屋に一夏は座っていた。

「……ッ！千冬姉！」

「一夏…………すまないが私はやらなくてはならない事がある…。明日の朝に日本行きの飛行機で先に戻って欲しい」

「……………なあ…蓮は…………？」

「……………ッ!!……………すまないが今は何も言えない……」

「千冬姉ッ！」

「すまない……」

私はそう言い残して部屋を後にした：

それから程なくして準備は整い蓮を拘束しているベッドに来ていた。身体中を包帯で覆っている姿は痛々しく、血が滲んで包帯の白さが皆無だ。

束曰く、ナノマシンで延命はしたがそれでもどうして未だに生きていられるのかわからない程の重症らしいが……。あの傷を見れば誰でもそう思うだろうな……

既に嚴重に拘束されているがそれでも押さえられないだろう……

「ちーちゃん行くよ？」

「ああ、いつでも始めてくれ」

そして束が蓮の腕に注射を差し込みナノマシンを注入していく。全てを注入し終え、しばらくした時に変化が訪れた。

「うう、ううううううううッ……！」

蓮が苦しうに身じろぎし始めて唸り声をあげた。

次の瞬間

「ガアアアアアアアアアアッ!?」

「ッ!?!」

突然凄まじい咆哮を上げながら暴れ始めて拘束を破壊しようとしたのだ。突然の変

化に私達は驚いたが直ぐに蓮を押しさえる。

「クツ…!?なんて力だ…!」

「これは…! キツイねツ…!」

その力は人間が出せるような力では無かった。筋肉も骨も既にボロボロの身体の筈なのに……!

すると蓮の身体に異変が訪れた。身体中の傷から煙が出てきたのだ。

「おい東! 何だコレはツ!?」

「傷が治って来てるだけだから大丈夫ツ!」

見た感じだと回復してるのか分からないが徐々に治っていくらしい。

そして1時間が経った頃にある変化に気付いた。千切れ掛けていた腕が元の状態に近付いて来ているのだ。更に回復してるせいか力が強くなっている。この状態だと明日には抑えきれなくなりそうだ…

「ハアツ…ハアツ…ちーちゃん大丈夫…?」

「問題無い…とりたい所だがこのままだと何れ力負けするぞ。最悪ISを使って押しさえるしか無い…!」

そしてまる1日押さえ込む私達だったが遂に生身では押さえ込む事が不可能になり

ISを纏った。東が何故か白騎士を纏っていたが今は何も言うまい。言う余裕が無いともいうが……

そして2日目に入った。相変わらず獣のように叫び続ける蓮だったが時折

「苦しいッ!!」

「痛いッ!!」

「止めてくれッ!!」

「殺してくれッ!!」

…と叫んでいる。叫び過ぎて喉が潰れて血を吐いても暫くすればナノマシンにより治癒されてまた叫びだすのを繰り返している。私達は涙を流しながら声を掛けていた。聞こえているかも分からないが必死に励ましの言葉を掛け続けていた。

もう私も東も肉体的にも精神的にも限界が近付いてきていた……

正午を過ぎて暫くすると蓮の身体は完全に治癒されていた。腕は繋がりに、抉られた箇所も元通りになり、一番驚いたのは欠損した筈の耳が生えてきていた事だ。

「ハアツ…ハアツ…もう…：…命の心配は…無いよ…：…」

束のその言葉を聞いて泣いてしまいたいそうになるがなんとか堪えた。まだ終わった訳では無いのに気は抜けない。

これから身体の構造が変化するらしい。嗚咽しながらもなんとか押さえ込む。

そして3日目。いよいよ今日を乗り切れば蓮を襲う激痛も収まる。最後の正念場だ。

「グウアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!？」

相変わらず叫び暴れる蓮。しかし明らかに昨日より力が強い…：…いや強すぎる。既にISでも押さえ込みきれない程の力だ。肉体の構造が変化しているからだろう。力だけでは無い。姿まで変わって来ているのだ。170cm程だった身長が180cm程までに伸びているし、見た感じはそこまでがっしりしていない…：…というよりガリガリな肉体だ。おそらく余分な脂肪を回復の為にエネルギーとしているのだろう。だがこのパワーからして途轍もない筋肉密度のようだ。そして髪も伸びて肩に届く程に長い。その髪は痛みからのストレスにより黒かった髪は白髪へと変色していた。

その変わり果てた姿を見ると自分の不甲斐なさに腹が立ってくる。そう思った瞬間に蓮の瞳が突然黒色から真っ赤に変色した。そして拘束具を破壊して私に掴みかかってきた。

「グウオオオオオオオオオオオオオッ!!」

「ガハッ!?!」

「ちーちゃん!?!」

突然の事態に反応ができずに首を掴まれて持ち上げられた。ISを纏っているにもかかわらず片手で軽々と。

そして脳裏を過る蓮が首を折った光景……

段々と首を締め付けてくる腕を掴むが全く引き剥がせない。束も止めようとするがビクともしていない。

（ああ……死ぬのか私は……）

人生で始めて死を感じた。しかし不思議と恐怖は湧き上がってこない。湧き上がるのは自分自身の不甲斐なさばかりだ。

私は手を伸ばし蓮の頬を触れた。

「す……まない……蓮……守つ……て……やれな……くて……」

私はそう言って目を瞑り、自分の死ぬ瞬間を待つ。

しかしいくら待っても首を折られる事は無かった。目を開けるとそこには涙を流している蓮がいた。意思の無い瞳だったが元通りの黒色に戻っており、その瞳から涙を流していた。

そして意識を失ったのか倒れた。慌てて私と蓮をキャッチした束は蓮の様子を見て驚いた顔をした後にへたり込んだ。

「痛みが収まつてる……。治ったんだ。予定より早く」

それを聞いて私もへたり込んだ。そして張り詰めていた緊張感が一気に解けてしまい涙が溢れてきた。

そしてそれを見た束も泣き出してしまい私に抱き着いてきた。

「うえええええん……良かった……良かったあああッ！」

「な、泣き過ぎだ……グスツ……うううツ……！」

そして数分してからようやく落ち着いて離れた。

「……ちーちゃん酷い匂いだからシャワー浴びてきたら？」

「お前だって酷い匂いだろうが……すまないが先に浴びてくる……」

「うん、レンくんは任せて」

それから交代でシャワーを浴びて食事を取り、仮眠をとった。蓮の身体も拭いたりし

て汚れを落とした。

まだ目を覚まさない……。東に聞いても分からないと言われた。

そしてドイツ軍から部隊を動員した事、テロリストを捕縛した事、施設を貸し出した事、現場の死体などの後処理をした事の見返りで私をドイツ軍のIS部隊の教官として1年間指導してほしいと言われた。

これに対して東(変装済み)は憤慨した。部隊を動員したが何の結果も出していないし、捕縛したテロリストも蓮が倒して気絶させた男達だ。施設や後処理は感謝しているがその2つは納得いかない、と

「分かりました。1年間の指導ですね」

「ちーちゃん!?!」

「良いんだ。今こうして蓮が生きてるのだから少なからずは軍のおかげだ。借りは返すさ」

東は何処か不満そうだったがもう決めた事だ。勝手に決めて一夏には悪いが……。とにかく1年間はドイツでの指導だ。

そして数日後に日本に一時帰還するために飛行機に乗るのだった。

しかし、この数日で蓮が目覚める事は無かった……



S i d e 千冬 S i d e o u t

S i d e 蓮仁

暗い、真つ暗な場所にいる。

いつたいここは何処なんだ？なんでこんな所にいるんだ？俺は何をしていたんだ  
……？

確か……そうだ。ドイツに来て……戦っていたんだ……I S の増援が来て……俺は殺  
されかけて……。

………俺はその後どうなった？意識が曖昧で思い出せない……

すると

突然目の前の暗闇が消えて景色が現れた。そしてその光景を目の当たりにした。

「なんだよこれ……」

突然景色が変わって、そして目の前にいる奴……

血溜まりに倒れた俺自身だ。

「なんで俺が……ううっ!？」

頭痛の後に段々と記憶が呼び起こされていき、血の気が引いていく。

力を求めるか？

「ツ!?この声はあの時の!？」

貴様は力を求めるか？

ああ……そうだ……俺はこの時に力を求めて……ッ!

『だ……から……力を……寄……越せ……ッ!』

「駄目だ……駄目だ止めろッ!」

そして朱時雨が現れて血を吸っていき、最後に自分の心臓に突き刺した。

すると意識を失ったのか力無く項垂れたと思った次の瞬間虚ろな瞳のままゆつくりと立ち上がり朱時雨を引き抜いた。

その瞳は真つ赤に変色しており瞳孔は爬虫類のように縦に裂けている。そして獣のように唸り声を上げてゆつくりと歩いていく。

殺気による恐怖で身動きが出来ない女に近寄り、千切れかけている左手をゆつくりと首に近付けて掴み、持ち上げる。ミシミシと嫌な音が聞こえ始めて何が起こるか……目の前の自分が何をするのか思い出す。

「止めろッ！手を離せッ！」

俺は目の前の自分に掴み掛かろうとする。しかし触れたと思ったらすり抜けていた。「止めろッ！止めてくれッ！」

何度も掴み掛かろうとするがやはりすり抜けて止められない。そして……

ゴキッ

女の首が折れてぐったりと力無く項垂れて死んだ…

そして突然左腕に首を折った時の感触が蘇る

「あ…ああ…あああああッ!!」

叫んだ。人を殺した事を自覚してしまい叫び散らした。生々しく残る感触に恐怖して吐いた。

しかし精神世界みたいな場所では吐く事さえ出来ない。

『う、撃てえええええええッ!!』

その声が響いて我に返った俺は顔を上げた。顔を上げた先には朱時雨で女を縦に真つ二つにしている自分がいた。

再び腕に刀で人を斬った時の肉や骨を断った感触が蘇る。

「ヒッ!?や、止めてくれ…止めてくれよ…!」

そんな願いが届く事は無く、無情にも次々と敵を殺していく。

絶対防衛を突破する威力の突き刺しを喰らい、突如爆散した奴。背中を向けて逃走し始めた瞬間に一瞬で近付いて一人の首を引きちぎられた奴。斬撃を飛ばして仲間を庇って真つ二つになった奴…。

それら全ての感触が鮮明に蘇る。俺は絶叫しながらその場に蹲る。

『クソクソクソクソッ!この化物がああああッ!殺す!殺してやるッ!アイツ等の仇を

とつてやるツツ!』

『チクシヨウツツ! お前は! 俺が殺す! 絶対に殺してやるツ! 死んだアイツ等の仇をとつてやる! 絶対に! ぶつ殺してやるツ!!』

「違う! 違う違う違う! 止めろ! 止めてくれ!」

再び景色が消えて真っ暗になる。蹲つて叫ぶ俺の周りにさつき死んだ奴らが現れた。

『人殺し』

「止めろ…」

『化け物』

「違う…」

『人殺しの化け物』

「違う違う…」

『なんで殺した?』

「お前らだつて殺そうとしただろ…ツ!」

『お前は人殺しの化け物だ』

「こんな! こんな力を求めてなんか無かった! 人なんか殺したく無かった…!」

『おいおい、嘘つくなよ』

「ツ!？」

今までと違う声に顔を上げると俺が立っていた。しかし先程とは明らかに違う意思のある瞳だ。

『お前はあの時に求めたのは奴らを殺す力だろ?嘘つくなよ』

「な、なんだよお前は…」

『ああ?俺の話は無視か?…まあいいけど。俺はお前だよ。見れば分かるだろ?』

ケタケタ笑いながらソイツが話す。

「何が俺はお前だ…!なんだよこの場所は!?!お前も何なんだよ!？」

『はあ……さつきから言ってるんだろ俺はお前でお前は俺。どっちも【緋龍蓮仁】さ。あと

この場所は意識の深層世界って感じた』

俺はお前?意識の深層世界?分からない事ばかりだ。

「待てよ……あの時の声、力を求めた時に聞こえた声がお前か?!」

『だから違うって言ってるんだろ!あの声は朱時雨だ!』

「な…ここ?」

『朱時雨は妖刀だ。呪われてる。使用者の血を吸って、あわよくば殺して魂をも取り込んで呪いの格を上げようとしているんだ。そして俺はお前の意識の深層部にあった【負

の感情」。それが意思を持った者だ。いわばもう一つの人格だ」

「もう一つの人格……？負の感情……？」

『朱時雨は使用者の感情を引き出し力を与える。それらは負の感情……怒り・憎しみ・悪意・殺意……そんな感情を引き出して力を解放する。その力に吞まれるとお前みたいに暴走して死に朱時雨に血と魂を奪われ、更に呪いを昇華させて殺しやすくする。そんな感じで負の感情を引き出した時に俺は自我を持つ事ができた。純粹なる悪としてなあッ！』

コイツは俺の負の感情が自我を持った、もう一つの人格って事かよ……！

『良かったなあ？今までこの力を引き出した奴は皆死んだのに、お前は生き残った！束さんと千冬さんが今も必死こいてがんばってるぜえ？おかげで俺は自我を手に入れた！ハッハッハッハッ！』

突然笑いだした奴は無視して、たった今も2人が俺を治す為に手を尽くしている事に素直に喜ぶ事が出来ないでいた。

「あの2人が……」

『なんだよ、嬉しく無さそうだな？まあ俺はお前だから何を考えてるか分かるけどな。『人を殺した俺なんか死んだ方が良い』って思ったんだろ？』

「……ッ！ああそうだよ……！俺は人を殺したんだ！殺人を犯したんだ！そんな俺が……生





「……けんな」

『あ?』

「ふざけんなッ!」

俺は殴りつけようと拳を振るうが躲された。しかしその拳はフェイクだ。本命の蹴りで顎を狙った。

しかし

『ざつき言つたら。お前が何を考えてるか分かるつて』

蹴りも防がれてしまったが掴まれていた首を解放され後ろに飛んで距離を取る

「ハアッ…ハアッ…:…なんで殺そうとする! お前が俺ならアイツ等を殺すなんてしないだろ!」

『俺は純粹な「悪意」…だから殺す。理由はそれだけだ。お前を殺して俺が緋龍蓮仁になる! だからお前はここで死ね!』

そう言つた瞬間に奴の右手に朱時雨が現れた。そして俺に斬り掛かる。

『《時雨流・穿ち》しぐれりゅう ツ!』

「ッ!ぶねえ!」

間一髪で躲して距離を取り応戦しようとブレスレットから武器を出そうとする。しかし何故か反応が無く何も出てこない。

『オラどうした！もつと足掻けよ！』《時雨流・岩砕割り》『ツ！』  
 「くっ！ガハッ！」

岩砕割りを躲したが衝撃で石などが飛んできて身体中に当たる。精神世界の癖になんで石なんかあるんだと悪態をつくが直ぐに体制を立て直すと拳を握る。

『おっ、やっと殺る気になったか！ならこつちも本気で行くぜえ！』《時雨流》『極』  
 五月雨『ツ！』

「身体強化【防】！拳に極み振りだ！はあああああツ！！」

両拳を身体強化で硬質化させて五月雨の無数の突きに対応する。しかし鉄をも貫く途轍もない威力の突き刺しに拳が耐えられる筈も無く、最初は防いでいたが限界を迎えて深々と突き刺された。

「ガアアアアアアアツ！！」

『ハハハッ！滑稽だな！まだまだ終わらないぞ！』《時雨流》『極』  
 鬼滅突き『ツ！』

《時雨流》『極』  
 五月雨の派生技《時雨流》『極』  
 鬼尽突き『前方の広範囲に穿ちを放つ五月雨とは違い、一点集中で穿ちを放つ技だ。』

その技が俺の左拳を貫く。何度も何度も同じ場所に突き刺して遂に拳から肩に貫通した。

「ガアアアアアアアツ！！？」

『なんだよさつきから叫んでばっかりだな……？もつと足掻けよ、楽しませろよ！』  
「グフツ!」

左腕の激痛に倒れた俺の腹に向かって蹴りを入れる。そして数メートル吹き飛ばされた。

『なんだよ弱いなあ……。あつ！そうだ！こうすれば本気になるか？』

周りの景色が再び変わる。そこには暴れる俺とISを纏っている千冬さんと束さんがいた。

『さて……まずは千冬さんからだな』

すると目の前の暴れている俺の瞳が真っ赤に変色して千冬さんの首を掴んで締め付け始めた。

「ツ!?!お前何をしやがった!」

『今の状態の身体なら俺でも干渉できる。こんなふうになつ!』

「ツツ!?!」

す……まない……蓮……守つ……て……やれな……くて

千冬さんがそう言った瞬間、怒りが爆発し飛び掛かった。

「止めろおおおおお!!」

すると叫んだ瞬間に左目が熱くなるのと同時に身体に力が漲るのを感じた。そして

そのまま奴に掴み掛かり投げ飛ばした。すると現実の肉体だと思われる俺の瞳が黒に戻り、倒れた。

そこで景色は霧散して暗闇に戻った。

『ぐっ……はははっ……。片目が俺と同じ赤色になっているぞ？いや、赤より濃い朱色か？』

「デメエ……！」

『お前が本気にならないからだぜ？まあいいや。ようやく面白くなってきたしな！』

そして再びぶつかりあう。右目を瞑って左目だけで見る事によりなんとか対応出来ている。

左目を通して見る景色は色が無いモノクロの世界。そしてまるでスローモーションのように攻撃がゆっくりと見える。更に攻撃や危険な物などが赤く見えるので対応しやすい。

しかしコチラは無手。それに対して奴は朱時雨を装備している。既にかかりの時間が経過している。1時間？10時間？はたまたまる1日？

既に精神的な疲れでそんな事に気をかける余裕すら無い。精神世界故か肉体的疲労は無いが終わりの見えない戦いに加え、自分が人を殺した事実が掛かり既に精神がボロボロだ。

何度も挫けそうになるが自分が負けたら大切な人達が殺されると、何度も何度も立ち上がった。

しかし

遂に限界が訪れる。

「ぐっ……」

身体に力が入らなくなり膝をついてしまう

『やれやれ……。往生際が悪い奴だよお前は。ここまで粘るなんてな』

そう言いながらゆっくりとコチラに近付いてきて朱時雨を振り上げる。

『これで終いだ。あばよ』

「クソっ……!」

そして朱時雨を振り下ろし俺を切裂こうとした瞬間。朱時雨が手から弾かれた。

「!?」

『…あ?』

俺も奴も何がおきたのか理解出来なかった。そして地面に落ちた朱時雨から2つの光の玉が現れた。

『なんだお前等は……死人の分際で邪魔をするなッ！ 《時雨流・送り火ノ蝶》ッ!!』

死人……? どういう事だ? しかも送り火ノ蝶は霊なんかに使う技だ……。いったい何がおきてる?

『……ッ!? なに!? 何故効かない!? 霊ならば強制成仏させる技だぞ!』

技が不発に終わり驚愕した奴に向かって2つの光の玉が飛んでいく。そして何度も何度もぶつかり攻撃をしていく。

『グアッ!? クソ! なんだお前等は!』

攻撃が一切効かない相手に一方的に攻撃を受けてダメージを負っていく。そして遂に膝をついた。

『グウッ……このまま終わると思うなよ……! 次こそお前を殺してその身体を手に入れるからなッ……!』

そう言った瞬間、闇に溶け込んで消えていった。

「た、助かった……?」

すると今度は俺に光の玉が向かってきた。そして俺の前で止まると、なんと話し掛けてきた。

『大丈夫ですか?』

「え? あ、はい……」

突然聞こえた女性の声に驚いたがなんとか返事をした。

「あの…助けていただきありがとうございます。…ぎいます。…：貴女達は、いつたい…」

『すいませんが余り時間がありません。なのでこれから話すことをよく聞いてください』

「いったい誰なのか尋ねようとしたが遮られてしまった。そしてその女性の声は話し始めた。

『これから先、貴方が肉体に多大な傷を負って弱った時。彼はまた貴方の身体を奪う為にこの場所で戦うでしょう。彼は貴方の半身にして闇の部分です。貴方が力をつければ彼も強くなり、貴方が負の感情を抱けばより強大な相手になります』

「……」

『だから彼を倒すには心を強く保ってください。貴方は身体と技量があります。ですがその2つに比べ心が脆く危ういです。怒りや憎しみ、殺意を押さえ込む為にもこれから心を強くしてください。でなければ…：次こそ貴方の身体を奪われるでしょう』

すると光の玉が段々と小さくなっていく

『私達が助けてあげられるのは今回だけです。どうかお気をつけて』

「待ってください！貴方達はいつたい誰なんですか!?!なんで俺を助けてくれたんですか!?!」

『……………もう、時間です』

その直後、俺は突然意識が遠のいて倒れる。そして意識が途切れる瞬間に2つの光の玉が何かを言った。

『敵仁さんをよろしくお願いします』

『父さんの事は任せるよ。頑張れ蓮仁』

そして俺は完全に意識を失った。

「ううっ……」

目を開けると見知らぬ部屋で寝ていた。起き上がろうとするが上手く力が入らなくて起き上がれない。誰かを呼ぼうにも掠れたうめき声しか出せない。

(……………夢じゃ……無かったのか……………)

俺は……………人を殺したんだ。

「ツ……………ごうツ……………」

吐き気がこみ上げるのを必死に押さえていると部屋の扉が開き誰かが入ってきた。

千冬さんと束さんだ。



「た…ばね…さん…。ちふ…ゆ…さん…」

「ッ!？」

2人が驚愕した目でコチラを見て固まる。そして暫くして泣き出した。

「よ、良かったああああッ! 目覚め無いかと思ったああああッ!!」

「蓮…! 良かった…本当に良かった…! ううっ…」

「あ…の…」

上手く喋れない事に気付いたのか直ぐに水を飲ませてくれた。おかげで少しは声が戻ったみたいだ。

そして俺は束さんの言葉に衝撃を受けた。

「俺は…1週間以上、寝ていた…?」

「うん…全然起きないから…本当に心配したよ…」

「そう…ですか…」

そうか…俺は1週間も奴と戦っていたのか…

「……………」

「…れ、蓮…」

「待つてちーちゃん。色々話したいだろうけど今はとりあえず検査を……」

グウウウウウウウウツ

「……………」

「と、とりあえず食事にしよっか」

そしてまず先に食事をとる事にした。

暫くして運ばれてきたのは質素な食事で、しかも介護食のような物ばかりだ。

「いきなり固形物は無理だからこれで我慢してね」

そして力の入らない腕を持ち上げスプーンを握り食べ始めた。そして直ぐに完食し

……

グウウウウウウウウツツ

「……………」

「……………おかわり」

結局は固形物も食べた上に成人男性の1月分の食事を平らげるのだった。

S i d e 蓮 仁 S i d e o u t

千冬と束の2人は目の前の光景に目を疑った。途轍もない量の食事が次々と消えていき、あつという間に完食されたからだ。

しかもそれを食べていた蓮仁は起きた時の状態は骨と皮しか無いようなガリガリの姿だったのに、今ではがっしりとした身体付きになっているのだから。

「まさか…今食べた物を瞬時にエネルギーに変えたというのか…？ コレはあのナノマシンの力か…？」

「分かんないけど…多分そう…」

この現象には蓮仁に投与したナノマシンの開発者である束ですら困惑していた。もはや人智を超えている謎の現象に頭が整理出来ない。

「モグモグ……ぐくん……（……人を殺しといて何を呑気に飯なんて食ってるんだろかな……）」

自分の犯した事がずつと離れない蓮仁は食事を終えて立ち上がった。

「も、もう身体大丈夫なの…？」

「はい。身体は大丈夫です」

ナノマシンのおかげで肉体は完全回復どころか構造すら変わって前より遥かに強く

なっていた。しかし肉体に反して精神はズタズタであり、とても危うい状態である。

「それじゃあ大丈夫だとは思うけど一応検査するね」

そして移動する為に歩き出した蓮仁は……

ズデンツ！

「ツツ!?!」

盛大に転んだ

「だ、大丈夫か!?!」

「どうしたの!?!まだ痛むの!?!」

「か、身体が変な感じが……まるで自分の身体じゃないみたいだ……」

ゆっくりと立ち上がり気づく。前とは明らかに自分と千冬と束との身長差が違う事に。そして視界を覆うような真っ白な長い髪に。

「あ……そっか……。それも含めて説明するからまずは移動しよう」

「肩を貸そう」

そして2人の肩を貸りて部屋を移動したが身長差があり過ぎて支えられてと言った方が正しい状態になっていた。

そして精密検査を受けた蓮仁の肉体は健康そのものであった。体中の傷も癒えて千切れ掛けていた腕も元通りになり、欠損した耳も治っている。

ただし、朱時雨を突き刺した胸の傷は決して消える事は無かった。

「なんでこの傷だけ消えないのかな？」

その事に疑問を覚えた東。それに蓮仁は答えた。

「この傷は呪いです。一生消える事はありません。俺が犯した罪、俺が求めてしまった力の代償……この傷は未来永劫俺を苦しめる……」

「……………」

「クツ……………」

2人は何も言えなかった。蓮仁の身体の傷は治ろうとも、心に一生消える事の無い傷を負わせてしまった自分たちの力の無さを恨んだ。

蓮仁も2人の心情を察し、声を掛けようと思つたが、自分が何かしら言つても今の2人には苦痛でしか無いと思ひ、話題を変えた。

「俺はこれからどうすれば良いですか？」

「そうだね……暫くはここにいて貰うね」

「そうですか……（今は……そっちの方が良いな……。皆に合わせる顔が無いし……）」  
すると東が思い出したようにある物を取り出した。

「レンくんコレ。回収してきたけど……」

「……ッ！雪月赤……！」

鞘に収められた愛刀を受け取り引き抜くと、そこには半ばから折れた刃があった。

「……………ツ！すまない……！俺が未熟なせいで……！」

貰つてから約4ヶ月と短いが、自身の愛刀としての愛着があつた為にかんりのシヨツクを受けていた。

「……………今日はとりあえずもう寝よう。明日から少しづつ身体に慣れたりカウンセリングしたりするから」

「……………はい」

こうしてその日はお開きになった。しかしベッドに入った蓮仁は様々な思考が渦巻き、眠れない夜を過ごさすのだった……

## 原作前第28話 消えない心の傷

前回のあらすじ

倒れた蓮仁を治療する束と千冬

瀕死の身体に打ち込まれた危険な治療用ナノマシン

回復するにつれて蓮仁は激痛により暴れる

そして蓮仁も別の戦いを繰り広げていた

それはもう一人の自分…

激闘の末に敗北したが謎の2つの光の玉に助けられた

そして目を覚ましたら既に1週間以上経過していた

更に身体まで変わり果てるのだった…

S i d e 束

レンくんが目を覚ました翌日。

朝食を済ませたレンくん二人で話をしている。いわゆるカウンセリングだね。

人を殺した事でだいぶ精神が不安定になってるみたいで夜も眠れなかったのか隈ができています。なによりいつも明るく笑っていた顔は暗いままだ。このままだと自殺でもしてしまうのでは無いかと思う程に憔悴しきっている。

別に専門的ではないカウンセリングだけど、ちーちゃんやドイツ軍の連中に任せるより私が行なう方が良いだろうと始めた事だけ……。結果は著しく無いね……。

一切笑わなくなっただし、目は虚ろだし、食事でも喉を通らないらしく昨日のバク食いが嘘のようだ。私とちーちゃんより少ないもん。

そして急成長した身体に慣れてないからか転びはしなくなっただけよくコケるようになったね。動きもぎこちなくて危なっかしいから余計に心配になる。

「それじゃあ今日はこの辺にしとこっか」

「はい……」

「やっぱり元気が無いなあ……。……無理もないか……レンくんだったってまだ子供なんだから……」

「そ、そうだ！今日からちーちゃんが教官として指導するから一緒に参加してみたらどうかな!?新しい身体にも慣れないといけないし丁度良いよ！」

「そう……です……。行ってみます」



「うんうん！あつ、コレ新しく買ってきたジャージだから使つてね！それじゃ行つてらっしゃい！」

私はそう言つてレンくんを送り出した。一人になつてため息を漏らしてしまった。

私がレンくんを巻き込んだからこんな事になつた……。私のせいでレンくんは……

そんな事を考えながらラボに戻るとクーちゃんが何かを作つてくれた。

「おかえりなさいませ束様。丁度クッキーが焼き上がりましたのでお茶にしましょう」

「うん、ありがとうクーちゃん」

差し出されたクッキーは真つ黒でコゲコゲだったけど私は迷わずに口に入れた。ガリッゴリッバキツと音をたてながら咀嚼して飲み込む。

「うくん！美味しい！」

「嘘ですね」

「そんな事無いよ！クーちゃんの作つた料理は何でも美味しいよ！」

「なら蓮仁様の料理と私の料理どちらが美味しいですか？」

「レンくん」（即答）

あつ、ヤバ……

「やっぱり私の料理は美味しくないですよね……グスン」

「ワーワー！美味しいよ！前より断然美味しくなつてるよ！これは将来有望だなーッ

!？」

慌ててそう言って泣いてるクーちゃんを見ると…

「嘘泣きです」（キリッ）

「嘘かーい！本気で焦ったよー！」

「少しは元気になったみたいで良かったです」

「…！クーちゃん…」

どうやら心配を掛けていたみたいだ…それにしてもこんなふう元気付けるなんて、なんだかレンくん家に泊まったらユーモアになった…？

「私でも相談くらいにはのれます。どうか一人で抱え込まないでください」

「クーちゃん…」

そして私はポツポツと語り始めた。

私がレンくんを巻き込んだからあんなに大怪我をさせてしまったし、人を殺させてしまった。身体も変わってしまったし…それに通常の範囲を超えた極端なストレスによりPTSDと言う病気を引き起こしてしまった…前とはかなり違ってしまった…私を恨んでるんじゃないかな…？…そりゃあ恨むよね…私のせいでこんな事になったんだから…

「……………束様。結論から言いますと蓮仁様は決して束様を恨んだりしません」

「…ツ！なんでそう言いきれるのさ！レンくんの事あんまり知らないじゃん！」

「そうですね」

「なら…ならなんで恨んでないなんて言えるの…！」

私は声を荒げてそう叫んでしまった。相談にのってくれたクーちゃんに八つ当たりまがいな事をしてしまった。

それでもクーちゃんは優しい声で話し始めた。

「確かに一度しかあつた事はありません。ですが束様から耳にタコができる程話を聞きました。本当は束様が一番分かっているのでは無いですか？蓮仁様が恨んだりしない事を」

「……ツ！…でも…やっぱり恨んでるかもしれないって…。そう思っちゃうんだ…。もう…前みたいに戻れないんじゃないかって…」

そう…私は怖いんだ。レンくんが恨んだりする性格じゃないのは知ってる。それでもやっぱり心の底では恨んでるかもしれない。もう…前みたいな関係には戻れないかもしれない。

「なら本人に直接聞きに行きましょう」

「えっ！む、無理だよ…」。レンくんだって自分の事で大変だし、精神的にも不安定だし、負担を増やしたくないし…怖いし…」

「東様……ヘタレですね」

「ングツ!？」

厳しい言葉が突き刺さる。

「ですが確かにそうですね。今は様子見をしましょう。では私はこのクッキーとお茶を届けに行きますので失礼します」

「行つてらっしゃい……」

私はクーちゃんを見送つてからソファに寝そべり手で顔を覆つた。

「やっぱり恨んでるかな……?」

そんな私の疑問の答えは出なかった……

Side 東 Side out

Side 千冬

ドイツ軍で教官として指導する事になった私は少々不安だった。蓮の事もあるが、指

導なんて篠ノ之道場にいた頃と日本代表として代表候補生に教えたくらいの経験しかない。

私はしっかりと導いて行けるだろうか……。

そんな事を考えていたら蓮が訪ねてきた。その姿はジャージで、肩まで伸びた真っ白な髪を後ろで結って邪魔にならないようにしている。

「千冬さん、俺も身体動かしたいので訓練に参加しても良いですか？」

「あ、ああ……構わないが……。大丈夫なのか……？」

「今は身体を動かしたい気分なので……」

「そう……か。分かった」

そのまま蓮を連れて訓練所へと向かう。軍事施設が珍しいのか辺りを見ているがやはり元気が無い。普段なら間違い無く興奮しながらアレはなんだ、コレはなんだと聞いてくるのだが……。今は少し辺りを見渡しながら私の後ろをついてくるだけだ。

そして暫くして訓練所に到着すると既に私が担当する部隊が整列していた。私が担当するのはI S部隊だ。故に全員が女性でありどうしても蓮が浮いてしまう。

「この部隊を指導する事になった織斑千冬だ。これから1年間、教官である私の指示に従うように」

『ハッ！』

「そして彼は暫く訓練に参加する事になった緋龍蓮仁だ。男故にISは動かせないが対人戦闘など他の訓練には一緒に参加する」

「緋龍蓮仁です。暫くの間、よろしくお願いします」

そして蓮を紹介した。すると部隊の面々はどこか怯えたような顔をしている事に気付いた。

そう、彼女達はあの日に蓮がISを纏っている相手を一方的に蹂躪する姿を見ていたのだ。

その視線に気付いた蓮は俯いてしまった。

そして訓練に移った。まずは走り込みだ。流石は軍人と言ったところだ。皆体力はかなりのもので呼吸の乱れも無い。しかし気になったのが少し離れた場所を走る二人。

一人は蓮。部隊の人に気を遣って離れた場所を走っている。……その理由もあるだろうが急成長した身体に慣れずによくコケていて上手く走れないようだ。

そしてもう一人は長い銀髪に眼帯を付けた、蓮と並んだら親子と見間違う程に小さな少女。名前はラウラ・ボーデヴィツヒと言ったか……事前に話しを聞いているが、どうやら【落ちこぼれ】と言われているらしい……。なるほど……彼女も部隊から浮いてしまったか。

体力には何ら問題は無いが蓮同様に離れた場所を走っている。というか蓮の後ろを

走っている。

確か同い年の筈だ。互いに何らかのきっかけになれば良いのだが……。

そして走り込みも終わり対人戦闘訓練に移った時に蓮がコチラに近付いて来た。何かあったのかと思つたが、どうやら力の加減がまだ分からないらしくこのまま対人戦闘に参加するのは危ないと判断したらしく自主トレをすとの事だ。

そして割と離れた場所に移動して行つた。するとボーデヴィツヒも部隊から離れた場所に移動し一人で訓練を始めだした。

まったく……これは前途多難だな……

そして訓練を開始し一人一人を見て回りながらアドバイスしたり、手合わせしたりしている。ボーデヴィツヒの所にも行き指導したがどこかよそよそしい態度だ。まあ、初日だから仕方がないか……。

暫く訓練していると皆が動きを止めてある一点を見ていた。私も見てみるとそこには蓮がいた。地面に倒れている蓮が。

私は血の気が引いて直ぐに近付こうとしたら直ぐに立ち上がった。まったく心配させてくれる……。

立ち上がった蓮は構えて体術を繰り出していく。少しぎこちない動きをしているが

段々と調整されていき速さを上げていって……盛大に転んで再び地面に倒れた。

部隊の者達はその光景をポカンと見ていたが私の一喝により再び訓練に戻った。とりあえず蓮の元に向かおうとすると私より先にボーデイヴィツヒが近付いていつて何かを話し始めた。そして暫く話し合うとボーデイヴィツヒは少し離れた場所へ移動して訓練を再開し始めた。

そして今度こそ近付いていき話し掛けた。

「蓮。余り無理はするなよ？」

「いえ、大丈夫です。多少無理した方が早く馴染むので」

「そうか……程ほどにするんだぞ」

そしてさつきボーデイヴィツヒと何かを話していた事について聞いてみる。

「ボーデイヴィツヒとは何を話していたんだ？」

「え?…ああ、俺の体術について聞いてきたんですよ。ただーから教えるのは期間的に無理だと言ったら『ならば動きを見て参考にする』って少し離れた場所に行きましたよ」  
「なるほど……」

どうやら蓮から何かを学ぼうとしているらしい。今も視線をコチラに向けて観察しているようだ。

まあ、害は無いしこのままでも大丈夫だろう。



そして訓練に戻るのだった。

S i d e 千冬 S i d e o u t

S i d e ラウラ

今日から新しく教官として入った人物。それはモンド・グロツソで優勝を果たした人物、織斑千冬だった。

私もその戦いぶりには感嘆したもので一種の憧れを抱いている。

しかし、私が今一番気になるのは彼女ではなくもう一人の人物だ。名は確か…緋龍蓮仁と言ったか…。

部隊だけでなく軍全体である噂でもちきりであるのだが、その噂の人物こそが緋龍蓮仁らしい。

“生身でISを纏った敵複数を惨殺した男がいる”……この噂の本は私の部隊らし

い。ドイツ軍の所有するISは現在3体だ。その3体をモンド・グロツソ最終日にある場所に出動させたのだ。その時私は力不足故に出動メンバーには選ばれなかった。

そしてその出動メンバー3人と他の部隊の連中が現場にてISと交戦する姿を目撃していたらしい。相手はテロリストだったらしく6機ものISを所持していた。そしてその全てを一人で……たった一人の生身で倒してのけたのだ。

私は大いに興味が湧いた。私はデザインチルドレン……人工的に作られた人間だ。軍人として戦う為に生み出された故に強さこそが全てであり、強さこそが存在意義だ。

実際に相手が男だろうが大人だろうが私は負け知らずだった……。ISが現れるまでは。

ISが現れてから私はどんどん落ちぶれていった。IS適合手術にも失敗し今では【落ちこぼれ】の烙印を押されてしまった……。

左目は忌々しい金色になってしまい私は眼帯を付け始めた。私はこの瞳が嫌いだ。この瞳を見ると自分が惨めに思えてくるから……。

だから私は強くなり再び這い上がるうとしている。好都合な事にあの織斑千冬が教官なのだ。なにより生身でISを倒すこの男からも何かを得られるかもしれない。私はそう思っただけの観察を始めた。

まず最初は走り込みだ。奴は部隊から離れた場所を走り始めた。別に遅れている訳

では無く、離れ過ぎず近過ぎない距離を保っている。その後ろを走って観察した。体力はかなりのもので現役軍人に余裕でついていっている。……いや、余裕過ぎるのでは無いか？私や他の部隊の奴らも多少息切れしているのにコイツはまったく息切れしていない様子が無い。だがよく躓く奴だな……。いつか転びそうだ。

次に対人戦闘に移ったが奴は教官と何かを話してから離れた場所に行った。どうやら対人戦闘はしないらしい。むう……一番気になる戦闘が見れないとは…。

私も部隊から離れた場所で一人で訓練を始めた。暫くすると織斑教官が来たが柄にもなく緊張してしまいよそよそしくなってしまった……。そして訓練を続けていたら奴が何かをしているのに気付いて手を止めた。

あれは……体術か？見た事の無い体術だが……。最初はぎこちない動きをしていたが暫くすると動きにキレが出て来て洗練された動きになっていった。そして段々とスピードが上がっていき……。奴が転んだ。それはもう盛大に。

暫くすると起き上がり、再び体術を始めた。さっきよりキレが増している動きで徐々にスピードを上げていき……。また転んだ。

起き上がった奴は頭をポリポリとかいて困ったような顔をしている。なんだろうか……見ていて思ったがなんともチグハグな奴だ。体力もあるし体術のキレも技量もあるのに、まるで身体が思い通りに動かないような……。そう、まさに自分では無い身

体を動かしているようだ。変な奴だ。

それでも確かな強さを持つている事は分かった。それにあの体術は使えるかもしれない。ISはパワードスーツだが、使用者の身体能力も大いに反映される。あの体術を学べば対人格闘はかなりの物になるだろう。ならば前は急げだ。直ぐに行こう。

そして私は奴に近付いて話し掛けた。

「おい」

「……ん？」

「さっきの体術はなんだ？」

「体術か？なんでそんな事を……ええつと、名前は？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「ボーデヴィツヒはなんでそんな事を知りたいんだ？」

奴はそんな事を聞いてきた。

「私は強くならなければならぬ。強さこそが私の存在意義だ」

「強さこそが存在意義……か」

私の言葉に何かを考え込んでいるようだがいちいち待ってやる程私は暇では無い。

「おい、それでどうなんだ？」

「ああ……この体術だが、一朝一夕で身につく物じゃ無いし、俺が此処にいる期間もそこま

で長くないからな。期間的に全て教えるのは無理だ」

「……そうか、ならば動きを見て参考にする」

私は奴から離れた場所に移動し始めた。

「別に基礎くらいなら教えたんだが……」

奴が何かを言ったようだが聞こえなかったのもそのまま観察を続けた。

しかしやはり見様見真似ではどうにもならないように結局今日の生身の訓練では何も得られなかった。

そしてISの訓練に移った。奴は男なのでこの訓練は見学のようにだ。しかし始めて直ぐに顔色を悪くして訓練所から走り去ってしまった。教官も自主トレを命じて追いかけてしまった。

「いったいなんだったんだ……?」

暫くして教官が戻ってきたが奴の姿は無かった。そして今日の訓練を終えた。

そして私は上層部の命により奴の……緋龍蓮仁の滞在中の翻訳係や案内などの面倒を見るように言われた。しかしこれは建前であり本当は奴を危険と判断して監視させようとしているのだ。私が選ばれた理由は日本語が話せる事、そして「落ちこぼれ」である事だ。

私が死んだ所で大した痛手にはならないのだろう。

しかし好都合だ。これで奴の事を調べる事ができる。必ず強さの秘密を暴き、這い上がって上層部の奴らを見返してやろう。

「施設の案内をしてやる。ついてこい」

「…分かった」

そして私は滞在中に使用できる施設や移動可能なエリアを案内した。すると奴が話し掛けてきた。

「なあ…ポーデヴィツヒは俺が怖く無いのか…？」

なんだ突然…。顔を見れば悲しそうな顔をしていた。少なからず驚いたが直ぐに返事をした。

「ふん、別に貴様など怖くなど無い。噂話は聞いたが実際に見た訳では無いしな。それに…：貴様は確かに強いがそれだけだ。恐怖も何も感じない【無】だ」

【無】か…：確かにそうだな。今の俺は胸にぽっかり穴が空いた気分だ…：。すまない、変な事を聞いたな…：もう部屋に戻るか」

そう言つて奴は背中を向けて去つて行つた。

それにしても奴は本当に日本人か？髪は真っ白だし身長もかなり高いが…：まあ、どうでもいいが。

私も自室に戻ろうかと思つた時に曲がり角から織斑教官が出てきた。

「お疲れ様です教官」

「ああ、ボーデヴィツヒもな。所で先程の会話だが…」

「…！聞いていたのですか？」

「あ、いや、盗み聞くつもりは無かったんだがたまたま耳に入ってたな…」

「そ、そうですか？」

なんだかしどろもどろしている気がするが気のせいか…？（天然）

「そ、それでだ。もし良ければ蓮の…蓮仁を気に掛けてやってくれないか？アイツは一人で抱え込み過ぎているからな。ボーデヴィツヒが何らかのきっかけになればと思っただが」

「ハッ、その命、謹んでお受けいたします」

「別に命令では無いのだがな……。まあいい。それにボーデヴィツヒも強くなりたいのだろう？ならばアイツから何かを得られるかもしれないぞ？…では、よろしく頼んだ」

教官はそう言って戻ってしまい私だけがその場に残されてしまった。しかし、気に掛けるか…？どうすればいいんだ…？

とりあえず奴の部屋に向かうとしよう。

そして暫く歩いて奴の部屋に到着した。ノックをして部屋に入ると奴はトレーニングをしていた。

「ボーデヴィツヒか？何か用か？」

「そういう訳では無いが……。貴様は訓練終わりだというのにトレーニングか？休む事も仕事だぞ」

「いや、何もする事が無くてな……。手持ち無沙汰だし動き足りなくて筋トレしていた所だ」

「なに……。生身の訓練だけとは言え軍人専用の訓練だぞ!? いったいどんな体力をしているんだ!？」

クツ……。私は既に疲労しているのになんて奴だ……。織斑教官といいコイツといい日本人は化け物か!？」

「それで特に用は無いのか？」

「むっ、そうだな……。教官に気に掛けてくれと言われだが黙っていた方が良いか……。貴様の強さが気になってな。話しを聞きにきた」

「そうか……。あつ、なら丁度良い。今から腕立て伏せをするから背中に乗ってくれないか?。」

「はっ? 何故だ?。」

「いや、身体に負荷をかけたらいし、乗るだけだから話しもできるだろう?。」

「ふむ、それもそうか。よし分かった」



そして私は奴の背中に乗る。すると奴は直ぐに腕立て伏せを始めた。

「ム…?ムムム!」

「ど、どうかしたか?」

「いや、何でも無い。続ける」

そして再び腕立て伏せを始めた。そして私は奴の背中に乗っているのだが……ふむ、なるほどな。

(なかなか楽しいではないか……)(・ω●)キリッ

なんだろうか。ただ背中に乗って上下に動いてるだけなのに妙に楽しいぞ!そうか!コレがいわゆる遊園地の乗り物に乗った時の気分か!

「ボーデヴィツヒ?」

ふ、ふふふ…今まで娯楽など一切何もしなかったが、まさかこれ程までに楽しいとはな……!

「ボーデヴィツヒ?!」

おお?少し早くなつたぞ!ハハハッ!いいぞいいぞ!もつと早くだ!

「ボーデヴィツヒ!」

「はっ!?!な、なんだ!?!」

「いや、話しを聞きにきたんだろ?突然黙ったからびつくりしたぞ?」

し、しまったあ！私とした事が余りの楽しさに呆けてしまったあああ！いかんいかん！強さの秘密を暴かなければ……！

そして私は奴の話しを聞いた。剣道の道場に入った話しや、師匠の時雨厳仁に弟子入りした話し。山に一ヶ月籠もって野犬の群れや熊と戦った話しなど様々な事を聞いた。しかし途中強さとは関係無い話しも挟んでいたが……。まあいいが……。

しかしVRMMOか……仮想世界の中で人や人外と戦う……。ゲーム内ならば死ぬ事は無いだろうし訓練には良いかもしれないな。しかも日本の自衛隊も訓練で使っている銃を題材にしたゲームもあるのか……。ふむ……これは良い話しを聞いたな。

にしても度々出てくる一夏と言う奴は教官の弟だったか……。コイツの話しを聞いていると高確率で出てくるな。

そして暫く話しを聞いていると夕食の時間になっていたので話しを終えた。その時に気付いたがコイツはいつからか片手で……しかも人差し指一本で腕立て伏せをしていた。私が乗っている状態にもかかわらずだぞ？やはりコイツはとんでもない奴だな。そして私達は食堂へと向かっていった。

……背中に乗るやつだが、またやらないだろうか……？

S i d e ラウラ S i d e o u t

S i d e 蓮仁

暗い闇の中

俺は走り続けていた

どこまで進んでも終わりの無い闇の中を…

『人殺し』

『化物』

『何故お前が生きてる』

『何故私達が死んだ』

どこからともなくそんな声が聞こえてくる

俺はひたすらに走った

その声から逃げた

怖い

もう止めてくれ

そして何かに足を取られて転んだ

そして生暖かい液体に触れた

血溜まりだ

俺が殺した彼女達の血だ

足を見ると彼女達が見ついていた

虚ろな瞳でコチラを見ている

『人殺し』

『人殺し』

『化物』

『死にたく無かった』

『お前のせいだ』

『お前が死ねばよかったのに』

『お前が死ねば』

お前が死ねばよかったのに

俺は耳を塞いだ

聞きたくない、見たくない

すると俺の腕が掴まれて耳から引き剥がされた

そこにいたのは奴俺だ

『目を背けるな』

奴俺はそう言った

『逃げられはしない。一生付き纏う』

彼女らが足にまとわりつく

『お前は…人殺しの化物だ』

奴俺は笑いながらその瞳を真っ赤に変えていく

そう、まるで血のように真っ赤に……

「ウワアアアアアアアアッ!!?」

俺は叫びながら上半身を起こした。そして直ぐに布団を捲った。しかしそこには何もなく、ただ前より長くなった自分の足があるだけだった。

「ハアツ…ハアツ…ゆ、夢…か」

どうやら夢を見ていたらしい。酷い夢だった。生々しい光景が鮮明に蘇り、脳に焼き付く。それを思い出した途端に気持ち悪くなり蹲る。

すると突然ノックが聞こえて誰かが入ってきた

「おい！今何時だと思ってる！隣部屋にまで聞こえて飛び起きたぞ…つて、どうした…？」

「ボー…デヴィ…ツヒ…袋…吐き…そう…うつぶ」

「!?ま、待て！今用意するから！ええつと…ええつと…あつたーよし、コレを使えー！」  
そして袋を受け取りその中に吐いた。胃の中の食べ物全てを吐いたが、それでも吐き気が収まらずに胃液を吐き続けた。

この事態にはボーデヴィツヒも焦ったのか俺の背中を擦ってくれていた。

そして暫く経ちようやく落ち着いた俺はボーデヴィツヒに札を言った。

「すまないボーデヴィツヒ…あと、ありがとう…」

「あ、ああ…気分が悪いなら医務室に行くか？」

そう訪ねてきたが俺は首を横に振った

「大丈夫だ…。少し外の空気を吸ってくる…」

「………そうか…分かった」

そして俺は一人で外に出た

見上げた空は清々しい程に雲一つ無いキレイな夜空だった。こんな気分の時に見ても何も感じる事は無いが

「……………クソっ」

俺は座り込んで悪態をつく。気分が晴れない。モヤモヤしたものが胸に残って気持ち悪い。

なによりあの光景が頭から離れない。人を斬った感触や断末魔が鮮明に蘇る。

「クソっクソっクソっクソっ！」

俺は壁に頭を叩き付ける。忘れたい。見たくない。聞きたくない。俺は逃げるように頭を打ち付ける。全て忘れる為に

「忘れろ！忘れろ！忘れろ！」

頭を打ち付けるが壁に傷ができるばかりで頭にはまったくダメージが入らない。忌々しい身体だ。こんな事してもかすり傷すらつかないなんて。

『言つたら？逃げられはしないって』

「ッ!？」

俺はその声に立ち上がりながら振り返る。しかしそこには誰も居らずに周りにも誰もいない

「なんで……」

『別に不思議じゃないだろ？俺はお前なんだから頭から直接話し掛けてんだよ』

ケタケタ笑いながら奴は話し掛けてくる

『精神的に不安定だと幻聴が聞こえるとか言うけど、それとは違う。俺は魂を宿したんだ。だからお前に話し掛けられる。……まあ精神が不安定な時にしか割込めないけどな。アツハツハツハ！』

「黙れよ……話し掛けてくるな……」

『そのうち幻覚も見えるんじゃないか？俺が現れるかもな！』

「引っ込んでろよ……」

『あ！死んだ奴らも見えるかもな！アツハツハツハ！』

「黙れツツ!!」

俺は叫んだ。左目が熱い。きつと真つ赤に染まっているんだろう。すると奴は笑いを止めて話し掛けてきた

『なら死ねば？』

「ツ!？」

奴の言葉に驚愕した俺は後ろに下がった

『本当は死にたいんだろ？怖いんだろ？また誰かを傷付けるのが。あの光景を見るの



が。怯えた目で見られるのが』

「う…あ…ツ！な、なんで…身体が欲しく…無いのか…」

『欲しいっっちゃ欲しいがお前が死にたがったから俺にまで伝染したんだよ。まあ別に怖くないから良いけど』

「なんだよ…それ…」

『もう嫌なんだろ？全てを投げ出したいんだろ？楽になりたいんだろ？なら逃げちゃえよ』

「逃げ…る…?」

『そう！死ねば全てが終わる！その恐怖も罪悪感も何もかもが終わる！』

ああ…そうか。死ねばこの呪縛から解放されるのか……。もう…苦しまないし、怖くないし……

そしていつの間にか左手に持っていた朱時雨を右手で掴んで鞘からゆつくりと引き抜いた。

真っ赤に染まった…まるで血を滴らせたかのような刀身を首元に近付けていく。

俺は……

もう……

死のう

しかしその刀身が首を切り裂く事は無かった

「何を…何をしている貴様ッ！」

「……ボーデヴィツヒ……？」

ボーデヴィツヒが朱時雨の刀身を掴んで止めていたからだ

そしてボーデヴィツヒの手から溢れ落ちた血が床を染め上げていくのだった……

## 原作前第29話 立ち上がれ、進み続ける

Side 蓮仁

「何を…何をしている貴様ッ！」

「……ボーデヴィツヒ……？」

俺は辛い現実に耐えかねて自殺しようとした。朱時雨で自身の首を切り裂こうとした。だが、首に触れる寸前にボーデヴィツヒが刀身を掴んで止めたのだ。

そしてボーデヴィツヒは俺の頬を殴り刀を奪って投げ出した。その顔は怒りで満ち溢れている。

「貴様は…貴様は何をしようとしていた！答える！」

「……見りや分かるだろ……」

俺はただそれだけを吐き捨てるように言った。するとボーデヴィツヒが俺の胸ぐらを掴んで睨みつけてくる。



そして俺は蹲ると泣き出した。噎り泣きながらボーデヴィツヒに話しかけた。

「自殺は弱い者がするなんて言うなよ……。どんなに強くても、どんなに賢くても、誰だって逃げたくてしようが無くなる時だってあるんだよ……。弱いから自殺するんじゃないよ……」

「…………ツ」

「…………ボーデヴィツヒは……こんな力が欲しかったのか……？誰かを傷付けて、大切なモノすら傷付ける力が……」

「……………」

「…………もうほつといてくれよ……」

俺はそう言いながら朱時雨のもとまでフラフラと歩いていく。そして刀を掴んだ時に後ろからボーデヴィツヒに話し掛けられた。

「…………すまない。感情的になり過ぎた……」

突撃の謝罪に動きを止める。すると更に離し始めた。

「お前の言う通りだ。ただ力を求めただけの私には何も分からない。弱いから自殺するのでは無い、か……。……私にお前の自殺を止める資格なんて無いだろう……。ただ」

そこで一度区切って俺の正面に移動してきた

「お前は確かに人を殺した。そんな力を求めて無いとも言ったな。それでも……。それで

もその力で救われた者が居るのでは無いのか？」

「ッ!？」

「お前が話した教官の弟、織斑一夏はお前が救ったのでは無いか？」

カランカラン

俺はその言葉を聞いて手に持っていた朱時雨を地面に落としてしまった。手が震えている。

「それにお前のおかげで教官は優勝を果たせたのだ。それに人の居ない場所で戦ったから一般人の被害者も出なかったのだぞ？」

「あ……あ……」

「それに、私だって教官が来てくれたおかげで強くなる機会を手にしたのだ。ほら見ろ、お前のおかげでこんなにも救われた者がいるだろう」

「罪ばかり数えるな。周りを見ろ。お前が救った者は沢山居るのだから」

俺はその言葉を聞いてスツと軽くなった気がした。涙が溢れ出して前が良く見えな  
いがボーデヴィツヒが顔を赤くしているのは分かった。

「わ、私とした事がガラにもない事をしてしまった……。クッ！オイ忘れろ！いいな!？」

「ふ、ははは……」

「な!?!笑うな!?!お前こそいい歳して年下の前で泣きじやくって恥ずかしくないのか!?!」

「え……？ボーデヴィツヒは俺と同年だつて千冬さんから聞いたけど……？」

「ツ!? 同い年だとお!」Σ（・皿●）;

今日一番の衝撃を受けたような顔をしているボーデヴィツヒを見て再び笑ってしまつた。

そして暫くしてようやく落ち着いた頃、熱かつた左目がもとに戻るのを感じた。それを見ていたボーデヴィツヒは驚いたようすだつた。

「不思議な目だな……色が変わるなんて」

「そうだな……俺はこの目は好きに慣れないけどな」

「……なら、私と同じだな」

そう言つて眼帯を外した目は金色だつた。

「この目はI Sの適合手術に失敗してこんな目になつてしまつた……。私もこの目が嫌いだ」

「そつか……でも綺麗な瞳だと俺は思つた」

月を見上げた俺はそう呟く。するとボーデヴィツヒはジト目でコチラを見てきた。

「嫌いだと言つてるのに綺麗なだとか言われても複雑なんだがな……お前の目だつて深紅で綺麗だつたがな!」



「ははは……お互いさまだな。……さて、今深紅と言ったか？」

「ん？ああ、最初はもつと濁った朱色だったが最後の方は間違いなく深紅だった。暗闇でも光っていたから間違いないだろう」

………目の色が変化した？ボーデヴィツヒの言葉を聞いたからか……？

………駄目だ分からないな。今は置いておこう

「お互い、いつか自分の瞳が好きになれる日が来ると良いな」

「フツ、そうだな……さて、明日も早いからな。そろそろ戻るぞ」

そう言つて眼帯を付けたボーデヴィツヒが歩いて行く。俺はその背中に向かって話しかけた。

「ボーデヴィツヒ。俺はこれからも人を殺した事を引きずるだろう。何度も挫けたり、死にたくなる事もあるかもしれない。だけど、もう逃げたりはしない。今は無理でも、いつか正面から向き合えるようになる。……こうして立ち上がる事ができたのはボーデヴィツヒのおかげだ。だから……」

ありがとう

俺は感謝の言葉を送る。ボーデヴィツヒは振り向く事はせずただ黙ったまま仁王立ちしていた。すると突然……

「……ラウラだ」

「……え？」

「ラウラで良い。私は自分が認めた者にしか名前呼びは許さんが、お前には許す」

そう言つて振り返るとコチラを指差す

「代わりに私もお前を蓮仁と呼ぶ。異論は認めんからな」

「……ッ！」

そう言つて笑つた。月明かりを受けた銀髪が煌めき、幻想的な姿に思わず見惚れてしまった。

「どうした？早く戻るぞ」

暫くして再び歩き出したボーデヴィツヒ：いや、ラウラの声に我に返りその後を追う。そしてラウラの横に並んで歩いた。

「ラウラ……ラウラか……」

「な、なんだ何回も名前を呼んで……」

「いや、ボーデヴィツヒつて正直長くて言い難いなくつて思つて……痛っ!?!ちよ!足を蹴るなよ!?!」

そうして部屋に戻つた俺はその日に悪夢を見る事は無かつた。

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 千冬

2人の会話を隠れて聞いていた私と束は、暫くその場に留まっていた。

叫び声が聞こえてから今現在までずっと様子を見ていた私達だが蓮の胸の内に秘めた物を聞く事ができた。

「まったく…一時はどうなるかと思っただが、ボーデヴィツヒのおかげでなんとか落ち着いたようだな」

「あの娘が居なかったらちーちゃん直ぐに飛び出してたもんね」

「お前こそハワワってただろう」

「ハワワっては無いよ!？」

「嘘つけ絶対ハワワってたゾ」

「ちーちゃんどうしたの!？」

なに、別にシリアスが続けざまだったからボケてみただけだ。気にするな、私も気に

しない。

「にしてもあの娘やるね。いやはや青春ですな」

「おつ、そうだな」

「なんかキャラ変になつてきてるよ!？」

「私達にですら蓮の本音を聞き出すなんて至難の業だというのに、いとも容易く本心をさらけ出させるとはな……。フツ、少し妬いてしまうな……」

「(話し逸らされた…) まあ、本音どうしをぶつけ合ったからこそその事なんだろうね。」

「……私もレンくんとしつかり向き合つて話さないと駄目だね……」

「束……ああ、そうだな。私も向き合つていこう」

そして私達もそれぞれ戻つていった。

蓮：お前はこれからも様々な苦難に立ち向かつていくだろう。折れそうになる時もあるだろう。そんな時は私達が支えてやる。それが姉として私達にできる事だからな。

私達はどんな時でもお前の味方だ。

S i d e 千 冬 S i d e o u t

## Side 蓮仁

翌日から俺はラウラと行動する事が多くなった。食事はだいたい一緒（十千冬さん）だし、訓練でも組む事が多い。

訓練の時には俺の技術を基礎から教えている。にしても飲み込みが早いからこの調子だとなんとか期間内には基礎を叩き込めそうだ。いや、少し問題が発生したけど……  
「ぐう……少しは手加減をしろ……！」

「わ、悪い……。まだ上手く加減が出来なくてさ……？アハハハ……」

「笑い事では無いだろうがッ!? 3m位吹っ飛んだぞ!? 私が受け身を取らなかつたら骨がバッキバキだったぞ!!? いや! バッキバッキのボツキボツキのメッキメッキだったぞ!!?」

それはもはや骨が粉末状なのでは……?

「そ、それは大袈裟過ぎ……」

「お前は! もっと自分の力を理解しろ! 私だったからなんとかになったが一般人ならポツキリからのポツクリだったぞ! 大事な事だからもう一度言うが、私だったからなんとか

なつたんだぞー！」

「ご、ごめんなさい…」（・ω・、）

「あ……いや、そこまで落ち込む事は無いだろう…」

「（・ω・、）」

「（・ω●、）」

「（・ω・ω・）（・ω●、）」

シヨンボリしてたらウララまでシヨンボリし始めた（驚愕）なんでお前までシヨンボリするんだ…

「何をやっているんだお前達は…」

「あ、千冬さん」

「教官！」

呆れた様子でコチラに近付いてきた千冬さん。そして俺の方をジロジロと見てきた。

「ナズエミテルンデイス!!」

「!?!」Σ（・∩●）

「フツ…いつも通りだな…」

「な!?!アレがいつも通りなんですか教官!?!」

「アレがいつも通りだ」（断言）

……なんだよその目は？ラウラが『なん…だと…？』って顔して見てくるし千冬さんは温かい目で見てくるし……。

「もう、大丈夫そうだな」

「…！ええ、ご心配お掛けしました」

「まったくだ。これからは一人で抱え込まずに私になり束になり相談しろ。いいな？またあんな事になったら……」

「…!?まさか…昨日の…」

「どれ、他の者達の訓練も見てこんな。ではな」

「あつ、ちよ……！……行っちゃったか…」

まさか昨日のを見られてた……？……いや、考えるだけ無駄か。訓練に戻ろう。

「よし、ドコからでもかかってk」

「あらよつと！」ズドン！

「ぬわあああああつ!!」

「あつ!!ラ、ラウラアアアアツ!!」

「……………フツ…頑張れよボーデヴィツヒ…！色んな意味で！」

訓練も無事(?) 終わり只今部屋にてトレーニングをしている。片腕で逆立ちして足

にラウラを乗せながら手を曲げては伸ばす。

やはり前より格段に筋力がついているから全然疲れない。もつと負荷を増やしたいがラウラは軽いからなあ……

千冬さんに頼むか……いや、でもなあ……

『千冬さん！トレニングに負荷をかけたので乗って下さい！』

『はっ？つまり私に重りになれと？なるほどなあ……泣くぞ？年甲斐も無く泣き喚くぞ??この年での年下相手にガチ泣きする姿は見苦しいからな？分かったかバカ野郎コノ野郎（涙目）』

……ポンコツな千冬さんが容易に想像できるう……

今は我慢するか……

コンコンコンコン

「んあ？誰だあ？」

誰かがノックしてきた。ラウラは足に乗ってるし、千冬さんも東さんも『ノック？そんなモノは知らん！』みたいにいきなり入ってくるしなあ……そもそも最近東さん見ないからもう帰ってるのかな？……まあ今はいいや



「開いてますよ〜」

すると扉を開けて入って来たのはラウラと同じIS部隊の人だった。話した事が無  
いから名前分かんねえけど…

「失礼します！クラリツサ・ハルフオーフであります！」

なんか名乗ってきた。いや名前分かんねえから助かるけど…

「あ（察し）…お取り込み中でしたか…」

「お取り込み中では無いですよ!?!」

なんか勘違いされそうになった気がする……。今現在の状況は、大柄な男性が片腕で  
逆立ちし、足にロリ少女（同い年）を乗せている……。

……うん、やべえ奴に見えるな……。それでも『あ（察し）』になる意味が分からん。

「それで何か?」

「あ、はい！実は先程の訓練の時に聞こえたのですが…」

……!

ものすごく真剣な顔になりやがった…! いったいなんの話しを聞かれたんだ…!?

「貴方はオンドウル語を話せるのですか!?!」

「……………?」

オンドウル語…？

なんでオンドウル語？

「私は聞きました…あの『なぜみてるんです！』…違いますね…。『なぜみてるんです！』…これも違う…」

「ナズエミテルンデイス!!」

「ツ！そう！それです！発音が私には難しく出来なかったのをいとも容易く…！感服しました…！」

「え…いいや…！それほどでも無いツスよ」

「おいおい、褒めるなよ…！照れちゃうだろお？（\*・ω・\*）」

「私は日本の文化、漫画やアニメが大好きです！是非とも色々教えて下さい！」

「しょうがねえなあ」（悟空）

そんなこんなで色々話してるんだが、この人の日本知識がなんか変だぞ？

「日本にはニンジャが普通に居るのですよね!!?手の平にエネルギーボールを出したり火を吹いたりするんですよね!」

「んなわけ無いでしょ」

「え…?」

「え……？」

え……？

「あ、ああ！ニンジャでは無くてサムライですね！？人斬り抜刀齋が居るのですね！」

「銃刀法違反で普通に捕まるゾ」

「え……？」

「え……？」

え……？

「………」

「(・ω・)」

「!?」

止めてよおおおおおッ！そんな顔しないでよおおおおおッ!? 罪悪感が半端ない

よおおおおおッ!!?

「じ、じゃあ…日本の海には海賊が居て一繋ぎの大秘宝を探しているというのは…」

「居ないし秘宝も無いよ」

「oh…」

居るわけ無いだろんもん！日本の海域だけ大海賊時代か！

「な、なら東京には人を喰らう喰種が……」

「いません」

「ウポツ…」

居たら怖えよ！俺は横浜に住んでんだぞ！怖くて東京行けねえよ！

あ、でも俺なら倒せるかな……

「トゲと肩パッドをつけたモヒカン達がバイクを駆り暴れ回りながら《ヒヤッハー！》とか《汚物は消毒だ〜!!》って叫ぶ人達が…」

「……………OK、よく分かった。ハルフォーフさんの頭の中の日本は世紀末でモヒカン達がバイクを駆り暴れ回っていて、更に侍や忍者、拳げ句の果てには喰種なんて化物が闊歩していて、更に更に海では海賊が秘宝を求めて暴れ回っていると。……………」

なんだよそのカオスな日本はツ!!？」

「ひんっ…」

「日本はいったいどんな魔境なんですか!?!もはや世界観が可怪しいでしょうが!？」

「な、なら空を飛んだりビーム出したり、瞬間移動したり黒髪から金髪になったり…」

「ならないよツ！」（憤怒）

「ピエン…」

お前それ全部漫画じゃねえかお前！しかも全部ジャンプのやつじゃねえかお前!!

「鬼を…」

「鬼を滅する奴等も！呪霊を祓ったりする奴等も！そんなのは日本に一切居ませんッ  
!!」

「……………う、嘘……………ガクッ

そしてうなだれながら膝を付いてしまった。真っ白に燃え尽きて……………

「アンタ……………漫画の世界の出来事が実際に日本で起きたと思つてたんですか？」

「……………はい。……………渋谷事変とか普通に起こつたのかと思つてました……………」

「いやさあ……………もうなんて言つたら良いか分からん」

頭を抱えていると袖を引つ張られる。横を見るとラウラが頬を膨らませながらジト目で『私、不機嫌ですよ！』と言わんばかりの顔をしている。

「おい！私を蔑ろにするな！」

お、かまってちゃんか？

ないがしろにされてヤキモチですか？

カワイイ！（ブロリー）

クツソかわいいー！（わかるマン）

あ、そういうえぱラウラって部隊から浮いてるんだっけ。ちょうどいい機会だから親陸を深めてもらうか！

「おっしーならばDVD試聴会だ！アニメから映画、特撮やドラマまで幅広いジャンル

を持つてるぜ！」

拡張領域ブレスレットの中に入ってるんだよなあ。どれぐらい入るか試してそのまま放置してて良かったぜ！

「ならばポップコーンとコーラを用意してきます！」

「夜☆露☆死☆苦ウウツ！」

さつすが分かってんな！やつぱりポップコーンとコーラは必要不可欠だよな！

「なるほど…：試験会にはポップコーンとコーラが必要不可欠か」

なんかメモしてるけどスルーで。

それからは試験会が始まり、仮面ライダーや鬼滅や呪術廻戦とか見た。

後日、仲良くなったラウラとクラリツサさん（名前呼びを強要）を見た他の人達が訪ねてきたりした。それから部隊の人達皆で試験会をしていき部隊の絆が深まる事になるのだった。

日本のアニメや特撮にドハマリしたのは言うまでもない。

アニメってしゅごい（語彙力低下）

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e ラウラ

蓮仁と出会ってから1週間が経過した。

その間に部隊の者達とアニメや特撮などを見たのだが、まさかあんなに仲良くなるとは思わなかったな。少し前の私ならまず信じないだろう。

この1週間は色々あったな……

く訓練く

ネーナ「教えてやる。本物の呪術というものを」

ファルケ「立てよド三流！私とお前との格の違いつてやつを見せてやる!!!」

イヨ「我！不敗！也！我！無敵！也！我！最強なり！」

マチルダ「私の戦闘力は530000です」

クラリツサ「ダディヤーナザアーン!!オンドウルルラギツタンデイスカー!!」

ラウラ「」

蓮仁「」

ラウラ「…おい、蓮仁…」

蓮仁「今日ノ飯ナンドロー」（現実逃避）

ラウラ「蓮仁!？」

千冬「クツ……ふざけてる様にしか見えんのに格段に良くなってる……!注意しようにもできん……!」

ラウラ&蓮仁「「普通に注意しましょうよ」」（正論）

く食事当番ラウラく

ラウラ「出来たぞ!さあ食べえ!」

蓮仁「……これはまさか……」

ラウラ「おでんだ」

蓮仁「うん、おでんだな」



ラウラ「ふっ…日本の味が恋しいだろうと思つてな…。特別に作つてやったぞ！」ド  
 ヤア

蓮仁「ら、ラウラ…（感動）…いただきます！あむっ！もぐもぐ！不味い!!」

ラウラ「Σ（・皿●；）ガーン

蓮仁「だけど、ラウラの思いが籠もってるから美味しいな！」

ラウラ「どっちなんだ!？」

蓮仁「どっちもだよ！そんじや俺がちゃんとしたおでんの作り方を教えよう！俺はス  
 パルタだぞ！ついてこれるか？」

ラウラ「望むところだ！次こそとびつきり美味しいおでんを食わせてやる！」

く食事当番蓮仁く

蓮仁「ドイツといえはじやが芋だよな。というわけで作りました！蓮仁特性ポテト

サラダ！お上がりよ！」

ラウラ「あむっ…：…ッ！これは…！」

ネーナ「芋を完全に潰さない形が残っているタイプ！」

ファルケ「そのおかげで食べごたえ抜群！」

マチルダ「しかもマヨネーズは市販じゃ無くて手作り!？」



千冬「さあ、よそつたから温かい内に食べる」

ラウラ「おお！教官の手料理！楽し…み…だ…」

謎の物体「フシユウウウ…フシユウウウ…」

ラウラ「」

蓮仁「」

ネーナ「…何か…変な音が…」

マチルダ「ドス黒い…」

イヨ「なんか顔が見えるような…」

フアルケ「私達は…今日死ぬの…？」

クラリツサ「これが…黄泉戸ヨモツヘ喫か…」

千冬「どうした？早く食べ」（無慈悲）

ラウラ「…くっ！ここは私が責任を持って食べる…！だからお前達は…」

蓮仁「馬鹿言つてんじやねえよ。ラウラ一人に任せる程落ちぶれてなんかねえぜ」

クラリツサ「私もそうです…！」

マチルダ「私も…！」

ネーナ「私だつて…！」

イヨ「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ…」

ファルケ「死なばもろともよ……！」

ラウラ「お前達……ああそうだな！皆で逝こう！」

蓮仁「地獄で逢おうぜえ……！」

7人「……」「……」パクっ！……もぐもぐもぐ……ごくん………「……」ングッ!??「……」ドサツ

蓮仁「ハアツ……ハアツ……クツ………だからよ……止まるんじや……ねえぞ……ゴフツ」キ

ボオノハナー♪

千冬「……フツ。余りの美味さに白目を向いて倒れたか。どれ私も……パクっ

………なるほどな」ドサツ

………あの時から教官を厨房には絶対に立たせては駄目だと皆で話した。下手したら死ぬ。いやマジで。

蓮仁曰く、あれでまだマシなほうらしい……。これが……世界最強の作る料理か……なんとも恐ろしい………！

ふっ……しかし今では笑い話だ。本当に部隊の者達と仲良くなったものだ。ただ見返

す為だけに生きていた私だったのに、今では何気ない日常ですらこんなに楽しく感じているのだから。

これも全て蓮仁のおかげだな。体術もだいふ鍛える事ができた。部隊の者達と分かれ会えた。おでんも作れるようになった。どれもこれも…蓮仁のおかげなんだ。

そんな蓮仁だが…ついに明日、日本に帰ってしまう。

ベッドに入って寝ようとしてもその事ばかり考えてしまい、中々寝付けないでいる。駄目だな…。外の空気でも吸ってくるか。私は服を着て（寝る時は全裸）部屋を出た。そしてすぐ隣の蓮仁の部屋の前で止まる。

「……流石に寝ているだろうな。起こすのも悪いしな」

そして私は一人で外に向かった。

外に出ると雲ひとつ無い綺麗な夜空が広がっていた。まるで1週間前のように。そういえばこの前もこの場所だったな。

確かあの辺りで蓮仁が……む……？

（あれは……蓮仁……？）

アイツまさか……また自殺をしようとしているのか……いや、流石にそれは無い。か。どうやら月を眺めているらしいな。どれ、こっそり後ろから驚かすか。

ソロリソロリ…

そしてついに真後ろに来了。よし、驚かすぞ！

「動くなッ！」

そう言った瞬間、奴は消えた。

………え？消え…消えた？

「何が…起こった…」

すると後ろから肩を掴まれ、身体が硬直した。

「いったい何時から俺の背後をとったつもりだった？」

「」

「フツ！まだまだ甘いなラウラ！……ラウラ？」

………少しチビツた。

寧ろ少しチビツた程度ですんで良かった。

「………悪いが少し花を摘んでくる。少し待ってろ」

「アッハイ」

そして私は早足でトイレへと向かった。

「……まさか、チビツた？……いや、これ以上はラウラの尊厳に関わる。考えるのはやめよう」

そしてトイレから帰ってきた私は蓮仁と並んで座り月を眺めていた。その間、会話は無かったが心地の良い静寂だ。

しかし、こうして星を眺めるのも今晚で最後だ。何か話しをしよう。

「明日……帰ってしまうのだな」

「……ああ」

「……あれから1週間だ。あつと言う間だったな」

「はは……本当にな。……あの日、ラウラが止めてくれなかったら今こうして二人で月を眺めてなんて無かっただろうな。改めてありがとな」

「フフ……お前を止めたおかげで部隊の者達とも馴染めたし、1週間で更に強くなれた。礼を言いたいのはコチラだ」

「本当に変わったよなラウラ」

「お前のおかげだな。………本当に……帰って……しまうのだな……」

「………あく！湿っぽいのは止めだ止め！そうだ！是非とも一曲聞いてくれ！」

すると突然アコースティックギターが現れた。それにしても本当にいきなり現れるな…DVDやらギターやら…。まあ既に馴れたが。

「お前は本当に多芸だな」

「色々覚えれば何かしら役に立つだろ？多分。まあギターはまだ練習中だけど」

学校の文化祭でバンドを組んで演奏するそうだ。くっ…直接見れないのが残念だな…。

「さてさて、それでは聞いてください。打首獄門同好会で【日本の米は世界一】」

「何だその歌は!!?」

「嘘だ、冗談だ」

「何故嘘をつく!?!」

「それでは聞いてください。【リメンバー・ミー】」

「おい!?!」

私の質問をスルーし、

そして蓮仁は静かにギターを引き始めた。

S i d e ラ ウ ラ S i d e o u t



【リメンバー・ミー】

Remember me お別れだけど

Remember me 忘れないで

たとえ離れても心は一つ

おまえを想い 唄うこの歌

Remember me 遠く聞こえる

Remember me ギターの音色は

優しく見守り包み込む

また抱きしめるまで、remember me

Remember me 忘れはしない

Remember me 夢の中で

離れていても何時でも会える

二人をつなぐ特別な歌

Remember me 寂しい夜は

Remember me 心寄り添わせ

また会える日がやって来る事を  
信じ続けよう、remember me

Remember me 会えないときも

Remember me 愛に支えられ

何時までも見守り包み込む

また抱きしめるまで、remember me

Remember me

Remember me

S i d e 蓮 仁

「……………ふうく。ご静聴、ありがとうございます。……寝てるか……」

曲を弾き終えた俺は余韻に浸りつつ横を向くとラウラが俺に寄り掛かりながら寝ていた。

ギターを閉まってからラウラを抱き上げると部屋へと向かう。……………あつと言う間

の1週間だったなあ。

本当に色々あった。

色々…な…。明日の今頃は日本か。

ラウラの部屋へとたどり着きベッドに寝かして布団を掛ける。そして頭をそつと撫でる。

「おやすみ、ラウラ」

そうして俺も自室へ戻り眠りについた。

翌日

朝食を終えた俺は空港にいた。

そして見送りにには千冬さんにラウラ、IS部隊のクラリツサさん、ネーナさん、ファルケさん、マチルダさん、イヨさんが来てくれている。

千冬さんとラウラ以外は既に号泣して顔が凄い事になってる。それは女性がして良い顔では無いよ?!



「く、クラリツサさん！助けて!!」

「ぬわあああああああんツ!!」↑（クラリツサ）

「お前もかいツ!?!」

もう皆して大号泣するから宥めるのが大変だった。千冬さんはなんか温かく見守つてただけだったし……。

そして飛行機が来たようだ。いよいよ別れの時だ。

「グスツ……すまない……。見苦しい姿を見せた……」

「気にすんなって。今生の別れって訳じゃ無いけど、やっぱり寂しくなるよな」

「……これ、私達からのプレゼントだ」

そう言つて俺に渡したのはサバイバルナイフだ。

「《アイトール・ジャングルキング》ブラックカラーだ。他にもサバイバル品など26種以上が備え付けられたセットだ」

お別れのプレゼントがサバイバルナイフ（白目）

なるほどなあ……これが軍人式のプレゼントか……

「ありがとう……大切に使う。そうだな、俺からも皆にプレゼントだ。受け取つてくれ」

そしてブレスレットから人数分のある物を取り出して渡した。

「ほう……これはカランビットナイフか」

そう、カランビットナイフだ。歪曲した爪や鎌のような形のナイフだ。ドイツに来る前に東さんに頼んで作って貰ってたんだよな。

パリイ目的で硬質に作って貰ったけど今回は出番が無いままだった。いつかは「ファランの不死隊」みたいに地面にナイフを突き刺してそれを軸に大剣で敵を一掃したい  
(憧れ)

しかし今ではタンスの肥やしならぬ、拡張領域のこやしだから皆にあげる。べ、別に在庫処理とかじゃないからな!」

「カランビットナイフは扱いが難しく大変だろうけど……」

俺はそう言いながら取り出したカランビットナイフを片手で指を巧みに使い分け回して回して回しまくり空中に投げてスタイリッシュにキャッチする。

「皆ならこれくらいできる様になるだろ?」

俺は挑発的な笑みを浮かべてそう言う。

「当然だ!今は無理だが……次に合うまでに扱いをマスターしてやるからな!楽しみにしてる!」フンス

「ああ、頑張れよ!……それじゃあ俺はそろそろ行くな?」

「……ああ」

「……DVDとか千冬さんに預けてるから、皆で見てくださいよな」

「……………ああ」

「……………それじゃあな」

俺はそう言つて歩き出した。

暫く歩いていたが、自然と歩みは遅くなり遂に止まってしまふ。

……………この1週間の記憶が次々と頭の中を流れていく。

やはり別れは寂しいな…。短い時間だったけど、楽しかった。

そして俺は後ろを振り向く。

未だにコチラを見ているラウラに向かつて拳を突き出し、親指を立てる。所謂サムズアップだ。

「<sup>サ</sup>Thank<sup>キュー</sup> you<sup>ソー</sup> so<sup>マツ</sup> much<sup>チ</sup>」

ベストフレンド  
ラウラ!!

「ツ!!」 d (、 ; ω ● (、 )

ラウラもそれに答える様に泣きながらサムズアップする。他の皆や千冬さんまでもがサムズアップして見送ってくれた。

そして飛行機に乗り込んで出発の時を待つ。

「……………これからどうしていくのか、迷っていたけど……………漸く決まった。もうあんな思いはしたくない。だから……………もつと強くなる……！」

日本に帰ってからどうするのかが決まった。ただし、まず母さんと親父を説得しないとなあ。

まあ、なんとかなるか。

問題は一夏達だが……………ううむ……やっぱり、まだ直接会うのは無理かな……。

どんな顔して会えばいいのかわからない。

だから手紙を書いて母さんに渡すか。

今後の予定を考えていると遂に飛行機が動きだし、飛び立つ。窓の外からドイツの街並みを見下ろす。

様々な事があつたドイツでの日々は遂に終わりを告げるのだった……………



## 原作前第30話 日本でのそれぞれ

前回のあらすじ！

ラウラにより自殺を止められた蓮仁

そして立ち直って再び歩き出した

1週間をドイツ軍で過ごし部隊の人達と交流を深める

そして遂に帰国の日がやってきた

皆に惜しまれながら飛行機に乗り込む

新たな決意を胸に日本へと向かう……

### S i d e 一 夏

ドイツでのモンド・グロッソが終わり、日本へ帰ってきた俺は部屋に閉じ籠もっていた。  
た。

モンド・グロッソ決勝戦の少し前の話だ。俺は蓮と一緒にトイレに行き、そこで蓮

に気絶させられたのだ。

目が覚めるとそこは見知らぬ部屋で、側には千冬姉がいた。何かあったのか聞かれたから答えていると段々と血の気が引くように顔を青ざめていく千冬姉。

その時に千冬姉の携帯が鳴り直ぐに部屋を出てしまった。

そしてだ、俺はその時何故か嫌な予感がして部屋を出て千冬姉の後を追った。そして通話相手は蓮だった。

そこで聞いてしまった。蓮が俺を庇って捕まった事を。幸い相手は倒したらしいがまだ敵がいるらしい。俺のせいで蓮が……！

俺は直ぐに蓮の下に向かおうとした。助けようと思った。

だけど、そこで思ったのだ。俺が行って何ができる？…と。相手はテロリストだ。たかが中学生の自分に何ができる？せいぜい高校生を打ち負かした事くらいしかない自分何ができる？

蓮は……蓮仁は俺とは違う。1ヶ月の命がけのサバイバルを生き抜き、どんどん新たな技を覚えて。どんどん…強くなっていく。

だが、俺はどうだろうか？蓮がサバイバルをしている時も何か特別な事をした訳でもない。新たな技を覚えてる時も、平凡な素振りや筋トレをしていただけだ。

ああ…そっか。確かに俺は強いよ。自分で言うのもなんだけど、そこいらの同年代や少し年上相手でも勝てるくらいには強い。

それでも、蓮は俺なんかとは違う…更に上にいたんだ。…今まで蓮と並んでいたつもりだった。

けど…実際は違かったんだ。この瞬間に気付いたんだ。蓮の背中はあるなにも遠い存在だったんだと。一緒に進んでいたつもりだった。でも実際は蓮は俺より遙か先に進んでいた。その背中は、まるで千冬姉や東さんのように遠いものになっていた…

俺は…弱い…。どうしようもない位に弱い…！何が大切な人を守りたいだッ！いつでも！今でさえも！俺は…守られてるんだ…。

…そして俺は部屋に戻る。自分の無力差を痛感し項垂れる。千冬姉が戻ってきて何か喋っていたけど全く覚えていない。部屋から千冬姉が出ていった後も動く気力が無くてモニターを眺めるだけだった。

暫くして決勝戦が始まる。そして千冬姉の闘いを見ていたが、圧倒的だった。相手の攻撃を叩き斬る。風を使った攻撃すらも斬り裂き相手に近寄る。多少攻撃を喰らっても全く怯まずに突き進む。千冬姉の剣が光だして斬りかかった。強く、そして美しい剣舞は会場を魅了した。

結果は千冬姉の圧勝だった。それから相手の下に行き一言二言話して握手を交わした。するとISを纏って何処かに飛んで行き会場がざわめきだしていた。

(ああ、蓮の所に向かったのか)

再び無力差を痛感した。それから暫くしてドイツ軍がやってきて保護され、軍事施設に連れて行かれる。

そこの一室で座っていると千冬姉が入ってきた。

「…ツ！千冬姉！」

「一夏……すまないが私はやらなくてはならない事がある…。明日の朝に日本行きの飛行機で先に戻って欲しい」

…は？何を言ってるんだよ…？蓮は？何で蓮が居ないんだよ？何で俺だけ日本に帰らせようとするんだよ？

そして気付いた。千冬姉の両手やISスーツに血が付いているのに。血の気が引くのを感じながら頭では否定する。あれは蓮の血じゃ無いと…。

「……………なあ…蓮は…………？」

頼む、違っていてくれ。無事だと言ってくれ…！

「……………ツ!!……………すまないが今は何も言えない…」

その後悔したような、悔しそうな顔が、答えを表していた。あれは…蓮の血なんだと。

無事では無いのだと。

「千冬姉ッ!」

「すまない……」

俺は追求しようとしたが走り去ってしまい、それ以上話を聞くことは出来なかった。膝について泣く事しか出来なかった。俺のせいで大事な親友が傷付いた。俺が弱いせいで…。そこからはよく覚えていないが気付いたら朝になっていた。鏡でみた顔は酷い有様だった。

飛行機に乗り気付いたら既に日本にいた。蓮の母の華さんが迎えに来てくれていた。どうやら千冬姉が連絡したみたいだ。

華さんは俺の姿を見て心配していた。…止めてくれ…!俺のせいで蓮は…!

家に帰ってからは部屋に閉じ籠もった。何も食わずに、何もせずに、只々泣いて過ごしていた。鈴や段、数馬。それに楽や舞子も来たみたいだがそれでも部屋を出る事は無かった。

華さんが食事を持ってきてくれたりしても手を付けずに数日が経過した頃。千冬姉が帰ってきた。

「一夏!? どうしたんだ! そんなにやつれてるなんて…」

「……なあ、蓮はどうしたんだよ…」

途端に表情が暗くなり、黙ってしまふ。

「すまないが……詳しくは話せない。だがこれだけは話せる。蓮は無事だ」

「……ツ！ほ、本当か……？本当なんだな……？」

「ああ、だから安心しろ」

そして俺は安堵した。その途端に空腹による飢えを漸く感じた。それからは食事をとって倒れるように眠りについた。

目が覚めると丸々2日が経っていた。よほど疲弊していたらしい。

千冬姉にも心配を掛けた。それに、まだ色々聞きたい事がある。

しかし……

「一夏……私は1年間ドイツ軍で指導する事になった」

「……は？」

俺はその言葉を理解するのに時間が掛かった。そして理解したが意味がわからない。

「な、なんで千冬姉が1年もドイツ軍に行くんだよ……？」

「……今回の件でドイツ軍には世話になった。それ故、見返りに指導する事になった。

……すまない……今一番近くに居てやらなければならぬ時に、一緒に居られなくて……」

「……………」

言葉が出ない俺。千冬姉はそんな俺に近寄り抱きしめる。

「本当にすまない……私は姉失格だ……。恨んでくれて構わない。だが……どうか心を強く持ってください」

「なんだよ……それ……」

「……お前を心配してくれる人達は沢山いる。だから心を病むな。決して一人じゃない。離れていてもお前の事を想っている。……それでは……私はもう行く」

名残惜しそうに、申し訳無さそうに、優しく俺の頭を撫でそのまま出ていってしまった。

そして暫くの間その場に留まっていた俺は……

「……なあ、見てるんでしよう……？ 束さん……！」

そう叫んだ

「束さん！ 見てるんでしよう!! 蓮から聞きましたよ! 今この瞬間も何処かで見てるんでしよう!?! 出てきてくださいよ!」

前に蓮から聞いた話したが、時々現れるらしい。しかもタイミングが不自然であり、まるで何処かで見ていたのでは? と思う程らしい。故に何らかの形でコチラを見てい

るのだと。

『東さんは他人には無頓着だけどさ、身内認定された者にはもうストーカーじゃんつてくらしいの事をしてくるヤバイ人だから日常生活でも注意しろよ？トイレからお風呂まで見られてるかもしれん』

蓮にそう言われた日には恐ろしくて風呂にも入れなかった。

だからきつと今も見ている筈だ。

「東さん『ピンポーン』……まさか……」

突然のインターホンの音。しかもこのタイミング……。まさか東さんか……？

インターホンの内蔵カメラで外を見てみると……。

「……？誰もいない……？」

イタズラかと思つてモニターから視線を外し後ろに振り返る。

「ハロハロ〜！いつくん久しぶり〜！」

「」

「いや〜いつくんが東さんと呼んでくれるなんて嬉しいよ〜！……いつくん？」

………少しチビツた。

寧ろ少しチビツた程度ですんで良かった。



「……すいません。ちよつとお手洗いにいきます」

「アツハイ」

そして俺は早足でトイレに向かった。

「暗い雰囲気だからちよつと和ませようとしたけど……まさかチビツたのかな？……うん、そつとしておこう」

トイレから戻ってきた俺はとりあえず一回落ち着いていた。あのままだったら束さんに物凄く問い質していただろう。そう考えるとチビツた事は寧ろラツキーと言えなくも無い。……うん、ラツキーでは無いか…。

とりあえずお茶を出して対面に座る。

「……それで？いっくんはなんで束さんを呼び出したのかな？」

「……分かってるんじゃないですか？」

「レンくんの事だよね？」

「……ツ！……はい」

はやる気持ちを抑えながら返事をする。

「悪いけど、いっくんには言えないよ」

「……蓮が俺を庇ってテロリストに捕まった」

「ツ!?なんでその事を…!」

その言葉に驚愕して目を見開く束さん。今まで見た事の無いその表情からは余裕を感じさせない。

よく見ると目の下に隈もできているし髪もボサついている。

「ドイツ軍で見た千冬姉の手や服に付いてた血。…あれも蓮の血なんですよね? ……俺のせいで、蓮が怪我をしたんですよね…?」

「……………違うよ。いっくんは悪く無いよ。…悪いのは…私なんだ……………」

束さんは悔しそうに俯きながら震えていた。

「私が頼んだから…。事前にテロリストの情報を掴んだけど、あんまり詳しくは調べられ無かったんだ…。だからレンくんにはいっくんを守って欲しいって……。でも、でも…まさかあんな事になるなんて予想出来なかった…ツ!」

「いったい何があったんですか?」

「…そこまではレンくんの為にも教えられないよ…。だけどこれだけは覚えておいて! レンくんはいっくんを守る為に命がけで戦ったんだ! ……だからレンくんが帰ってきた時に姿が変わっていても、変わらずに接してあげて……。?まだ、眠っているけど、きつと身体以上に心に深い傷を負ってるから…」

今にも泣きそうな顔でそうお願いしてきた束さん。こんなに弱々しい姿を見るなん

て思わなかった。世間では天災とか言われてるけど、こうして見ると普通の女性って感じがするな。

「東さん。蓮は俺の友達……いや、親友です。照れくさくて言えないけど、兄弟みたいに思ってます。だからこれから先、どんな事があっても俺は蓮の親友で居続けます！」

俺は力強くそう答えた。それを聞いて安心した様に笑う東さん。

「……東さん。実はお願いがあります」

「……?お願い?」

俺は一度深呼吸してから改めて覚悟を決める。

「俺を鍛えてくださいッ！」

「……」

東さんの表情は真顔で目を瞑る。

「俺はいつも誰かに守られてばかりだ……!俺のせいで誰かが傷付くなんて嫌だ……!俺は弱い!誰かを守りたいなんて言える程強くななんて無いッ!だから……!だから俺を鍛えてください……!お願いします……!」

俺はそう言つて土下座する。

「俺は追いつきたい……!あの遠く離れた背中に……!だからお願いします……!」

「……ふう……。いつくんの覚悟は良く分かったよ。本気で強くなりたい気持ち伝わっ

てきた。……生半可な鍛え方はしないからね？レンくんは遙か先に居るんだから血反吐を吐くような修行になるよ？」

「…ツ！望む所です！」

その言葉を聞いて顔を上げる。

「でも東さんも忙しいから、師匠を用意するね。東さんが教えてあげる時以外はその師匠に鍛えて貰ってね♪」

「はいー！」

こうして俺は新たな一步を踏み出す。あの背中まで何千、何万歩あるかわからないけどきつと追い付いてみせる…！

蓮、待つてろなんて言わない。先に行つて構わない。絶対に追い付いて、肩を並べるからな！何年掛かろうと絶対に！

S i d e 一 夏 S i d e o u t

## Side 千冬

ドイツから一時帰国した私は久しぶりに家に帰ってきた。ろくに話ができないまま一夏と別れてしまったので心配していたが、予想以上に酷い状態だった。

目の下には隈ができていて、頬も痩けてとても暗い雰囲気だ。蓮が無事だと伝えると安堵したのか腹が鳴っていた。食事もまともにとつて無かったのか…。

食事を終えた途端に倒れるように眠ったのでベッドに運んだ。

そして今、私は束と共に緋龍家に赴き華さんと蓮也さんと対面していた。

今回の経緯を束が説明し、何があったのか、蓮が今どういった状態なのかを説明した。そして私達は二人に土下座して謝っている。

「この度は大切な息子さんを危険に巻き込んだ挙げ句、命の危機に陥る程の重症を負わせてしまい申し訳ありませんでした…!」

「悪いのは私です! 私が危険だと分かっていた上でレンくんに協力を頼みました! 本当にごめんなさい…!」

私達は頭を下げながら謝罪する。到底許される事ではない。もう、前の様な関係には戻れなくなるだろう。私達はそれほどの事をしたのだ。

どんなに罵声を浴びても、どんなに罵られても、甘んじて受け入れる。

そのつもりだったのに……

「二人共、顔を上げてくれ」

その言葉に従い顔を上げる。二人は怒る事も、泣く事もせず優しく語りかけてきた。

「確かに二人は蓮仁を巻き込んだかもしれない。だがアイツは何もしなくてもきつと自分から飛び込んでいったはずだ」

「ええ、そうね。あの子は身内には本当に甘いから、たとえ自分がどれだけ危ない目にあっても必ず助けに行くわね」

「そうだな。それに、アイツは承諾したんだろ？ なら後は自己責任だ。酷い事言ってると思うだろうが、漢が自分自身で決めた事に外野がとやかく言う筋合いはない。どんな結果であれ、アイツは生きてるんだ。万事解決とはいかないが、アイツはやりきったんだ」

「だからね、二人共自分を責める必要は無いわよ？ あの子は……蓮は二人が思うよりずっと強いから。挫けてもきつと立ち上がれる」

思ってもいなかった言葉に驚くのと同時に目頭が熱くなるのを感じた。きつと束も同じだろう。

「ですが……」

「それでももし自分が許せないなら、蓮が困った時に助けて上げて？二人なら大抵の事はなんとかできるでしょ？」

「だから今回の件でよそよそしくなる必要は無いからな！二人とも家族みたいなもんだからな！ハッハッハ！」

「……ッ！あ、あ”り”がと”う”……ご”ざ”い”ま”す”……！」

「うう……あ”り”がと”う”……ご”ざ”い”ま”す”……！」

そして私達は遂に泣き出してしまった。

大切な一人息子を命の危機に晒した私達を許すだけでなく家族とまで言ってくれた。本当に器の大きな人達だ。

一夏と私には親は居ない。私達は人の手で造られた存在なのだから。だから二人が家族と言ってくれたのがたまらなく嬉しい。血の繋がりが無くても、二人は私達の父と母なのだ。

だから、一夏を誘拐仕様とした挙げ句に蓮を傷付けた者共を打ちのめす。【亡国企業】  
……必ず潰してやろうではないか……。

私の家族に手を出した事を後悔させてやろう……ッ！

そう心に誓う。

凰鈴音やら一夏の友人達が来たりもした。そして一夏が目覚ました日にドイツへと再び旅立った。

### S i d e 千冬 S i d e o u t

#### S i d e 鈴

春休みも終わりアタシ達は2年生になった。クラスは変わらずだけど皆ソワソワとした様子。ただアタシは：アタシ達は気分が果てしなく沈んでいた。

ときは遡り春休み中。モンド・グロツソを見にドイツに向かった蓮と一夏。その帰国日の翌日に弾と数馬を連れて二人の家を訪ねた。しかし蓮は帰って無かった。そう、蓮だけ。

華さんに聞くも千冬さんからも断片的にしか話しを聞けなかったから詳しくは分からないみたい。だから一夏の家に行ったのにまったく出てこない。

弾と数馬に止められ無かったら扉を破壊してでも乗り込んでいたわね。そして結局は一夏が出てくる事も無く進級した。



そして、その時に衝撃の事実を知ったわ。

それは担任の齊季松先生から伝えられた。

「うむ、また皆と1年を過ごさせる事を嬉しく思う!…そして皆に大事な話しがある。緋龍の事だ。緋龍は春休みにドイツに行ったのだが…そこでテロに巻き込まれて重症を負ったらしい」

『ツツ!?!』

その言葉にクラスの皆がざわめき出した。そしてアタシは頭が真っ白になりながら先生に問いかける。

「せ、先生…蓮は…無事なんですか…?」

「…ああ、一命を取り留めたから命の心配は無い」

その言葉を聞いて皆が安堵した。

「ただ、まだドイツで治療中との事らしいからな。暫くは学校も休みだ」

すると弾が立ち上がり先生に問いかけた。そう、もう一人の欠席者の一夏の事を聞く為に。

「なら一夏はどうしたんだ!?!」

「織斑は緋龍の事で精神的ショックを受けてしまい引きこもっている。デリケートな問題故に私にはどうにもできん…。が、諸君ならなんとか出来るかもしれない!是非織斑の

事を気に掛けてやってくれ！それではホームルームを終了する！皆、始業式に向かう様に！以上！」

その後、皆がアタシ達に何か知らないか聞いてきたけど、アタシが知りたいくらいよ！と思ったが口には出さなかった。クラスを中心人物の二人が居ないだけでこんなに寂しいものなのね…。

その日は始業式だけで終わったので一夏の家に向かった。無駄かと思いつながらインターホンを押すと扉が開いた。驚いたアタシ達。でも出てきたのは一夏では無くて千冬さんだった。因みにアタシは千冬さんが苦手だ。だつてほら…威圧感が半端無いもん…。弾も数馬もビビつてたけど家へ上げて貰えた。

そこでアタシ達は蓮について質問した。

「あの千冬さん！蓮は無事なんですか!?!」

「…無事ではある。五体満足の状態で後遺症も無いと言っていた。しかし…まだ目覚めていない」

「[[[:]]」

まだ目覚めていないって……本当に大丈夫なの…？もし、もし蓮に何かあったらアタ

シ……

「おい……？鈴？どうした鈴しっかりしろ！」

「はっ!?ご、ごめん……」

「あんまり無理しないでね？」

弾と数馬に心配かけてしまった。すると千冬さんが……

「蓮の事がさぞかし心配だろう。だがアイツは大丈夫だ。私はまたドイツに行く事になった。だから向こうでの蓮の事はまかせてくれ。……そしてだ。一夏は今回の件で辛い思いをして心が弱っている。だからどうか一夏の事を気に掛けてやってくれ……！  
弟が辛い時に一緒に居てやれない姉の代わりにどうか一緒に居てやってくれ……頼む……！」

そう言つて千冬さんは頭を下げてお願いしてきた。その姿は世界最強のブリュンヒルデではなく、弟を心配する一人の姉だった。

「……分かりました。一夏はアタシ達にまかせてください！その代わり蓮の事をお願いします！」

「俺も任せてください！あんな状態のダチを放つとけないですからね！」

「もちろん僕もです！任せてください！」

「お前達……すまない……本当にありがとう……！」

そう言つて更に頭を下げる千冬さん。なんとか頭を上げてもらい今日は解散となつた。

蓮の事、すつごく心配だけど……今のアタシ達に出来る事は一夏を元氣付ける事！元氣になつた一夏とアタシ達の4人でいつもみたい蓮を迎えてあげるのよ！

だから蓮！とつとと目覚めて元氣な姿見せなさいよね！

S i d e 鈴 S i d e o u t

S i d e 蓮 仁

長かった12時間ものフライトを終えて空港に到着した。何日ぶりだ？モンドグロツソ見て、倒れて寝込んで、療養と検査でドイツ軍にいて……。うん、2週間以上経つてゐるな。

いやはや、本当に色々あつた……。

外はすっかり暗くなっている。それで空港内に見知った二人がいる。そう、親父と母さんだ。

……今の俺は身長も100cm程度伸び、髪は白くて肩あたりまで伸びている。流石にこんな姿じや二人とも分からないか。

なんて思っていた時もありましたよ。

直ぐ横を通り抜けてやろうと思つたら肩掴まれた。母さんの握力強すぎない？骨ミシミシ言ってるんだけど？肉体どころか骨までパワーアップした筈なのにすつごいミシミシ言ってるんだけどお!？」

「あらあら……いったい何処に行くのかしらあ……？」

「散々心配掛けといて素通りか あ”あ”ん？」

「ヒエツ」

青筋を浮かべたお顔がとても怖いです。笑顔つてこんなに怖くなるんだなあーつて思いました(作文風)

「は、ハッハッハ！いやいや、二人が俺に気づくかのテストだよ！ちよつとしたジョーク的なので！ドイツジョークつてヤツだよ！ハッハッハ！」

「ふーん」

「ほーん」

咄嗟にそんな事を言ったが物凄いジト目で見て来る二人。

「い、いや〜！それにしてもよく分かったよね！すっかり姿が変わったのに！」

「馬鹿言うな！自分の息子くらい分かるに決まってるんだろ！」

そう言いながら小突いてこようとしたが反射的に掴んで捻ってしまう。

「いのででッ!?」

「あ、つい反射的に…」

やべえ…：ドイツ軍での訓練の影響で反射的に反撃しようとしちまった！しかし上手

いこと空気を和らげる事ができたからヨシ！（現場猫）

しかしこれから割と真面目な話があるから柔らいだ空気を自分からぶっ壊しに行

くぜ（白目）

「あのさ…話があるんだ」

「……まあ、なんだ。とりあえず近場のファミレスでも行くか」

俺の表情から何かを察したのか親父がそう言う。

そして車に乗って移動し、ファミレスで夕飯を食べて一息ついた頃に本題に移る。

「親父、母さん。暫くの間、学校を休ませてほしい。この通りだ。お願いします」  
そうして俺は二人に頭を下げた。

「…何で学校を休む？ いったい何をするつもりだ？」

「理由も無しに納得はできないわよ」

鋭い視線を向けてくる二人。俺はその視線を見つめ返しながら告げる。

「強くなりたい。ただ、それだけの理由だ」

「……………」

二人は沈黙したまま視線をコチラに向けてくる。しかしこれ以上は何も言うつもりは無い。

「そんな理由で納得する『分かった』ッ!? ちよつと!?!」

母さんの言葉を遮った親父の返答はまさかの固定だった。母さんだけでなく俺も目を見開きあ然としていた。

まさかこんな簡単に許しを貰えるとは思わなかった…。

「ただし、期間は夏休みまでだ。夏休み中は学校に行つて遅れた分の勉強をしろ。それが条件だ」

「……………はあ…勝手に決めて…。分かったわ。学校には入院期間と言っておくわね」

「……！ 二人共ありがとうッ！」

そして俺は礼を言つて立ち上がる。

「今日から夏休みまで、家には帰らない。その間一夏を気にかけてやってくれ。あと、手紙を書いたから渡しといてほしい。……それじゃあ、行つて来ます！」

「行つてこい馬鹿息子！」

「ちゃんとご飯は食べるのよ」

こうして俺は役4ヶ月の修行に出る事になった。行く場所は当然師匠の下だ。

もう、あんな思いは沢山だ。必ず強くなつてやる。たとえどんな苦難の連続だろうと！必ず乗り越える！

「苦難上等！好むものなり修羅の道！」

S i d e 蓮仁 S i d e o u t



くダイシー・カフェく

ここは《ダイシー・カフェ》。昼はカフェで夜はバーとして経営している店。店主の「アンドリユー・ギルバート・ミルズ」とその妻の二人で切り盛りする店は蓮仁の友人キリトこと「桐ヶ谷 和人」達の溜まり場になっている。

そんな店の前に蓮仁はいた。時刻は既に深夜を回っており店は当然閉まっている。そして店の扉の前に来た蓮仁は懐から一通の手紙を取り出して扉の隙間に入れた。翌日に店主のエギルが見つ付けてくれるだろうと。

「……皆に会いたいけど、やっぱり今は合わす顔が無いから……今は置き手紙だけだ。……またケーキでも食いにくるから。それじゃあな」  
蓮仁は一人言を呟き夜の街に消えていくのだった。

翌朝

昼間のカフェの準備の為に店に来たアンドリユーは扉の鍵を開けて中に入る。すると足元に何かが落ちていた事に気付いて拾い上げた。

「なんだコレは？」

手紙のようだが宛先が書かれていない。訝しげに後ろを見てみると何かを書いてある。それを見たアンドリユーは目を見開き啞然としながら急いで誰かに連絡を入れるのだった。

そして午後になり、放課後を利用してやって来たのは和人達だ。蓮仁との知り合いは皆集まって欲しいとアンドリユーから連絡がきて集まった訳だ。

メンバーはキリトこと和人、リーファこと直葉、リズベツトこと里香、シリカこと瑠子、クラインこと寮太郎、フィリアこと琴音、そして現在リハビリ中のアスナこと明日奈とA Iのユイとストレアはテレビ通話で参加している。各々が注文した飲み物を配り終えてから本題に入った。

「まずだ、今朝店に来たらこの手紙が落ちていた」

アンドリユーがそう話し始め一通の手紙を見せる。その裏には差出人の名前：【緋龍蓮仁より】と書かれていた。

「まったく…数日で帰ると言ってから2週間以上音信不通になった挙げ句に顔も出さず

に置き手紙とはな。こつちがどれだけ心配したと思つてるんだアイツは……!」

「ま、まあまあ。無事なのは分かったんだし良いじゃねえか」

怒るアンドリユーを宥める寮太郎。しかし他のメンツも散々心配させといて手紙一通なのは納得がいかないらしい。

「何言つてんのよクライン! 2週間も音信不通だったのよ!?! それなのに手紙一通でお終い!?!」

「そうですよ! ドイツで何かあつたのかと思つて心配したんですよ!?!」

『そうです! お兄ちゃんが死んじゃつたんじゃ無いかと思つて……心配で心配で……』

上から里香、珪子、ユイがそう言つて怒る。ただ宥めようとしただけの寮太郎はとばっちりを受けて心の中で蓮仁に怨嗟の念を送る。

「……なあ、手紙の中身は見たのか?」

「そ、そうです! ……なんて書いてありました!?!」

そこで和人と直葉が話を戻すべく手紙の中身を問う。

「いや、全員集まつてから見るつもりだったからまだ見ていない」

「なら早く見よう」

そして手紙を開けてアンドリユーが代表して内容を読み上げる。

「えー……『親愛なる……親愛なるも変だな? なんだろう……うん、愉快(笑)な皆様へ。』

まず初めに2週間近くも音沙汰無しだった事を謝罪します。申し訳ありませんでした。何故こんなにも長期間連絡が入れられ無かったかという疑問があるでしょう。まず一つ、この2週間はずっとドイツにいたから。二つ、そもそも連絡自体忘れていたからです！テヘペロ♪……」

その場にいた者は全員ズッコケた。連絡自体忘れていた？ふぎけんこの野郎！などなど思いながら立ち上がり座り直す。

「続けるぞ。『きつとこれを聞いた皆は《ふぎけんこの野郎！》とか思っているでしょう。 m9（ハハ）プギヤール』」

（（（（（こいつエスパークか!?））））））

「『そして《こいつエスパークか!?》とも思っているでしょう。 m9（ハハ）プギヤール』……煽る様に書かれた顔文字にイラツとする中、もはや本当にエスパークでは無いだろうかと皆が疑い始めるが続きを直ぐに読み始める。

「『さて、何故2週間もドイツに居たかという話しだけど、色々あって詳しくは話せないけど……簡潔に言うるとドイツでテロに巻き込まれて重症を負って1週間意識不明だった。』だど!?』」

「なっ!?」

「ドイツでテロ!?!」

「しかも重症で1週間も意識不明って!?!」

『そんな情報一切出ていませんよ!?!』

『待って、確かに正式な情報は出ていないけどモンド・グロツソ最終日に複数のISが街の上空を飛んでいたとか、街中で銃撃音が聞こえるってツイートがあるよ。それに決勝戦が終わって直ぐに織斑千冬が何処かに飛び去ったのは日本でもニュースになってる』  
「本当かストレア!?!」

さつきまで顔を真っ赤にして怒っていたが、今は皆顔面蒼白になっていた。まさか自分達の知らない場所でそんな自体が起こっていたとは思わなかったと。

「つ、続けるぞ……!」『だけでもう大丈夫だから余り心配しないでくれ。五体満足で後遺症も特に無いらしいから。』……

その言葉を聞いて幾分か落ち着きを取り戻し、手紙の続きを聞く。

『既に日本にも帰ってきてる。だけど、まだ色々な感情がゴチャゴチャしてて精神的にまいってる状態で皆にどんな顔で合えばいいか分からないんだ。だから今は手紙だけ届けた。これから暫くは療養兼リハビリで夏休みくらいまで知り合いの所に行くからまた暫くお別れだ。……自分勝手に悪いとは思ってる。本当にごめん。今度あつたらまたALLOで冒険しよう。それじゃあな。蓮仁より』……

手紙の内容を聞き終わったが皆一言も発する事は無かった。否、発する事ができなかった。

さつきまでは散々心配かけてと怒っていたが、理由を聞いた今は既に怒りも霧散し、更に蓮仁の今の心境を考えて皆暗くなっていた。

『……手紙では明るく振る舞っていたけど、きつと精神的にも辛いんだろうね』

「ああ……そうだな。1週間も意識を失う程の重症だ。かなり危険な目にあっただろう……俺には……俺達にはよく分かる」

明日奈と和人がそう呟き、回りの殆どが頷く。それもその筈だ。彼等彼女等の中では直葉以外全員がS A Oに閉じ込められ、死の恐怖を感じながら戦ってきたのだ。故に死の恐怖で精神的にダメージを追う事もあつただろう。

「はあ……。もう怒る気も失せちゃったわよ……」

「そうですね……」

「寧ろ余計に心配になってきたよ……」

怒り心頭だった里香と珪子は意気消沈し、琴音は寧ろ余計に心配になっていた。

『でも……でも！お兄ちゃんなら大丈夫です！お兄ちゃんならまたいつもみたいに元気な姿で会いに来てくれます！』

「ユイ……ああ、そうだな。ここで心配しててもしょうがない！アイツはちよつとやそつ

とじゃ挫けない奴だ！きつと大丈夫！」

「うん！そうだねお兄ちゃん！よし、それじゃあ蓮仁くんが帰るまでにALLOでもっと強くなっておかなきゃ！」

「よし！それじゃあさっそく帰ってログインするか！」

その言葉を皮切りに皆が立ち上がり帰っていく。アンドリユーはその姿を見送ってもう一度手紙を見る。ふと裏を見るとそこにも何かが書いてあった。

『P. S. 帰って来たらダイシー・カフェに行くからケーキセット用意しといて（ゝゝ  
ゝ）bグツ！』

「フツ…相変わらず甘党だな。細やかな祝いに奢ってやるか」

そして手紙を折りたたみポケットにしまってからある事に気づいてテーブルの上を見る。そこには空になったグラスやカップしか置いておらずアンドリユーは頭を抑える。

「アイツら…代金払わないで帰りやがったな…！お前らに奢ってやるとは一言も言つて無いぞおッ！」

その晩にALLOでエギルにこっぴどく怒られる複数人のプレイヤーがいたとか……

## Side 亡国企業

亡国企業のとある支部。そこに一人の白衣を着た男が何やら作業をしていた。

「嗚呼……嗚呼！素晴らしい！流石は大天災・篠ノ之 束だ！世界が第3世代機の開発に追われているというのに！既にその域に達しているとは！しかも無人機！しかもこのスペックでプロトタイプ!?彼女の科学はいったいどれほど先に行っているのだ！嗚呼！本当に素晴らしいッ！」

研究室にて独り言にしてはかなり大きな声量でそう言いながら無人機「ゴーレム・プロトタイプ」を弄っている男、名を「Dr. ゲノム」と名乗っており本名は誰も知らない。

「しかもあの白騎士もかなり弄っていたな。スペックからして第2……いや、第2・5世代といったところか！クッククック私の機体もプロトタイプとはいえ、かなり弄ってい



たのだから……。しかし、私の発明については是非聞いて欲しかったのだから……。そう、この機体に組み込まれているシステム！その名も「アー『おい！ゲノムは居るか!』……まったく何故システムの名前すら言わせてくれないんだ……。まったく……。オータム君！君は重症なのだから大人しく休んでいなさい！腕の傷がまた開くぞ！」

「うるせえッ！そんな事より義手はどうなった!?!あのクソガキをぶっ殺すんだ！早くしろ！」

「だから傷が完治するまでは不可能だと言った筈だ！大人しく休んでなければいつまでも義手を着けられないぞ！」

「クソッ！」

ゲノムが自身の開発しているシステムを叫ぼうとした時に左腕を無くし痛々しい姿のオータムが入ってきて叫んだ。しかし傷も完治していない身体で無茶をして何度か傷が開いてしまっていた。

しかしオータムは自分の部下を殺され、腕まで失い冷静では無かった。目は血走っており限も酷い。口を開けばクソガキだの復讐だのと叫んでいる。

そんな中、扉が開きまた誰か入ってきた。

「オータム。駄目じゃない大人しく寝てなきゃ」

「……スコール」

そこに現れたのは金髪でグラスマーな女性、スコール・ミューゼル。彼女はオータムに近寄り頬に手を当てる。

「また限が酷くなってるわね。まだ悪夢を見るの?」

「…ああ。あの光景が…今でも頭から離れないんだ…!」

蓮仁との戦いで仲間を失いその恐怖により連日悪夢に魘されていたオータムは最近  
は寝る事すらしなくなり虚ろな目で呪詛を吐いている状態で支部の者達もビビって避  
けていた。

「なら今晚から私が一緒に寝てあげるはね? 別の意味で眠れないかもしれないけど。フ  
フフ」

「ツ／＼／＼」

二人の背後に百合の花が咲き乱れる様に見えるゲノム。

「はいはいごちそうさま。そういうのは部屋でヤツてくれ。私の居ない場所でヤツてく  
れ」

「あら、ごめんなさいね?」

謝りつつまったく反省の色がないスコールと顔を真っ赤にするオータム。ゲノムは  
『カーツ! ペツ!』と唾を吐きブラックコーヒーを飲み干す。

「ブラックコーヒーがカフェオレみたいに感じる…。はあ…」

「貴方もまだ若いのだから恋くらいいしてみたら？」

「ふん、そんな事に費やす時間はない。一刻も早く私の研究を完全にするのが最優先だ。  
(その為だけに長年この組織亡国企業に居るのだからな)」

パソコンで前の戦闘のデータを見てみると『ああ、そういえば』とゲノムが呟く。

「オータム君は何故彼が…緋龍 蓮仁がまだ生きていると思うんだね？あの傷ではもう助からないとは思わないのか？」

「……只の直感だ。アイツとはまた戦う事になるつてな」

「ふむ…非現実的だが、案外間違っていない直感かもしれないね。ドイツ軍の内通者からの情報で彼が生存しているとの事だ」

「やつぱりか…ッ！」

「まあ待て。焦るんじゃない。怪我も治っていないし義手も完成していない。オマケに今はI Sがかなり不足している。言いたい事は分かるね？」

「…チツ。分かったよ」

渋々ながらも先程までとは違い落ち着いた様子でそう返したオータム。ゲノムは『やつと落ち着いたか…』とため息をこぼす。

「それではこれからの活動方針としては失ったI Sの補充をメインとするわね。Dr. は無人機の解析とI Sの強化及び兵器開発。オータムはゆっくり休んで怪我を治す事。

分かったわね？」

「分かった」

「コチラも了解だ。しかし…いささか資金が不足していてね。強化及び兵器開発は厳しいだろう」

「…：…はあ…。問題は山積みね…」

頭を抑えてため息を吐きながら部屋を出るスコール。それに続いてオータムも出ようとしたがゲノムに引き止められる。

「ああ、オータム君。少し待ちたまえ」

「あん？なんだ？」

「実は彼の事について調べているのだが、近々彼の家族に接触しようと考えている。だから私が君に復讐の機会をセッティングしておこうと思ってるね」

「…：…そうか。なら、最高のショーにしてくれよなあ？それまで楽しみにしてるからよ」

そう言いながら部屋を出ていくオータムを見送ってから椅子に座りパソコンを開く。そこには蓮仁の家族構成や友人関係など、様々な情報が出ていた。

「それにしても、実に平凡な家庭だ。…：…父親がハガレンのマース・ヒューズ似な事と、母親が学生時代に三節棍で100人相手に一人で特攻して打ち負かしたスケバンである事と、幼馴染の姉に世界最強と大天災かいる事と、遙か昔から継承されてきた剣術を

扱う師匠を除けば……いや、大分平凡では無いな。既にかなりイカれてるね。一人で100人倒すとか化け物かね彼の母親は？しかもこの師匠に関しては何情報も無いときた。結論からしてヤバイ集団だね」

調べ上げた内容がだいたいヤバイものしか無い事に目眩がするのをコーヒーを飲んで誤魔化する。

「さて、まずは日本に行くか」

— そう言いながら立ち上がり白衣を脱ぐゲノム。そしてつけっぱなしのパソコン画面にはとある情報が載っていた。

『《緋龍 蓮也》 中企業に勤めている。義手や義足等を作る会社であるが最近では新事業としてI Sの部品開発や組み立て等も始めており現在企業拡大中』

「ククク……とても良い情報が手に入った……！待っていたまえ蓮仁君。君は私の研究にとつて無くてはならない存在の様だからね……！フハハ……フハハハハハハハッ！」

声高らかにそう言いながら笑い出すゲノムは研究室を後にするのだった。

# 原作前第31話 彼の者、歩み進むは修羅の道

第31話です！

今回は蓮仁くんの強化回ですね！人外化待った無し！因みに現在の蓮仁くんस्पックも出ますよ！やったね！

そして、これを言わせて欲しい……

篠ノ之 箒いいいいッ！誕生日おめでとおおおうツツツ！！

出番はまだもう少し待ってくれええええええッ！！

それでは第31話どうぞ！

前回のあらすじ！

日本に帰ってきた者達と日本にいた者達。

それぞれが様々な想いを抱く。

そしてそれぞれが新たな道を進む。

蓮仁もまたその一人。

更に高みえと向かう為に、もうあんな想いをしない為に。

彼が歩は修羅の道……。

S i d e 蓮仁

6月になって段々とジメジメしてきた今日このごろ。

さて、そんな中でも修行に励む白髪長髪の高身長マツチヨマンは誰でしょう？

そう、俺だ！

日本に帰ったのが4月頃だから早くも2ヶ月近くも師匠の下で修行しているぜ！

懐かしいなあ：帰ってきた時には殴られて説教された後に『よく戻ってきた…!』つて抱きしめられて涙腺崩壊しながら謝ったな。……主に痛みでな（白目）

それからはまさに地獄の修行が始まったんだよ。

ここで簡潔に今の俺の肉体スペックを説明しよう。

まず東さん製の強化ナノマシン（失敗作）を投与された結果肉体が急成長して身体が既に高校生くらい？ になってる。あと痛みのストレスで髪の色素が抜けて白髪頭です。これは学校始まったら染めないとなあ…。

このナノマシンだけど治癒能力が高くて大抵の傷は治るらしい。あと毒やウイルスも分解するオマケ付き。その代わりに治る時に激痛が襲ってくるのと、毒以外にも薬すらも分解するデメリットがある。

そして以上な骨密度と筋肉密度でスペックバク上がりしたぜ。

【身長】 181cm

【体重】 96kg ヒ・ミ・ツ♡

【パンチ力】 1.3t

【キック力】 11.0t



【ジャンプ力】16.0m

【走力(1000m)】5.1秒

【時速】70km

コレが今のスペック(ノーマル)ね。因みに東さん調べ。仮面ライダーの初期フォームより少し弱いくらいだね。あはは(白目)

ウマ娘の時速も70km。そして俺の時速も70km。つまり俺はウマ男ですね。うまびよいですね。(白目)そして俺は時速70kmを5時間はキープ出来る。(ドヤツ)

因みにダチヨウも時速70kmです(豆知識)

因みに身体強化とか闘気開放次第では更に強くなるよ！やったね！そんなスペックを持つてる俺でも師匠に一撃すら入れる事はできないぜ！ふざけんな！

ふうー……、まあ、とりあえず俺のスペックは置いといて現状を説明するか。まず修行の難易度バク上がりしました。

まず師匠との真剣での斬り合いだけどさ？さつき言ってたナノマシンで大抵の傷は治るって師匠にも話したんだよ。そしたらさあ『なら手足を切り落としても治るか』って言いながら腕切り落として来やがった。マジふざけんなよ。

ヤバかった。切り落としても繋がるのか解んないもん。痛みに泣きそうになりながら腕拾ってくつつけてソコに回復を集中させてなんとか治ったよ。いや師匠の切り口が凄く綺麗だったのもあるけどさ？

いきなり腕切り落とす？人としてどうなん？

治って良かったあ…って涙目で安堵&安堵してる時に見た師匠の笑顔。この時程師匠に恐怖した事は無かったよ？

良い笑顔で『コレで多少手荒でも問題無いな（ニツコリ）』って言われた時はマジで…：あ、なんか泣きそうになってきた…：。

それからの2ヶ月ときたらもう…手足切り落とされて、内臓を避けながら身体貫いて貫通してくるし。身体中切り裂かれたり。本当に死ぬかと思つた。難易度アルティメイト過ぎてワロタアアア！

それに加えて気の修行と闘気開放の時間延長の修行もしてるし！滝に打たれながら師匠の投石を避けたりもするし！まさに地獄！あ、因みに日記書いてるんだよなあ。精神的に安定させる為にね。

蓮仁の日記く地獄の修行編く

4月○日

今日は師匠の下に修行の為に来た。怒られたり色々したけど住み込みでの修行を許可してくれた。因みにあの修行の山、時雨山の麓辺りに家がある。麓って言っても山の中だったけど。

さあ！修行開始だ！

イツパイ斬ラレタ：

4月？日

今日モイツパイ斬り落トサレタ：

4月△日

今日ハイツパイ貫カレタ：

4月□日

シフ達との戯れが唯一の癒やし：はつきり分かんだね。段々斬られ切り落とされ貫かれるのに慣れてきた。痛みにも慣れてきた。だからって両手を切り落とさないで  
(泣)

あとドイツで買った服が全て切り刻まれた。師匠の服は体格的に着れないからどうしよう…。

4月◎日

滝行したら投石してきた。あはは！すごい！速すぎて見えないや！銃弾より速いとかマジなんなの？

師匠が服を調達してきてくれた。サイズもピッタリ！だけどさあ…：何故全て和服？もう侍の着物に忍び装束とか甚平とか…。何処で調達したん？

4月●日

滝行中に投石されるのに慣れてきたので撃ち落とす余裕ができてきた。それが気に食わないのか威力マシマシの数もマシマシになった。あはは！すごい！まるでガト

リングガンだね！（白目）

殆ど喰らって骨折や打撲したけど牛乳沢山飲んだら骨折治った。この身体凄い。でもそれ以上に師匠が凄い。

風呂に入る時傷の多さに引いた。いくら治るとはいえ生傷絶えないから古いのが消える前に新しいのがどんどん増える…。

あ、因みに師匠の家の風呂は五右衛門風呂だよ！なんかイイね！

4月◇日

投石を刀で撃ち落とす。つまり今の俺はガトリングガンを刀一本で攻略出来る訳だ。やったね！

ヤバい。師匠が大量の槍持ってきた。あはは！すごい！まるで突き穿つ死棘翔の槍の雨みたいだね！（死んだ目）

今の俺には急所を守りながらなるべく撃ち落とす事だけさ。7本突き刺さった。あははは…

死ぬは！7本とか普通は死ぬは！急所避けたけど普通の人間なら死んでるからねえええええッ！？

……自分で自分を普通の人間では無いと言ってる事に気付いた。泣きたい。

5月〇日

月が変わり新しい修行がスタート。何でも《気》の進化系らしい。

.....?

..... (。 ㇿ ) ?

..... (つ ㇿ ) ゴシゴシ

..... (。 ㇿ )

.....

..... 師匠が炎ヲ出シタ.....

工エエエエ (。 ㇿ ) エエエエ工

あ...ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「師匠が 刀を抜いて構えたと思ったら 突然刀が炎を纏った」

な…何を言っているのかわからねーと思うが

おれも 何をしたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった… 幻覚だとか手品だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

さてさて、この技だけどうやら温度を気で上昇…つまりは強化して発火させているらしい。応用すれば温度を下げて氷点下の冷気を纏わせる事も可能らしい。

しかし無から生み出した訳では無くてあくまで強化なので熱気と冷気……つまり熱さと冷たさが無いと駄目な技のようだ。炎は自身の体温の熱気を使えばいつでも使えるけど、冷気は冬とか冷たい場所とかでしか使えないと。近くに川とかの冷たい水があれば使えるらしいけどね。

更に更に、暑い時…つまり夏に冷気を使うと気の消費量が半端無いらしいから使い勝手が悪い。

そんな技をいきなり『やれ』と言われても困るんですが？説明してどうにかなる事じゃ無いよ???だってこれ明らかにもう世界観が……あ、はい。直ぐにやりますう…

………できました(白目)

これには師匠もびつくりですね。俺もソーナンス。

5月△日

昨日は新技を呆気なく覚えてしまったので今日はお休みですね。休みは自主トレとか山の散策とか師匠の鍛冶の仕事の見学とかしてる。ん？シフ達との戯れ？毎日の日課ですが？唯一の癒やしの時間ですが何か？

鍛冶を見学してたら『お前もやってみろ』と言われた。師匠に教えてもらいながらなんとか刀を作る事に成功！ヤッベ！初めてでこれは才能有りなのでは!?!………つて思ってたら師匠が刀を見てへし折りやがった。

『まるで話しにならない。形だけの只の金属の塊だな』だつてさ。  
ムキになってこの日から本格的に刀鍛冶を覚えようと決意した。

5月□日

今日は新技の開発中。せっかく炎出せる様になったんだからかっこいいのが欲しい



よな！鬼滅の刃を読んで参考にしてやるぜ！

貸し与えられた部屋で鬼滅全巻を普通に楽しんでしまい慌てて修行した。うーん、やっぱりなんか新技って難しいなあ…。

師匠家に戻ったら師匠が眼鏡掛けながら鬼滅読んでた。流石は鬼滅ですな。師匠すらハマったぜ。だからって飯の直前まで読まないでくださいな。

あ、因みに食事は俺が作ってます。

5月？日

修行しようとして外に出たら師匠がなんかしてた。コツチに気付いたのか手招きしてきたのでそのまま師匠と開けた場所に移動。

そして俺は自分の目を疑った。何故かって？

師匠がヒノカミ神楽を使ってたからだよッ！！

マジかあんたオイオイオイ!?昨日初めて鬼滅の刃読んだ癖に次の日に何でヒノカミ神楽をマスターしてるんですかあああッ!??!本当に何なんですか師匠は!?!

5月◎日

修行に新たにヒノカミ神楽が追加された。それどころか前集中の呼吸を参考にした呼吸法を編み出したらしくそれすらも追加された。マジで何なんですか？何で新技編み出したりフィクションの動きを再現するんですか？

……あ、俺の斬撃って月牙天衝を真似て覚えたっけ。

6月○日

今日も今日とて滝行しながら突き<sup>ゲ</sup>穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ボ</sup>翔<sup>ル</sup>の槍<sup>ク</sup>を避けたり叩き落としたりして、師匠に手足切り落とされそうになるのを必死に防いで、師匠独自の呼吸法を練習して、ヒノカミ神楽を舞って、シフ達と戯れて、飯準備したりするのがルーティーンになった。最近<sup>カ</sup>は畑仕事も手伝ったり狩りをしたり魚釣りしたりなんかもしてる。

毎日が充実してるなあ

やってる内容は地獄だけだな！

そんな地獄を今日まで乗り切った俺は一人で鉄を斬る修行中！

暴走した時、確かにI Sの装甲を両断したんだ。…そう、人と一緒に両断した……。余り思い出したくは無い記憶だが斬鉄はI Sと戦う以上必ず必要になる。

あの暴走した力はまさに異常。I Sのシールドエネルギーを全損させ絶対防御を突破し装甲と人体を両断した。たった一振りで。

そこまでの力はなくとも斬鉄は大きなアドバンテージになる。だから今現在刀で鉄鎧を斬ろうとしている。…けど、駄目だなあ…。多少切れ込みは入るけど両断できない。刀の刃こぼれも酷い。

一旦刀を取りに工房に戻る。此処は師匠の仕事場の鍛冶場で依頼を受けて刀や包丁を打ってるらしい。主な収入源らしい。因みに 刀：2 包丁：8 の割合で注文があるらしい。なんか師匠の打つ包丁って凄く有名らしいし、刀はコレクターからヤクザまで幅広い人が欲しがららしい。オークションに出したらとんでもない額になるらしいよ。

そして俺はそんな凄い有名な師匠の打ってくれた俺専用の愛刀【雪月赤】を……折られてしまった……。俺が未熟なせいだ……！

折れた雪月赤は師匠に預けてある。その後どうなったのかは知らない。

「おう、ちょうど良い所に来たな」

「？」

鍛冶場で作業をしていたらしい師匠がそう言った。何か用があるのかと思いい師匠の所に行く。

「どうかしたんですか？」

「ああ、今刀を打ってたんだが材料が足りなくなつてな」

「なるほど。なら取ってきますね。何が必要ですか？」

「ああいや、必要ない。今ちょうど向こうから来てくれたからな」

向こうから来てくれたと言った師匠の言葉に疑問を感じた俺は質問しようとして右手の違和感に気づく。右手を見ると……肘から先が無くなっていた。

「…ッ!?グアアッ!痛えええッ!」

俺が右手の傷を抑える中、師匠は赤熱化している刀に俺から切り落とした右腕から血を垂らします。ジュウウウウツ!と音を響かせる刀にどんだん血が垂らされていく。

「よし、もういいぞ」ポイツ

「俺の手の扱いが酷過ぎる!」

ポイ捨てされた右腕をキャッチして直ぐにくつつける。傷に気を集中させて治癒力を底上げし、ナノマシンで更にブーストさせて一気に治す。暫くしてからしつかり感覚

があるのを確認してから師匠に怒鳴る。

「師匠ッ！ やつて良い事と！ やつて悪い事と！ どちらでも無い事と！ 様々ッ！！」

「何が言いたいんだ？ それよりお前の《氣》をこの刀に流せ！ 早くしろ！」

「えっ!? はっ!? …… ああもう！ やれば良いんでしようやれば！」

師匠が刀を打つ横でひたすらに《氣》を流しこむ。

「もつとだ！ もつと捻り出せッ!!」

「は“い”っ!!」(ヤケクソ)

そしてどれほどそうしていただろうか…。既に気は無くなってダウンした俺の横で師匠は打ち上げた刀を焼き入れし終えて研いでいる。

それから茎なかに銘を入れ始める。そして事前につつてあつたのだろう龍を施した鍔や柄を取り付けて目貫で固定し紅い柄巻を巻いていく。

そしてこれまた事前につつておいただろう紅に金の装飾が施された鞘に納める。どうやら完成したようだ。

「蓮仁。お前の新たな刀だ」

「え…? それ、俺の…なんですか…?」

「ああ、お前の雪月赤を溶かして素材にし、玉鋼や他の金属、お前の血と気を練り込んで

鍛え上げた刀。その名も【緋徹】だ」

「こゝ、これが……雪月赤を使つてできた刀？」

刀を受け取ると鞘から抜き刀身を確認する。その刀身は鮮やかな紅色で、炎の様な刃紋の刀……否、刀と呼ぶには刀身が長過ぎる。

「それは普通より長く作つてある太刀だ。しかし反りは本来の太刀程無い。今までより扱いは難しくなるだろうが問題無いだろう？」

「はい。それに……この形状は【朱時雨】と同じですね」

そう、緋徹はまるで朱時雨の様な形状をしている。普通より長い刀身。しかし太刀程の反りが無い……。そして何より色が似ている。

「朱時雨は既に俺の手から離れた。……既にお主が契約してしまつた故にな。しかし、今のままでは到底扱えまい。故に新たな刀はより朱時雨に近くした。形状、素材、そして使用者の《氣》と血……。まずは緋徹に慣れるんだ。分かつたな？」

「は、はい！分かりました！」

俺は鞘に納めてから腰に下げ緒で固定する。多分今の俺はすつごく侍だと思ふ。和服に刀とかもう侍だね？髪は白だし、なんとなく三編みにしてるけど……。

そして師匠による緋徹のココが凄い！が始まる。

曰く、今まで打つた中での最高傑作。刀身の刃紋はまるで燃え盛る炎の様。鮮やかな

紅色が美しい。この刀には隕鉄を使用している。

「つまりこの刀の正式な名前は〔流星刀りゅうせいとう・緋徹ひてつ〕って訳だ」

「えっ、流星刀とかロマン溢れるヤツじゃん。めっちゃかっこいい」

「朱時雨も今は妖刀だが、元は流星刀だ。緋徹を使いこなせれば朱時雨もいつか使いこなせるだろう」

……朱時雨は日本に戻ってからは師匠に預けている。今は俺が継承したが正式なものでは無いし今の俺では扱えない。何よりまだトラウマを克服できていない。日本に帰ってからも時々夢であの悪夢を見る。その度に胸に残った朱時雨を突き刺した傷が痛む。心臓を突き刺すような痛み。

その度にアイツが語り掛けてくる。……アイツだと分かりづらいから、ダークサイドの俺だから今後「レンジ・オルタ」と呼ぼう。毎回毎回悪魔の囁きのように何か言ってきている。いつかコイツとも決着をつけないとな。

「あ！そういうえば斬鉄用に刀を取りに来たんですが……。流石に緋徹をいきなり使ってポロポロにするのはちよつと……」

「問題無い。鉄程度で刃こぼれなんぞ起こささん」

「ええ……？」

「ほれ、早うせんか」

そう言われたので渋々さっきの場所まで戻り鉄鎧の前に立つ。そして師匠をチラツと見るが『早うせんか』と目で促されるだけだ。ああクソっ！

緋徹を抜刀して構える。この時点で俺専用には造られたのだなあとはつきり分かんたね。まず柄が手に良く馴染む。俺の握り方を完全に熟知してないよこのフィット感はない。そして俺の細かい癖すらも熟知しているのか刀全体がこう…なんか凄い馴染む。まるで昔から使っていたかのような…いや、それ以上にまるで身体の一部の様だ。

今なら何だつて斬れるとすら思う。そして俺は緋徹を振り上げてから一気に振り下ろす。

「ハアアッ!!」

振り下ろされた緋徹は鉄鎧の三分の一まで斬り裂き止まる。俺は過去最高記録をすんなり更新した事に驚きながら直ぐに刀身を確認する。しかし刀身には刃こぼれ一つしていないかった。

「す、凄い…：自分によく馴染む刀だどこまで違うとは…」

感動しながらも今までより重くて長いからかまだ上手く扱えない緋徹を完全に使いこなせればどれほど高みえ行けるだろうと考える。すると師匠が顎に手を当てながら話しかけてきた。





.....マジか...

「結論ッ!!」

「!?」

「鉄鎧は豆腐だったッ!!以上ッ!!解散ッ!!」

そして俺は晩飯の用意をする為に台所に向かった。師匠をその場に残して、俺の残像を残して...

「.....まさか本当に斬るとはな...。流石に思考が柔軟過ぎるだろう...」

晩飯を作り食卓に並べている中で師匠の家にある唯一の家電の電話が鳴り響く。師匠の家には電化製品が電話しか無い。あとはアナログテレビ。

台所は釜戸だし、冷蔵庫は無くして氷室が地下にあるからソコに食材を保管している。氷室内は涼しく、更に師匠が氷を作って（修行で覚えた《気》で水を氷にしたヤツ）入れている。場所によっては冷凍庫並みの温度の場所もある。

って話がそれたな。それで今鳴り響く電話だけど主に仕事の依頼とかでかかってくるんだよな。師匠は今風呂に入ってるから後でかけ直すように伝えとこう。

ガチャ

「もしもし、時雨です」

『明日の昼に貴様との決着をつけに行くぞ厳仁ッ！今度こそ朱時雨と共に時雨流剣術免許皆伝をいただくッ！首を洗って待っておれッ！ガチャ！ツー…ツー…』

「……え、ええ…？」

どうやら何かが始まるらしい…。

どうでも良いけど豆腐ステーキ旨かったです。

# 原作前第32話 朱時雨を賭けて勝負う!!え、俺が!!

前回のあらすじ!

日本に帰ってきた蓮仁は師匠の巖仁の下へ!

そして約2ヶ月の新たな修行で強くなった!

新たな刀〔緋徹〕を携え、遂に斬鉄を会得!

その晩に何やら不穏な電話が……?

## S i d e 蓮仁

昨夜に謎の人物から電話があつた事を師匠に話したらこめかみを抑えながらため息を吐いていた。その人物はどうやら師匠の兄である〔時雨 藩仁〕と言う人物らしい。師匠に兄弟がいた事に驚いたがとても仲が悪そうだ……。

詳しい話しはまた明日にとその晩は何も聞くことは出来なかった。まあ明日になったら色々分かるだろうしいつかと思つてアミユスフィアを被つて布団にダイブした。

ん?何でアミユスフィア?ほら、東さんの作つてくれたアニメキャラとバトルできるやつあるだろ?あれで夜も修行してんだよ。あれオフラインだからネット環境の無い師匠の家でも使えるからラッキーだね。最近戦つた相手だと…

### V S 東堂葵

東堂「お前はどんな女が好みタイプだ?」

蓮仁「タイプだとお?フツ……タイプとかそんなんじゃない。惚れた女の全てを愛する!それが漢だッ!」

東堂「……フン、つまらん奴だな」

蓮仁「……つて言うと思つたか?」

東堂「?」

蓮仁「人前でならそう言つてただろうさ!だがなあ!今は俺とお前だけ!ならばはつきり言つてやろう……」

胸と尻がでかい娘がタイプだツツ!!身長が高いならなお良しツツ!!」

東堂「ツツ!？」

瞬間、東堂の脳内に溢れ出した存在しない記憶…。

東堂「俺…高田ちゃんに告る」

蓮仁「…奢ってやるのはラーメンで良いよな？」

東堂「何でフラれる前提でラーメン奢ろうとしてるんだよ」

蓮仁「ええ？だってさ…うん。東堂は一夏とかとは違うからさ…うん。だから…

まあ…頑張れ？負け戦でも全力で逝ってこい！」

東堂「…かのアン・サリバンはヘレン・ケラーにこう説いた。『やる前に負けることを考える馬鹿がいるか』と…」

蓮仁「ふーん…。そんじやはよ逝ってこい」

東堂「…さつきから『行ってこい』が違う意味に聞こえるんだが蓮仁…？」

そう言つて東堂は高田ちゃんに告白するべく走り出す。

蓮仁「…もしもし母さん?今日は東堂とラーメン食ってくるから飯要らない。うん、そう。玉碎しに逝った。うん、そんじや」

高田「私、好きな人がいるの」

東堂「」

そう言つてラブレターを破る高田ちゃん。高田ちゃんが立ち去った後も呆然とその後ろ姿を見送る東堂…。そしてその光景を影から見守っていた蓮仁は東堂の下に向かう。

「好きな人が俺ってパターンは…」

「ある訳ねーだろ。現実を見ろ」

三角座りしながら落ち込む東堂。そんな東堂の肩に手を置いた蓮仁。

蓮仁「ラーメン、食いに行くか」

東堂「…ああ」

そして二人は鈴の家の中華料理店に向かうのだった……。

東堂「……地元じゃ負け知らず……か」

蓮仁「あつ」（察し）

東堂「どうやら俺達は、親『言わせねえぞオラアツ!!』ブベラアツ!?!」

蓮仁「悪いな……俺の親友は一夏だけなんだよ……そして!心友はラウラだけだツ!!」

東堂「フツ……!照れるなよ蓮仁」  
マイブラザー

蓮仁「照れてねーよ!」

東堂「……手加減はしない!全力で導くツツ!!」

蓮仁「かかってこいやこの野郎ツツ!」

……一人目の回想から既に内容が濃い……ツ!

これ以上思い出したくないので戦った相手だけ教えてやるよ。まず仮面ライダーの【オーマジオウ】だろ?ドラゴンボールの【ブロリー】だろ?ワンピースの【カイドウ】だろ?七つの大罪の【エスカノール】だろ?刃牙の【範馬勇次郎】だろ?ワンパンマン



の【サイタマ】だろ?北斗の拳の【ケンシロウ】だろ?呪術廻戦の【五条悟】だろ?あと……うん?もういい?まだファイアーエムブレムのキャラとか……あつ、はい。早く進めますね……?」

「ごほん!さて!脱線したけど師匠の兄がくるらしい!それまでは修行でもしてるか!

俺が坐禅して気を循環させながら昼飯何作ろうか考えていると誰かがコチラに向かってくるのが見えた。とりあえず循環を止めて立ち上がる。

コチラに向かってくるのは二人だ。師匠の兄だけじゃ無いのか?…見た感じだと師匠と同年代くらいの敵ついジーちゃんと小中学生くらいのちびっこいボサボサ髪で目元が隠れて腰まで伸びているロングヘアーの剣道着の奴が歩いてきた。見た感じ孫を連れてきたジーちゃんだな。……なんて呑気に考えてたらいきなりチビが刀を抜刀して凄いいスピードで斬りかかってきた。

「ん何だお前?!(驚愕)」

「……って感じに前の俺なら焦っただろうけど…今の俺ならこの程度余裕で躲せるん

だよなあ。

「ハアツ!!」

チビがそう叫び俺に向かって刀を振り下ろした。その瞬間俺は一気に動き残像を残してチビの後ろに回る。

「…ツ!?!ぎ、残像!?!」

「はい、動くなよ〜? 動くと言首チョンパだからなく〜?」

「なっ!?!」

後ろから首にラウラから貰ったジャングル・キングーを突きつけながらそう言ってるのと驚愕しながら動きを止めた。

「随分と凶暴なおチビさんだなお前」

「なツ! チビ言うなツ!!」

チビがコンプレックスらしいなこのチビ（無慈悲）

すると騒ぎを聞きつけた師匠が家から出てきた。

「来たか…滯仁…」

「今日こそお前を倒すぞ厳仁…!」

二人は睨み合いながらそう言っている。俺はナイフをしまつてチビを開放してやると直ぐに離れて唸り声を上げ始めた。うん、犬っぽいなアイツ。

そして師匠の兄……うん、藩仁さんでいつか。藩仁さんはコチラを見てから鼻で笑った。

……うん? (# ^ ω ^)

今、何で鼻で笑ったコラ? あ” あ” ン? テメーぎつくり腰にしてやろうかこの野郎  
(無慈悲)

「風の噂で弟子を取ったと聞いていたが……。ハッハッハ! 確かに腕は中々だがその歳でその程度か!? 大した事無いなッ! まだワシの孫は其奴より弱いが才能ならコチラが上だッ!」

「……あー、これはアレだな……年齢が分かってないやつですよ師匠」

「……そのようだな……。おい、藩仁。コイツの名は緋龍 蓮仁だ。年齢だがこんな凶体でも今年14だ」

「は?」

師匠の発言に『何言ってるんだコイツ?』みたいな顔してる。うん、俺も自分が中学生に見えないから仕方がないね。

「はい、時雨 厳仁師匠の下に弟子入りして約4年になります。緋龍 蓮仁です。中学2年です。更に言うと8月生まれなんでまだ13歳です」

「う、嘘…俺より一つ上…?」

え?このおチビは一個下だったの?ならこの間まで小学生じゃん。なるほどね、確かにあのスピードを出せるなら才能上だツ!て言うのも頷けるな。

「う、嘘をつくな!成人はまだでも16~18くらいだろう!?そ、そんなタツパと体格の13歳がおるかツツ!!」

「はあく??ならここに保険証があるから確認したらいいですよ」

そう言つて保険証を渡すと二人は目を見開き更に驚く。まあね。そりや驚くよね。

「そ、そうか…勘違いだったか…。すまん…。(まさか本当に13歳だとは!よもや才能も上か!?)」

あら以外。自分の非を認めしつかりと謝つたぞこのジーちゃん。思つてたよりまともそうだな!

「ああ、それとだが今現在朱時雨の所有権は蓮仁に移つておる。免許皆伝はまだまだだかな」

「なつ!?!あ、朱時雨が此奴を認めたと言うのか!?!契約は!結んだのか!?!」

「ああ、結んだ」

二人がそう言っている横でチビがコチラを睨んできている。うん、全然怖くねえや。

「な、なら此奴を倒せば朱時雨がワシを認めるかもしれんのだな!?!」

え?え?

「そうだ。既に朱時雨は俺の物では無い。蓮仁を倒せば認めて貰えるやもしれぬぞ。だが免許皆伝は俺を倒せばだがな」

「は?え?ひよつとして巻き込まれてる!?なんでさ!?兄弟の喧嘩?がコツチにまで飛び火しやがった!」

「ほほう?ならば……貴様を斬るツ!」

「なんでだよツツ! (憤怒)」

「前言撤回だゴラアツツ!! テメーやっぱりまともじゃねえよバカ野郎コノ野郎! ふつぎけんなマジでこのジジイが! 総入れ歯にしてやるぞツ! (無慈悲)」

すると俺の事を睨んでいたチビが叫ぶ。

「じーちゃん! コイツは俺に殺らせてくれ! さっきは油断したけど今度は全力で殺るからッ!」

「え? コイツ今殺るって言わなかった? 言つてたよね? 殺意マシマシかよマジふつぎけんなよクソガキが丸刈りにすんぞゴラアツ! (無慈悲)」

「ふむ……よし、殺れ」

「あつ、ふーん。コイツマジで頭イカれてんな。髪の毛全部塗り取つてやろうか? (無慈悲)」

そうして結局俺が戦う事になった。なんでえ？

「俺の名前は時雨しぐれ。満月みつき！お前を殺して朱時雨を手に入れる者の名だッ！」

「……はあ……。俺は緋龍。蓮仁。簡単に倒せると思うなよ？」

互いに抜刀して構える。緋徹を使つての戦闘は初めてだ。扱いにまだ慣れていないが……負けるつもりは一切ない。

そしてチビ……ミツキがコチラに向かつて突っ込んでくる。

《時雨流・穿ち》ッ！

「ほう」

師匠以外の時雨流剣術を初めて見た。スピードもあるし威力もある。だがまだ身体が硬いな。身体の捻りが足りていない。

《時雨流・穿ち》ッ！

俺もまったく同じ技を繰り返し互いの刀の切っ先がぶつかり、ミツキが後方に吹き飛んだ。

「がっ!？」

「どうした？もう終わりか？」

「ツッ…この野郎!」

今度は真つ直ぐでは無くて左右に動き、更には速度を速めたり遅めたりと強弱をつけて向かってくる。

なるほどな。確かに感覚が狂うだろう。普通は。そう、普通は!しかし!俺は普通では無い!

「《時雨流・穿ち》ツ!三連突きツツ!!」

中々のスピードでコチラに近づくと今度は穿ちを三連続で放って来た。

「破ッ!」

その攻撃に対して俺は大きく踏み込む。その踏み込みは地面にヒビを入れて衝撃波を放ちミツキの攻撃を弾く。更にミツキの小さな身体も弾かれて再び後ろに吹き飛んだ。

「ぐあっ!?…………ツ!コイツ化け物かよ…!」

「…………化け物…か…」

「…?」

「何でもねえよ。早くかかってこい」

化け物と言われた事にドイツでの出来事を思い出ししてしまいそう眩いてしまった。

それを訝しげに見るミツキだったが直ぐに切り替えて再び互いに構える。

「《時雨流》 ツツ！」

俺とミツキの音が被る。飛び上がったミツキは刀を振り上げてからコチラに向かって振り下ろす。それに対して俺は刀を振り下ろしてから振り上げる。

「《岩砕割り》 ツツ！」

「《カチアゲ斬り》 ツツ！」

ミツキの《時雨流・岩砕割り》と俺の《時雨流・カチアゲ斬り》がぶつかりあい、拮抗する事すらなくミツキの刀は空中に打ち上げられた。そしてすかさず俺は緋龍を鞘に納めて抜刀術の構えをとる。

「さっき言ったよな？ 殺すって」

「!？」

未だに空中で無防備な状態のミツキは目を見開く。そして悟った。コイツとは格が違うと。勝てないと。そして恐怖した。余りに濃厚で触れただけで斬り刻まれてしまいうような程の殺気に。

「人を殺した事も無い奴が、軽々しく殺すなんて言うんじゃないッ！ 《時雨流・疾風斬り》 ツツ!!」



「あ…死んだ……」

そうして放たれた疾風斬りは抜刀と同時に突風を巻き起こした。そして土煙が立ち昇り辺りが見えなくなった。

「み、満月!？」

「待て」

直ぐに孫の安否を確認しようとした滯仁を厳仁は止める。

「は、離せッ！大事な孫だぞ!?ワシのかわいい孫が死んだかもしれんのだぞ!？」

「安心せい。蓮仁は人斬りをするような奴では無い。ほれ」

土煙が晴れた場所には刀を振り抜いた状態の蓮仁。そして座り込んでいるミツキがいた。そしてミツキの目元までかかっていた前髪は綺麗にカットされていた。

「邪魔そうだったから斬つといたぜ。結構かわいい顔してんのな?」

「あ…いい、生きてる……?」

五体満足な事を確認しながら安堵した。しかし足元の違和感に気づいて下を見ると剣道着の袴が湿っていた。顔を真っ赤にしているのでさり気なくタオルを被せてやる。本当にすいません。ちよつと…いやかなりやり過ぎました。

「ま、まさかこれ程とは…」

「フツ…まだ本気では無いがな」

師匠のドヤ顔が凄い。こんなにドヤる師匠初めて見た。

「……ならば次はワシが相手だツツ！」

「ええ……？」

マジすか？この人、師匠程じゃないけど間違いなく強い。どれほどかと聞かれたら分からないとしか言えないけど…。

すると師匠が俺に耳打ちしてくる。

「いいか。時雨流剣術は一子相伝。故により才能のある俺が受け継いだ。だからと言って滯仁が弱い訳では無い。正直今のお前では勝てんぞ」

「……やっぱりですか？薄々そんな気はしてましたけど…」

うわ…マジすか。いや、でも格上の相手が出来るんだからラッキーだ。師匠とばかり戦ってるから師匠以外の格上との戦いはそうそう無いぞ。

「作戦会議は終わったか？ならば初めるぞ。特別にそっちは何でも使つて良いぞ」

……うん？今、何でもつて言った？俺は師匠に視線を送ると頷いていた。……よし。勝てる見込みが出てきたぞ。

そして互いに構えて……

俺は左腕のブレスレットからワイヤーを取り出した。

「《ワイヤーアクション》<sup>拘</sup>《バインド》<sup>束</sup>《》！」

「なっ!?ぐおっ!?」

瞬時に左手に呼び出したワイヤーを足へと放ち拘束し、力まかせに引つ張る。空中に突如放り出された事に驚き動きが止まった所に瞬時に弓と矢を取り出し5発放つてからクナイと手裏剣を呼び出し投擲、更に近くの木を斬り倒して投げつけた。

「んなっ!?!」

突如空中に放り出され、そこに矢が放たれ、更にクナイと手裏剣が複数、更に更に木まで投げつけられて驚愕する滯仁さん。そしてポカーンとその光景を眺める満月。最後にドン引きしている師匠。

いや師匠。あんた俺の手足切り落としてた癖になにドン引きしてんの??切り落としてより遥かに良心的だからね??

「クッ!甘く見るなよツツ!ハツ!セイツ!ゼアツ!」

空中で体制を変えながら矢を避ける。そしてクナイと手裏剣を全て刀で撃ち落とす。それから八双に構える。

「《時雨流・空烈斬》ツツ!」

最後に飛んでくる木を空烈斬で真つ二つにして全ての攻撃を防ぐ事に成功。少し焦ったが全て迎撃した事にさぞかし驚いただろうと俺を見る。そしてその目に写った

光景は……。

投擲の構えで槍を持つ俺だった。

「《突き穿つ死翔の槍》的な何かツツ!!」

そう叫びながら投擲された槍は凄まじい勢いで迫る。刀を振り抜いた体制のままでは到底切り落とすのは間に合わない。だがおそらく身体を捻りギリギリで躲すだろうと予測。しかしおそらく多少は掠つてダメージにはなるはず。

しかしその考えはハズレた。突如空中で横に移動したのだ。驚愕しながらも追撃するべく刀に切り替えて着地点に向かう。そして間合いに入った瞬間に刀を振り抜いたがなんと空中で跳ね上がり攻撃を回避した。そして今度は振り抜いた体制で無防備な俺に攻撃を仕掛けてくる。

「《時雨流 〃極〃・鉄塊割り》ツ!」

「ツツぶねえ!」

即座に後ろに飛び跳ねて回避する。衝撃で飛んで来た石礫が多少掠つてしまったがそれ以外は傷は無い。しかし……やっぱ強いな……。そんであの空中での動き……!間違いない【月歩】!つまり空気を蹴つてやがる!!

「身体強化……【力】【速】《ブースト》ツ!」

身体強化で力と速さを上げる。因みにだけと呼び方変えました!力は【パワー】で速

さは「アクセル」で防御は「ディフェンス」になります。

一気にスピードを上げて突っ込んでいき殴りつけた。しかし回避はされなかったもののガードされ、次の瞬間には俺が吹き飛ばされた。身体にもすごい衝撃が走ったのは分かったが何をされたのかは分からない。

「ぐうっ……! いったい何をした……?」

「ふっ……特別に教えてやろうか?」

「あ、マジすか? ならお願いします」

「おま……! プライドとかは無いか!?!」

そんなもん無くは無いか!?! 教えてくれるならお願いするしか無いだろうおん?

「ま、まあいい……。どうせ敵仁が説明していただろうからな。今のはおm『お前の放った拳の衝撃を身体を通してお前に送り返したのだ。たった一瞬でな。この技は中国武術にもあるぞ』……敵仁貴様……ッ! 何故説明を被せてくるッ!?!」

「なんとなく」

「なんとなく!?!」

「それより……余所見してよいのか……?」

師匠の説明になるほどなあ……と思つていたけどスキが出来たから普通に突撃します。

卑怯? H A H A H A H A H A H A H A H A! 真剣勝負に卑怯も糞も無いんだよッ!

刀を構えながら懐目掛けて走る。それに少々焦ったのか横に薙ぎ払うように刀を振るうが屈んで回避し、そしてその腕を掴んで背負投する。

しかしまたもや空気を蹴って衝撃を殺して叩き付けるのを防がれた。しかしまだ腕を離さない。自身の気と相手の気をくつつけて引つ張る！そして相手の気を自分のものにするツ！かつてクマさん相手に使った技〔身体狩り〕!!

「ぐうつ!? 貴様ツ! 返せツ!」

「なっ!? ぐぬぬぬ…ツ! 誰が返すかツ!! 俺の気は俺の物! お前の気も俺の物なんだよオラアツ!!」

「グアアアアツ!?!」

引つ張りあいの末に見事勝利した俺は大量の気を奪う事に成功。へへへっ! この気を奪うのだけが唯一師匠に勝てるやつなんだよな! あとチビが『ジャイアニズム…』とか言つてたけど無視で。

「さあて…! 一気に決めるぞツ! 新技でなツ!」

そう叫んだ瞬間に刀と俺の身体が炎を纏う。日本に帰つて分かった事だが、今の身体は極端に炎とか熱への耐性が強い。いや、強すぎる。

こうして炎に直接触れても何とも無いし、それに師匠の家の五右衛門風呂。普通は熱すぎて底板を敷いて入らないと大火傷するらしい。しかし! 俺は現代っ子故にそれを

知らずに入っていた!普通に入れるのだ!これはおかしいと沸騰した湯を被ってみたけどやっぱり熱く無い!寧ろ丁度良いぞ!ってなったんだ。

そして炎を纏った俺はその熱エネルギーにより肉体活性で身体能力が更に向上。そこに剃を使つて速度UP!!その状態で突っ込む!

「ツ!速い! (しかし! 攻撃の最の殺気で攻撃箇所が分かる………ツ! 上段からの一閃!) そこだツツ!! 《時雨流・カチアゲ斬り》 ツ!」

上段からの一閃と読みすかさずカチアゲ斬りで防ごうと下段から刀を振り上げる。そして目視した瞬間には自身の刀の軌道上に炎を纏っている刀を確認した。

「(勝ったツ!)」

そう思った瞬間、自身の刀が相手の刀を斬り裂いた。…否、斬り裂いた感覚が無い。

思考が止まりそうになる中、それを見て悟った。炎を纏った刀では無い。炎が刀状に形成されていたのだと。そして次の瞬間に腹部に伝わる熱と痛み到我に帰るが余りに重い一撃、更には意識外からの完全なる不意打ちによりクリティカルヒットしてしまった腹部は尋常では無い痛みが襲う。

「グアアアアアアアツ!!」

「炎を刀と身体に纏って高速で相手に突っ込み横一閃の一撃と炎のダメージを与える技。その名も…」

《緋龍閃》  
ひりゅうせん

「るろうに剣心に出てそうな名前の技じゃのう」

「は〜い外野は静かにしてくださいね〜」

るろ剣に出るのは飛龍閃で俺のは緋龍閃だから違いますう〜！それよりなんか師匠が完全に漫画にハマってしまっただけ…。最近るろ剣にもハマったし、鬼滅のアニメも見たいとか言うし…。まずは地デジ化しましょう？今だにアナログテレビで昔の録画しか見れないのは流石にどうかと思います。

「ぐっ…ぐおおおッ…！」

あ、いかんいかん忘れてた。峰打ちとは言え、割と本気で叩き付けたから…。大丈夫かな…？

「な、何故だ…？確かに上段からの攻撃だと…ぐっ…」

「…師匠との斬り合いでよく使われたんですよ。殺気だけを飛ばしたフェイント。アレは殺気で反応しちゃうから本当に厄介だし、本命の攻撃には一切の殺気が無くて察知



できないし。…まあそれをやった訳です」

「殺気だけを飛ばした…だと…?」

「因みに炎を刀に見せる事で更に引っかけやすくなるというオリジナル技にしました」

因みにこのフェイントは緋龍閃には含まれないよ!緋龍閃は炎を纏って相手に突っ込みながらの横一闪だからね!

「はあ…はあ……。クツ…。よもやワシが負けるとは…。小僧…見事であった…。ワシもここまで…。か…。ふつ…。戦って死ぬるなら本望だ…。」

「え?いや、峰打ちですけど?」

「え?」

…いや、え?じゃないよ。峰打ちだよ。殺さないよ?何を勝手な事をほざいてんだ???

「…痛みはあるが、切り傷が無い…本当に峰打ちだったとは…」

「…滯仁よ。どうだ俺の弟子は?」

「…悔しいが完敗だ。歳のせいにはしたく無いが世代交代か…」

「うむ、もう俺達の出番は無い。今を生きているアヤツ等に託すのだ」

「しかし……しかしだ！やはり一族では無い者に託すのは………はっ!!」  
「？」

ん？なんか話しあつてたのにいきなり滯仁さんがコツチ見たぞ？何なら満月も見てるぞ??てかコツチに来たぞ??

「な、なんだよ……まだやる気か？」

ファイティングポーズをとる俺の前にやつてきた満月は俯きながらぶるぶると震えている。……トイレか？

するといきなり顔を上げた。満面の笑みとキラッキラのお目々で。

「スッゲー！俺じいちゃんが負けるの初めて見た！しかも沢山武器を使つてたし炎も出したし！スッゲーカッコイイ！」

突然の褒めちぎりに啞然！そして赤面！

「よ、よせよ！照れちゃうだろおとおん？」

「だってカッコイイんだもん！アニキはスッゲーや！」

「あ、アニキ!!」

「ああ！決めたんだ！俺はあんたの舎弟になる！」

マジか……。舎弟が出来ちまつたぜ。衝撃的過ぎる発言に思考停止しかけるもなん

とか持ち直す。ここははつきり言つてやろう! 舎弟なんか要らん! って!

「いいか! 俺は舎弟なんか……はっ!? (な、なんて目で見てくるんだあああッ!? これはまるで【拾つてください】と書かれたダンボール箱に入っている捨て犬のような目たあああッ!! 止めてくれ! そんな目で見られたら断るなんて……断るなんて……!) ……俺に付いて来やがれミツキ!」

「押忍!」

あんな目には勝てないよ……。しようがないんだ俺はいつつもあんな目には勝てないんだから……。多分これから先も一生あの目には勝てないぜ……。

「よし、ならばまず……風呂に入るか?」

「……あッ」

直後に気づく自身の下半身の醜態! そして赤面!

「あ……五右衛門風呂だから直ぐには使えないか……。悪いけど川で我慢しろよ? よし行くぞ!」

「はいアニキ!」

そして俺達は川に向かって進む。この時、師匠達の話しを聞いとけば良かったと思う事になるなど今の俺は思いもしなかった。

## Side蓮仁Side out

## NoSide

「ふむ……なるほど。この手があったか……これなら無用に争わずにすむ……」

「おい……さつきから一人で何を言ってる?」

「喜べ厳仁!もはやワシ等が争う理由は無いのだ!時雨流劍術はこれにて安泰だ!ガツハツハ!」

突如笑い出す瀧仁を見た厳仁は少し引いていた。

「……ふむ、遂にイカれたか」

「イカれとらんわ!よいか?ワシは父上にお前を倒して時雨流劍術免許皆伝と朱時雨を奪えと言われていた。何故かわかるな?」

「……俺が妻と子を失い、後継者が居なくなつた事。新たな後継者を産むようにと見合  
い話を持ってきたのを断つた事だろう」

厳仁はかつて妻と子を失った。それはつまり後継者が居なくなつたということ。そうすれば時雨流剣術も厳仁の代で消えてしまう。それを防ごうと新たな妻を娶るように見合い話を持ちかけるも『俺が生涯愛する妻は唯一人だけだ……それは死んだとしても変わらんツ!』と突っぱねた。

それに憤慨した厳仁と漣仁の父は漣仁に免許皆伝と朱時雨を奪えと言われた。しかし免許皆伝はともかく、朱時雨は妖刀であり使用者を選ぶ刀。つまり厳仁を倒し認められなければならぬ。

しかし、厳仁と漣仁の間には越えられない壁があつた。どんなに努力しても、どれほど鍛え抜いても、遂にこの年まで勝つ事は無かつた。息子ができて息子にも厳仁を倒すように言うも賛同はしてくれず、やがて出来た孫は賛同してくれた。そして今に至る。「しかし……もうその必要も無い。父上は既に死んだ。……ワシとて妻や子を持つておる。お前の気持ちも分からなくも無かつた……。だが父上の期待を裏切りたく無かつた故に今までこうして戦いを挑んできた……」

「そうか……」

「今まですまなかつた厳仁……! 兄らしい事もできずに、父上の傀儡のようになって……  
本当に自分が情けない……!」

「……ふっ……なあに別に気にしておらんよ。それに、戦いは中々楽しんでおつたからな」



「何があつた!? オイ! 満月に何があつた!?!」

「あつたんだよ! そして無かつたんだよ!?!」

テンパーの蓮仁と意味が分からない巖仁、そして何かを納得する滯仁。

「ミツキが剣道着を脱いだら! サラシが出てきて! 弾けて! バイーン! て出てきたんだよ! 胸が! しかも! タマがねえ!! チンも! (悟空)」

「ツ!?!ま、まさか!?!」

「そう、その通り、満月は…」

すると再び向こうから満月が走つてきた。……生まれたままの姿で。その姿は小柄な体型には不釣り合いなデカすぎるバスト。引き締まったクビレのあるウエスト。安産方のヒップを持つ女性だった! コレで中学一年とは末恐ろしい。おそらくこの光景を見た鈴音は血涙を流す事だろう。

「おくい! アニキどうしたんだよ!」

「ギヤアアアアアツ!?! 服着ろ馬鹿!?!」

すかさずタオルケットを投げつけた蓮仁は鼻から血が出ていたとか……。

「満月は女だ!」ドーン

「ドヤ顔の滯仁に絶句する巖仁だった……。

## Side out

## Side 蓮仁

ミツキは女だった。川について俺も汚れを落とそうとしたんだよ。そしたら横でミツキが剣道着を脱ぎ始めると胸にサラシが巻いてあつてさ……『何でサラシ?』って思った次の瞬間に爆ぜたんだ。それはもう立派なモノが。

思考停止した俺。そして俺の横で袴も脱いでフンドシ一丁になる。明らかにイチモツが無いペターとした股間。あ、フンドシの下にはアレが存在しないんだなく、と理解した。

そしてフンドシを脱ごうとした瞬間に俺は叫びながら師匠達の所に全力疾走した。それはもう綺麗なフォームで走った。

師匠達に合流。更にミツキまで到来。しかも全裸で。直ぐにブレスレットからタオルケットを出して放り投げた。



「満月は女だ!」ドーン

ドーンじゃねえよ!危うく大量出血する所だったよ!胸見ちやったよ!?良いの!?あなたの孫の胸見ちやったよ!?胸なんて母さんと千冬さんと親戚の姉ちゃんくらいのか見た事無いのに!因みに千冬さんを見た事あるのは俺と一夏が風呂入ってる時に乱入してきたからだよ!母さんと親戚の姉ちゃんも風呂に乱入だよ!乱入しスギイ!?

暫くして、今は家の中です。ミツキは一人で川に行きました。ごちそうさまでした。そんでみんなで机を囲んでいます。だけど剣呑な雰囲気では無いから大丈夫そう。

「お茶ですどうぞ」

「うむ」

「ありがとうアニキ!ズズツ…苦ツ!」

「ドクダミ茶だ。身体に良いぞ。ズズツ…苦アツツ!!オ”エ”ツ!」

「アニキ全然飲めて無いじゃん!」

俺は甘党だからね。コーヒーもブラックで飲めないぜ!でも身体に良いから毎日頑張つてドクダミ茶飲んでる。

「さて…本代に入ろう…。小僧…ミツキと結婚しろ」

「ブウウウウツツツ!」

「アツツツツ!」

突然そう言われてお茶を吹き出して瀧仁さんに吹き掛けてしまった。

「ゲホゲホッ! いきなり何を言ってるんでいすか!」

「お前が満月と結婚したら時雨流剣術は将来安泰になるのだッ! 黙って結婚しろクソガキがッ!」

「クソガキツて言ったぞこのクソジジイがッ! だいたいミツキが許可してないだろうが勝手に決めてんじゃねえツツ!!」

「けっこん? 別に良いぞー?」

「軽ツ!」

いや軽々しいなお前!?

「けっこんでアレだろ? 一緒に暮らすんだろ? アニキと暮らすんなら楽しそうだな〜!」

はあ〜つ…微妙に分かってねえし…。

「と、とにかく! まだ結婚とかしないんで! この話し終わりッ! それよりさっきの技教えてくださいよ! 衝撃を送り返すやつ!」

「何だと!? 貴様満月をフツといて技を教えるだどツ!? ふざけんなよこの野郎ツ!?」

「ふざけてんのはお前だろうがクソジジイッ! 髪引っこ抜くぞこの野郎ツ!」

「あ、あ、ん?」

「止めんか馬鹿タレ共!」

二人でメンチを切りあつてたら師匠に拳骨くらわされた。クツソ痛い……。

「じーちゃん! そろそろ帰らないと晩飯の時間になつちまうよ! 早く帰ろう!」

「お、おお……もうそんな時間か……。それじゃあ帰るかのう……」

そしてようやく帰る二人を見送るべく外に出る。すると師匠とクソジジ……ゲフンゲフン。藩仁さんが何か話してる。そしてミツキは俺に話しかけてきた。

「アニキ! 次来た時はアニキの技教えてくれよな!」

「おう! 気お付けて帰れよ!」

「分かった! じゃあなアニキ!」

そうして二人はようやく帰っていった。しかし師匠の顔は強張っていた。いったい何を話したんだろうか……?

「……どれ、俺達も飯にするか」

「あ、急いで作りますね」

こうしてようやく長い一日が終わりわ告げた。明日からは衝撃を送り返すヤツと月歩の練習だな！

俺はそう考えながら台所へと向かうのだった。

S i d e 蓮仁 S i d e o u t

S i d e 廉仁

濤仁を見送ってから暫く夕日を眺めていた。思い出すのは先程の濤仁との会話…。

『廉仁』

『何だ…？』

『あの小僧と戦った時に互いの気を引っ付けたんだが…。アヤツの身体にもう一つのナニカが居るな？』

『…気付いたか』

『時雨流の古い文献に書かれていた事……。歴代継承者の中で極稀に現れるもう一つの人格を……魂を形成された者。そうだろう?』

『本人にも聞いた……もう一人の自分が居ると。破壊的な言動の危険なもう一人の自分が居る……と』

『……呪われたか。この呪いに掛かった者は歴代継承者の中でも最強と言われておった人物だらけだ。しかしその者達全員が碌な死に方をしなかった。血を抜かれた状態になったり、狂ったように暴れて自害したり……。それに……あの小僧の寿命……明らかに少ないではないか。気を会得した者は大抵100を超えても生きているのだぞ。父上は病で早死にしたが、小僧は違うだろう?』

『……ああ、以前なら100以上は生きる筈だった。しかし今は……残った寿命は約70程か』

『……83歳が寿命か。……歴代最強の力。しかしそれは自身の寿命を犠牲にする程危険なもの……。か。しっかりと鍛えておけ。これ以上力を使わせたら取り返しがつかんぞ』

『分かっておる。なんとか寿命を戻せないか調べておる所だ。そっちの家の文献も今度持ってきて』

『チツ……しようがない。小僧には満月を娶って貰わんといかんしな』

『滯仁……まだ諦めんか……』

『当たり前だろう！どれ、そろそろ帰るか。ではな』

……あの寿命の減り方は異常だ。少なくとも30年近くの寿命が無くなっておった。  
……そしてアヤツはドイツで戦った相手の組織を倒そうとしておる……。

「……少し、鍛え方を変えるか」

これ以上は力を使わせたらいかん。アヤツの親に合わせる顔が無い。下手したら親より先に死ぬかもしれないからな。……蓮仁よ

……気付いておるのだろうか？寿命が減っている事を……。

もう、もう誰かを失うのは御免だ。ましてや死んだ息子と同じ名前の弟子だぞ！絶対に死なせてたまるかッ！たとえ鬼と言われようとその力を使わずに済むように鍛えてやろうッ！

「……だから……死ぬんじゃ無いぞ……馬鹿弟子」

## 原作前第33話 帰ってきた蓮仁

S i d e 蓮仁

夏の日差しが熱すぎる8月……。蝉の鳴き声が響き渡る山の中で俺は師匠と向き合っていた。

「師匠……。長い間お世話になりました、お陰で更に強くなることができました。本当に……本当にありがとうございます！」

俺はそう言って深く頭を下げる。そう、本日をもって長かったように短かった修行が終わったのだ。

「うむ、暫くは勉強などで忙しくなるのだろうか？落ち着くまでは暫く俺のそこには来なくていい」

「はい！（つしやオラアン！やつと地獄から開放されたぜヤツホイ！マジで死にかけたからな本当にやったぜベイビー！）」

「……なんだか嬉しそうだのお？」

「え」…気の所為ですよ…アハハ！」

…あ、あはは…あつぶね。危うくさらなる地獄を味わうところだったぜ…。

………改めて振り返るとあんな地獄の日々すらも懐かしい。本当に色々あった…。

師匠の兄の滯仁さんとその孫の満月と戦ってからというもの、師匠の修行は更にパワーアップしてマジで死にかけた。あれは俺じゃなかったら確実に死んでたわ。それとこの時雨山の更に奥地へと足を踏み入れ魍魎魍魎溢れる……いや、全部動物だったけど……ゴリラみたいな体格のリーダー率いる武器を使う猿軍団と戦ったり（ONE P I E C E のヒューマンドリルかよッ!）、二メートル超えの巨大鹿率いる鹿軍団にロデオしたり（もののけ姫のシシガミ様かよッ!）、めちゃくちゃデカイ狸率いる狸軍団に化かされたり（化け狸かよッ!）、世界最大級の鳥並みにデカイ鴉率いる鳥軍団を掴まえ空を飛んだり（楽しかった（小並感））、別の山から縄張り争いの為に攻めてきた熊軍団と全面戦争したり（熊の癖に群れるなよッ!） e t c . e t c . …

結果、そんな化物達を全て倒し配下にした（なんでこうなった?）。そして名実共にこの山の王へと君臨した（本当になんでこうなった!?!）

いやそもそも生態系おかしいだろ!?!明らかに普通のじゃない生物しかないじゃん



！一番マトモなクマさんが実は最強だったけどさ、俺と昔戦った時はまったく本気じゃなかったのか…（白目）

……まあ、それは置いといて…。山の化物共と戦ったり、師匠と殺し合い一步手前の戦い（一方的に殺されかけただけ）をしたお陰でかなり成長した。具体的に言うとなんて下手で落ちたとしても気にせず戦えるようになった。何なら手足を掴まれた瞬間に自分で切り落とす事にも躊躇わなくなった。

今の俺なら片脚でも縮地できるぜ！へへへ！……あれ？おかしいな、目から水が……。

……正直言っただけかなりヤバイ。主に精神的に…。時々あの日の悪夢を見たりして胸の傷が幻痛を起こしたりして精神的にまいったりした…。そんな精神ダメージを何とかする為身に付けた新技！その名も「明鏡止水」！技と言っても只々 心を無にするだけなんだけどな。明鏡止水って唱えて心を無にして精神的なダメージを防げるんだ！やったね！この技のお陰で今日までメンタルブレイクしないで頑張ってたんだ！……俺よくあの地獄を耐え抜いたな…（白目）

……まあ、こうして地獄の修行や縄張り争いをしまくって更に強くなった。そしてたまたま山中。久しぶりに我が家に帰れるぜ。

そしてここで紹介しよう。俺の新たな仲間を！

「わふわふ！」

そう！この仔犬だ！

コイツは俺が修行中に産まれたシフの子供達の内の一匹。シフ譲りの灰色の毛並みの雄♂です。

— それで何故この一匹だけ俺と一緒にいるかと言うとシフ達に鍛えてほしいと頼まれ……はい、嘘です。余りに可愛かったからシフ達に頼み込んで譲り受けました。それはもう本当に頼みまくった。俺の必殺技「錐揉み回転ジャンピングスライディング土下寝」で頼みまくった。だってカワイイんだもんしょうがないよ！こんなに小さなモフモフの身体で足元に来て上目遣いで見られたらハート撃ち抜かれちゃうよッ！この子はもう家の子ですッ！

ん？親の許可？ダイジョーブダイジョーブ！母さんケモナーだから余裕で許可貰えるって。因みに俺もケモナー。母さん譲りのケモナー！

……さて、名前付けよつか。前は黒丸拾った時、みんなで考えたけど俺が今のうちに決めちゃおう！母さんのネーミングセンス皆無どころか壊滅的だからな。ふむ……よしカツコイイ名前が良いな。うくん……。ヨシッ！

「お前の名前は今日からヴォルフだ！」

「ワフワフー！」

ヨシッ！気に入ったみたいだ！やったぜ！

そして俺はヴォルフを抱っこしながら時雨山を下山するのだった…。

はい、下山しました。今は街中を歩いてるんだけどすつごく見られてる。どうやらヴォルフの可愛さにみんな釘付けのようだな。

さてさて…まだ午前中だし家に帰る前にダイシー・カフェにでも寄って顔出しと昼食でも済ませるかな。

「あの～すいません。ちょっとよろしいですか？」

「…？………ッ!!？」

声を掛けられて振り返ると警察官がいました。

アイエエ！警察!?警察ナンデ!?

「お兄さんその格好とコレ…何かな?？」

「……oh」

今気付いたけど、俺の格好って着物じゃん。しかもお腰に刀挿してた。……あかーん

「やっでもうた！おもいつきし銃刀法違反やないかい！（唐突な関西弁）  
「あく…日本語分らないかな？ナイストゥーミーチュー？」」

「ツ!?こ、この警官、俺の事外国人だと思ってる…!?はっ！確かに今の俺は高身長に日  
焼けた褐色肌、更にストレスで脱色した白髪頭！あんまり日本人には見えない！」

「ならば！このまま演じてやろう…！日本語の分からない外国人をツツ！見せてやる  
ぜ俺の英語力！（テスト平均約80点）」

「What, s happen?」

「あちや…英語かあ…。どうしようか…?えくと、日本語話せます?スピークジャパ  
ニーズ」

「I can not speak japanese」

「あく…やつぱり駄目か…。仕方がない、なんとか頑張るか！」

「いや、頑張るのかよ。スマホで翻訳でもしろよ文明の利器使えよ。あ、いや…使われ  
たら俺が困るからやつぱり使わなくていいッス。」

「その日本刀はなんですか?」

「Do you mean this?」

「そう、それそれ」

「I love japanese samurai!」

「あーね、侍好きなのね。でもね？それ危ないから、デンジャラスだから。そもそも銃刀法違反だからね？」

デンジャラスね、はいはい。デンジャラスゾンビ（唐突）

「OK OK」

「いや、全然オーケーじゃ無い……って消えたツ!？」

「This is a magic trick!」

種も仕掛けもあります！只々拡張領域にしまっただけ……あれ？コレがあればマジシャンになれるのでは……？まあ、興味無いけど！よし、逃げよう！

「Goodbye forever!」ε≡≡へ（・D・）ノ

「えっ？あつちよ!？ちよ、待てよ!？」

待てと言われて待つ訳無いんだよなあ。

そのままヴォルフを抱えたまま全力疾走で逃げました。めでたしめでたし♪

……うん、服買いに行こ。

Side蓮仁Sideout

## Side 一夏

夏休みに入つて暫くたった今日此頃、日差しが強くジリジリと肌を焼く暑さの中でも俺は庭にでて重り付木刀で素振りをしていた。

東さんに鍛えてほしいと頼んでからというもの、毎日ボコボコに殴られまくつていた。来る日も来る日も殴られ殴られ殴られ、躲した瞬間に殴られ、防いだ筈なのに殴られ……にかく殴られまくつた。素手や木刀、酷い時はメリケンサックで殴られた。それはもう顔が酷い状態だったらしい。鈴が俺の顔見て絶叫したからな。怖くて鏡を見れなかつたぜ……。

そして東さんが途中から連れてきた新しい師匠だけ……うん、人じゃなかつた。何なら生物ですらなかつた……。だつてアレは完全に……うん。

それは置いといて……。もうすぐ蓮が帰つてくる。あれから修行して前よりは強くなつたと思う。だけど蓮は俺以上にもつともつと強くなつてはるはずだ！だから一日だつて休んでいる暇なんて無い！蓮に追い付く為に！

「フッ！ハッ！セイッ！」

「相変わらずこんな暑い中頑張るわねえ」

素振りを止めて声の方を振り返ると鈴がいた。

「…！鈴か、また来たのか？」

「何よ、アタシが来たら悪いわけ？」

「…」最近は毎日家に…いや、家の隣の蓮の家の様子見に来ている。もうすぐ帰ってくるからソワソワしている。

「蓮が帰ったら連絡するから家にいれば良いのに…。態々こんな暑い中毎日確認しに来なくても良いだろ？」

「別にいいでしょ！それにアンタは放つといたら水分補給もしないです！つと素振りしてるでしょ！ほら、スポドリよ。ちゃんと常温にしてあるから感謝しなさいよ！」

「サンキュー…つて危なッ!? 投げつけて来るなよなッ!?」

野球部並みのスピードで投げられたスポドリをキャッチして飲んでいるとまた誰かが来たようだ。

「オッス！一夏に鈴」

「二人共おはよう」

「なんだあんた達か…」

「酷えな鈴…。いくら愛しの蓮仁じゃ無いからッヘブラバアツ!?!」

「それ以上言ったらぶん殴るわよ!?!」

「だ、弾!?!」

「既に殴ってるよ!?!」

弾の顔面に直撃した鈴の右ストレート。クリティカルヒットしたその一撃に弾は白目を剥いて気絶した。

「フン！中国3000年の歴史を舐めるんじゃないわよ！」

「いやいやいや！中国3000年の歴史関係ないよね!?!ただの右ストレートだよね!?!」

「……数馬は左ストレートが良いのかしらあ……?」

「ヒエツ…ゴメンナサイ…」

あれえ…?おかしいな…。弾と数馬もあれ番外編からしつかり鍛えてるのに鈴にまったく勝ててないぞ?中国3000年の歴史…未恐ろしい…!

……なんだかんだでこうやって様子見に来るし、やっぱりみんなも早く蓮にあいたいんだろうな。クラスのみんなだつてそうだ。最初は蓮が居なくてクラスの雰囲気がいぶ暗かつたからな。今はそんなことないけどやっぱり蓮が居ないと物足りなさを感じてるみたいだ。



「早く帰ってこないかなあ…」

「…そうね」

「もうすぐかあ…今日かな？明日かな？」

「さあなあ…とりあえず散々心配掛けたんだし、一発くらい殴らないとな」

「それは嫌だなあ…。…まあ弾の拳なんて俺には当たらないだろうけど」

「それもそうか…」

「まだ僕や弾じや掠る事すらできないよ」

「一夏なら当てられるんじゃないかしら？毎日修行してたし」

「おつ、そうなのか一夏？」

「ああ、だけどやっぱり蓮には勝てないかなあ」

「鍛えてますから！」

「お、響鬼か？」

「正解！流石は一夏！分かってる〜！そんな貴方には【爆裂真紅の型】を御見舞いするぜ  
！」

「止☆め☆ろ！」

「「「ははははははっ！」「」」」

あはは、蓮なら本気で爆裂真紅の型とかやりそうだなあ…。

……ん？

………

「「イヤちよつと待てえええええッ!!?」」

「ん？なんだ？」

い っ の 間 に か 蓮 が 混 ぎ っ て た !

「おま…!?……え？れ、蓮…？」

「そうだけど？」

蓮の姿を見て固まった俺達は悪くない。だって……

何故かFateのアーチャーエミヤのコスプレしてたからッ!?

「いやなんで!？」

「いや……ちよつと色々あつて警察に職質されてさ……。変装の為に入った服屋が実はコスチュームショップだったんだ…！そこで俺は…クツ…！服を剥がれッ！採寸されッ！髪を切られッ！メイクさせられてッ！カラコンも入れられてッ！着替えさせられてッ！写真を撮られまくったんだよッ!!いくら白髪で褐色の高身長だからっていきな



かった。だからこうして元気な姿を見れた事に安心した。

「……なあ、蓮」

「ん？なんだ？」

ずっと前から考えていた。俺は蓮の…蓮仁の事をちゃんと分かっているんじゃないんじやないかって。日常生活じゃない、戦いの中の蓮仁を。

だから……

「俺と……戦ってくれ」

本当の意味で蓮と分かり合う為に、蓮に追い付く為に、自身の未熟差を知る為に、俺は蓮に挑む。

Side一夏Sideout

S i d e 蓮仁

「俺と……戦ってくれ」

「……………」

なんかいきなり一夏に戦いを申し込まれた件について。

え？なんで？いきなり過ぎじゃない？いきなりステーキよりいきなり過ぎない？（意味不）イキ（ナリ）スギイ！

「頼む……この通りだ……………」

そう言って頭を下げる一夏。……なんで戦いを挑むのか、なんでこんなにも真剣なのか、理由は分からない。それでも……やはり無下にはできない。

鈴に弾、数馬も事前に聞かされていたのか驚く様子はなく、事の成り行きを見守っている。

「……………分かった。ここじゃ人目につくし移動するぞ」

「ッ！ありがとう……！」

「さて……場所だけど、やっぱりあの場所が良いな。俺達の剣の始まりの場所……」  
そうして俺達は移動し始めた。篠ノ之道場へと。

### Side 蓮仁Side out

### No Side

暫くして篠ノ之道場へとたどり着いた蓮仁達。箒達が篠ノ之神社を出ていった後、箒の叔母さんの雪子が管理をしている。道場は今でも時々ではあるがかつての門下生が使用したりしている。

そんな道場に蓮仁と一夏は向かい合わせになっていた。突然尋ねてきた蓮仁達を雪子は快く迎え入れてくれたうえに道場まで使わせてくれた。

蓮仁はエミヤコスから師匠・厳仁に貰った着物へと着替えて竹刀を持つ。防具は邪魔になるので付けない。一方の一夏も服を剣道着に着替えていた。そして同様の理由で

防具を付けていない。

ルールは至ってシンプル。

1. 竹刀以外の攻撃（殴る蹴る）も有り
2. どちらかが棄権するか続行不可能になるまで戦う
3. 重症を負わせない（重症を負わせた場合は即敗北）
4. 道場の物を壊さない（壊したら即敗北）

後半2つは雪子が付け足しました。まあしようがないというか当然というか……。

そして二人は構える。互いからヒシヒシと伝わってくる闘気。最後にドイツであった時とは比べ物にならない程に強くなったのが構えただけで伝わり二人は冷や汗を流す。

当然戦えば蓮仁が勝つ。そこは間違い無い。これは油断でも慢心でも無い。しかし、しかしだ：蓮仁は一夏の才能が恐ろしくて仕方がない。確かに蓮仁も才能があった方だ。でも一夏はそれ以上の才能を持っていた。幼少期はほぼ互角の強さ。もし蓮仁が敵仁と出会わずに成長していたら間違い無く一夏に手も足も出なかつただろう。

いや、それ以上に敵仁に出会った時に一夏もいたら、もしくは蓮仁ではなく一夏が弟子になつていたら……。考えるだけで恐ろしい。蓮仁は運が良かった。そして血反吐

を吐くほど努力した。そのお陰で今の強さがある。

…改めて一夏の強さの異常差を思い知らされる。この数ヶ月毎日死にかけるような修行をさした。それに対して一夏は蓮仁程の濃密な修行をしていない。しかも学校もあつた筈。それなのに……既に人外とまでは行かずとも、それに近い程の強さを有していた。

(……本当に未恐ろしい奴だよお前は……)

(…ツクー！蓮の奴…普通に構えてるだけなのにまったく隙が無い…！それに肌がピリつくようなこの感覚ツ！強さの次元が違い過ぎるツツ!!蓮の強さはもう千冬姉や束さんレベル……いや、ひよつとしたらそれ以上に…)

「一夏」

「ツ?!な、なんだ!?!」

「お前がどうしていきなり勝負を選んだのかは知らない。だけど……目を見れば分かる。どれだけ本気で挑んでいるのか。……だから、俺もお前の想いに本気で答えよう」

「ツツ!!?(威圧感が増したツ?!)」

「吞まれるなよ?行くぞツツ!」

「掛かってこいッ!!」



一夏の想いに答える為に全力を出すと云った蓮仁。しかしそれは通常状態での全力だ。身体強化などしない純粹な素の身体能力。もし、本当の意味で全力を出した場合、1秒と掛からずに一夏は戦闘不能&重症になるだろう。

そしてその素の身体能力をフル活用した縮地で勢いを付けた突きを腹に向かって繰り出す。しかし一夏はコレを身体を捻り躲す。

突然の攻撃に考えるより先に身体が動いたのだろう。一夏自身も避けたことに驚いていた、しかしそれも一瞬だけであり、直ぐに竹刀での反撃を繰り出す。

しかしそれを事前に竹刀で押さえつけて攻撃を出させない。竹刀を封じられた一夏。すると驚いたことに竹刀を即座に離して正拳突きを繰り出してきた。

蓮仁も竹刀を手放し、正拳突きを躲して伸びきつと腕を掴んで背負い投げに移行。コレを一夏は投げられる瞬間に竹刀を掴んで空中に浮いた瞬間に背中に斬りかかる。

それを察知し即座に腕を離れた蓮仁はステップでこれを回避。同士に竹刀を回収した。そして一夏が着地する隙を狙い回し蹴りを放つ。

着地した一夏は前方に転がり回し蹴りを回避。片脚立ち状態の脚に蹴りを放つ。

しかしそれも空振りに終わった。即座に空中に飛び跳ねた蓮仁は竹刀を頭に向かつて振り下ろした。ギリギリのところで一夏が竹刀で攻撃を受け流して距離を取った。

余りの戦いに観戦していた4人は絶句していた。もはや目で追うのがやつとな攻防に。

「な、なんだよあれ……二人とも人間技じゃねえ……」

「なんで空中から、しかも不安定な体勢からあんなに鋭い攻撃が出来るんだろう……」

「あ……アタシ、今のだけでまもうお腹いっぱいよ……。これ以上はもう色々ヤバいわ……」

「あらあら……二人とも強くなり過ぎねえ……」

一夏と相対する蓮仁。外野が呆然としているがそんなことより一夏の実力に驚いていた。正直、初撃で倒すつもりで攻撃を放った。まさか避けて更に反撃までするとは思わなかった。

無意識に口角が上がっていた。そしてそれは一夏も同じだった。

「そういえば……こうしてちゃんと戦うのってかなり久しぶりだな。正直かなり驚いたぜ」

「一夏」

「まあな。俺も正直、今自分が立っている事に驚いてるよ。初撃から危なかったからな……」

よく見ると一夏の息が少し上がっている、ら蓮仁はまったく余裕だが一夏は今の攻防で少なからず消耗したらしい。これは経験の差だろう。丸一日全力疾走&死合を師匠

と繰り広げる蓮仁のスタミナは伊達じゃない。

「さて…続きといこうか。【荊】 ツ！」

「ツツ…後ろツ！」

（残念！後ろと見せかけた『上かツ!!』ファツ!!）

一瞬で地面を複数回蹴る高速移動技の【荊】を使い攻撃を仕掛ける蓮仁。後ろから攻撃が来ると思わせる為に態と殺気を一瞬だけ一夏の後ろから放った。そして真上に飛び上がり攻撃を仕掛けたのに攻撃を読まれた。

そして一夏が動く。

「飛天御剣流ツ！」

「ツ!?!」

「龍翔閃ツツ！」

空中に浮いた蓮仁に向かって放たれた一撃。左手で竹刀を持ち、右手で竹刀の峰を支え、下から飛び上がり竹刀の腹で切り上げる技……《飛天御剣流・龍翔閃》が蓮仁の腹部に炸裂する。

（当たったツツ！）

自身の攻撃が入った事を確信した一夏。しかし、当たったにも関わらず余りに軽い、否…軽過ぎる。下から上への攻撃故に振り上げる際に相手の体重が掛かる筈なのに余

りに軽過ぎて竹刀をそのまま振り切ってしまった。

そして更に空中に飛ばされた蓮仁は天井にぶつかる瞬間に身体を捻って体制を整えて天井に着地、そのまま天井にぶら下がる。

「一夏お前……いつの間に飛天御剣流なんか覚えたんだよ……。流石にヒヤッてしたぞ……」

「え？ いやいや……それより攻撃当たったよな？」

「当たった瞬間に空気を蹴って上に飛び跳ねた」

「……意味不明い……」

攻撃の当たった瞬間に空気を蹴り上に跳ぶ……。そう、以前敵仁の兄 藩仁と戦った際に見た技……【荊】同様、六式の一つ【月歩】をマスターしたのだ。

「さあ……一気に行くぞッ！ 【月歩】ッ！」

天井から飛び降りると空中を蹴りながら一夏に迫る。予想し辛い動きに翻弄されながらも攻撃を見極めようとする。

「ッ」

「チッ、防いだか！」

攻撃をなんとか防いだ一夏。しかしそこから攻めに転ずる事ができない。動きに強

弱を付けて翻弄、更に空中まで管制した三次元的な動きへの対処に精一杯である。しかし蓮仁はそんな一夏に下を巻いていた。初見の動きをここまで見切るなんて思ってもいなかった。

そして一度距離を離す。そこをチャンスと見た一夏が特攻を仕掛けようとした次の瞬間、直ぐに屈んだ。そして屈んだ直ぐ真上を何かが高速で通り過ぎる。

「し、竹刀!？」

そう、蓮仁は竹刀を投げつけたのだ。それはもうすごい速さで。そして若干掠った後頭部の髪の毛を気にしながらも丸腰となっている相手に攻撃を仕掛ける。

瞬間顔面を襲う衝撃に一夏はノックバックする。衝撃は大した事は無いが何が起こったのか理解できない。一夏と蓮仁の距離は約4メートル、そして拳を振り抜いた体勢の蓮仁……。そして一夏は何をされたのか理解した。

(まさか……!拳を振り抜いて衝撃波を放ったのか!?)

まさかの衝撃波。未強化の今は精々ゴムボールが当たった程度の威力だが、そもそも未強化状態で普通に衝撃波を起こすのが頭おかしい。もう脳筋ですね。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッ!」

「ぐっ!がっ!?!ぐおっ!?!」

そして連続で放たれる衝撃波。一夏はそれをまともに受け続けてしまう。しかし威力はそこまででは無い。ならばと一気に距離を詰めようと脚に力を込めて跳ぶ。

竹刀を水平に構えて突きを放った一夏。その一撃が身体に当たる瞬間、蓮仁は身体を回転させる事で攻撃を回避し、更に遠心力の乗った裏拳を叩き込んだ。

危険を察知し直ぐに頭を下げる一夏。しかし…

「ツ!?…ぐう…! (避けきれなかった…!)」

完全回避に失敗した。そして顎に受けた衝撃で脳が揺れてしまい上手く力が入らない。この隙を逃す筈も無く、止めを刺そうと掌打を打ち込もうとした。

しかし

突如として危険を察知し身体が一夏から離れた。考えるより先に身体が動いたのだ。そして直ぐ目の前を通り過ぎる竹刀。一瞬でも遅れていたら顔面に直撃していただろう。決定打にはならずとも多少の隙が出来てしまう。

(何が起った!?)

突然動きが変わった。ノウ揺れて上手く力が入らない状態。普通ならばまともに戦える筈が無い。しかし一夏は力が入らない事で無駄に込められていた力が抜け、自然体

で竹刀を振り抜いた。その一撃は力こそ普通だが技のキレと速さが格段に上がった。

### 正しく主人公補正

しかし一夏も流石に脳へのダメージで限界が近い。次の一撃で決めるそさか無い。そして抜刀術の体勢に入る。

それに対して蓮仁もいつの間にか回収していた竹刀を同じく抜刀術の体勢で構えた。次の攻撃で勝敗が決するのを彼も感じていた。

因みにだが、束の修行により飛天御剣流を身に付けた一夏ではあるがまだまだ実用段階では無く、基礎は出来ているが派生技と九頭龍閃、天翔龍閃を使う事はできない。そして他の抜刀術の双龍閃も竹刀一本では使えない。しかし、純粋な剣技で果たして蓮仁に勝てるのか？

(いやー勝てる勝てないじゃない！ここで俺の全力を出すッ！)

そして同時に抜刀された竹刀がぶつかり合い……………。

一夏の竹刀が切断された。

「……………」

破壊されたとか、砕かれたとか、そんなものではない。綺麗にスッパリ切断されていた。これには一夏も外野も啞然。

「悪いな一夏。これが今の俺の実力だ……。さあ、トドメだ！」

そう言つて竹刀を振りかぶる蓮仁。一夏は何とか防ごうと腕を交差させた。  
しかし

「そ、そこまで！」

「!?!」

雪子の声に反応し二人は動きを止めた。

「試合終了！勝者……………」

織斑一夏！



.....

「あ？」

声が被る蓮仁と一夏。

「あ？」

声が被る鈴と弾と数馬。

「「「「なんでツツ!?!」」」」

そして全員の声が被るのだった……。

## Side蓮仁

なんか一夏に負けたでござる。え？なんで？俺勝つてたよね？

「ま、待つて下さいッ！なんで俺の勝ちなんでするかッ!?勝つてたのは蓮の方ですよッ!」  
俺以上に困惑している一夏がそう言つて他の3人も同調する。

「待つて待つて。ルールは覚えてる?」

「え……?確か、竹刀以外の攻撃も有り。棄権するか続行不可能まで戦う。重症を負わせない。道場の物を壊さな……あつ」

え?何今の『……あつ』つて?

「この竹刀……道場から借りたやつだった」

「……………あ?」

絵?それ一夏が持参した竹刀じゃ無いの…?

道場から借りた竹刀↓竹刀は道場の備品↓竹刀は道場の物↓竹刀破壊↓第4ルール  
適用↓俺☆敗☆北

「……………」

「…これ、蓮…?」

「(。▽。) ワヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ」

「れ、蓮…!?!」

勝負に勝って試合に負けたぜっ! ハッハア! 笑わずにいられないぜえ! (泣)

「チクシヨウツ! 俺帰るツツ!」

ガシッ!

「竹刀弁償しなさい♡」にこっ

「ヒエツ……ここ、コレをどうぞ……」

「うむ、よろしい。では解散!」

こうしてなんとも言えない結果で俺達の戦いは幕を閉じた。

帰り道、勝ったけど釈然としない一夏とまさかの備品破壊で敗北して落ち込む俺を鈴達がフォローしていた。

「む…納得いかない…」

「修行の成果が仇となるとは……トホホ…」

「ほら! いつまでそうやってんのよ! 男ならシャキッとしなさい!」

「そうだぜ！二人共はつきり言つて人間離れしたスゲー戦いだつたぜ！……正直引いたけど」

「ちよつ!?なんでそんなこというのさ弾!?ほら！二人が更に面倒くさ……ゲフンゲフン。落ち込んだじゃったじゃないか！」

（（（コイツ……今サラツと面倒くさいって言おうとした……!?）））

何気に一番酷えのが数馬だつたんだが……。コイツこんなに腹黒い奴だつたっけ？

「まあ落ち込んだでも仕方がないか。よし！帰って飯食おう！」

「あ、アタシが連絡しといたから今晚はバーベキューよ！」

「イエー！夜は焼肉っしょ！」

「イエー！」

「ヒュー！」

「君は最高のオカンだあ！」（檀黎斗 風）

「おうコラ、最後の奴話五反田舞があるからちよつと来なさい」

ゴゴゴゴ

………さて！帰るか！

「アアアアアアアアアアツ!!」

汚え悲鳴だぜ!

そして（1名を除いて）無事帰宅した俺達を待っていたのは庭でバーベキューの用意をしていた母さんと、ヴォルフに襲われ……戯れてる親父だった。

「あら! やつと帰って来たわね! お帰りなさい馬鹿息子!」

「ただいま母さん!」

「おうお帰り! ……それとちよつと助けてイダダダダダダダダダダダツツ!!」

「バウバウ! ガルルルルルツツ!!」

……うん! 楽しそうに戯れてるな! (目反らし)

なんか喚いてるけど聞こえない聞こえない!

「ンナ〜」

「おお! 黒丸〜! 久しぶりだな〜! 元気そうで良かったあ!」

「ゴロゴロ♪」

「ちよつ…助け…」

「ガールルルルルルツツ!!」

「ンアーツ!?!」

…あはは！…本当に楽しそうだなあ〜！（目反らし）

「な、何この子!?!かわいいッ！」

「あ」

かわいいと言ってヴォルフを抱き上げる鈴。オイオイ大丈夫かあ？親父をズタボロにしていた犬をよくもまあ抱き上げる事できるなあ…。

「わふ…？わふわふ！」ペロペロ

「あははッ！くすぐったいわね〜！」

「……はは。この俺と鈴ちゃんとの扱いの差よ…」（泣）

……ちよつと可哀想になつてきた…。親父は緋龍家のヒエラルキー最下層なのか…。

大黒柱、しつかりして下さいよ…。

「俺も撫でさせてくれよ」

「わふ♪」

一夏に撫でられて気持ち良さそうにする。

「僕も」

「わふ♪」

数馬に撫でられて気持ち良さそうにする。

「んじゃ俺も！」

「ガルルルルルツツ!!」

「なんで!？」

弾に撫でられそうになって牙を剥き出しで唸る。ふ…お前もか弾よ…。あ、なんか親父と一緒に拗ねちゃった。まあ面倒くさいから放つところ。

そして肉や野菜が焼き上がり、それぞれ飲み物を持って乾杯し…え？俺が乾杯の音頭を？あく、はいはい分かりましたよ！

「え、それでは！俺の帰還と新しい家族ヴォルフを歓迎して…歓迎！」  
『乾杯!』

そこからは飲んで食つての楽しい時間を過ごした。そしてある程度経つ頃に一夏が俺の隣に腰を下ろす。

「こうやってみんなで食事するのも久しぶりだよな」

「そうだな……。またみんなとバカ騒ぎできて楽しいな」

「……なあ蓮、ドイツでの事なんだけどさ……。千冬姉と電話してたの聞いてたんだ、俺」

「……ッ！……どこまで……聞いた……？」

「俺を庇って捕まって重症を負ったって……」

「……どうやらI Sを相手にした事や人を……殺した事は聞いてないようだ。千冬さんはあんまり喋らなさそうだから、多分束さんが話したんだろうな……」

「その……俺を庇ったせいで蓮が死にかけて……だからずつと謝りたかった。俺が謝ったところで何にもならないだろうけど……本当に……『一夏』ッ」

「俺は俺がやりたくてそうしたんだ。俺の身体が弱かったから死にかけて。俺の心が弱かったから挫けそうになった。だからお前のせいじゃ無い。全部俺の自己責任だ」

「……ッ！それでも！」

「そんなに抱え込むなよ。あの事があつたから色々気付けたし、新しい出会いもあつたんだ。悪い事ばかりじゃない。……それでも自分が許せないなら強くなれ。あらゆ



る理不尽を自分の力でぶっ飛ばして周りの人を助けられるくらい強くなれ！それで、今度は一夏が俺を助けてくれればいい。謝ったら許さないからな？分かったか！」

「…ッ！ああ！必ず強くなつていつか蓮と肩を並べてみせる！だから先に行つてろ！待つ必要なんて無いからな！必ずその強さに追い付く！いや、追い抜く！」

「ハッ！やつてみる！そう簡単には追い付かせないからな！」

そう言つて互いに拳をぶつけあう。お前ならきつと出来るさ一夏。なんとたつて俺の親友なんだからな。

お前なら……いつか必ず。

そうして新たな目標を胸に、日常へと戻っていく。

しかし、こんな日常がある日終わりを告げて俺と一夏は非日常へと飛び込む事になる。なんてこの時は思いもしなかった。

中学卒業まで残り約1年と半年…。

# 原作前第34話 鈴の従姉妹!?!台湾より来襲!

前回のあらすじ!

修行を終えた蓮仁!

家に帰ると一夏に戦いを挑まれた!?

篠ノ之道場にて戦う二人!

最後はまさかの備品破壊で蓮仁敗北!

そして一夏は新たな目標を胸に、蓮仁はそんな一夏に負けられないように日常へと戻って  
いくのだった……。

緋龍 蓮仁の朝は早い。

日の上がり始める刻から寢床から起きては猿叫をあげ毎朝30000本の基礎時雨流カラテの素振りをするのだ。

「キエエエ!!」(小声)

練習台にされるカラテ木材は異様な曲がり様を見せており、時雨流の基礎体術がいかに高いか物語っている。

それが終わり次第 愛刀【緋徹】を持ち基礎時雨流剣術の素振りをする。

その後は一夏も合流して走り込み・筋トレ・瞑想をし、最後に感謝の正拳突き(音を置き去り)を1000回行う。それが終われば汗を流して朝食の準備をする。この頃になると起きてきた母と一夏との3人で手早く作る。

朝食が済めば今度は一夏メイン修業だ。さらなる高みを目指すべく師事してきた一夏を蓮仁は鍛えるのだ。

S d e 蓮仁

帰ってから3日目の今日。俺は庭にでて一夏と修行していた。……と言うよりは一夏に教えていた。

「違う！九頭龍閃は突進の勢いに乗せて神速の連撃を放つ技だ！一夏のは突進力も無いし剣速も遅すぎる！」

「くうっ……！」

「オラッ！もつと強く踏み込む！手に力が入り過ぎるから剣速が出ない！この間の力の抜けた感覚を思い出せ！」

「ぐはっ！ぐえっ!!」

「あの状態のしなやかな動き！神速一步手前の速度！それを引き出した上で更に力強く打ち込める様になれ！」

「へぶっ！あばっ!!?ぐえあっ!!」

「何座り込んでんだ！早く立て！」

「ぎやあああああああッ!!」

こんな感じでフルボッコにしながら実戦形式で九頭龍閃を教えている。この間の戦いではかなり良い動きだったのに今はなんかなあ……。一夏は昔から本番や、いざって

時に強かったからな。常にあのコンディションなら最高なんだが…。

「良いか?もう一度説明するぞ?」飛天御剣流・九頭龍閃「は正眼の構えから足を踏み出し、突進の勢いに乗せて神速の連撃を放つ技だ。壺いちの唐竹からたけににの袈裟けさ、参さんの右薙みぎなき、肆しの右切上みぎきりあげ、伍ごの逆風さかかぜ、陸ろくの左切上ひだりきりあげ、漆しちの左薙ひだりなき、捌はちの逆袈裟さかかげさ、玖くの刺突つき…これをめちやくちや速く打ち込まなければ技が成立しない。一夏が九頭龍閃の肆の右切上を放つ頃には俺の九頭龍閃は玖の刺突まで終わってるぞ!」

「うう…」

因みに偉そうに言ってるが師匠は俺が弍の袈裟を放つ頃には既に九頭龍閃を終わらせてる。マジでなんだあの人?俺の速度も普通に目で追えないくらいなのに、師匠が放つと何にも見えない。あの人一秒も経たない内に九頭龍閃放つんだよ?マジで何なんだ?もう人じゃ無いと思うんだ。

「ふうく…。少し息抜きでもするかあ。よし!るろ剣ゴツコしようぜ!お前剣心な!俺は鶉堂刃衛するから!」

「え、いきなり過ぎるだろお!」

そして俺は自身に暗示を掛ける……。

「我！不敗！也！ 我！無敵！也！ 我…最強なり！」

そう自己暗示を掛けた途端に力が漲る感覚。そして筋肉が膨張し身体が一回り大きくなる。

「ふう〜…よし！そんじやさつそく始め…」

「参りました！」（土下座）

「……え？」

「参りましたツ!!」（土下座）

……え？

何故か降参された…。まだ戦って無いのに…。

「それはヤバい！絶対ヤバい！下手したら死ぬ！だから勘弁して！」

「……………分かった」（ω・ω・ω）

「うぐつ…！（その顔は止める…！罪悪感が…ツ!）」

「何やってんのアンタ達は……。……いや待ちなさい本当に何やってんの!？」

「あ、鈴」

鈴がやってきた！そして何やってるってそりやあ、るろ剣ゴツコだろ。見たら分かる……分からないか。土下座する一夏と一回り体格のよくなった筋肉ムキムキの俺を見

ただけでるろ剣ゴツコだと分かったらスゲーよな。それはともかく、鈴のやつ俺が帰ってから毎日来てるんだよなあ。暇なのか?…他に遊ぶ人が居ないのか?…?あと距離近くない?

「ちよつとなによその哀れみの目は!」

「鈴…俺達ずつと友達だからな…!」

「え、嫌よずつと友達なんて」

※いつかは友達では無くて恋人関係になりたいの意味。

「……そつか」(・ω・)

※お前なんかとずつと友達な訳ねえだろ!中学卒業したら二度と会わねえよ!…という意味と捉える。

「!?!」

鈴とはずつと友達でいたかったのにまさか拒否されるとは…!俺何かしたかな?…?実は嫌われてたのか?…?あと距離近くない?さつきより近いんだが?

「待て待て!鈴は別に『お前なんかとずつと友達な訳ねえだろ!中学卒業したら二度と合わねえよ!』なんて意味で言った訳じゃ無いからな!」

「え…?そうなの…?あとナチュラルに俺の考え読まないでくれるか?」

とりあえず一夏に考え読まれたけどいつもの事だからスルーしておこう。鈴に視線





「いえ、なんでもありません…」ガタガタ

「…まあ、良いわ。今日は紹介したい人が居るの。出てきて良いわよ!」

するとひよつこりと誰かが出てきて……ん?んん!?え!?鈴!?いや、鈴のそっくりさん!?え!?

ま、まさか……生き別れの姉妹……?

「言つとくけど生き別れの姉妹じゃ無いから」

「鈴まで俺の考えを読むのか…」

なんだろうか、もう俺の知り合いはほぼ思考を読む事ができる奴しか居ないんだが? 怖いなく。何が怖いかつてそれに慣れた俺の感覚と、逆に俺がその人達の考えも読める事がだよ。

そんなことを考えていたり俺の方をじーっと見ているではないか。そんなに見つめんよ。照れちやうだろお?

「ふーん……。この人が鈴姉の好き『わあああああ!』モガガガガ!」

(あんた!絶対に言うんじゃ無いって家であれだけ言ったわよね!?) ヒソヒソ

(だって…鈴姉があんまりヘタレだから…。あと距離近くない?) ヒソヒソ

(悪かったわねヘタレで!) ヒソヒソ

「鈴はヘタレなのか？あとやっぱり距離近いよな」（超地獄耳）

「アンタは黙らっしやい！」

「（；；；；）」

「あくあ、泣かせちゃった」

「うっ……………、ゴメン……」

正座した筋肉ムキムキの男に謝る女子中学生の囃。実にシユールですなあ。あと俺の耳が良いのもあるけど鈴がゼロ距離でひそひそ話するのも悪いと思う。

「もう大丈夫だ。俺は緋龍 蓮仁。こんな凶体だけど鈴と同年だ。よろしく」

「あー！そういうえげまだ挨拶してなかった。アタシは風 乱音！台湾から来た鈴姉の従姉妹で歳は鈴姉の一つ下よ」

そう言つて握手した乱音。年上の相手でも敬語を使わないタイプらしい。見た目は鈴と瓜二つ。違いは髪の色と髪型がサイドテールなこと、そして何より違うのが鈴には無いものだ。……………何故ここまで差が出てしまったのだろうか……？

「……………その哀れみの目は何かしら……？」

「大丈夫……大丈夫だ鈴……！まだイケるって！やればできる！だから……………だから最後まで諦めないでくれ……………！」

「……………ちよつとこつちに來なさい」



「そ、そう…なのかな……?」

「ほら、ちゃんと挨拶しろよ一夏」

「お、織斑 一夏でしゅ……よろしく…」

「ふ、嵐 乱音です…よろしく…おねがいます……?」

ボロ雑巾状態の一夏に思わず敬語になるくらいドン引きしてるけどさ…これはアンタの従姉妹がやったんだぜ?

するとまた誰かがやってきた!……と言つても弾と数馬だけどな。コイツ等揃いも揃つてほぼ毎日遊びに来るじゃん。暇人かよ!?

「話しは聞いたぜ!俺は五反田 弾!黙つていればイケメンと名高い男だ!」

「それ自分で言つて悲しくないの…?あ、僕は御手洗 数馬。よろしくね」

「また濃い人が出てきた……。嵐 乱音よ。よろしく」

「あと鈴の距離感バグつてない?」

すいませんね。まともなのが数馬くらいなもんで。弾は馬鹿だから放つといて良いよ。多分。あとやつぱり距離感おかしいよなあ?

「それにしても…本当に鈴に似てるなあ。さしずめ鈴二号機つて感じか?」

「なっ…!?!」

あ、それはおそらく地雷だぞ弾!ほら見ろ、乱の顔がおつかない事に!マジでキレる

5秒前!略してMK5!

「弾!そんな風に言ったら駄目だよ!それじゃ鈴と同じだって言ってるようなものだよ?鈴と彼女は違うんだから2号とかは本当に駄目だよ」

「うっ…:そうだな数馬…。すまねえ!悪かったこの通りだ!」

「…:…:フン、今回は許すけど、もう二度と言わないでよ!」

あ…:良かった。弾のせいでヤバい事になる所だった…。ナイスだ数馬!流石はこのメンバー唯一の常識人!

「あ、あの…:さつきはありがとう…:」

「気にしないで。弾も悪気があつた訳では無いから」

「数馬さんって優しいのね!フツメンだけど!」

「ングフツ!」バタツ

「…:か、数馬!!」

「ちよつと乱!数馬はフツメンを気にしてんだからね!?そんなドストレートに言わないの!」

「ご、ごめんなさ〜い!」

「あ!?!待ちなさ〜い!!」

乱はそう言つて走り去つていき、鈴もそれを追い掛けて行つた。忙しい奴らだな。

そして家には満身創痍の一夏、精神的ダメージでダウンした数馬、馬鹿の弾が残った。

「何で俺だけ馬鹿なんだよ!!」

「ええい!どいつもこいつも人の心を読むんじゃぬわあいッ!!」

Side 蓮仁 Side out

Side 鈴音

まったく乱は!いったい何処に行ったのよ!!日本に来たばかりで右も左も分らないくせに!しかもしばらく見ないうちに生意気になってるし!しかも!何よあの胸は!アタシのよりデカいじゃないのよ!!許すまじ!いったいアンタとアタシの何が違っただって言うのよ!!

「だああああッ!!見つからないわね!!いったい何処に行ったの!!」

さつきから探してるのに全然見つからない!困ったわね…。今頃心細くて泣いてるんじゃ……。いや、泣いて無いわね。生意気になってるし。でも心配だから放つとけな

いし……。

「お〜い、鈴!」

「あ、蓮に一夏じゃない。ちょうど良かったわ。乱が見つからないのよ。探すの手伝ってくれない?」

「そんなことだろうとは思った。まあ久々に帰ってきたし、知り合いにも顔出しついでに探すの手伝うぜ!」

「ああ、もちろん俺も手伝うぜ!」

「そして俺は最強の助っ人を連れてきた……。行けヴォルフ!」

「ワフツ!」

「さあ!鈴と似た匂いを探すのだ!」

そう言つて蓮が連れ帰つてきた子犬のヴォルフをアタシに渡してくる。ああ〜!可愛いわね!モフモフしてるし匂い嗅いでるし!このまま連れ帰りたい!

「ワフツ!」

「分かったか?」

「……………ワフ?」

「……………」

……うん、絶対分かつて無いわね。でもそんな所が可愛くてしょうがないわ!!

「なあ、蓮の嗅覚も犬並みだろ？なら蓮が匂いを探するのが良いんじゃないか？」

「ほう？一夏は俺に女性の匂いを嗅ぐHE☆N☆TA☆Iになれと？そうかそうか、よほど俺を犯罪者にしたいらしいな貴様？」

「ヴェツ!?ま、待って待って！そんなつもりで言ったんじや…」

い、一夏はいきなり何を言い出すのよ!?そんな…蓮に匂いを嗅いで貰うなんて………うん！アリ寄りのアリね！変な性癖に目覚めないか不安だけどこのチャンスを逃す手は無いわ!!

「し、しようがないわね！四の五の言ってる暇なんて無いわ！さあ！嗅ぎなさい!!」

「何でだよツツ!!」

「ウツサイわね！つべこべ言わずに早くしなさいよ!?!」

「くっ……!分かったよ!ならば御手を拝借……!」

そう言つてアタシの手を掴む蓮。思わずドキツとしてしまったわ…。そして顔を近づけていき……は、はわわわ…これは傍から見たら手にキスしようとしてるみたいに見えるのでは…!?!ん”ん”ん” ツ!駄目よしつかりしなさい!これは乱を探す為にやっているのよ!確かに下心あるけど!何なら下心9割9分だけど!!

そんな事を考えていたら蓮が顔を上げた。そして直ぐに顔を背けた。

「……………ちよつと待てえい!今のチラツと見えた顔は何よツ!?!何でフレーメン反応起こ



してんのよッゴラアツツ?!?」

コイツ…! あろうことか乙女の匂いを嗅いでフレーメン反応を起こしやがったわ…! 何よその臭い靴の匂いを嗅いだ猫みたいな反応は!?

「だ、だつて鈴の手…: 香辛料の匂いがキツ過ぎて匂いだけで辛いんだよ…!」

「ちゃんと手洗ったのか…?」

「洗ったわよ!?! どんだけ嗅覚優れてんのよ!?!」

本当に犬並みの嗅覚してんの!?! 何なの!?! 炭治郎なの!?! もう凄いわよアンタ! 本当に人間か怪しくなつてきたくらいには凄いわよ!?!

「結論から言つて俺の鼻が駄目になつたので探すの無理ッス」

「よく考えたら乱スマホ持つてたわ」

「今までのくんだり要らないじゃんツツ!!?!」

しょうがないでしょ忘れてたんだからツツ!! それより早く連絡しないと!

pururururu♪

「あ! 乱!?! 今何処に居るん」

『あつ、もしもし鈴姉! 大変な事になつちやつた!』

「え…: ちよ、何かあつたの!?!」

『私! 今不良に絡まれてる!』

「……は？はあああああツツツ!!？」

いやなんで!？」

「アンタ何したのよ!？」

『ナンパされたから、一昨日来やがれって中指立ててやったの』

「何で喧嘩売ってんの!?バカなの!？」

『はあ!?バカじゃ無いし!バカって言った方がバカだから鈴姉の方がバカだしツ!!』

「ハアツ!?バカって言った方にバカって言った方がバカだからアンタがバカよツ!!」

『バカって言った方にバカって言った方にバカって言った方がバカだから鈴姉の方がバカだからツ!!』

「バカツツ」

「ええい!いい加減にしろ!何で喧嘩始めてんだよ!それいつまでも続くやつだろうが!?!ちよつと貸せ!もしもし、蓮仁だ!今どうしてるんだ!不良は!?!」

『えつと…』初めてだぜ…この俺にそんな態度をとった奴。おもしれー女』とか言つて来たから逃げただけけど、仲間呼んだみたいでどんどん人が増えてる』

「ヤベー奴やん(困惑)今何処らへんにいる!?!何か目印になるの無いか!?!」

『ハアツハアツ…。ええつと…何処かの公園にいるんだけど、とくに目印になるのは無いわね。あ、太極拳してるおじいちゃんおばあちゃんがいるわ!』

「太極拳してるおじいちゃんおばあちゃん? オツケー分かった! すぐ行くから隠れてろよー!」

『うん! 分かった!』

何で太極拳してるおじいちゃんおばあちゃんだけで分かったのかしら…? (困惑)

「蓮は前から公園でおじいちゃんおばあちゃんに太極拳を教えてたからな。多分その公園なんだと思う」

「そんな事してたの…?」(困惑)

「俺も時々参加してたからな。でもここからだど急いでも30分はかかるぞ? 俺はまだしも鈴じゃ蓮の速度に追い付くのは無理だろ」

30分!? いやあ真逆の場所探してたつて事!? それに2人に合わせるなんて確かに無理ね。身体能力人外な蓮と準人外な一夏になんてどうやっても追い付けないわ。だってアタシは普通の人だもん。逸般ピーポーなあんた等と違ってアタシは一般ピーポーだもん。

「だから俺が運ぶぜ」

すると逸般ピーポーな蓮がそう言った。え? 運ぶ? つ、つまりお姫様抱っこ!!?

「…な、訳無いわよね…」

普通に脇に抱えられました。乙女の純情を返せ(泣)

「鈴を抱えるのはわかるけど…何で俺も抱えるんだ…?」

そう、何故か一夏までもが抱えられていた。いや力強すぎない?

「いいか2人共。俺なら2人を抱えた状態で30分の道のりを5分でたどり着く事ができる」

「うん。……うん?」

「流石蓮だぜ!」

「いや待ておかしいでしょ。30分が何で5分になるのよ!?もう嫌な予感ビンビンするんですけどッ!」

「うん。素晴らしい予感だね。口を閉じて無いと舌噛むからな?——跳ぶぞ」

「鈴、諦めろ。俺は慣れた」

「アンタ経験者だったの!」※番外編にて経験済み

「行くぞ!3!2!1!0ッ!」

そうカウントをした瞬間に跳躍しあつという間に空高くにいた。絶句しながらも舌を噛まないように必死で口を閉じながら自由落下していく浮遊感に涙目になる。そして落下した先にある電信柱のてっぺんに着地すると同時に再び跳躍する。

時に屋根、時にビルの壁を走り、更には空中ジャンプをしながらあつという間に目的

地の公園に辿り着く。コイツ本当に人外の領域だわ…ッ!

地面に倒れ込みまともに動く事ができないアタシ。そしてなんとか自力で立ちながらも産まれたての小鹿のようにふるふるしている一夏。そして息切れも無く辺りを見回す蓮…。

するとある一点を見つめたまま訝しげな顔をする。

「誰か戦つてる…?」

「えっ」

アタシと一夏がその方向を見ると確かに複数人を相手に戦っている誰かがいた。

「…!あれは、乱と…:数馬か!」

えっ!?数馬!?

「自力で見つけたのか!蓮!加勢に行くぞ!」

「待て!」

加勢に行こうと走り出す一夏のまえに手をかざし止めた。

「ちよつと!何で止めるのよ!」

「見る。あの数馬の動きを…。一対多で有りながらも圧倒している」

「ほ、本当だ!すげえ!」

確かに数馬の動きを見ると常に一対一になるように立ち回りながら攻撃を受け流すように躲して足を掛け転ばせながら他の不良達を巻き込ませている。そして相手の力を利用して背負投している。

「小よく大を制する」

「え、何それ」

「合気道だ。合理的な身体の運用により、体力体格に関係無く投げ技や固め技により相手を傷付けずに相手を制する。体格の良く無い、相手を傷付けるのが苦手な数馬には打って付けな体術だ」

「この数ヶ月でかなり頑張ってたからな。俺と弾で相手してたんだ」

「それに合気をしっかり理解しているな。合気を理解出来ないは何年やっても上達しないらしいし。流石は俺たちの中で一番頭が良い数馬だ！」

「頭が良いの関係ある…？まあ良いけど…」

それにしてもなんか知らないけど体術とか武術に関してめちゃくちゃ詳しくない？合気を理解だの合理的な運用だの…。それにしても本当に強いわね数馬。

S i d e s i d e o u t

side 乱

さつきまで不良に追いかけて回されていたけど遂に捕まってしまった。このまま酷い事をされるんだ…。エロ同人みたいに…エロ同人みたいにッ!!

「冗談じゃないわよッ!こんな奴等にあんな事やこんな事されるなんて絶対に無理ッ!早く助けに来てッ!!」

「グへへ無駄無駄。俺たちはこの辺りじゃ有名な不良なんだぜ?ビビって誰も助けになんか来ねえよ!」

「ゆ、有名な不良!?!」

「そうさ!俺たちは【白虎隊】!この辺りに俺達に敵う奴なんぞいないんだよお!」

「え…白虎隊って日本の歴史に出てくるあの?」

「え?日本の歴史?……………不良だから分かんねえや」

「ええ…」(困惑)

不良だから分かんないって理由はどうかと思うんだけど…?ていうかそんな有名な

名前を不良集団が使ってるの……？元祖白虎隊に謝ってほしい。(辛辣)

「ふ、ふん！いくらアンタ達が有名な不良でもコッチには人外クラスのヤバイ強さの人が居るんだからね！」

「な、なんだと！人外クラスのヤバイ強い奴!?まさか、吉田沙〇里か!?」

「いやそれ霊長類最強女子イイイイツ!?」

その人多分まだ人外クラスじゃ無いよ!?人間クラスでなら最強かもだけど！

「なんだよ、吉田〇保里じゃないなら安心だな！」

「ヤバイ、この人バカだ……」

「あ”!?!バカって言った方がバカなんだぞコラツ!?!」

「このやり取りさつきまでしてたからもうやらなくていいよ！」

「このアマツ……！自分の立場が分かんねえみたいだなあ……?」

そう言つてコチラに手を伸ばす不良。アタシは恐怖により目を閉じてしまった。

しかし、いつまでも掴まれない事に疑問に思い目を開くと、アタシと不良の間にあのフツメ……じゃなくて数馬さんがいた。

「あ、あの……この娘僕の知り合いなので止めて貰えますか！」

「なんだ？ヒーロー気取りのフツメンは引っ込んでろツ！」



そうやって殴りかかる不良。殴られると思った瞬間、数馬さんは手を使い攻撃を受け流した。

「ぼ、暴力は止めて下さい!争うつもりはありません!あとフツメンって言うな!」

「……ハツハツハツ!攻撃を受け流すからとんでもない奴だと思ったが、ただの腰抜けのフツメンか!お前等!やれツ!」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「ツ!?アタシは良いから早く逃げて!このままじゃアンタまで酷い事されて……!フツメンがボコボコにされちゃう!」

「大丈夫」

彼は優しく語り掛けてくる。

「少し下がってて」

「でも……」

「大丈夫だから」

再びそう言ってコチラに顔を向けて……

「君の事は、僕が守るから」

「あっ……」

トウシツ……。そうアタシの胸の中で鳴り響く。

(フツメンって言われまくってキレそう…ッ)(怒)

※数馬さんは割りとキレてて好戦的になってます。

数馬さんは上着を脱捨てると不良達に向かって駆け出して行く。そうして多方面からの攻撃を受け流す。そして集団の中で常に一对一の状況になるように立ち回りの確に捌いていく。相手を背負投げしたり関節技で動きを封じたり、時には相手が同士討ちになるように攻撃を避けていた。

「す、凄い…」

正直あの男性4人の中でも彼は喧嘩なんかとは無縁の弱そうな人だと思った。ヒョロヒョロだし何処か気の抜けたような雰囲気。フツメン。

でも、でも今の彼はそんな雰囲気は無い。凛々しく、頭脳的な戦い方。そして相手になるべく傷付けないようにしている優しさ

。何より、アタシを守ってくれてる。

トウUNK…トウUNK…

「クソツッ！コイツ強いじゃねえか！こうなったら人質をッ！」

このままではマズイと思った不良の一人がアタシに向かって駆け出してくる。しか

し…。

「ハアツ!」

「ギャツ!」

「彼女には、指一本触れさせ無いよ!」

~~~~ツツツ!!む、胸の高鳴りが収まらないツツ!顔が熱い!どうしちゃったの  
ア  
タシ!

「さあ、お前達の罪を数えろツ!」

き、決め台詞がかっこいいくツ!!なんかもう顔もかっこいいく!!あれ!?フツメンは!  
フツメンは何処に消えたの!?!

「は、はははははッ!お前は確かに強い!強いが…残念だったなあ?」

「何を…ツ!」

「嘘…!援軍…!」

いつの間にか現れた援軍の数はおよそ50人。こんなに居るんじや流石の数馬さん  
も…。

「フツ…」

「え…? (笑ってる…?)」

さ、流石数馬さん! あれだけの人数相手にもまったく余裕を崩さないなんて!

(や、ヤバイ…。絶対勝てない…。何なの50人で、アホなの? 何でそんな人数呼んだの? 過剰戦力過ぎでしょ!?! もう体力的に限界だし、詰んだなコレ…。アハハ(白目))

そして数馬さんが構えたその瞬間。

「オラアツ!」

「ハアツ!」

「フンツ!」

「「「「ギヤアアアアアアツ!」「「「「

「えっ!?!」

突然現れた3人の人影が不良達をなぎ倒す。

「な、なんだてめえ等は!?!」

不良の一人がそう叫ぶ。

「貴様等に名乗る名など無い緋龍 蓮仁だツ!!」

「ガツツリ名乗ってるし!?! お、俺の名は織斑 一夏ツ!!」

「そしてこの俺様が五反田 弾様だツ!!」

現れた3人がそう名乗った。このタイミングでコッチにも援軍が来たッ!

「乱!大丈夫だった!」

「あ、鈴姉!大丈夫!なんとって数馬さんが守ってくれたからね!」(＊、艸、＊)

「…え? (まさかまさかの…?え?マジで??)」

そうこうしてる内に戦いが始まるうとしていた。

「数馬、良くやったな!カツコ良かったぜ!」

と、蓮仁さんが言った。分かり味が深い。

「あとは任せて休んどけ。こいつら全員俺達が相手にする」

「…それじゃあお言葉に甘えて休むよ。頑張ってるね」

「「おう!」」

それからは一瞬だった。

まず蓮仁さんが集団の中に飛び込み片手で人を振り回して鈍器みたいにしていた。その混乱に乗じて一夏さんが一人ずつ確実に意識を刈り取り、あの失礼極まりないバナナ男が蹴りを入れてるの全員顔面偏差値の高い奴ばっかりなんだけど!?個人的理由で顔蹴つてない!?

「ご、ごほん!と、とにかく一番ヤバイのが蓮仁さんだ。一瞬で数人の意識を刈り取つてるし相手のパンチを額で受けたと思つたらパンチした方の拳が砕けたみたい…。更には何かの武術まで繰り出し最終的には衝撃波みたいな飛ばしながら空を飛ぶように跳ね回つてた。

あ、あの人は人じゃ無いな。

一夏さんも一夏さんだ。蓮仁さんほどではないがとてつもない身体能力で気絶させまくつてる。しかもダメージを余り負わせないようにしながら一気に複数人を相手にしてだ。強いよ。

そんでバンダナ男。アイツはひたすらに顔面偏差値の高い奴の顔に攻撃してる。本当に何なんだろうアイツは…?」

それにしても……はあゝ♡

休む姿も様になる数馬さんは本当にかっこいいな♡

はっ!?あ、危ない危ない!トリップしかけてた!そんなこんなで一分もしないで鎮圧完了した。未だに顔面に攻撃を加えているバカもいるけどね。

「このツ!このツ!今までその顔でどれほどの女のコとキャツキャウフフしてたんだこ







蓮仁さんナイス!そしてアタシのプロポーズを受けた数馬さんは…。

「つ、つつつつつつつつつつつつつつつき合ううううツ!!???あ、アババババババババツ…」

「アカン、数馬が現実を受け止めきれなくてバグった」

蓮仁さんがそう言うってから斜め45度の角度で数馬さんの頭にチョップした。

「はっ!?!…いやー、なんか告白された夢見ちゃったよ〜!アツハツハ!」

「節子…それ夢やない、現実や」

「現実…!?!このフツメンが告白されたのが現実…だと…!?!」

いきなり過ぎたからそりや動揺するよね。

「数馬さん」

「ら、乱ちゃん…」

「今日出会ったばかりなのにいきなり告白されてもそりや困るわよね。でもね、アタシのハートは既に射抜かれちゃったの。だから…」

「だから…?」

「たとえどんな手を使ってでも必ず彼女になってみせます!たとえ!どんな手を使ってでも!」

「何で2回言ったの!?!ちよつと怖いよ!?!」

「手始めに数馬さんのご両親に挨拶をしに行くしかないわね！外堀から埋めるわよー！」

こうしてアタシは数馬さんの家に突撃するのです。めでたしめでたし！

### S i d e 乱 S i d e o u t

「……………乱って怖あ……」

「狙った獲物はどんな手を使っても逃がさないタイプなのよあの娘は……」

「ご両親に挨拶までして買物に付き合っただけで貰うのか？乱って変な奴だなー」

「ハハ、ハハ……」